転生者が織り成す物語

黒翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生者が織り成す物語

【Ｎコード】
Ｎ８３８５Ｖ

【作者名】
黒翼

【あらすじ】
ＩＳとバカテスを組み合わせました。他のキャラも登場します。設定や流れが滅茶苦茶になるかもしれませんが、とにかくやっていきます。
他の作品と同時進行で投稿します。更新が疎かになると思いますが、よろしくお願いします。
バカテス及びＩＳ原作も開始しました。

転生（前書き）

最近他の作品の更新が疎かになっているのにまたやってしまった……。

でも仕方がなかったんだ！　やりたくなってしまったんだもん！

転生

ここはどこだ……？
目を覚ますと周囲が真っ白な空間にいた。

「目を覚ましたか」

声がしたので振り向くと、そこにはＢＬＥＡＣＨのグリムジョー似の男がいた。

「お前、なんでここにいるか覚えているか？」

「いいやさっぱりだ」

なんか途轍もない痛みがあったような気がするが。

「痛みがあったのは事実だ」

！？　今口に出して無かったよな！？

「あーそれはお前の心を詠んだだけだから安心しろ」

「安心できるか！」

「うるせえなぁ……」

「お前の所為だろ！」

「まあそれは置いといて」

「置いとくのかよ！」

「お前はトラックに轢かれて死んだんだよ」

「……あーなんだか思い出してきた気がする……」

学校帰りに轢かれそうな女の子がいたから助けたんだっけか。

「そう言う事だ」

「だから勝手に心を詠むな！　でもまあ、ここにいる訳はなんとなくわかった」

「お前は死んでここに来たんだが、お前が死んだ理由は俺にあるんだよ」

「……はい？」

「だから、お前が死んだ理由は俺にあるって言ってんだよ」

コイツはなに言ってんだ？
ってかコイツって誰！？

「あーそういえば言ってなかったな。　俺は神だ」

「……あんたが神？　寝言は寝て言え」

「寝言じゃねえよ、ガキんちょ」

「……あんたが神だとして、その神の所為で死んだってのはどういうことだ？」

「俺のミスでお前が死んだんだよ」

「……えーっと、詳しいこと聞かせてくれるかな？」

「詳しいことは言えんが、あの時轢かれそうになっていた女の子の代わりにお前が死んだんだが、あの時死ぬのがお前じゃなかった」

「じゃあ、あの女の子が死ぬことになってたのか？」

「いいや違う。　あれそのものが俺の手違いなんだわ。　だから、あの時助かった女の子はともかく、お前は死んじまった。　だから、俺の所為ってこと。　悪いな」

ブチッ！

俺の中で何かが切れる音がした。

「おいテメェ……」

「ん？　なんだ？」

「テメェの手違いで俺が死んだって言うのに！　なんなんだよ！　その謝り方はよぉ！　気持ちが籠ってねえぞ、糞野郎が！」

「……何急にキャラ代わりしてんだよ」

「テメェ俺の心が読めるんだよなぁ。　だったら、俺が何しようと

するかもわかるよなぁ？」

「え？　ちょ、ま……」

「歯ぁ食い縛れぇぇぇ！！」

「ったく……お前って見た目に反して弱かったのな」

「ずびばぜんでじだ（すみませんでした）……」

俺は自称神をボコボコにして、自称神は俺の前で土下座をしている。

「で、これから俺はどうなんのさ」

「あ、あなたには転生してもらいます。　で、でもまあ、あなたが望めばですが」

主従関係の出来上がり。

「転生ってあれだろ？　にじファンとかにある別の世界に行きましょう的なあれだろ？」

「そ、そうです。　あなたにはその転生をしていただきます」

「面白そうだし、いいよ。　転生する」

「で、では、こちらのお詫びとして、好きな能力をプレゼントいたします」

「数とかに制限は？」

「特にはありません。　駄目ならばお教えしますのでご安心ください。　それと、アニメやライトノベルなどに出てくるものでも構いません」

お、いいねぇ。

「じゃあまず、完全記憶能力と処理能力、身体能力ＭＡＸ。　それと、ＲＥＢＯＲＮ！の全ての波動とリング・ボックス兵器の召還と使用できること。　ＮＡＲＵＴＯの永遠の万華鏡写輪眼。　とある魔術の禁書目録の七天七刀と、超能力の使用。　めだかボックスの暗器スキルかな。　行ける？」

さすがに多すぎるし、チートすぎるよね。

「はい。　大丈夫です」

「マジか！」

「ただ、デメリットがあるものはありますよ」

「どれでどんな？」

「万華鏡写輪眼の幻術及び術を使用した場合は、それ相応の体力を使用します。　超能力は脳への負担があります。　レベルの高低関係無く、超能力を長時間使いすぎると、最悪命の危険になります。

もちろん、レベルの高い超能力ほど脳への負担が大きいのであしからず」

「そりゃそうだな。　じゃあリングの炎は？」

「原作そのままです」

「了解した」

万華鏡はあまり使えんよな。　天照とか須佐能乎とかはばれたらアウトだ。
超能力は使いすぎ危険か。
でもまあ、面白いからいいとしよう。

「転生する前に私の名前を教えておこうと思います」

「名前？　何で？」

「もしも緊急事態があれば呼んでいただくためです。　あなたは異例ですよ？」

「そうか。　それは助かる」

「では、私はセスタと申します」

「セスタ？　だからグリムジョーなの？」

「いいえ、これは私の趣味です」

「神にも趣味なんてあるのかよ……」

「ありますよ」

そういえば俺って神をボコッたんだよな。
関係ないけど思った。

「では、転生先をどうしますか？」

「転生先か。　そうだな……原作を少しでも知っていればどこでもいいや」

「どこでもいいんですか！？　私が勝手に決めてしまいますが、それでもいいのですか！？」

「だって俺、一度悩むと長いもん」

俺って超が付くほどの優柔不断だからな。
あーでも、ＩＳとか、バカテスとか、ハヤテのごとくとか、デュラララとかもいいかも。
禁書目録もいいな。　ＲＥＢＯＲＮでもいいしな。
……やっぱり悩むのはやめよう。　２４時間以内に決まる気がしない……。

「……そうですか。　わかりました。　では、私が決めさせていただきます」

どこになるんだろうか。
やっぱ人任せにする方がすぐ決まるよな……。

「では、転生させていただきます」

「おう。　で、転生先はどこなのさ？」

「それは辿り着いてからのお楽しみです」

「それはそれで面白そうだな」

「では、二度目の人生をお楽しみください」

俺は白い光に包まれ、その空間から消えた。

「おぎゃあああ！？（なにいいいい！？）」

赤ちゃんスタートとか聞いてないぞ！？
俺に羞恥プレイを受けろというのか！？

「おぎゃあああああああ！！！（セスタアアアアア！！！）」

ともかく、俺の第二の人生が始まった。

転生（後書き）

始めてしまったからもう後悔はしない！　……多分。
滅茶苦茶になると思いますが、頑張ります。
よろしければ見てください。

気づいたこと

「おぎゃあああああ！！！（セスタアアアアア！！！）」

転生しました。
だけど、赤ちゃんからとかふざけるな！
滅茶苦茶恥ずかしいじゃないか！

『その方が都合がいいのですよ。　あなたにとっても』

頭に直接響くセスタの声。

『どういうことだ？』

『あなたが望んだ能力をすぐに使いこなせるとお思いですか？』

『あー確かに。　言われてみればその通りだな』

『それに、落ち着いて親の顔を見てください』

『親の顔？　……！？』

俺は親の顔を見て絶句した。
なぜなら、俺を抱いているのがデュララララの折原臨也（おりはらいざや）だったからだ。
母親の方が気になって顔を向けると、それまた絶句した。
母親は、とある魔術の禁書目録の神裂火織（かんざきかおり）だったからだ。

『え、えーっと……これは一体……』

唖然として言葉が思いつかない。

『あなたが望んだ能力、というより刀ですが、それを渡すなら原作の所持者が親の方が都合がいいだろうと思いまして』

それは納得。

『じ、じゃあ臨也さんは？』

『あなたが転生先を決めるときに頭に思い浮かんでいたものにデュラララがありましたので、私の趣味で臨也にしました』

『マジかよ……ってあれ？　神裂が持っている赤ん坊は？』

『あなたの双子の妹です。　名前は麗奈（れいな）。　常人よりかは異常です』

『マジか。　まぁ、完全にチートな俺が言えることじゃないか。というか、親がこの二人なら普通の方がおかしいか』

『そういうことです』

なんか凄いことになったな……。

『あ、一つ言い忘れていました』

『なんだ？』

『あなたの前世の名前は捨てていただきます』

『はい？』

『あなたの前の名前進藤圭祐(しんどうけいすけ)は捨てて、この世界では折原終焉(おりはらしえん)として生きてもらいます』

『その程度ことか。　別に構わない。　だが、なんだ終焉て！　すっごい仰々しい名前じゃねえか！　しかも読みがおかしいだろ？！』

『あなたの親が“あの”折原臨也なのですから仕方がないでしょう。あなたの名前は彼が付けた名前ですので』

『じゃあ妹の方はなんなんだ！　俺と比べれば普通じゃねえか！』

『彼女の名前は神裂火織が名付けました。　どうやら、双子とわかってから二人で名前を考えたそうです』

『……で、こんな仰々しい名前になったのか……』

まぁ、決まったことは仕方がない。　諦めよう。

『一つだけいいか？』

『なんでしょう？』

『ここは何の世界だ？　親がこの二人になっている時点で普通じゃないと思うけど』

『一つだけ言っておきましょうか。　ここは複数の世界を組み合わさった、あなたを送るためだけに作られた世界です。　あ、原作ブレイクはしても構いませんのであしからず』

『自分で探せって事か。　まぁいい、わかった。　だが、いつか教えてくれよ』

『わかりました。　では、失礼します』

『ああ』

ここでセスタの声が聞こえなくなった。
いろいろと凄いことになってきたな～。
……早く離乳食にならないかな……。

俺はセスタにしか気づかれない羞恥プレイを受けた……。

原作発見。　その後のための対策

折原終焉5歳になりました。　同時に妹の麗奈も5歳です（双子だから当たり前）。
俺の顔はコードギアスの“ルルーシュ”に似ていた。
ちなみに、麗奈は緋弾のアリアの“白雪”似だ。
二卵性双生児のため、見た目の共通点は黒い髪くらいだ。

この5年間でわかった原作はデュララと禁書目録、バカテスだ。
なぜなら、俺たちが生まれて祝うためか、犬猿の仲の“あの”静雄さんとヴァローナさん、幽さんとルリさん、父さんの妹の九瑠璃さんと舞流さん、デュラハンのセルティさんと新羅さん他複数が来てくれた。
同じ理由で、上条さんと御坂さん、ステイルにインデックスなどなど、同じく他複数来てくれた。
生で見れて感動した。
どうやら、デュララに関しては未来の話ということで、いろいろとカップリングされていた。　原作のパラレルワールドだろう。
それでもダラーズはあるようで、セルティさんは未だに首無しライダーとして池袋限定でだが有名だ。
禁書目録はキャラだけのようで、学園都市は存在しない。　だから上条さん（不幸なのは原作通り）とはどういう経緯で出会ったのかが謎だ。

で、バカテスがわかったのは、俺と麗奈が通っている幼稚園にいたんだ。
バカテスの主人公でバカといえばこの人と言えるバカ、吉井明久が。
初めて見て、それが明久だと理解してから、普通に友達になった。
どうやら、麗奈が明久に惚れたのがわかった。

っと、説明はこれくらいでいいだろう。
今から明久が家に来るんだ。

ピーンポーン。

どうやら来たようだ。

「お坊ちゃま、吉井明久様と玲様（あきら）がいらっしゃいました」

「あ、はい。　わかりました。　今行きます」

対応がすごいまともなのは仕方がないだろう。
前はごく普通の一般人だから、執事やメイドと言う者に慣れていないのだ。
あ、なんで執事とメイドがいるのかは両親のおかげだ。
この世界では“ＫＡＮＺＡＫＩグループ”とか言う大手企業のトップでお金持ち。
父さんは父さんで情報屋。　原作とは違い（原作のパラレルワールドの未来だから当然といえば当然）、世界中の情報を集め、それを高値で売っているため、父さんの収入も高い。
おかげで家は豪華な屋敷で、執事メイドが数人いる。　両親曰く多すぎると無駄とのこと。

「あ、シエン！　来たよ！」

「明久、玲さん、いらっしゃい」

「シエン君、お邪魔しますね」

玲さんはやっぱり大人な雰囲気をかもし出している。

「今麗奈が来ると思いますけど……あ、どうやら来たようです」

「麗奈ちゃん、こんにちわ」

「あ、明久さん、こんにちわです！」

笑顔で挨拶をする麗奈。　少し明久が赤くなっている。

「二人は一緒に遊びな」

「シエンはどうするの？」

「俺は玲さんに勉強を教えてもらう」

「へぇ～そっか。　じゃあ遊ぼうか、麗奈ちゃん」

「はい！」

二人は一緒に動き出した。

「勝手に決めてしまいましたが、大丈夫ですか？　玲さん」

「しっかりしていますね。　とても年下とは思えません」

実際、死んだのが１７で、今が５歳だから、精神年齢は２２歳だから年上なんだけどね。

「俺は５歳児ですよ、玲さん」

普通じゃなさ過ぎるから信用できないでしょうがね。

「そうですか。　では、勉強、しましょうか」

「ありがとうございます。　では、よろしくお願いします」

バカテスがなら、勉強しておいた方が得だ。
完全記憶能力と処理能力を貰っているため理解できないこともないが、勉強ができる玲さんに教えてもらった方がいい復習になるから、改めて勉強するには都合がいい。

2時間後……

「お坊ちゃま、玲様、おやつを用意しましたので少し休んでみてはどうでしょうか？」

「そうですね。　2時間休みなしですので、ちょうどいいので休みましょう」

「わかりました」

玲さんの教え方は上手い。
忘れていたものも含めて思い出した。
さすがは後にハーバード大学を卒業するだけのことはあるな。

「少し麗奈と明久の様子を見に行きますが、玲さんはどうしますか？」

今日はバームクーヘンだ。
美味い美味い。

「そうですね……」

俺は珈琲をすすりながら玲さんが答えるのを待つ。

「二人が過ちを起こしてないか心配ですので行きましょう」

アンタは5歳児に対してどんな考えを持ってんだよ！？

「過ちってなんですか？」

一応こうしておいた方が無難だろう。

「さあ、行きましょう」

スルーか！　スルーしてくれた方がありがたいけれども！

「あ、はい。　案内しますね」

俺は珈琲を置いて先導する。

「シエン君は頭がいいですね。　すぐに飲み込んでしまいましたから」

小学校3年くらいまでの内容の復習だった。

「そうですか？」

「そうです。　明君にも見習って欲しいです」

「まだ5歳なんですからそこまでしなくても……」

「そういうシエン君も5歳ですよ？」

自分で蒔いた種だけど、痛いとこ突かれたな……。

「……俺は普通じゃない。　ただ、それだけだ」

「そうですか」

玲さんは追及しないでくれるようだ。　助かるな。

「あ、着きましたよ」

「ここですか。　明君、入りますよ」

ガチャ。

そこには二人仲良くおやつを食べている姿が見えた。

「仲良くやってるか？」

「はい！　仲良くやっています！」

明久と二人っきりでいれたから嬉しいのだろう。　少し興奮気味だ。

「明君、麗奈ちゃんに手を出していませんね？」

明久に言ってもわからねえだろ……。

「？　姉さん、なんのこと？」

やっぱり……。

「玲さん！　だ、大丈夫です！　何もされていませんから！」

麗奈よ、なぜわかった！　君にはまだ早い！

「仲良くしてるならいいや。　麗奈、頑張れよ（ボソッ）」

「っ！　はい／／／」

うん。　可愛いな。
どうやって二人をくっつけようか……。
ま、それについてはまだ時間があるからいいか。

「俺は戻るな。　玲さんはどうします？」

「戻って続きをしましょう」

「じゃ、戻るから仲良くしてろよ」

「「はーい」」

俺たちは戻って俺の部屋。

「じゃあ、続きをしましょうか」

「お願いします」

勉強を続けるのだった。

原作発見。　その後のための対策（後書き）

カップリングは作者の独断です。
ありそうなキャラ同士で組ませました。

超能力の使用。　あれ？　なんかおかしくない？

折原終焉、小学校に入学しました。
バカテスで明久と姫路が行っていた睦月小学校だ。
明久も姫路も同じクラスです。　仲良くなりました。
残念ながら麗奈は別のクラスです。

「シエン」

「なんだ明久」

「麗奈ちゃん、大丈夫かな？」

「大丈夫じゃないか？　あいつは礼儀正しいし、人当たりもいいからな。　いじめとかそういうのには無縁な気がするし。　まぁ、もしもいじめとかがあったらやった奴を締め上げるけどな」

「……そこまでするの？」

「じゃあ逆に訊こう。　もしも麗奈をいじめている奴がいて、麗奈が追い詰められたらお前はどうする？」

「いじめた奴をぶっ殺す！」

「な？　ってかお前の方が酷いじゃねえか」

「はっ！　麗奈大丈夫だよね！？」

「吉井君、折原君、何を話しているんですか？」

「えっと君は……」

ピンクの髪の女の子が話しかけてきた。　もしかして……！

「姫路です。　姫路瑞希（ひめじみずき）です。　よろしくお願いしますね」

この子が後に必殺料理人となるあの姫路か。

それにしてもしっかりしているな。

「俺も自己紹介しておくか。　俺は折原終焉。　名前の読みがよく間違えられるが、シエンだからな。　シエンでいいぞ」

「じゃあ僕も。　僕は吉井明久だよ。　呼び方は好きにしていいよ」

「よろしくお願いしますね、シエン君、明久君。　私も瑞希でいいですよ」

「わかった。　よろしくな、瑞希」

「よろしくね、瑞希ちゃん」

「ところで二人は何を話していたんですか？」

「俺の妹についてだ」

「妹さん、ですか？」

「ああ。　隣のクラスにいるんだが、いつもは俺か明久がいたからな。　何かされないかとかが心配なんだ」

「シエン君は妹さん思いなんですね」

「僕も心配なんだ。　優しい子だから大丈夫だと思うけどね」

「明久君も優しいんですね」

「そ、そうかな？」

「確かに明久は優しいよな。　否定はしない」

その代わり残念なほどに馬鹿だけど。

「ねぇシエン」

「なんだ明久」

「今馬鹿にされた気が……」

「気のせいだ」

なぜわかった！？

「そろそろ時間ですよ？」

「ん？　もうそんな時間か」

「席着こうか」

「そうですね」

キーンコーンカーンコーン。

「よし終わった」

小1の内容は暇すぎる。
元高校生が小学生の勉強をするとか暇すぎる。

「お兄様、帰りましょう」

「お、麗奈。　わざわざ来たのか」

「わざわざって私のクラスは隣ですよ?」

「それもそうだな。　明久、帰るぞ」

「あ、うん。　ちょっと待って」

「私も一緒に帰ってもいいですか?」

「瑞希？　俺たち車だけどそれでもいいのか？」

「一緒に帰れるところまででいいですよ」

「ちょうど明久も来たところだし行くか」

校門

「あ、あのシエン君」

「なんだ？」

「車ってこれ……ですか？」

「そうだよ」

瑞希はあんぐりとしていた。

俺たちの迎えの車。　それはリムジンだ。

驚くのも無理は無い。

「お帰りなさいませ、お坊ちゃま、お嬢様、明久様」

「え！？　明久君もなんですか！？」

「え？　僕はシエンと麗奈ちゃんと仲がいいから乗せてもらうことがあるんだ」

幼稚園のときから仲良く遊んでるからな。
それに、麗奈のこともあるからだろう。
麗奈が明久に好意を持っていることは家の者は皆知っている。それもあるのだろう。

「と言ってもほとんどだけどな」

「そ、そうなんですか……」

まだ落ち着けてないようだ。

「瑞希の家どこだ？　送ってもらうこともできるけど」

「わ、私は大丈夫です。　そ、それに申し訳ないですし」

「別に構わないんだけどな」

「で、ではまた明日！」

「あ、ああ。　またな瑞希」

「またね、瑞希ちゃん」

「またお話しましょうね、瑞希さん」

瑞希は俺たちと別れて帰っていった。

「んじゃ、帰るか」

「そうですね（だね）」

俺たちはリムジンに乗って帰った。

某海岸沿い

「まともに使うのは初めてだが、それなりに使えるな……」

俺は小学校になってから近くの海岸でまともに超能力の練習をし始めた。

今までは被害の少ないもの（例えば透視や肉体変化（メタモルフォーゼ）、読心能力（サイコメトリー）など）で隠れながら特訓していた。
小学校に入ってからそれなりに外に一人で外出できるようになったため、ここに来て特訓をするようになった。

「未元物質（ダークマター）」

レベル5第二位の能力未元物質。
この世に存在しない素粒子を生み出し、操る能力。
俺の背中に6枚の翼が生み出される。

「いきなり未元物質はキツイか……」

かなり疲れる。
それでも俺は翼を使い、空を飛び、斬撃を生み出したり、原作通りには使えた。

「この程度で疲れてては駄目だな」

俺は翼を消し、一枚のコインを取り出す。

「いきなりは無理かな？　一応は理解しているつもりだけど。超電磁砲（レールガン）」

俺は指でコインを弾き、御坂美琴の超電磁砲が放てた。

「ワォ……。　ビックリだよ」

電子制御系能力は使ったことなかったのにな。
これも神の特典？　違うか。

「砂鉄の剣も作れるし、習得は早くできるようだな」

……まぁ、まだ長時間使えないけど。

「今日はこれくらいにしておくか」

俺は空間移動（テレポート）で家の近くまで戻った。

移動系能力はそこまで脳に負担はかからないようだ。

……なぜ？　一番かかると思うのに……。

今度セスタに訊こう……。

バレた能力

小学校二年になりました。
この世界はＩＳも混ざっているらしい。
篠ノ之束によりＩＳが発表されました。
その一ヵ月後、来ました２３４１発ものミサイルが日本に飛んで来ました。
よし、ばれないように介入しよう。
一応俺は匣（ボックス）を使ってみました。　しかも原作に登場しない物を。

「開匣。　“霧（ネッビア）ミサイル”」

霧の炎により、視ることはできない。
このミサイルを視ることのできる人物、装置はこの世界には存在しないと思う。

「さてと、ミサイルを跳ばすか」

俺の座標移動（ムーブポイント）は原作よりも圧倒的に強力だ。
原作の結標淡希は８００メートル以上だが、俺の座標移動は訓練の賜物か、数十キロの距離で飛ばせる。
まぁ、距離が長ければ長くなるほど精度も落ちるし（それでも十キロまでならミリ単位の誤差で済む）。　まぁ、負担も大きくなるけど（どれでも普通に動ける）。
（数十キロも飛ばしても普通に動けるのは、前に空間移動系能力の負担が小さいことをセスタに訊いて、『空間移動系の能力は使う頻度が多そうなので、特別に負担を小さくしました』ということで、他の能力と比べると圧倒的に脳の負担が小さいみたいだ）

「少し白騎士の負担を減らしますか。　というわけで行け、霧ミサイル！」

俺の周囲に漂っていたおよそ１００発のミサイルを同時に日本に向かっているミサイルに向けて飛ばした。

「どんな結果になるか、見物だな」

俺は空間移動で自分の部屋まで戻った。

俺はテレビをつけ、どうなったか確認した。
結果、ほとんど変化は無い。
俺がミサイルを少し撃墜しただけで、それ以外は変化が無い。

「この世界、どんどん歪んでいくよな……」

改めて思う。
それでも複数の原作が絡んでるからこれからどうなるかが楽しみだ。

白騎士事件から数日が経っている。

「終焉、ちょっといいかい？」

「なんです？　父さん」

俺の部屋に父さんが珍しく訪ねてきた。

「実の息子にこういうのはあれだけど一つ、どうしても訊きたい事があってね」

「？　なにをですか？」

なんだ？　なにを知っている？

「君の力はなんだい？」

「！？　……なんのことですか？」

最悪だ……。　見つかっちまった……。

「俺は情報屋だ。　いろいろとコネを持っている。　それからの提供なんだけどね、君が君がたびたび人気の無い海岸沿いで何かしらの力を使っているのを見たって言う証言があるんだよね。　目の前から急に消えたっていう証言もね」

もっと警戒しておくべきだったか……。

「……」

この世界では超能力は無いはずだ。　そんな世界で俺の能力のことがばれればヤバイ。

俺が異常なのは周知なのは知っている。

それでも能力に関しては言い辛い。

「やっぱり親の俺にすら話せないものかい？」

転生のことを言って誰が信じる？
他言しないと信じれるか？
毛嫌いされない確証もない。
この生活は気に入っているんだ。
言いたくない。

「終焉はそのことを言ったら俺に捨てられる、とか考えてるのかい？　俺が誰にも言わない保障が無いから言えないのかい？」

「……」

それだけじゃない。
言っていいものなのかがわからない。

「安心しな。　俺はたとえ終焉がどんな子でも俺の子供だ。　誰にも言わないし、今まで以上に愛す自信もある。　何があっても俺が、俺たち家族が守り続ける」

そう言えば俺の父親はデュラララの折原臨也だったな。
人を分け隔てなく（静雄さんは例外）愛する異常者だったな。

（……セスタ）

（なんでしょうか？）

（俺のことは他人に言っていいものなのか？）

（別に構いませんが、自己責任ですよ？）

（わかった。　ありがとう）

（失礼します）

「……わかったよ。　話すよ。　俺の力について。　ただし、母さん以外には誰にも言わないで欲しい」

「ん、わかった」

「能力について言う前に一つ。　俺は一度死んだ人間だ」

「一度死んだ？」

「ああ。　俺は一度死んだ。　そして、能力を持って転生した」

これにはさすがの父さんも驚いたようだ。

「で、父さんのコネの人が見たのは、俺が前の世界で存在したライトノベルに出てきた超能力と呼ばれる力だ」

「超能力？　例えば？」

「例えばこんな感じに電気を発生させたり、炎を生み出したり、いろいろあるよ」

「なかなか便利だね」

「確かに便利だよ。　もちろん、デメリットも存在する」

「普通に考えたらそうだね」

「超能力のデメリットはそのとき使った能力により、自身への脳に負担がかかるということだ。　皆に隠れてこそこそと行ってきたおかげでかなり能力を使っても大丈夫にはなったけどね」

「超能力『の』って言うことは、別の能力もあるってことだよね」

「あるよ。　まずはこの眼、『写輪眼』だ」

俺はまずは写輪眼（万華鏡じゃないよ）を見せる。

「この眼は観察眼が一般の目よりもずば抜けて高く、幻術を掛けたりすることができる。　そして、これが最強の写輪眼『万華鏡写輪眼』だ」

俺の万華鏡の模様はギアスの模様で、鳥のような紋章になっている。

「目の模様が変わったね。　能力も変わるんだろう？」

「変わるんじゃない。　より強化されるんだ。　この眼は強力な瞳術がある。　どれも強力すぎてこの場で試すことはできないけどね」

「機会があったら見せてよ」

「わかってます。　で、他がこのリングと匣です」

「……どこから出したの？」

「“出した”のではなく、“召還”したんです。　なにも無い空間から呼び出せるんですよ」

「……それってマフィアの道具じゃないのかい？」

「！？　どうしてそれを？　前の世界にあった漫画に出てきた物ですよ？」

「どういう訳かこの世界にもあるんだよ。　リングからでるのは炎でしょ？」

この世界はＲＥＢＯＲＮもあるのか。　しかもリングと匣があると言うことは原作の１０年後の未来以降のだな。

「さすがは情報屋。　世界の裏の情報も持っているんですね。　そうです。　このリングから出るのは炎です」

「俺の情報が確かなら、リングの属性は七種類……いや、ごく僅かだけど他の属性もあったな。　それは匣という兵器だろ？」

「はい。　例えばこういうのですね。　開匣」

俺が出したのは黒い鎌。

「匣には武器や生物、いろいろありますね」

俺は鎌をしまう。

「実物を見るのは初めてだけど、これも便利だね」

「ちなみに、俺は全てのリングを扱うことができます」

「……チートだね」

「……自覚してますよ」

「……ＩＳも使うことができるのかな？」

白騎士事件から数日経って、すでにＩＳが女性にしか使えないことは周知のことだ。

「それは知りません。　ＩＳを使えるようになることは頼んでませんから」

「んーでも、君なら使える気がするよ」

「……否定できませんね」

「話がそれたけど、能力はこれだけかい？」

「後は身体能力が馬鹿高く、完全記憶能力、処理能力、暗器スキルですね」

「最後の暗器スキルってのは？」

「漫画にでてきた異常（アブノーマル）で、暗器の扱いに関しては右に出る者はいません。　ありとあらゆる法則を無視して武器を持つことができます。　今はその武器が無いので使ってませんけどね」

「ますますチートだね。　君なら一人で国と戦える気がするよ」

「戦えますよ。　能力を全力で使い続ければね」

“一方通行（アクセラレータ）”や、万華鏡の“須佐能乎（スサノオ）”とかチート能力を使い続ければ余裕で勝てると思う。

「全く以て恐ろしいね。　そして頼もしい」

「それが味方ならですけどね」

「それもそうだ。　でも君は、俺たちの味方だろ？」

「違いますよ。　俺は、俺の味方をしてくれる人の味方です」

「くははははっ！　面白い！　最高だ！」

「と、父さん？」

折原臨也はわからないな。

「君は、君と言う存在は俺が守る。　まぁ、逆に守られると思うけどね」

「いえ、俺としては嬉しいです。　化物としか言いようの無い俺にそこまで言ってくれるなんてね」

「俺はこれでも君の親だ。　他がどうかは知らないけど、親としては当然だろう？」

「そうですね。　ありがとうございます。　気が楽になりました」

「それならよかった。　火織には俺から言っておく。　何があってもお前は俺たちが守る。　もちろん、麗奈もね」

「麗奈は俺が命に代えても守ります。　俺の妹ですから」

「麗奈は任せるよ。　俺たちよりも一緒にいれるからね」

「わかりました。　俺のすべてに懸けて麗奈を、麗奈の繋がりを守ります」

「頼むよ。　ただし、あまり無理はするなよ」

「了解です」

それから、父さんから母さんに話が伝わり、母さんに抱かれました。

「臨也から聞きました。　あなたは私たちが何があっても守ります……」

抱かれながらそう言われました。

「あなたほどの力があればきっと、私にしか使えなかった力を使いこなせるでしょう。　守る力として、あなたに覚えてもらいます」

「わかりました」

神裂火織だから七閃か？　唯閃か？
いや、唯閃は魔術があるのか知らんからわからんな。
俺は母さんに連れられて地下に来た。

「地下にこんな場所があったのか……」

「ええ。　あまり知られたくないものはここで作られています」

「……何を作ってるんですか？」

「７割ほどはヘリなどの乗り物ですね。　残りは刀や銃器などの武器ですね」

「……改めてＫＡＮＺＡＫＩグループの凄さを思い知ったよ……」

家（豪邸）の地下で恐ろしいものを作っていたとは知らなかった。
刀とかの武器はどこに行くんだ？
マフィア？　軍隊？

「これからはＩＳも開発する予定です」

「ホント裏では何してんだ！？」

表ではアクセとか貴金属などの製造業、さらにはそれを売るための販売業、さらにさらにはホテルなどの観光宿泊施設などなど、なんでもありの大企業（ここ１０年ほどで発展したらしい）。
それが裏では武器や兵器を作るとは、なんとも凄いんだが恐ろしい組織だな。

「もともと私が立ち上げた会社ですが、臨也と付き合い始めてから、臨也の情報を得るようになってから、この会社は急成長しました」

「父さんやっぱりすげぇのな！？」

流石情報屋折原臨也だ。

原作以上の情報を持っている。

「臨也の情報により、ＫＡＮＺＡＫＩグループは様々な経営をしてきました。　臨也がいなければこのような大企業にまで発展することはありませんでした。　それと終焉は勘違いをしています」

「勘違い？」

「ＫＡＮＺＡＫＩグループが行っている事業に裏はありません。私たちがあなたが見せていたのは危険が少ないものです。　これらは危険なもののため、隠してきたのです。　世間にはあまり知られていませんが、ここで作られているものは政府や軍隊に売られています。　裏でこそこそ隠れてやっているわけではありません」

「……なんでもありだな……ホントに……」

「あなたをここに連れてきたのには理由があります」

「理由ですか？」

「あなたの能力についても臨也から聞きました。　あなたの暗器スキルはあらゆる法則を無視し、武器を持つことができると。　ですので、ここで作られている武器、刀や銃などをいくらでも持ってい

ってくれて構いません」

「守るために必要な武器ですか？」

「はい。　あなたなら、ここにある武器を、使い方を誤ることなく使えると信じていますから。　まぁ、相手が外道ならばどのような使い方をしても構いませんが」

さらっと恐ろしいことを言いましたね！？

「それと、私の愛用する刀『七天七刀（しちてんしちとう）』を使った技を覚えてもらうために、ここで特訓をしてもらうためです」

「その七天七刀でしたっけ？　母さんが愛用している刀なんでしょ？　その刀の技を教えるということは、その刀を俺にくれるんですか？」

「いいえ違います。　あなたに持ってもらうのは、ここで刀を打っている刀鍛冶に、私の七天七刀に似た刀を打ってもらいます。　もちろん、あなたが持つに相応しい物を」

「その刀ができるまで、技の習得の特訓ですか？」

「はい。　あなたなら習得できるはずです」

「わかりました。　がんばります」

「それと、あなたの超能力の特訓も、ここで行ってもらっても構いません」

「ありがとうございます。　助かります」

七天七刀貰えなかったら意味無いじゃんと思ったけど、それ以上の刀が貰えるなら嬉しいな。

これはセスタの狙いだったのか、それとも別の何かなのかは定かではないが……。

攫われた麗奈。　明久の覚悟

俺１０歳です。　小４です。
母さんの七天七刀を使って“七閃”となぜか存在する“唯閃”を覚えた。
おかげでよりチートになりました。

「終焉、これがあなたのためだけに造られた刀。　名は『聖天絶刀（せいてんぜっとう）』。　切れ味、強度も申し分ない、最高の一振りです」

「ようやく完成しましたか。　待ちましたよ」

あの日から、俺のためだけの刀を造るといわれてから早２年。
いや、２年で完成したのは早いものだ。

「これまで造った刀は、あなたの力に耐えれず、悉く壊されてきましたが、今回のこの刀は正真正銘、最高の一振りです。　あなたが使っても壊れることは無いでしょう」

母さんの命令により造られた刀の名は『聖天絶刀』。
今まで造ってきた物は、俺の本気の振りに耐えることができず、壊れていった。
しかしこの刀は製作期間半年と、通常の刀のおよそ１０倍に近いほど長い期間をかけて造られた。
この刀ができるまでに俺が壊した刀は軽く１０本を超える。

この聖天絶刀は七天七刀と同様に２メートルを超える長さの刀だ。
そして、何よりも目立つのが刃の色だ。
この刀に何を使ったのかは知らないが、銀ではなく、綺麗な黒。

黒刀だ。

「黒刀……いいね、格好いいね」

俺は刀の輝きに、美しさに見惚れた。

「さーて、全力全開。　全力の一振りに耐えれるかな？」

楽しみだ。

俺の全力に耐えれる刀に出会えることが！

「“唯閃”」

俺の標的は海。

どこまでの威力になるかは自分でも予測不能だ。

「はぁあああああ！！」

ズドォォォォォン！！！

俺の放てる最高の一撃。

海が割れ、１０メートルを超える水柱が立ち、刀は美しい輝きを魅せる。

「すげぇ……」

自分の想像を遥かに超えた一撃と刀の強度に感動した。

「……さすがの私でもこれほどの威力が生み出せるとは思いませんでした。　“唯閃”は生身の相手には決して使わないでください。

この威力で斬られてしまえば肉片一つ残らないでしょうから」

「わかった。　生身の人間には使わない」

俺はこの刀を振るって思ったことを正直に言う。

「母さん。　この刀は間違いなく世界最高の一振りだ。　俺が保障する。　こんなに素晴らしい刀を創ってくれてありがとう」

「いえいえ。　この刀はあなたと、あなたの周りにいる仲間を守るための刀です。　どうってことありません」

本当に父さんと母さんには感謝しなければならない。

俺の正体を知っても今まで通りに愛してくれて、俺のために、俺を強くしてもらった。

「俺は……負けない。　この力で守る……！」

俺は決意を新たにした。

「お兄様、どこに行っていたのですか？」

「ちょっと野暮用があってね。　出かけてたよ。　それよりも、明久をどうやって落すかでしょ？」

「／／／」

明久とどうやってくっつけるか考えているだけなのに顔を赤くしないでくれるかな？

「麗奈、お前は明久とどうなりたい？」

「明久さんと……ですか？　私は……／／／」

考えているうちにどんどん赤くなっていった。

「俺が言ったことなんだけどさ、勝手に妄想で赤くならないでくれるか……？」

「はっ！　すみません……。　明久さんとは結婚したいです／／／」

「素直にそう言えばいいの。　正直言って俺は明久ならお前を任せても言いと思う。　あいつは馬鹿だけど根はいい奴だからな。　それに、俺もお前と明久にはくっついてほしいし」

麗奈は可愛いし、俺たちの実家がこんな金持ちだ。

馬鹿な親なら金目当てで付き合わせたいだろう。
しかしそれだと麗奈が可哀想だ。
だから俺は、根がいい明久とくっついてほしい。
奴は優しいし、やるときはやる男だ。
最も信頼できる親友だ。

「俺はお前に全力で協力する。　明久をお前の虜にしてしまうのだ」

「は、はい！」

「よし、これからはどんどんアプローチを掛けて行く。　高校に入る前には落すぞ」

時間は十分ある。
ゆっくりと、確実に落す。

「もっと積極的になれ。　お前と明久の邪魔をする奴からは俺が守る。　存分にやれ」

「わかりました！　私、がんばります！」

「その意気だ」

原作に介入する前にくっつけてやるぜ！

「というわけで、明日は二人っきりで帰れ。　俺は遅れるってことにしとけば大丈夫だろう」

「お兄様はどうするのですか？」

「尾行されるのは嫌だろ？　だから、適当に暇潰しておく」

実際は尾行するけどね。

「そうですか？　わかりました。　頑張ります！」

「おう。　俺は全力で応援するぞ」

翌日、予定通り麗奈と明久が一緒に帰ることになった。

だが、問題が発生した。
それは、先生からの指示で俺が尾行できなくなった。

「折原すまんな。　手伝わせてしまって」

「気にしないでください。　どの道俺は少し暇でしたから」

尾行できないのは残念だけどな。　本当に残念だったけどね。

「ありがとう。　助かった」

「それでは、帰りますね」

「おう。　気をつけろよ」

「はい。　さようなら」

俺は１０分ほど手伝わされ、急いでいる。

「予想よりも早く終わったが、間に合うか?!」

俺は尾行することを諦めていなかった。

麗奈たちを追うために全力疾走しています。
俺の全力疾走は自分が思う以上に速く、早ければそろそろ追いつけるだろう。

「ん？　なんだ？　あの人ごみは……」

……なんだか嫌な予感がする。
俺はその人ごみの先になにがあるか、確かめるために俺はその人ごみに飲まれた。
そして、そこで見たのは、一人の男の子が救急車に入れられているところだった。
その子供には見覚えがあるどころではなく、俺の最も信頼する友達の、ぼろぼろになった明久だった。

「明久！？　おい！　明久！」

「ちょっと君！　どきなさい！」

「おい明久！　何があった！」

「急ぐから君も乗りなさい！」

「……シエ…ン……ごめ……ん……れい……な……つれて…いかれ……ちゃった……守れなかった……」

麗奈が連れて行かれただと？

「わかった！　安心しろ、明久！　麗奈は、俺が助け出す！」

俺は救急車から離れる。

呼び止められる声が聞こえたけど関係ねぇ。
俺は、明久を傷つけた奴を、麗奈を連れ去った奴をブチノメス！

「麗奈、待ってろよ……今助けに行くからな……」

俺は携帯を取り出し、麗奈の携帯に取り付けられたＧＰＳの反応を確認する。

「ここは確か廃ビルだったはず……」

俺は公園の公衆トイレに入り、そこからテレポートした。

「ここだな」

テレポートした場所と、麗奈が捉えられていると思しきビルの周りに着いた。

「……見張りはいない。　透視（クレアボイアンス）」

透視能力でビルの中を視る。

（どこだ……どこにいる……）

中を視ていく。

（……見つけた！　麗奈は気絶しているのか……。　敵の人数は１５人……少し多いが、大丈夫だろう……）

俺はテレポートで一気に麗奈がいるフロアの影にまで飛んだ。

「これであいつに……臨也の野郎に仕返しができる！」

「こいつどうする？　やっちまうか？」

「ぎゃははっ！　いいねぇやっちまおうぜ！」

「おいおいお前らロリコンか？　確かにコイツは上物だがよぉ」

「コイツを使って臨也の野郎を誘き出すんだ。　まだ手ぇ出すなよ」

「ということは、呼び出したらもうやっちまってもいいんですね？」

「好きにしろ」

あいつら……麗奈が気絶してるからっていい気になりやがって……。

「そう言えばあのガキどうした？」

「ガキって臨也の娘と一緒にいたガキっすか？」

「そうだ。　奴はちゃんとやっといたんだろうな？」

「勿論です。　今頃病院でしょうね。　ギャッハッハ！」

あいつらか……あいつらが明久を……。

（……ちょうどいい……あいつらは“聖天絶刀”の最初の実験台にしよう……）

俺はステルスリングでカメラで俺を捉えることはできないようにし

た。

（まずは麗奈を助けるか……）

俺は雲のリングと雲ムカデの匣（スコロペンドラ・ディ・ヌーヴォラ）を呼び出し、そのまま開匣する。

「（お前はここで待機し、ここに来る俺と同じくらいの女の子を守れ）」

俺は指示を出し、“座標移動（ムーブポイント）”で、麗奈をここまで飛ばす。

「お、おい！　あのガキどこに行きやがった?!」

「目ぇ離した隙に逃げられたか?!」

「それはありえません！　縛り付けていましたから！」

「探せ！　何が何でもあのガキを探し出せ!!」

慌ててる慌ててる。
さーて俺も出るか。

「麗奈はもう俺が助け出した。　お前らの負けだ、下衆共！」

「だ、誰だ！」

「出てきやがれ！」

「言われなくてもそのつもりだ」

俺は堂々と現れる。

「どうも愚かな皆さん。　俺はあんたらを殺しに来ました」

「が、ガキだと！？」

「こいつ、こいつも臨也のガキです！」

「そうか……なら、こいつを捕らえろ！」

「わかりました！」

俺が折原臨也の息子だとわかってから粋がって来た。

「言ったでしょう？　俺はあんたらを殺しに来たって」

「ガキの妄言だ！　とっとと捕まえろ！」

「お前らはここで仕留める。　俺の刀の錆にしてやるよ。“聖天絶刀”……殺るぞ……」

１０歳の子供が持つにはあまりにも不恰好なほど大きい刀。
授かったばかりの刀。
格好の餌食だ。

「“七閃”」

キィィィン！

俺の目の前にいた男共は吹き飛ばされた。

「後１０人……」

「何しやがった?!」

「多少傷つけてもいい！　確実に捕まえろ！」

「“七閃”」

もう一度放つ。

今度は7人を吹き飛ばし、今無傷で立っているのは残り3人。

「さて、もうコイツの用は済んだな」

俺は聖天絶刀をしまい、新たに二本の刀を取り出す。

「お前らは許さない……」

肉体強化（リインフォース）により、身体能力を底上げし、跳ぶ。

「速い!?」

「本当にガキか!?」

「化け……者!」

ドサドサドサッ！

残った男たちが倒れる。

「っぐ……」

「化け物め……！」

「命までは獲らないでやる。　だが、この程度で済むと思うなよ」

「「「ヒィッ！」」」

俺に恐怖した男共の悲鳴。
俺は雷のリングと二つの匣、γが使った匣を呼び出す。

「開匣。　“黒狐（ネレ・ヴォールピ）”やれ」

「「「ぐあああああああ！！！！」」」

黒狐は男共を囲い、電気で痺れさせる。

「もういい。　戻れ」

黒狐は匣に戻り、匣と雷のリングは消えた。
気絶した男共の服は所々焦げており、しばらくは眠ったままだろう。
俺は携帯を取り出し、父さんに電話をかける。

『なんだい終焉。　明久君が病院に運ばれたんだけど、どうしたんだい？』

「麗奈が攫われて、明久はそのときにやられた。　麗奈を連れ去った奴はもう仕留めた」

『そうか。　大変だったね。　すぐに迎えを送るね』

「ああ。　任せる」

電話を切り、ため息をつく。

「戻れザムザ。　ありがとう」

麗奈を守っていたザムザを匣に戻し、ステルスリングは未だに使用した状態だ。
その麗奈はまだ眠っていた。

「……守れてねえじゃねえか……畜生……」

麗奈を撫でながら俺は唇を噛み締める。

「……お兄様？　……どうしたのですか？　……凄く苦しそうですが……」

「麗奈、起きたのか。　俺は大丈夫だ。　麗奈は大丈夫か？」

「……嘘です。　……お兄様は嘘をついていらっしゃる」

「いいんだ。　俺のことはいいんだ……」

ごめん麗奈。
兄さんはお前を、明久を守れなかった……。

「明久さんは……？」

「明久は病院だ。　ごめん麗奈。　お前を、明久を危険な目に遭わ

せてしまって」

「……なぜお兄様が謝るのですか？」

「俺はお前らを守るって決めたのに、肝心なときに一緒にいれなかった。　だからごめん」

「お兄様、私はお兄様に助けられたのですね？」

「ああ……」

「ならば、お兄様には感謝しなければなりませんね」

「……なんで……なんで感謝されなければならないんだ……？　俺は……」

「お兄様がいたからこそ、今私が無事でいられるのではありませんか。　事前に防ぐことはできなくても、しっかり私を救ってくれたではありませんか。　ですから私はお礼を言います。　助けてくださり、ありがとうございました」

「麗奈……」

「それと、すみませんでした」

「なんで謝るんだよ……」

「私の所為でお兄様を危険にさせてしまいました。　明久さんに怪我をさせてしまいました。　ですので、すべて私の所為です……」

麗奈、なんていい子なんだ……。

「俺はお前を責めない。　明久も、誰もお前を責めたりはしない」

「お兄様……」

バラバラバラバラ……

ヘリの音が近づいてくる。
辺りも明るくなってきた。

「迎えが来た。　歩けるか？」

「……はい。　大丈夫です」

「じゃあ行こう」

「終焉、麗奈大丈夫かい？」

父さんが来た。
俺がいても心配なのだろう。

「ああ。　大丈夫だ」

「私も大丈夫です。　明久さんのいる病院まで連れて行ってください！」

「わかった。　じゃあ、速く乗って。　あそこに転がっている奴らは別のヘリで送るから。」

俺と麗奈は父さんと一緒に乗り、俺が倒した奴らは別のヘリに入れ込まれた。
あいつがどうなるかは知ったこっちゃねえ。

「病院まで急いで」

「了解しました。　臨也様」

「明久、来たぞ」

病院について俺たちは明久の病室に来た。
そこには、当然といえば当然だが、明久の両親と玲さんがいた。

「よかった。　麗奈、無事だったんだね！」

明久が麗奈を見て、最初に言った。

「お兄様が助けてくれましたので……」

「そっか、無事でよかったよ」

「すみません明久さん……」

「へ？　なんで麗奈が謝るのさ？」

「だって私の所為で明久さんがお怪我を……」

「大丈夫だよ。　むしろ麗奈を守れなかったことの方が僕としては辛かったかな」

「明久さん……」

「言っただろ、明久はお前を責めないと」

こいつは優しいんだ。　俺の知る誰よりも。

「皆いいかな。　シエンと二人っきりで話がしたいんだけど……」

明久が話し？

もしかして……

「そろそろ面会時間も過ぎるからね。　私たちは帰りましょう」

「明君、ちゃんと寝てなさいね」

「あ、うん。　ごめんなさい」

「お前たちが無事でなによりだ」

明久の家族は帰っていった。

「麗奈、臨也さんもすみません。　シエンと二人っきりで話がしたいんです」

「じゃあシエン、ヘリポートで待ってるから」

「明久さん、早くよくなってくださいね！」

父さんと麗奈も出て行き、この病室にいるのは俺と明久だけとなった。

「で、話は何なんだ？」

「うん……。　そのことなんだけどね、僕を鍛えてくれないかな？」

「やっぱりか。　そんなに麗奈を守れなかったのが悔しかったのか？」

「うん……。　相手は大人がいっぱいだったけど、なにもできなか

ったんだ。　シエンはそんな相手に勝ったんでしょ？　だから！」

「お前の言いたいことはわかった。　いいだろう、鍛えてやる」

「ホント?!　ありがとうシエン！」

「ただし！」

「ただし?」

「お前にその覚悟があるか?」

「覚…悟?」

「そうだ覚悟だ。　お前に訓練に耐え続ける覚悟、その力の使い方を間違えない覚悟があるか?」

「あるよ。　僕は守るために、どんな訓練を受ける覚悟があるよ」

「……ならば、この七つの指輪のうち、どれか一つでも変化させることができれば、鍛えてやる」

俺は大空の七属性のリングを出す。

「色の違う指輪だけど、これをどうするの?」

「指に嵌めて、嵌めた状態でお前の覚悟を、お前の思う自分の確固とした覚悟を魅せてみろ」

「難しくてなんとなくだけどわかったよ」

なんとなくなのかよ……。
明久は七つの指輪全部を片手の指に嵌めた。
「まさか全部嵌めるとは……」
「あれ？　一つずつやらなきゃ駄目だった？」
「いや、いい。　ただ、片手に全部嵌めるとは思わなくてな」
「じゃあやるよ」
明久を目を瞑り、リングの二つに炎を燈した。
「……ちゃんとした覚悟があるようだな」
「え？　ええ！？　なにこれ！？　指輪に火がついてるよ！？」
「その指輪は特殊でな、詳しいことは今度教える。　指輪外していいぞ」
「え？　あ、うん。　はい」
俺は明久からリングを受け取る。
「傷が完治したら特訓を始めるからな」
「わかったよ」
俺は父さんと麗奈を待たせているので急いでヘリポートへと向かっ

た。

（明久はリングにちゃんとした炎を燈せるほどの覚悟があった。属性は“晴れ”と“雷”だった。それもどちらも似たような炎の大きさだった。明久は二つの強い波動を持っている、か。面白いことになりそうだ）

俺は明久のこれからに楽しみを覚えた。

明久強化訓練開始

「シエン。　怪我治ったよ。　だから……」

明久の怪我が完治したようだ。

「わかった。　しばらくは基礎だからな。　腕立てやらなんやらで体を鍛える」

「わかったよ」

「じゃ、今日家に来い。　そこでお前の今の状態を確認する」

「じゃあ学校終わったらすぐに行くね」

「待っている」

◇

学校が終わり、俺は家の玄関前で明久を待っていた。

「シエン！」

「来たか……」

走ってきたようで、汗をかいていた。

「付いて来い。　案内する」

「え？　あ、ちょっと待ってよ！」

「急げ。　麗奈に見つかる」

まだ麗奈は地下のことを知らない。
というか、明久が麗奈に見つかると捕まる。

「ここだ」

「ここだって……何も無いよ？」

着いた場所は何も無い空間。
あるものは芝生ぐらいだけだ。

「まあ見てな」

俺は壁に手をかざす。

《――――承認シマシタ。　ゲート、オープンシマス》

機械音声が鳴り、芝生の一部に地下へと続く階段が現れる。

「す、すごいね……」

明久は唖然としていた。

「入るぞ。　付いて来い」

俺たちは地下へと入る。

「……家の下にこんな場所があったんだね」

「ああ。　ここは俺の訓練場として使わせてもらっている」

母さんに初めて連れてこられたときは別の入り口から入ったが、あのゲートは直接訓練場に入るためのゲートである。

「広いね……」

「今や日本トップクラスの大企業のトップの豪邸だぞ？　当たり前だ」

ＫＡＮＺＡＫＩグループは今では日本の大企業のトップ３に入るほどの企業に進化していた。

「……なんか凄いね」

「明久お前……わかってないだろ……」

「難しいことはわからないよ！」

「俺は簡単に言ったつもりなんだけどな……」

今に始まったことじゃないが、明久の馬鹿さに呆れていた。

「さて、今日はお前の能力を測る。　今のお前の全力を見せてみろ」

「わかったよ。　で、何をすればいいの？」

「まずはこの機械の上で走り続けろ。　限界までだ」

「これ？　とにかく走ればいいんだね」

「じゃあ始める。　準備はいいか？」

「うん。　大丈夫だよ」

「よし。　始めるぞ。　カウント3から」

3……2……1……0！

明久の強化トレーニングが始まった。

「ぜぇ……はぁ…はぁ…はぁ……」

体力の限界になったのか、息も絶え絶えと言う様子で倒れている明久。

「それなりに体力はあるな。　これなら他のトレーニングしながらでも大丈夫だな」

「……そ…そう……？　と……とにかく……休ませて……」

本当に死にそうな感じだな……。

「お、おう。　ゆっくり休め。　今飲み物とか持ってくるから」

急ごう。　冗談抜きでやばそうだ。

◇

「明久、飲めるか？」

「う、うん……大丈夫だよ……」

俺はスポーツドリンク（冷えてないよ、ぬるいよ）を明久に渡す。

明久は体を起こしてそれを飲んだ。

「冷えてるのが欲しかったな……」

「前に何かで運動後の熱を持った体に冷えたものを取り込むと体に悪いと聞いたことがあったからな。　一応参考にしたんだ」

正確には、ＩＳの原作の一夏がそう言ってたんだよな。
それが正しいのかは知らんが。

「へー、やっぱりシエンは物知りだね」

「いや、合ってるかは知らんぞ？」

「それだけじゃないよ。　学校のテストじゃあいっつも満点だからね。　やっぱりシエンは頭もよくて強くて、憧れるよ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃねえか。　よし。　そんなお前にあの指輪について教えてやろう」

「それってあの燃える指輪のこと？」

「ああ。　前にお前が炎を燈させたあの指輪だ」

「ずっと気になってたんだ」

今まで聞いてこなかったのは偉かったな。

「あの指輪……リングは特殊で、あのときお前が炎を燈したリングは幾つあり、その色がなんだったか覚えているか？」

「確か二個だったよね……？　色は覚えてないや。　ゴメン……」

「まあいい。　あの炎は“覚悟の炎”、もしくは“死ぬ気の炎”と呼ばれる」

「あ！　だからあの時僕に覚悟を魅せろって言ったんだね！」

「正解だ。　リングの炎を燈すには条件がある」

「条件？　それが炎の出なかったリングと関係があるのかな？」

「お前にしては鋭いじゃねえか。　リングには属性があり、リングの属性と使用者に宿る波動が合い、なおかつ確固とした覚悟が無ければリングに炎を燈すことができない」

「だから他のリングにはなんにも起こらなかったんだ」

……なんだ？　今日の明久はなんか凄いぞ？
いつもの馬鹿さがありえないほど冴えている……！

「じゃ、次にリングの属性について。　リングには属性があると言ったな。　リングの属性は全部で七種類。　大空・嵐・雨・雲・晴・雷・霧の七種類だ」

「天気みたいだね」

お、正解だ。

「そして、属性により炎の色が違う。　大空は橙（オレンジ）、嵐は赤（レッド）、雨は青（ブルー）、雲は紫（バイオレット）、晴れは黄（イエロー）、雷は緑（グリーン）、霧は藍（インディゴ）。　お前があの時燈したの色は黄と緑。　つまり、晴れと雷だ」

「へー。　僕は晴れと雷の属性が使えるんだ。　じゃあシエンは？」

「俺は珍しく、全七属性全ての波動を持ち、全てのリングを扱える」

「シエンって凄いんだね。　僕も他の属性のリングって使えるの？」

「明久は晴れと雷のリング以外は使うことはできない。　波動は生まれたときに決まっており、お前が使えるのはどう足掻いたって晴れと雷の二つだけだ。　まあ、複数の属性を扱えるのは得だな」

「ねえシエン。　属性って色だけが違うの？」

「いいや、属性ごとに特性が違う。　たぶんお前に言っても理解ができないだろうから、お前の使える晴れと雷だけ教える。　晴れの特性は“活性”で、傷を治したりすることができる。　雷の特性は“硬化”で、物の強度をあげたりすることができる。　あ、晴れの炎を燈しただけじゃあ効果は得られんから。　雷は電磁シールドとして使えるぞ」

「……最後のはわからなかったけど、晴れは傷を治したりすることができて、雷は物を硬くすることができるんだね」

「間違ってはないな。　お前の理解力だとこれくらいが限界だろう。もっと詳しく知りたかったら、もう少し利口になってくれ」

明久は馬鹿だから応用とかはまだ無理だ。

「そう言えば、お前の波動の強さをなんとなくでも知っておきたいな。　明久、このリングに思いっきり炎を燈せ」

俺が渡したのは晴れと雷の精製度Dランクのリングだ。

「炎を燈せばいいんだね。　前みたいに……」

リングに炎が燈り、二つとも砕けた。

「あれ？　ゴメン。　リングが壊れちゃった……」

「じゃあ次はこれだ」

今度は精製度Cランクのリング。

「壊れても別にいいから。　気にせずやれ」

「う、うん……わかったよ」

また炎が燈り、また、二つとも砕けた。

「！　お前すげえな。　リングがお前の波動の大きさに耐え切れず壊れやがった。　まさかCランクリングでも耐えられんかったか」

「……それって凄いの？」

「凄いぞ。　リングがお前の持つ波動に耐え切れなかったんだから」

「シエンはどうなの？」

「俺か？　俺は大空はBランクで確実に砕けるな。　前にAランクのリングでも壊れたことがあったな。　それ以外だと嵐と雨、雲が

Cランクで確実、Bランクは稀に砕け、残りはDランクだと確実に砕けるな」

いやーAランクのリングが壊れたときはビビッタよー。
たまにあるんだよな、Aランクのリングが壊れること。

「……シエンって本当に凄いね」

俺は誰がなんと言おうとチートだからな。
なぜか波動がでかい。
普通一つ以外は微弱なんだろ？
どんだけだよ……。

「お前の晴れと雷の波動は俺のそれよりもデカイ。　それは確定した。　明久、Bランクのリングでやってみろ」

「わかったよ」

リングに炎が燈り、しばらく経っても砕ける気配は無い。

「……お前の波動はBランクのリングでやっと耐えれるほど大きい。
まだリングを使った戦いは教えんが、これだけは忘れるな。　絶対に誰にも言うな」

「わかった。　誰にも言っちゃ駄目なんだね」

「もしも言ったら……」

「（ゴクリ）……言ったら……？」

「お前のこれからがどうなるかわからなくなる。　最悪、死ぬぞ」

「！　わかった。　絶対に言わない」

「俺の無責任で教えちまったが、何があっても他の誰かには教えるな。　明久、俺はお前を信じるぞ」

絶対に言わないことを。

「わかった」

「なにかあったら俺を呼べ。　なにがあっても助けてやる」

俺が無責任で教えちまったんだ。

守らなければならない。

俺の手による明久の強化は始まったばかりだ。

明久強化訓練開始（後書き）

明久は戦闘能力に関しては雄二を凌駕するほどにしたいと思います。

明久の好きな娘

俺たちは小６になった。
第一回モンドグロッソは原作通り織斑千冬が優勝した。
ＫＡＮＺＡＫＩグループのＩＳの業績もどんどん上がっている。
それでフランスのデュノア社が視察に来た。
まだ引き取られていないので、シャルはいなかった。

俺の日常からだと、麗奈と明久がいい感じになってきた。
文月学園入学前にはくっつくだろう。
瑞希とは同じクラスにならず、誰かの策略かまた明久と同じクラスだ。
俺と麗奈は一度も同じクラスにはなっていない。
そもそも、双子って同じクラスになれるものなのか？
疑問が浮かび上がった。
６年間で同じクラスになった回数は

麗奈　０
瑞希　２
明久　４

明久とは縁があるようです。
明久と麗奈は、俺と同じクラスにならなかった二回、同じクラスになっていた。
んで、明久強化により、明久の強さはかなりのものになっている。
微妙だが、高校生くらいなら、サシの勝負でだったら勝てるくらいにはなっている。
でもまあ、相手が原作の雄二並に鍛えられた相手だったら負けるけどな。

「さて明久。　覚えれたか？」

「木刀一本くらいならできるようになったよ」

俺は明久に暗器スキルを覚えさせていた。
俺の暗器はなぜか武器とか関係なしでしまえるようになっている。
だから、今俺が持っているのは、『聖天絶刀』に無名の刀数十本、様々な種類の銃器、暗器には全く無縁な物などなど、他多数持っている。

「俺並になれとは言わんというより無理だから、せめてもう一本は持てるようになってくれ」

明久には木刀ともしものときの真剣の二本は最低でも持っていてほしいからな。

「わかった。　頑張るよ」

「さて、剣道ではない、喧嘩の試合でもするか」

「お手柔らかにね」

「俺の本気についてこれる生身の人間なんてそうそういないからな」

「……そうそういないんじゃなくて、いないんじゃないの？」

「世界は広いからわからんぞ。　でもお前は凄いぞ。　お前はこの1年ちょっとで俺の半分にも満たないが、俺の3割の力に互角に闘えるんだからな」

「僕だってシエンの地獄のトレーニングをやっているわけじゃないからね」

「……地獄のトレーニングって、言い過ぎ……じゃないか」

３時間ランニング（一定の速度よりも遅くなったらおしおき）とか、腕立て、腹筋、背筋ｅｔｃ．をそれぞれ一日２００回やらせたり、１５０キロの剛速球をぶつけまくったり……。

……よく明久も付いてこれたな……。

「さて、そろそろ休みを入れるか」

「休みって休憩？」

「いいや違う。　トレーニングそのものを休みにするんだ。　お前、最近ちゃんとした休み取ってないと思ってな」

「わかった。　明日は休みにするよ」

「明日は日課以外のトレーニング禁止だ。　破ったらお前の好きな人に告白しろ」

「え！？　そんなのってありなの！？　絶対にふられちゃうじゃないか！」

「お前、好きな人いるんだ。　知らんかったな」

「な！　謀ったな！　シエン！」

「お前が勝手に嵌っただけじゃん。　で、お前、誰が好きなんだ？
俺の知ってる奴か？」

「い、言えるわけ無いよ！　恥ずかしいじゃないか！」

コイツの好きな奴知れたら後々助かるのに。
……能力使えば一発だけど。
能力使用は可能な限り避けたいからやらんけど。
でもまぁ、十中八九麗奈だろう。
麗奈といるときの明久は嬉しそうだしな。

「ま、告白したくなかったら日課以外のトレーニングをしないことだな。　余程バレない自信があるなら、止めはしないがな」

俺に隠し事はできんぞ、明久。

「でも、そうすると明日暇だなぁ……」

「俺はちょっと出かけるから。　麗奈とか瑞希とか、他の友達とか誘えば？」

「うーん瑞希ちゃんとは最近あまり喋ってないし、友達ってシエンのトレーニングがあるからあまりいないんだよね。　でも麗奈ちゃんを誘うのは申し訳ないし……」

遠慮がちだな、本当に。

「んじゃ、もしも麗奈が了承すればいいのか？」

「そうだね。　まあ、麗奈ちゃんは了承しないと思うけどね」

あんだけアピールしていてもまだ気づかんのか?!
コイツの鈍感さは筋金入りだな……。

「じゃ、麗奈に聞いてみるか」

俺は携帯を取り出し、麗奈に掛ける。

『はい、折原です』

「麗奈? 俺だ」

『あ、お兄様。 何でしょうか?』

「お前、明日暇か?」

『明日ですか? 明日は確かお兄様はお出かけのはずでしたが……』

「俺じゃなくて明久だ」

『明久さんですか!? 私は大丈夫です!』

明久の名前聞いた瞬間に豹変したな。

「わかった。 明久にそう伝えておくから」

『はい! お願いします!』

通話は途切れ、俺は携帯をしまう。

「明久」

「どうだったの？　どうせ駄目だったよね……」

「大丈夫なそうだ」

「だよね、やっぱり大丈夫だったよねってええ！？　大丈夫だったの！？」

やっぱ明久の好きな奴って麗奈で決まりだな。

「ああ。　大丈夫だって言ってたぞ」

「よかったぁ。　あ、そう言えばシエンってどこに行くの？」

「俺はちょっと池袋にな」

「池袋って東京のだよね？　どうして？」

「ある人に用があるんだ」

池袋最強の、あの人にね。

「明日の予定をちゃんとお前から伝えとけよ。　だって“デート”だろ？」

「ちっ、違うよ！　デートじゃないよ！」

その動揺があるからバレるんだよ。

「まぁ、頑張れよ。　俺はお前なら麗奈を任せてもいいと思っているんだから」

「！」

「お前が好きなの、麗奈だろ。　俺はお前を応援しよう」

「……ありがとうシエン。　僕、頑張るよ」

これで確定したな。
原作ブレイク完了だ。

「明日はサポートできんが、馬鹿をしなければ大丈夫だ」

コイツは根っからの馬鹿だからな。

「うっ、頑張るよ……」

「今日は中止だ。　明日の準備をしろ」

さて、俺は撮影の準備をしなければ。

池袋に着いたら

「明久と麗奈は上手くやっているだろうか……」

朝１１時。
俺は東京池袋に来ている。
そのため、明久と麗奈のデートは見れないでいる。
それでも諦めきれないので、父さんに任せることにした。
折原家の人間は皆麗奈と明久のことを気にしている。
俺が池袋に来たのは池袋最強の名を持つ父さんの犬猿の仲、平和島静雄さんに会うためだ。

「さて、しばらくは暇だな」

連絡はしたのだが、仕事があるらしいので、“４時までは池袋を散策してろ”とのことだ。

「とりあえず適当にぶらつくか」

今一わからないので、デュララに出てくる場所（といっても、実際のものそのもの）を回ってみることにした。
俺が歩き出そうとしたときに、誰かに肩を掴まれた。
俺は振り向くと、そこにいたのは都市伝説こと

「セルティさん？」

“首無しライダー”ことセルティ・ストゥルルソンであった。

『シエンじゃないか。　池袋にいるなんてどうしたんだ？　お前は

一人で何しているんだ？　臨也とかはいるのか？　ここになんの用だ？　そもそも、小学生が一人で知らない土地を歩くのは危険ではないか？』

セルティさんは首が無い。

だから、ＰＤＡに文字を打って会話をする。

「セルティさん。　一度にいくつも質問しないでください。　まず、ここにいるのは用事があるからです。　で、今日は俺一人です。用事って言うのは静雄さんに会いに来たんです。　それと、そこらのチンピラには負けないので大丈夫です。　大丈夫ではないといえば、池袋についてあまり知らないことですね」

『そうか。　お前が静雄に用とは何が目的だ？　弟目当てか？　それだったら静雄が適任かもしれんが、無理だと思うぞ』

「違いますよ。　俺は幽さんに用があるわけではありません。　静雄さん本人と話がしたいんです」

『詳しくは訊かんが、静雄は怒らせるなよ。　昔よりかはマシになったけどな』

この世界の静雄さんは沸点が高くなったようだ。

「ご忠告ありがとうございます」

『そう言えばお前一人なんだろ？　静雄に会うまでは私は仕事の途中だから駄目だけど、杏里ちゃんにでも案内頼んでみようか？』

仕事中に俺に話しかけてたんですか……。

「杏里さんですか？　帝人さんに迷惑がかかるのでは……？」

『杏里ちゃんも帝人も優しいから大丈夫だと思うよ。　二人に用事が無ければ来てくれると思うけど』

無知で回るよりかはいいか。

「すみません、訊いてみてもらってもいいですか？」

『いいよ。　ちょっと待っててね』

セルティさんはメールを送ったらしく、少しすると返信が来た。

『大丈夫だって。　西口公園に二人が来てくれるよ。　私もちょうどそこを通るから乗せてくよ』

「すみません、わざわざありがとうございます」

『気にしないでいいよ。　仕事のついででもあるし』

セルティさんってホントいい人だよなぁ。

『さ、行くよ。　乗って』

「あ、はい。　お願いします」

俺はセルティさんの跨る黒バイクの後ろに跨る。

セルティさんは影の真っ黒のヘルメットを俺にかぶせる。

「これはなんですか？」

知っているけど訊いてみる。

『これは影だよ。　私の着ているライダースーツとかも影でできているよ。　私としては、君に初めてこれ使うのに、まったく驚いていないことに驚いたな』

「俺はあの折原臨也と大企業のトップの息子ですよ？　非常識的なものに慣れているんです」

折原臨也は歪んでいるし（今はそれほどでもない）、旧姓神裂火織は若くして大企業にまで成長させた。

こんな二人の間に生まれた俺たちが普通なわけがない。

『……これ以上ないほどの説得力だな』

人間味帯びた精霊にも通用するようだ。

『さて、無駄話は終わりにして行くよ。　あまり遅すぎると二人を待たせちゃうからね』

「あ、すみません」

セルティさんの駆る黒バイクは、エンジン音ではなく、馬の嘶きのような音を池袋の街に響かせ、街を走る。

（実際に乗ってみるとすげぇな）

俺は黒バイクの感想を募らせていた。

少し時間を遡り、明久と麗奈のデート……

「ゴメンね、付き合わせちゃって」

「そんなこと、全然構いません！　むしろお誘いありがとうございます！」

謙遜する明久と、二人っきりの状態に感極まる麗奈。
そんな二人を見る影が一つ。

「臨也様、二人が接触したようです。　ただ今より、撮影を開始します」

『ああお願い』

折原家に使える執事の一人で、臨也専属の執事だ。
臨也に絶対服従し、臨也を補佐する唯一の人間だ。
臨也も終焉と同様に気になっていたのと、終焉に頼まれたこともあったので記録に残すために彼を行かせたのだ。

そして、見られていることに全く気づいていない二人はというと……

「じゃあ行こうか」

「はい！」

「れ、麗奈？　なんで僕の手を握るの？」

「いいじゃないですか。　私はこの方が落ち着きます」

……いちゃついて（？）いた。

「ねぇ麗奈」

「なんでしょうか？」

「本当に僕でよかったの？　こんな休みくらい別の友達と遊んだりした方がよかったんじゃ……」

「そんなことありません！　私は明久さんと一緒に遊びたかったので来たのです！　明久さんは自分を過小評価しすぎです！　もっと自信を持っていいんですから！」

自分を過小評価する明久に麗奈が反論する。

「明久さんは自信を持っていいんです！　お兄様と一緒にいつも守ってくださっていますし、お兄様がいないときでも私を守ってくれています！　明久さんは勉強は駄目ですけどとっても優しいんです！　私はそんな明久さんが大好きなんです！　そんな明久さんだからお兄様も応援してくださるんです！　もっと自分に自信を持ってください！」

興奮していたのか地味に明久を傷つけ、自分も気づかないうちに明久に自分の気持ちを暴露していた。

「……え？　れ、麗奈？　シエンが応援してくれるってどういうこと？　それとだ、大好きって……」

「へ？　あ！　えっと……その……／／／」

やっと気づいたのか麗奈は顔を真っ赤にして俯いた。

明久も顔を赤くしていた。

「れ、麗奈？」

「……いてく……い……ん」

ボソッと麗奈がつぶやく。

「え？　何？　麗奈。　聞こえなかったんだけど……」

「明久さん！　聞いてください！」

「は、はい！　なんでしょうか！」

いきなり大声を出した麗奈にビックリして畏まる明久。

「わ、私は明久さんが好きです！！　つ、付き合ってください！！／／／」

「……」

顔を真っ赤にして告白する麗奈と、同じく顔を赤くしてフリーズして固まった明久。

「あ、あのぉ、明久……さん？」

反応のない明久に不安になって声をかける麗奈。

「へ？！　あ！？　いや！　その！」

「お、落ち着いてください明久さん！」

「ぼぼぼ僕はおおお落ち着いていいいいるよ！」

さっきの告白で完全に思考回路をやられたようだ。

「えっと……返事はいいです……。　私の気持ちを伝えだけですので……」

返事は聞かないと告げた麗奈に、ようやく治ってきた明久が反応した。

「れ、麗奈！」

「？」

「ぼ、僕も麗奈が好きだ！　こんな僕でよければよろしくお願いします！」

自分の気持ちを打ち明けた明久。

当然の如く顔は真っ赤だ。

「あ、明久さんが、私のことが好き……？」

「うん。　好きだよ」

「……（ボンッ！）」

麗奈が頭から煙を出しながら顔を真っ赤にした。

「れ、麗奈！？　大丈夫！？」

「ら、らいりょぶれす」

「ぜ、全然大丈夫じゃないよ！？　ちゃんと喋れてないから！」

「落ち着いた？」

「は、はいぃ……」

明久が必死に落ち着かせたおかげで、やっと麗奈がまともに喋れる

ようになった。

「えっと……本当に僕なんかでいいの？」

「明久さんだからいいんです！　幼稚園のときからずっとこの気持ちは変わりません！」

「よ、幼稚園から!?　そんな前から僕が好きだったの!?」

「はい／／／」

「ぼ、僕、そんなに麗奈の気持ちに気づいてあげれなかったんだ……ゴメンね……」

「今までずっと思い続けていたからこそ、こんなに嬉しいんです。これからよろしくお願いします」

「こ、こちらこそ」

はれて恋人同士になった明久と麗奈。
終焉の今までの努力が報われた瞬間であった。

「臨也様、お聴きになりましたか？」

『ああ。　麗奈がようやく報われたね。　もう録画はいいよ。　初デートだからね。　邪魔しちゃ駄目だよ』

「了解しました。　これより帰還します」

一部始終を見ていた執事は、臨也の命により邸宅に帰還した。

明久と麗奈が恋人同士になったのを知らない終焉は、竜ヶ峰帝人と竜ヶ峰杏里と落ち合った。

二人は結婚して、俺より二つ年上の娘が一人いるらしい。

「すみません、俺の所為で時間を使わせてしまって……」

「別にいいよ。　臨也さんにはお世話になったしね。　初めてだからしょうがないよ」

「すみません帝人さん、杏里さん」

「全然構いませんよ。　セルティさんの頼みですし、シエン君はまだ12歳ですから、一人だと危険ですし」

本当に優しい……。
感動の涙が出そうだ……。

「じゃあどこに行こうか。　行きたいところってある？」

「池袋のこと知らないんで無いです」

「んーじゃあサンシャインシティでも見てみる？」

「お願いします」

俺たちは移動を開始した。
どうせなら帝人さんの娘さんを見てみたかったな。

池袋に着いたら（後書き）

明久と麗奈がくっつきました。
帝人と杏里に子供がいました。
設定を考え中……。

池袋最強の男（前書き）

タイトルの割りに、静雄さんの出番はそこまで多くありません。

池袋最強の男

昼時、俺は帝人さんと杏里さんと一緒に、とある店の前にまで来ていた。

「変わってる店ってここですか？」

「そうだよ。　少し変わってるけど、おいしいよ」

店の看板には露西亜寿司と書かれていた。
つまり、サイモンさんのいる寿司屋だ。
門田さんたちワゴン組御用達のあの露西亜寿司だ。

「オーミカド。　イラッシャーイネー」

黒人の板前が話しかけてきた。
サイモンさんだ。

「ソノコ誰ネ？　初めて見る顔ヨー」

「帝人さん、この人は？」

「この人はサイモンさん。　ロシア系の黒人だよ」

「えっと初めまして、折原終焉（シエン）です」

「“折原”？　お前が情報屋の息子か？」

流暢な日本語で話してくるのは白人の板前、名前はデニスだったは

ずだ。

「あ、はい。　折原臨也の息子です」

「へー君がイザイザの子供なんだー」

「あの人の子供には見えないっすねー」

「あ。　門田さん」

「おう。　で、コイツが臨也のガキか」

ここで登場したのはワゴン組こと、門田京平さん、渡草三郎さん、狩沢絵理華さん、遊馬崎ウォーカーさんだ。

「あなたたちは？」

「俺は門田京平って言うんだ。　よろしくな」

「俺は渡草三郎。　よろしくな」

「私は狩沢絵理華って言うんだよ。　よろしくね、シエン君」

あ、さっき名前聞かれてたんだ。

「俺っちは遊馬崎ウォーカーって言うんす。　よろしくっすね」

「さっき聞いたと思いますけど、折原終焉です。　よろしくお願いします」

「おいアンタら、店の入り口を塞いでないで座ってくれ」

「あ、すみません」

そういえば入ったところでサイモンさんに話しかけられたんだっけな。

そのまま門田さんたちが来たんだったな。

「なあお前ら、どうせなら一緒に食うか？」

「あ、はい。　そうします。　シエンもいいよね？」

「はい」

俺たちは奥の座敷に座った。

柱には傷があり、包丁が刺さったときのものだろう。

「臨也、元気にしてるか？」

「はい。　昔よりも恨みを買わなくなったみたいです」

「そうか。　昔のままだったら家族に迷惑かかるから当たり前か。お前は大丈夫なのか？」

「？　何でですか？」

「臨也に恨みを持っているやつはいるからな。　臨也に復讐しようとする奴もいる。　そんな奴に絡まれたりしてないのか？」

「ああ、そのことですか。　確かに父さんに恨みを持った連中が俺

や妹を狙って襲ってきますよ」

俺はそれが当たり前と言う感じに返す。

「大丈夫なの？！」

「大丈夫ですよ。　今まで襲ってきた奴は全員俺がボコボコにして返り討ちにしましたから」

「凄いな……」

「いやーあいつら弱すぎて手応えないですね。　妹攫われたり、友達にまで手を出した奴らを全員病院送りにしてしまうのが俺の悪いところですね」

「……お前、それは本当なのか？」

「本当ですよ」

俺がボコボコにしてから、連中は警察に連れてかれたり、裏の人間が引き取ったり、両親には俺の後始末のおかげで苦労を掛けてしまっている。
ちゃんと親孝行しなければ。

「……やっぱりお前は臨也の子供だな」

皆が納得したような顔をしている。

「それは俺が異常だって言いたいんですよね？　否定はしませんけど」

俺はこの世界に来た時点で異常なんだから。

「ドウゾ寿司ね。　ソレトここではそういう話ダメネ」

「あ、すみません。　気をつけます」

寿司が置かれる。
ここの寿司、食べてみたかったんだよな。

「いただきます。　……美味い」

寿司が美味い。
原作にも美味いってあったが、本当に美味い。
門田さんたちがリピーターになるのもわかる。

「ご馳走様でした」

俺たちは食べ終えた。

「会計お願いします」

「いいよシエン。　僕が出すから」

「それはさすがにできません。　俺にわざわざ付き合ってもらって

るんですから、お金くらい払わせてください。　それに、お金には困りませんから」

ＫＡＮＺＡＫＩグループトップの息子だからね。

「それでも、子供に払わせるわけには行かないよ」

帝人さん、いい人だけどなんか悪いな……。

「シエン君は気にしないでください。　子供はそういうのを気にしないでいいんですよ」

「……すみません。　何から何まで……」

結局、帝人さんに払ってもらった。

申し訳ないな……。

それから時間が経ち、静雄さんに会う時間が迫ってきた。

「今日はありがとうございました」

「ううん、大丈夫だよ」

「気にしないでください。　私たちも楽しかったですから」

「じゃあ、俺は用事があるので失礼します！」

「うん、またね」

「またいらしてくださいね」

「はい！　また来ます！」

俺は走って離れた。

そして、俺の目的が果たされようとする。

「静雄さん！」

静雄さんを見つけた。
隣にはドレッドヘアーの男性もいる。

「なんだ？　お前。　静雄の知り合いか？」

「あーはい。　コイツは臨也のガキっす」

「折原終焉です」

「俺は田中トムっつーんだ。　しかしまぁ、コイツが噂に聞くあいつの子供ねぇ。　見えねえな」

「さっきも言われました」

「で、俺に用って何だ？　思い当たる節がなんもねえんだが……」

「力試しです」

「力試し？」

「はい。　俺の力がどれほどのものか、気になったんです。　静雄さんを利用する形になってしまいますが、俺の知る中で最も強いあなたに力を貸して欲しくて」

「ふーん、力試しねぇ……。　で、なにするんだ？」

「俺に、一度本気で殴ってください」

「お前正気か！？　臨也の子供ならコイツの腕力について知ってるだろ？！　ただじゃすまねえぞ！？」

「正気ですよ。　俺も力には自身があるんですよ。　俺の力が静雄さんにどこまで拮抗することができるか確かめるのが俺の目的ですから」

「いいぞ。　ただし、俺は全力でやるけど、どうなっても知らねえからな」

「はい。　最初からそのつもりです。　本気で来てください」

「行くぞ」

「お願いします」

「おらぁぁぁぁ！」

「はぁぁぁぁぁ！」

俺に向かってくる静雄さんに拳に俺の拳をぶつける。

ズズズッ……

靴がすれる音が響く。

「さすがですね。　俺の右腕が痛みますよ。　ありがとうございました」

結果は俺が力負けし、少し後退した。

さすがは静雄さんだ。

いくらまだ成長途中でも、軽く大人の筋力を超える身体能力を持つ俺でも、後退させられるほどの力だ。　本気でぶつけたのに。

「おいおい、お前、それでもガキか？　静雄のパンチを受けきりやがった……」

驚愕するトムさん。

まぁ、当たり前の反応だよな。

「お前、腕大丈夫か？」

「大丈夫です。　少し痛みますけどね」

「それならよかった。　で、これでいいのか？」

「はい。　本当にありがとうございました。　やっぱりあなたは俺の超えるべき存在です。　絶対に超えてみせますよ」

「そうか。　あまり無理すんなよ。　お前は臨也の子供だってことでもここでは目立つからな。　ここでは特に気をつけろよ」

「ご忠告ありがとうございます。　こんな用事に付き合ってもらってすみませんでした。　また来ます」

「おう。　またな」

「はい。　ありがとうございました。　失礼します」

俺の目的を達成し、俺の目標も見つけた。
絶対に静雄さんを超えてやる。
俺は新たな目標と共に、池袋を離れた。

池袋最強の男（後書き）

サイモンさんや遊馬崎さんの喋りはこれでいいのだろうか？
一人称などに不安があります。
感想などがあれば、お願いしますｍ（＿＿）ｍ

池袋から戻って

「ただいま～」

「お帰りなさいませ、お坊ちゃま」

ホント堅苦しいな。
こういうのは慣れが肝心なのか？

「父さんはどこにいる？」

「旦那様なら自室にいらしています」

「わかった」

俺はそのまま父さんの部屋に向かう。

コンコン。

「父さん、終焉です。　入ってもいいですか？」

「いいよ。　入りな」

俺は部屋に入る。

「どうだった？　静ちゃん、化け物染みてたでしょ」

「静雄さんに力負けしましたよ。　少し後退させられました」

俺がそう言うと、心底驚いたような表情になった。

「へぇ、まさか生まれながらのドチートに力押しするなんて、本当に静ちゃんは化け物だな」

「まぁ、まだ成長途中ですからね。　いくら化け物染みた身体能力を持っていたとしても、まだ俺の体は１２ですからね。　土台である身体はまだ出来上がっていない」

「それでも、常軌を逸したほどの身体能力と強度だよね」

「それが転生者であり、化け物能力を大量に貰った俺ですからね。それがなければ知識を持った普通の人間でしかありませんよ」

「それもそうだね」

「話が逸れましたが、麗奈と明久の様子はどうだったんですか？」

「麗奈にまだ会ってないのかい？」

「ええ。　池袋から戻ってすぐにここに来たので」

「そうか……。　だったら麗奈に会うといいよ」

「？　わかりました」

なんなんだろうか……？

「では、失礼します」

俺は部屋を出て、まずは自分の部屋に戻り、財布などを置く。
俺はどうしたものかと思っていると、

コンコン。

扉がノックされた。

「お兄様、麗奈です」

「麗奈か。　なんだ？」

麗奈が俺の部屋に入ってくる。
その顔は、どこか嬉しそうであった。

「なんかいいことでもあったのか？　お前、嬉しそうな顔してんぞ」

「はい、ありました」

「へぇ。　もしかして明久と付き合うことになったとか？」

「はい。　明久さんとお付き合いすることになりました」

……はい？

「……俺、冗談のつもりで言ったんだけど、マジ？」

「はい。　あまりにも明久さんが自分のことを過小評価していたので、つい勢いで……」

「勢いで告白したら成功しちゃったのか。　まぁ、お前らは気づい

てなかったけど相思相愛だったからな。　俺の予測よりも速かったな。」

「お兄様、明久さんが私のことが好きって、いつから気づいてらしたのですか？」

「少し前からお前といるときの明久、どこか嬉しそうだったからな」

「……そうだったのですか。　お兄様」

「ん？　何だ？」

「ありがとうございました」

「なんで礼なんかすんだ？」

「お兄様のおかげで明久さんとお付き合いすることになりました。私一人でしたらきっとまだ友達同士という関係から進むことができなかったと思うのです」

「そうか？　俺は確かにサポートはしたけどよ、結局はお前たちの意志じゃねえか。　俺は、お前らが良ければそれでいいんだよ」

「お兄様はいつも私たちのために動いてくださりますよね」

「まぁな。　俺は俺の認めている奴限定で後ろ盾するんだよ」

「それがお兄様のいいところだと、私は思います」

それが力を持った俺の生き方だ。

仲間を守る。
絶対に譲れない俺の信念だ。

「ま、おめでとう。　よかったな、麗奈」

「はい！」

うーん……。
告白のときの映像見たいな。
凄い気になる。
父さん撮ってくれたのだろうか？

「んー、それなら明久のトレーニング時間を短くしよう」

「いいんですか！？」

「別にいいよ。　明久はかなり強くなったし、お前と付き合うならお前と一緒にいれる時間を増やしてあげないとな」

麗奈は俺と明久がトレーニングをしていることを知っている。
さすがに隠し通すのは無理だった。
おかげで、地下訓練場のことが知られてしまった。
まぁ、ＫＡＮＺＡＫＩグループの地下研究所とかはばれていないのでまだセーフだ。

「ま、俺はお前らがくっついてくれて嬉しいぞ。　これからも頑張れよ」

「はい！　失礼します！」

「おう。　明久と仲良くな」

俺は麗奈の父親か！

言ってから思った俺だった。

「父さん」

「どうだった？」

「驚いた。　俺は高校入学前には付き合わせようと思ってたんだけどね。　まさか小学校卒業前に付き合い始めるとはな」

「それはそれでいいじゃないか。　俺たちは麗奈と明久の仲をよくしようしてたんだし」

「そうだな。　それとさぁ、父さん、麗奈の告白のシーンのデータ、持ってるよね？」

「ああ持ってるよ。　告白終了後には撤収させたけどね」

「そうか。　聞いては駄目だとわかっているんだが、そのデータ、俺にくれ」

「いいよ。　元々君の頼みでもあるしね。　でも、麗奈と明久にバレる前に処分しなよ」

「わかってる」

「これがそのときの映像だよ」

「どうも。　俺は戻ります」

「ああ。　今までご苦労さん。　それと、これからも頑張ってね」

「はい」

俺は自室に戻り、麗奈と明久の告白を観た。

「初々しいねぇ」

俺はそれを服にしまった。

これで、俺がバカをしない限り見つかることはなくなった。

もしかしたら明久の両親、及び玲さんに求められるかもしれないからな。

破壊はまだしない。

「これが原作にどう影響するか……」

終焉の日常

「ごめん。　気持ちは嬉しいけど、それに応じることはできない」

「…そう……ですか……」

俺は中一になったんだけど、告白されました。　はい。
今日だけで3人目だ。
体育祭で目立ちすぎた（２００m走でダントツ1位（陸上部涙目）に、明久と共に二人三脚でぶっちぎり、リレーではアンカーで3クラス抜き（全5クラス）等等）所為か（目立ちすぎ）、それとも毎回テストで全教科１００点でダントツの1位になった所為なのか、１０月を過ぎたころから女子生徒からの告白が爆発的に増えた。
先輩からも告白されるのだが、全て断っている。

「あ、あの……！　折原君って好きな人がいるんですか？」

「いないよ。　ただ、俺はまだ付き合うつもりがないんだ。　本当にごめん」

特に理由はないけど、付き合う気はないんだよな。

「……わかりました。　時間取らせてしまってすみませんでした！　えと、私はこれで失礼します！」

そう言って女の子は去っていった。

「なんか悪いな……」

「あれ？　シエン、どうしたの？」
俺が立ち尽くしていると、明久が来た。
「明久か。　麗奈はどうした？」
「麗奈は教室だと思うよ。　それよりも、早く戻らないと授業始まるよ？」
「ん、ああ、そうだな」
「……シエン、もしかして、また？」
「ああ。　まただ」
「シエンはどうして全部断るの？」
「俺はまだ、付き合う気がないだけだ。　行くぞ」
「あ、うん」
俺と明久は教室へと戻った。
「そうですね、吉井君。　粒の大きさが０，０６？以下の堆積岩をなんと言いますか？」

今の授業は理科。
明久がどんな答えを出すか……。

「岩石です」

やっぱり明久はバカだった。

「えー……それでは折原君。　答えをお願いします」

「……0，06?以下の堆積岩は泥岩、0，06?から2?までが砂岩、2?以上のものが礫岩、火山の噴出物が堆積してできたものが凝灰岩、生物の死骸などが堆積し、塩酸をかけると気体が発生するものが石灰岩、生物の死骸などが堆積し、塩酸をかけると気体が発生しないものをチャートと言う」

余計なものまで言ったけど、大丈夫でしょ。

「完璧です。　さすがですね」

「すっげぇ……」

「俺もあれくらいできるし……！」

「格好いい……」

余計な声が聞こえてくるな。

「続いて……」

俺は適当に聞きながら授業を終えた。

そして

「折原！　今からでもいい！　我が陸上部に入れ！」

「いいや！　サッカー部に入れ！」

「ここは野球部だ！」

わいわいと先輩方が来た。

「何度来ても答えは変わりません。　いい加減諦めてください」

俺は帰宅部で、体育祭以降、部活の勧誘を毎日受けていた。

「大変だね、シエンも」

「お兄様は部活をしないのですか？」

「面倒くさいし、賞状とか表彰とかに興味ないし」

「あはは。　シエンって本当に凄いよね。　テストだっていつも満点で一位だし」

「麗奈はいつも五本の指には入るぞ？」

「私は満点は滅多に採れませんよ。　お兄様はこの学校で最も頭がいいと評判なんですし」

「それに運動神経抜群で、見た目も正確もいい」

「お兄様は私たちの応援をしてくださいましたが、お兄様はいいのですか？」

「なにが？」

「お兄様はとてももてています。　今日も告白されていましたではありませんか」

「何度も言うけど、本当に付き合わないの？」

「だから、俺はまだ付き合う気にはならねえよ」

ザザッ、ザザッ

「またか……」

「またみたいだね……」

「よう折原」

「吉井、借りを返させてもらうぞ」

俺たちを取り囲むざっと見た感じ、３０人はいそうな集団。

「はぁ……。　明久、麗奈を守れ。　俺が殺る」

「わかったよ」

明久は木刀を持つ。

「嘗めた口きいてんじゃねえぞぉぉぉ！」

集団が襲い掛かってくる。

俺は木刀を両手に持ち、襲い掛かってくる奴らの足に、肩に、腹に、腰に斬撃を入れていく。

「二刀流……七十二、煩悩鳳（ポンドホウ）！！」

「「「ぐあっ」」」

ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥのゾロの技を真似てみたらできちゃったんだよ。

勿論、木刀だから斬れないよ？　本気出したら斬れるけど。

「明久、こっちは終わったぞ」

「こっちはあまり来なかったから大丈夫だよ」

「そうか。　なら帰るぞ」

集団は地にひれ伏し、俺は倒れる輩を見下ろす。

「……終焉……ね……」

俺の呟きは空に消える。

「シエン早く！」

「置いて行ってしまいますよ？」

「あー悪い。　すぐ行く」

こんな日常も悪くはないな。

明久改造計画？（前書き）

タイトルが思いつきません。

明久改造計画？

中二になりました。
俺はいろんな意味で有名になっていました。
成績優秀、運動神経抜群、無双、情報屋。
テストでは相変らず全教科１００点、運動をさせれば右に出る者はいない、お金で情報を売る情報屋、全てにおいて無敗で、長月中だけでなく、ここら一帯に知らぬ者はいないと言わせるほどの有名人になっていました。
顔はそこまで知られていないが、“折原終焉”と言う名は、誰もが知っている。

そんな俺は、校庭でまた囲まれていた。

「あんたら懲りないな。　何度来ても同じだってこと、わからねえのか？」

「うるせぇ！　お前をやれば俺たちの名は鰻上りだ！」

「俺たちの名を知らしめるために！」

『『『貴様にはここで死んでもらう！！！』』』

『『『折原（君）（先輩）ー！　頑張れ（って）ー！！！』』』

ここは学校の校庭で、俺がやることは喧嘩で、しかも授業中なのに、

学校中の声援があるのはなぜだろうか。
先生も見てないでどうにかしようとは思わないのか？
てかもうこれ、この学校の名物になってんだけど！？

「いくらお前でも、この人数に勝てるわけがねえ！」

俺を取り囲むのは１００人はいそうな武装した男集団。
むさ苦しいったらありゃしない。

「はぁ……、馬鹿だよ……本当に馬鹿だよ」

「あ？　なに言ってんだ？」

「この俺に、テメェら如きの力しか持たねえ奴らが、この程度の人数で勝てるわけねえじゃねえか」

「い、言いやがったな！　一斉に掛かれ！」

「いくら折原でも、この人数の同時攻撃を防げるわけがねえ！」

「やっちまえ！！」

『『『おおおお！！！』』』

「馬鹿ばっかだ……」

俺は三本の木刀を出し、一本を口にくわえ、ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥのゾロおなじみの三刀流になった。

「三刀流……龍巻き！」

『『『ぐあああああ！』』』

回転切りで旋風を巻き起こし、襲い掛かってきた奴らを吹き飛ばす。

「鷹波！」

『『『わあああああ！』』』

衝撃波の波を放つ。

「三刀流……百八、煩悩鳳！！」

『『『ぎゃあああああ！！』』』

三筋の斬撃が、三方へ飛び、倒れている奴らも巻き込んで吹き飛ばす。

パキパキパキッ！

技に耐え切れなくなった木刀が折れた。

「まだやるのか？」

１００人はいた男共は、今ではもう３０人ほどしか立っていない。

「う、うおおおお！」

そのうちの一人が特攻してきた。

「弱い」

俺は特攻してくる男の腹を蹴り、そのまま蹴り飛ばす。

「この程度かよ？」

俺は立っている男共を睨む。

「ひ、怯むな！　奴は丸腰だ！　今がチャンスだ！」

馬鹿だ。

「いくらコイツでも、武器がなければこっちのもんだ！」

「やっちまえ！」

『『『うおおおお！！』』』

「愚かな……」

ジャキン！

ズバババババッ！

俺は両手にマシンガンを出し、撃ちまくる。

これは当然エアガン（それでも威力は高い）なので、この場で使っても問題ない。

弾丸がなくなったので、マシンガンをしまう。

俺の目の前には１００人もの男たちが蹲っている。

大して俺は無傷。

汗一つかいていない。

「これで終焉だ」

俺は踵を返し、校舎へと戻り始める。

俺が動き出した数秒後、

『『『きゃあああああ！！！』』』

『『『すげえええええ！！！』』』

学校中の生徒からの歓声が沸きあがる。

もうこれ、卒業するまでは続く気がする……。

昼休み、明久が俺に近づいてきていた。

「お疲れ、シエン」

「ああ。　もうあれ、俺が卒業するまで続く気がする」

「あはは。　さすがにそれはないと思うけど……」

「てか、なんで喧嘩なのに歓声が沸くんだよ……」

「それはシエンが人気だからじゃないの？　最近“終焉の剣（ジ・エンド）”って言う渾名を聞くようになったし」

「何だよ、終焉の剣って……。　それは歓声とは関係ないだろ……。　ってか、先生はあの喧嘩を止めなくてもいいのかよ。　無理でもなんかしようとするだろ、普通」

「それは無理でしょ。　だってあの人数に、あれを汗一つかかずに無双するシエンだよ？」

「わかってはいるんだけどな……。　てか、俺の校内の喧嘩のたびに学校内で授業を止めて観戦するのはさすがにおかしいと思うけど……」

「あはは……それは同感。　でも、僕はありがたいかな」

「授業が止まるからだろ？」

「うん」

「だからお前は馬鹿なんだよ。　お前も勉強しねえと高校で麗奈と同じ高校に入れねえぞ」

「んー……そうだね。　僕も頑張って勉強することにするよ。　シエン、いつも頼ってばかりだけど、勉強教えてくれない？」

「いいけど、巧く教えれるかわからんぞ？」

俺が勉強できるのは完全記憶能力と処理能力、超能力使用で培った演算能力があるからだし。

「教えてくれるならそれでいいよ。　僕だって精一杯頑張るんだから」

ま、コイツはやるときはやるやつだから大丈夫か。

「わかった。　俺でよければやるよ。　あ、条件がある」

「条件？」

「私生活をちゃんとしろ」

「わかったよシエン。　よーし！　そうと決まれば、今日は速く家に帰って片付けとかしなくちゃ！」

こいつは原作ほど酷くはないが、一般的な人間と比べると酷い。原作ブレイクしていいんだから、明久の生活も改善しておこう。

「俺も手伝うか？」

「いいよ、悪いし。　それに、あれがあったんだし、ゆっくりすれば？」

「そうだな。　そうさせてもらう」

「あ、そろそろ席に戻るね」

「もう時間か。　頑張れよ」

「うん」

そろそろ時間になるので、明久は自分の席に戻っていった。
明久のやる気がどこまで本気なのか、観察するか。

俺は初めて明久が真面目に授業を受けているのを見た。

「お兄様、明久さん、帰りましょう」

「麗奈か。　わかった」

「あ、ゴメン麗奈！　今日は速く帰りたいんだ！」

明久はそう言って走って帰っていった。

「明久、相当本気だな」

「お兄様、明久さんに何かあったんですか？」

「ああ、勉強教えてくれって言われてな。　条件に私生活をちゃんとしろって言ったんだ。　条件をクリアするために速く帰りたかったんだろう」

「そうなんですか。　でも、急にどうして勉強がしたいなんて……」

勉強をまともにしなかった明久が勉強を教えてくれだもんな。

そういう反応はわかる。

「明久がやる気を出したのは理由はお前だ」

「え？　私ですか？」

「あいつはお前と同じ高校に行きたいから頑張るみたいだぞ」

俺は常に学年トップで、麗奈は毎回五位以内に入っている。
好成績者が行く高校は大体有名な進学校だからな。
明久もそれだけ本気ってことだな。

「明久さん……」

「ま、そういうことだ。　明久はお前と離れたくないんだよ」

本当にいい奴だよ、明久は。

「帰るぞ、麗奈」

「はい」

明久をＡクラスに入れることが目標となった。

転生者の親友

中学三年になった。
明久の成績がかなり上がり、去年までのテストの順位が常にワースト3に入っていたが、今年は３０～５０位には入るまでになった。
いいときは２０位台と、先生も驚きのようだ。
俺は相変らず告白されまくる。
学校で見せ付けるように喧嘩を（相手が学校に押しかけて来るから）しているのに、生徒会長よりも、先生よりも人気で支持率も高いってどうよ？
喧嘩をよくしていて、尚且つ、武器を常備している俺が人気で、モテるのがわからん。
三年になってからは、明久も巻き込まれるようになり、俺と明久の二人が“無敵の双璧”とか呼ばれるようになった。

「あーあ。　原作通りだな」

俺はテレビで第二回モンドグロッソの決勝に、織斑千冬が棄権した。
今のところＩＳの方には白騎士事件でミサイルを飛ばして以来、介入してないので変化しないのは当たり前か。
ってか、ＩＳ普及したのに、俺の知り合いって女尊男卑じゃないよな。
何でだ？

「考えても無駄か。　ちょっと出かけるか」

俺は特に用もないが、出かけることにした。

「お坊ちゃま、お出かけですか？」

俺が玄関へ向かっていると、この家のメイド長で、母さんに従順する十六夜咲夜さんだ。
前にどこかで名前は聞いたことはある気がするんだが、詳しくは知らん。
だが、美人だ。

「ああ。　特にやることもないんでな。　暇つぶしだな」

「そうですか。　お気をつけて」

「あい」

俺は家を後にした。

「出てきたけど、特にやることもないしな……」

結局暇だった。

「適当にぶらつくか」

これしかやることがない。
あー、暇だ～。
なんか面白いことでもおきねえかな～。

「!?　……消えた？　……何だ？」

一瞬誰かに見られた気がした。
誰かに見られるのは街中だから当たり前なんだが、今のは一般人の気配じゃなかった。
ヤクザ？　ヤクザに目を付けられることなんて……してるか。
俺からじゃないが、喧嘩ばかりしているからな。
目を付けられてもおかしくはないか？
相手から来れば相手をするだけだ。
今は気にしないで置こう。

「折原ぁ！　覚悟しやがれ！」

「お前の相方はいねえみたいだなぁ！」

またかよ。
人数は十人か。

「休日くらいはゆっくりさせろよ」

これが許せない。
人の穏やかな休日に喧嘩とか最悪だし。
面白いこと起こらないかとは思ったが、喧嘩はゴメンだ。
そもそも（相手が弱いから）面白くないし。

「はぁ……」

俺はため息をつき、木刀を取り出す。
俺は地を蹴り、相手に特攻する。
最初の一人の腹に木刀を突き刺し、後ろから迫る三人には木刀を地面に立て、それを支点に蹴り、蹴り飛ばされた三人がその後ろにいた奴に衝突し、倒れる。
残りも攻撃を仕掛けてくるが、殴り、蹴り、斬って男１０人を一分ほどで地にひれ伏せさせた。

「……こいつら放置でいいや。　さて、馬鹿は排除したし、またぶらつこう……」

変わらずやることがないので結局ぶらつくしかない。

「……またか」

俺がしばらく歩いていると、またさっきの視線を感じた。
その視線を感じながら歩いていると、気配が近づいてきた。
俺がいる場所は人目の少ない道。
目立ちたくはなかったのだろうか。

「漸く出てきたのか」

出てきたのは俺の予測を裏切り、ヤクザのような男ではなく、見た目が優男の茶髪のツンツン頭の少年。
見た目はＲＥＢＯＲＮの沢田綱吉に似ているが、どこか違う。
そして、なぜかどこかであったことのあるような気がする。

「やはり気づいていたか。　“終焉の剣（ジ・エンド）”折原終焉（んしゅら）。　いや、“天（て）

修羅”と言った方がいいか」

「天修羅？　なんだそれは？」

天修羅って、ＰＳＹＲＥＮのグラナの二つ名じゃん。

「知らんのか？　お前のもう一つの二つ名だぞ？　お前の戦いっぷりが激しく、あまりにも圧倒的過ぎるためにそう呼ばれるみたいだけどな？」

「へー、それは知らなかった……じゃなくて！　あんた何者だ？　俺に何のようだ？」

いかんいかん。　相手の目的を聞くのを忘れていた。

「俺はお前と同じだ」

「！　……お前も転生者か。　その転生者がなんの用だ？　俺を消しに来たのか？」

「いいや違う。　俺はあんたを消そうなんて思っていない。　俺を間違えて殺しやがった天使にもう一人いる転生者に接触するように言われたんだよ」

天使か。

セスタは確か（自称）神だったよな。

「どうやら、俺を殺した天使はあんたを殺した神の部下らしくてな」

「……セスタ出て来い。　これはどういうことだ？」

「おいアンタ、何言ってんだ?」

「ちょっと待て。　出て来いセスタ。　話を聞かせろや」

『わかりましたよ』

相変らずのグリムジョー姿のセスタが現れた。

「グリムジョー!?」

「いや違うから。　こいつが俺を殺した神だ」

「セスタと申す」

「俺は沢田吉宗(さわだよしむね)だ」

沢田?

もしかしてREBORNのツナの身内だったりして。

「この世界ではだな。　確か前の名前は高谷翔也(たかやしょうや)だったはずだ」

「高谷翔也だと!?　お前、翔だったのか!?」

「ああ。　久しぶりだな、圭祐。　名前、言わなくて悪かったな」

どこかであったことがあると感じたのは当然だった。

コイツは、俺が前の世界の幼馴染で親友だったのだ。

「……翔を殺したその部下っての、ここに呼び出せねえのか?」

「呼び出せますよ」

「ちょっと呼べや」

「ちょっと待ってくださいね」

セスタはそう言って消えた。

「なあ圭祐」

「何だ？」

「あいつって神だよな？　今の会話聞く限りだと、明らかにお前の方が立場上だよな？」

「ああ、上だぞ。　俺を転生させる前にあいつをボコしたからな」

「マジかよ!?　前から強いとは思っていたが、そこまでだったのか！」

「いいや、あいつが弱かった。　グリムジョーの姿なのに」

あのときはビビッタよ。

「俺を殺した天使は可愛かったから殴れなかった」

「またかよ。　可愛い女だとほとんど手出せんもんな、お前。　まぁ、手出して悦に浸る外道よりかはマシだけど」

「お前はそこんところ容赦なかったよな。　喧嘩吹っかけられたら男女関係なしにぶちのめしたしな」

「俺だって女子を殴るのは嫌だぞ。　ただ、あまりにも酷く、醜い奴ならやるんだよ」

「そうだったな」

昔の話で花を咲かせていると、セスタが女の子を連れて戻ってきた。

「そいつか。　翔を殺した天使ってのは」

「す、すみません……」

「圭祐、俺はもう気にしてないからそこまで怒るなよ」

「怒ってない。　どんな奴か見たかっただけだ」

「そうなのですか？　私はてっきりボコボコにするのかと……」

「そこまでしねえよ。　で、アンタ、翔を殺した見返りに何をあげた？」

「えーとですね、まずは驚異的な身体能力に、ＲＥＢＯＲＮの超直感に憤怒の炎、ＮＡＲＵＴＯから永遠の万華鏡写輪眼、うえきの法則から、理想を現実に変える力です」

俺ほどじゃないけど十分チートだな。

翔と俺って趣味とか見るものがほとんど同じだから同じ能力があってもおかしくはないか。

理想を現実に変える力って生物には使えんけど、滅茶苦茶な能力だったよな。
ってか、うえきの法則なつかしっ！！

「俺よりも弱いな」

「当たり前です。　私は天使、セスタ様は神ですので、渡せる能力とかも少ないんです」

「ふーん。　で、デメリットは？」

「万華鏡写輪眼はあなたと同じで、理想を現実に変える力にデメリットはありません」

「万華鏡以外はデメリットがないんだな？」

「そうです」

「お前も災難だったな、翔」

「まあな。　にしてもお前、折原臨也と神裂火織が両親で、嘘みたいな金持ちで、バカテスの明久と幼馴染で今の相棒で、馬鹿みたいなドチートだろ？」

「まあそうだな。　お前はどうなんだ？」

「俺は沢田綱吉と笹川京子の間に生まれて、ボンゴレファミリー十一代目ボス候補になったんだよ」

「やっぱりボンゴレは存在していたのか。　前に父さんに俺のこと

話したときに匣とリングが存在するって言ってたし」

「俺もそれなりに楽しくやってるよ。　まあ、俺はお前よりも一個年下だけどな」

「マジか」

「マジだ」

「あのーお二方……」

「「ん？　何？」」

「えっとこれを……」

天使が渡してきたのは二つのリング。

「これ、翔也さんに転生させるときに渡しそびれちゃいまして……」

「このリング何？　オリジナルのボンゴレリングに似てるけど」

「これは光のリングと闇のリングです」

「おい。　お前、勝手に新しいルールを付け足したな？」

「すみません！　セスタ様！　しかし、これは終焉様にも関係がある話でして……」

「俺にも？」

ってか様付けかよ。

「私が翔也さんをこの世界に飛ばしたのはあなたがこの世界にいたからでして、あなたに翔也さんの守護者になって頂きたいのですが……」

「俺が守護者？　どっちのリングだ？　ってかもう一人は誰だ？」

「このリングはどちらもあなたが使えます。　全ての波動を所持していますので、私が後付した闇と光の波動も持っています」

「そうなのか……」

「で、あなたの最も信頼できる方が、そのリングのどちらかが反応するようになっています」

「最も信頼できるって、翔なんだが……」

「いいえ。　翔也さん以外の人です」

「翔也以外ねぇ……」

俺は一人の親友の顔が思い浮かんだ。

「そいつ、一般人なんだが？」

「構いません。　その方にはリングの加護がありますので、余程のことがない限りは大丈夫です」

「なあ圭祐、お前が思いついた奴って誰だ？」

「吉井明久。　俺の妹の彼氏で、俺が最も信頼する俺の相棒だ」

「やっぱりか……」

「えっと吉井明久さんですか？　あ、その人なら光のリングが反応しますね」

ビンゴだし。

「光のリングの加護は強力ですから大丈夫です！」

「はぁ……わかったよ。　明久に光のリングを渡して俺が闇の守護者になるから、そんときは翔も来いよ」

「わかった。　あ、それとこの世界だと沢田吉宗だから、前の名前は禁止だぞ」

「わかってる。　俺らしかいないからそう呼んでるだけだ。　馴染みがあるからな。　そういうことで俺は終焉（シエン）って呼べよ」

「了解。　連絡先交換しとこうぜ。　連絡してくれ」

「わかった。　そのときになったら連絡する」

「俺、もうそろそろ帰らんと親が心配するから、今日は帰るわ」

沢田綱吉と笹川京子は過保護なのだろう。

「じゃあな、吉宗」

「ああ。　またな終焉」

予想外の出来事が起こって、俺はとても驚いた。

転生者の親友（後書き）

新たなリングの属性と、もう一人の（チート？）転生者でした。
これらがどうなるかはまだわかりません。

新たな力。　リングと妖刀（前書き）

グダグダです。

新たな力。　リングと妖刀

俺が闇と光のリングを受け取った翌週、俺と吉宗は明久の家に来ていた。
明久と吉宗は互いに紹介し終えている。

「明久、前にリングの話をしたのを覚えているか？」

「うん、覚えているよ。　僕の使えるリングは晴と雷だっていう話でしょ？」

「ああ。　その時の話だ」

「明久さんに折り入って話があるのですが、俺の守護者になっていただけませんか？」

「守護者？　それって何なの？」

「実は俺、イタリア最強のマフィアのボス候補なんです」

「マフィアって殺し屋とかのことなの？」

「一般的にはそうですが、俺の父さん……今のボスはあまりそういうことが好きではありません。　そのため、初代がそうであったように、自警団のように誰かを守るための組織に変わりました。　俺がボスになってもそれを変えるつもりはありません」

ツナはやっぱり甘いんだな。
それがいいんだけど。

「守護者は簡単に言うとボンゴレリングを持つ六人の幹部のことなのですが、新たに二つの属性のリングが見つかったのです」

「それが、この闇のリングと、光のリングだ」

俺が受け取ったリングを見せる。

「この二つのリングは特別で、リングの適応者がほとんどいない。俺はどうやらこの二つのリングも付けるみたいでな、闇の守護者になることを決めたんだ。で、おそらくお前は光のリングの適応者だ。これを受け取るかどうかはお前が決めるんだ。最悪、関係無い者を巻き込んでしまうかもしれない。それでも受け取るならこのリングをお前に渡す」

「明久さん、この二つのリングの力は大空のボンゴレリングの力を超えます。あまり知りませんが、あなたのような人ならば、このリングもあなたに力を貸すでしょう。俺が聞く話では、闇と光のリングには特殊な加護があるようですし、力の使い方次第では、あなたにデメリットは少ないと思います」

「いいよ。僕、その光の守護者っていうのになるよ」

「明久、俺は闇の守護者になったが、光の守護者にもなれる。二役になるが、不可ではない。俺はお前を危険な世界に巻き込みたくない」

「シエン、僕は自分の意思でなろうと思ったんだ。そのリングにどれだけの力が宿ってるかはわからない。危険かもしれないし、麗奈たちを巻き込んじゃうかもしれない。だけど、光と闇は対と

なる存在。　僕とシエンはいつも一緒に戦ってきたじゃないか。
僕はそのリングの力で皆を守る。　だから僕も守護者になるよ」

「……わかった」

俺は光のリングを明久に渡す。

「これが光のリング……」

明久はリングを自身の指に嵌めた。

ボワッ

明久がリングに炎を燈した。

「この炎、とても綺麗だ……そして、どこか落ち着ける……」

光の炎は白く輝き、暖かく、優しい炎だ。

「ねえシエン、闇の炎ってどういうのなの？」

「闇か？　こんなんだ」

ボワッ

黒い炎。
漆黒の禍々しい炎だ。
だが、なぜか不思議と落ち着く。

「俺の闇のリングと明久の光のリングは対となるものだ。　俺とお

前は相性がいいんだよ」

「きっとそうだね。　僕はこの力、使いこなしてみせるよ」

「修行には付き合うぞ」

「ありがとうシエン。　ところで吉宗、守護者になるのはいいんだけど、僕はどうすればいいのかな？」

「明久さんは今まで通り生活してもらって構いません。　用があれば召集を掛けます。　リングは何があってもなくさないでくださいよ？」

「わかったよ。　光の守護者として頑張るね」

「ありがとうございます」

そう言えば、守護者の使命ってなんだろうか？
ま、いいか。　いずれわかるだろうし。

「明日からリングを使った戦い方を教える。　かなりハードになるかもしれんが、大丈夫か？」

「大丈夫だよ。　僕だって今までシエンの地獄の特訓をやってたわけじゃないんだから」

「そうか。　なら、俺も頑張らないとな……（ボソッ）」

「？　最後の方聞こえなかったんだけど……」

「いや、明久は気にしなくてもいい。　俺の問題だから」

闇と光の匣を考えて、使えるように形にしないとな……。

「そう言えば吉宗、俺たちは普通にリングを使ってもいいのか？　マフィアのものだろ？　俺たちが使ってたら余計ねらわねねえか？」

闇と光のリングはイレギュラーだ。
見つかったら確実に狙われるだろう。

「俺は別にばれてもいいが、明久は完全な一般人だ。　いくら俺と特訓して強くなったとしても、明久は表の人間だ。　裏の人間たちである奴らに必ず勝てるとは限らない」

単体の力が明久の方が上だったとしても、相手とは懸けるものの大きさが違う。
明久は守るためだが、裏の人間は命を懸ける。
場慣れもしているだろうし、そう簡単にはいかないだろう。

「探知レーダーはあるんで、ばれますよ。　まあそこはイタリア最強のマフィア、ボンゴレファミリーの力の見せ所だ。　ばれても手は出させない」

「信じるぞ？」

「任せてくれ。　父さんにはもうリングのことも、守護者候補の明久さんのことも教えてある。　俺は父さんたちを信じるさ」

ツナの守護者は曲者の強者だからな。
大丈夫だろう。

「わかった。　信じる」

「僕も信じるよ。　マフィアについては知らないけど、吉宗に任せるよ」

話すこともなくなってきたな……。

「あ、そう言えばさ、吉宗の武器は何なんだ？　銃か？　グローブか？」

「両方だ。　それに刀が一振りだな」

XANXUS（ザンザス）の銃か、ツナのグローブが妥当だと思う。

「なるほどね」

吉宗は前は剣道部だったし、この世界にはスクアーロや山本がいるから、それでだろう。

「そういう終焉はなんなんだ？」

「俺は武器を滅茶苦茶持てるから、刀に銃にいろいろだ。　刀とかは俺の力に耐えれずに壊れるのばっかりだけど、唯一壊れない武器がこれだ。　母さんの“七天七刀”を発展させ、俺が全力で振っても壊れない、俺だけのために作られた刀、それがこの“聖天絶刀だ”」

「お、それ格好いいじゃん」

綺麗な光沢を持つ黒い刃に、２mを超える長さ。
俺は滅茶苦茶気に入っている。

「うー、なんか僕だけそういうちゃんとした武器がないね……。
あるのはシエンから貰ったこの木刀と刀だけだし……」

それも十分ちゃんとしていると思うが……。

「んーじゃあ、ちゃんとした武器、あげようか？　守護者なら、それ相応の武器くらい持っててもおかしくないし」

俺があげたのは無銘の刀に普通の木刀。
よく見てみれば、木刀の方はかなりボロが来ていた。
刀の方はあまり使っていない為、刃こぼれなどはない。

「じゃあ明久、どんなのが欲しいんだ？」

「うーん……、少なくとも、簡単に壊れない木刀が欲しいかな。
これ、大分使ってるからかなりボロが来てるし、いつ壊れるかわからないから怖いんだよね」

「わかった。　じゃあ、妖刀でもやるよ」

「妖刀？」

俺は一振りの木刀を渡す。

「妖刀・星砕。　真名は“村雨（ムラサメ）”だ」

「見る限りは普通の木刀だよね。　ていうか、妖刀なんて貰ってい

いの？」

「そいつの強度、硬度、切れ味は並みの刀を超る。　まぁ、余程の太刀筋でない限りは斬れんだろう。　それと、なぜか稀に妖刀が生まれるから、それらはほとんど俺が貰ってるからいいぞ。　他にもあるし」

「妖刀がそんなにわんさかあってもいいの！？」

「いいんじゃねえか？　年に一本は必ず俺の元に来てるし」

確か妖刀って木刀、真剣も含めて２０くらいあった気がする。

「それはもうお前のだ。　暗器スキルを覚えているお前なら木刀の一本や二本、増えても変わらんだろ？」

「……ありがとうシエン。　大切に使わせてもらうね」

「おう。　じゃ、明日からは光のリングと村雨の特訓だ。　卒業までの間、受験勉強も含めてとことんやるからな」

「わかったよ」

「その特訓、俺も混ざってもいいですか？」

「吉宗もか？　俺は別にいいが、明久はどうなんだ？」

「僕もいいよ。　吉宗は僕よりも絶対に強いしね。　雰囲気からわかるよ」

「雰囲気とかでわかるようになったんだ。　さすがは今まで俺に耐えてきただけはあるな」

「まあね」

俺たちは、新たな力を使いこなすための修行を始めようとしていた。

光と闇の匣（前書き）

オリジナル匣登場です。

光と闇の匣

「「開匣！」」

終焉が考え、形にした光と闇の匣の一つがこれらで、漆黒の狼、“闇狼（ルーポ・ディ・オスクリタ）”に、純白の鷲、“光鷲（アクイラ・ディ・ルーチェ）”だ。

「ねえシエン」

「何だ？」

「匣の名前って何でイタリア語なの？」

「何でってそりゃあ、イタリアでできたからだろ？　いくら匣に名前があっても、お前は光鷲にレインって付けてるじゃねえか。ってか、レインの由来は何だよ。雨か？」

「違うよ。　麗奈とシエンの名前から取ったんだよ」

麗奈のレイ、シエンのン、合わせてレインか。

「あーなるほどな。　納得だ」

「じゃあ闇狼のガロンは？」

「ガロンか？　なんとなくだ」

理由ってほどのものがないんだよな。

いや、マジで。

「ま、やろうぜ」

「うん。　レイン！　形態変化（カンビオ・フォルマ）！」

「ガロン！　形態変化（カンビオ・フォルマ）！」

明久の妖刀・村雨とレインが合体し、光り輝く刀となり、俺はガロンと今持つ武器（今は妖刀・ムラマサ）とが合体し（武器との相性がある）、禍々しい黒い炎を纏い、荒々しさを感じさせる一振りの刀になっている。

「行くよ、シエン！」

「来い明久！」

「はぁ、はぁ、やっぱり強いね、シエンは」

「お前も十分強いぞ。　匣とリング無しでもお前に勝てる一般人はあまりいないと思うぞ？」

だって、俺の五割に互角とまではいかないが、それなりにやれるからな。

今の俺が静雄さんに八割で互角なんだから、明久は滅茶苦茶異常なんだよな。

「ありがとうシエン。　シエンにそう言われると自身が付くよ」

「そうか」

あ、あれも渡すか。

「さて、明久。　まだお前専用の匣があるんだが、これは途轍もな

く強大な力を持ち、危険だ。　どうしようもないほどにやばい状況になったら使え」

「……途轍もなく不安なんですけど？」

「どうしようもないほどにやばい状況になったらは冗談だ。　マフィアとかが相手のときに使え」

「それが不安なんだけど！？」

「明久の命令なら聴くようになってるから安心しろ」

「それでも不安だよ！？　何の匣なの！？」

「龍だ」

「り、龍？　龍ってドラゴンの龍？」

「龍と言ったらそれしかないだろ。　その龍だ」

「そんな恐ろしいものがこの匣に入ってるの？」

「恐ろしくはないが、そうだ。　龍の大きさは開匣時に注入した炎の大きさによって変わるから」

「じゃあ、馬鹿でかいときもあれば、小さいときもあるってこと？」

「そうだ。　サイズに関してはお前次第だ。　まぁ、見ろ」

俺はその匣を出す。

「出て来い、カオス！」

出てくる漆黒の龍、闇龍（ドラゴーネ・ディ・オスクリタ）。
サイズは全長３メートルほどだ。

「でかい……でも、格好いい！」

明久の眼がキラキラと輝いている。
そんなキャラだっけ？
まぁいいや。
俺は一度しまい、今度は炎を抑えて呼び出す。

「ちっちゃくて可愛いね」

今度は５０センチほどの小さな龍。
結構可愛い。

「こんな感じだ。　炎の大きさで変わるのは見た目だけじゃないぞ。
そのサイズでも十分強力だが、攻撃の威力も変わるからな」

威力変わらんかったら恐ろしすぎるからな。

「その匣はお前専用だ。　俺のカオスに見た目は似ているが、細かいところが違う。　そして、カオスは漆黒だが、お前のそれは純白だからな」

「わかったよ。　とにかく、出してもいい？」

「いいぞ」

「ありがと。　じゃあ、出てきて！」

明久が匣に炎を注入した。

『ギュアアアオオオ！！！』

全長５メートルほどの純白の龍、光龍（ドラゴーネ・ディ・ルーチェ）。

「でかすぎだ明久！」

「ご、ゴメン！　炎の大きさがわからなくて！」

「一旦しまえ！　このサイズの力は半端無い！　最悪、ここが壊滅する！」

「わ、わかった！　戻って！」

明久の指示通り匣に戻った光龍。
ミスはなさそうだ。

「今度はもっと炎を抑えろよ」

「わかってるよ！」

明久がもう一度呼び出す。
サイズは全長２メートルほど。

「綺麗で格好いいね」

「ああ」

眩い光を放ち、堂々とした姿は見惚れる。

「そう言えばシエン」

「ん？　何だ？」

「詳しくは知らないんだけど、この龍ならＩＳにも勝てるんじゃないの？」

「普通に勝てるぞ。　やろうと思えばＩＳと操縦者諸共灰にできるぞ」

「やっぱり恐ろしい奴だったよコンチクショー！」

「だけど、それを操るのはお前だぞ？　お前が望まなければ死なないぞ」

「そうだけどさ……恐ろしいものは恐ろしいんだよ！」

『キュウウン……』

「あ、落ち込んだ」

「ええ！？　落ち込んじゃったよ！？　何で！？」

「そりゃあ、光龍の主はお前で、主であるお前に大声で否定的に取れるセリフを言われたんだ。　落ち込むに決まってるだろ」

「えっと、その、えーっと……ゴメン！　見た目だけで君の事判断してた！　だからゴメン！」

光龍に頭を下げる明久。
なかなかシュールな光景だ。

『キュルウ♪』

「あ、機嫌がよくなった」

「あ、そうだ。　名前決めなきゃね。　うーん……」

明久が考え出した。
ここで決めれるのか？
俺は持ち前の優柔不断で時間掛かったけど……。

「コスモスなんてどうかな？　シエンの龍がカオスなら、カオスの対義語のコスモスにしようと思うんだけど、どうかな？」

『キュルルゥ♪』

「気に入ってくれたみたいだね。　よろしくね、コスモス」

『ギャオオオ！！！』

「にしても明久、カオスの対義語がコスモスなんて知ってたな。
教えてなかったのに」

「僕もそれなりに勉強してたんだ。　教えてもらうだけじゃ駄目だ

からね」

「そうか。　じゃあ、コスモスをしまえ。　今日は終わりだ」

「わかった。　戻ってコスモス」

「炎のコントロールもしてくからな」

「わかったよ」

俺が構築した光と闇の匣は計４つ。
あと補助系の匣は一つは欲しいか。
考えなければ。

光と闇の匣（後書き）

イタリア語も詳しくないので自分なりに調べましたが、読みがあってるかわかりません。
意見があれば感想にお願いしますｍ（＿＿）ｍ

光と闇の炎の性質

「なあセスタ」

「なんでしょうか？」

俺はセスタを呼び出していた。

「光と闇の炎の性質って何だ？　今一ピンと来ないんだよ」

「光の炎は“大空”“晴”“雷”“雨”の四つの炎の性質を持ち、尚且つ光の炎の性質があります」

大空は“調和”、晴は“活性”、雷は“硬化”、雨は“沈静”。

チートだな。

それに光の炎自身にも性質があるとか、滅茶苦茶強いぞ。

「光の炎の性質は“解放”。　制限を無くしたりすることができますね」

「凄いなまったく」

制限を無くすってことは、限界を超えるってことだ。

人としての限界を超えたりしたら、化物になっちまうぞ。

……いや、だから明久はあそこまで強くなったのか。

明久の身体能力は人外だからな。

「ちなみに、闇の炎の方が凄いですよ？」

「……教えてくれ」

さらに俺がチートになる気がする。
てかもうなってるけど。

「闇の炎は“大空”“嵐”“雲”“霧”の性質を持ち、闇の炎の性質は“吸収”」

大空に、嵐は“分解”、雲は“増殖”、霧は“構築”。
吸収ってまさか……。

「闇の炎の性質“吸収”は、様々のものを取り込む。　それを自分の力とすることもできます。　全ての属性の中で最も危険で、最も恐ろしい性質を持ちます」

どんだけチートだよ……。
ツナの死ぬ気の零地点突破・改を普通に使えるとか……。

「大空の七属性、及び大地の七属性を軽く凌駕する力を持つのが、光と闇の炎のようです」

「そういうことか。　漸く納得した。　だが、闇と光に含まれる大空の七属性の炎の性質はどうなってるんだ？　俺が使う限りはそういうのは感じられなかったが……」

「炎を使うときに、その属性を想いながら使うと強く反映されます。　意識しなければ、その四属性の性質はあまり反映させません」

「つまり、無意識でも各四属性の性質は出ていたということか」

「はい」

「これは明久にも伝えておかなければな。　俺たちはまだ、光と闇の炎の力を使いこなせていなかったみたいだし」

さっきまでは漸く使いこなせてきたと想っていたが、今の話を聞いて、自分の考えが間違っていたことに気づいた。

「ありがとう。　靄が晴れた」

「そうですか。　では、私はこれで」

「ああ。　助かったぞ」

セスタは戻っていった。

「さて、まずは試してみるか」

俺はセスタに聞いたことを試すために地下訓練場に入った。

「んー、嵐サソリでいいや」

俺は五匹の嵐サソリを出し、俺に攻撃させる。
俺は闇の炎を燈し、それをシールドとする。
すると、嵐サソリの攻撃は闇の炎に取り込まれた。

「恐ろしい力だな。　本当に俺の力になりやがった」

嵐サソリの攻撃を取り込んだ瞬間、僅かにだが、力が湧き上がってくるのを感じた。

俺は嵐サソリをしまい、闇の炎の特性を試す。

「まずは霧だな」

俺は霧の炎の性質をイメージしながら闇の炎を燈す。

「久しぶりの幻術だな。　ま、こんな感じでいいか」

現れたのは宙に浮かぶ剣。
ちなみに有幻覚。

「これにさらに雲の性質を加えて……よし、できた」

霧のイメージをした闇の炎に、さらに雲をイメージする。
すると、宙に浮いていた剣は増殖を始めた。

「これに嵐を組み込んで……」

さらに嵐のイメージを加える。
俺は浮いている剣の一つを手に取り、地に刺す。

「うまくいったな。　床が壊れ始めた」

俺は剣を抜く。
床の破壊は止まり、壊れた部分を適当に埋める。
そして、大空をイメージした闇の炎で調和する。
しかし、石化する速度が遅い。

「大空の調和は本物よりも弱いみたいだな。　だが、その分推進力は高いが」

大空の七属性の炎の中で推進力が最も高いが、闇の炎はそれを超える。
そのおかげで、闇の炎で飛べるんだよな。
便利だけどますますチートだ。

「ま、便利ならいいか」

俺は訓練場をあとにし、明久に電話かけた。

『もしもし、どうしたの？　シエン』

「光の炎の性質についてわかったから連絡しとこうと思ってな」

『へー。　光の炎の性質ってなんだったの？』

「かくかくしかじか、と言うことだ」

『へぇ、光の炎って便利だね。　僕の使えない“大空”と“雨”の性質が混ざってるなんて』

「俺の方の闇の炎に関しては、大空に嵐に雲に霧だ」

『やっぱり光と闇のリングって対になってるみたいだね』

「そうみたいだな。　それと明久、光の炎の性質を使うのはいいが、暴走はさせるなよ」

『わかってるよ。　慣れるまでは多用しないよ。　シエンも暴走させないでね』

「誰に向かって言ってんだよ」

『そうだね。　シエンがそう簡単に暴走なんてさせるわけないよね』

「当たり前だ。　闇の炎の性質の吸収を使いこなす前に多用したら暴走するのがオチだ。　最悪辺り一帯が無に返るぞ」

『冗談に聞こえないのが怖いよ……』

「じゃ、次からはそれらのコントロールもあるから。　忘れるなよ」

『忘れないよ。　じゃあまたね』

「ああ」

明久には教えておいた。
吉宗にも教えておくか。

『どうした？　終焉』

「気になってセスタに闇と光の炎の性質訊いたんだよ」

『どういうのだったんだ？』

「かくかくしかじかだった」

二度目のご登場。　便利でいいね。

『思いっきりチートだな。　光を応用すれば化物レベルの人間ばか

り生まれるぞ』

「明久はそんなことしないしな。　その点については安心だ」

『闇は闇で悪用すれば世界を統べることなんて簡単じゃねえか』

「闇は今のところ俺しか使えんからな。　ちなみに、俺なら闇の炎が無くても世界を破壊するくらい目じゃないぞ」

『確かにな。　お前の能力はドチートだからな。　身体能力だって俺より高いし』

「それは俺たちを殺したのが神か天使の差だろ。　殺されたのは最悪だが、お前よりも俺のほうが運が良かったってことだ」

『まあそうだな。　ま、今が楽しめてるならそれでいいじゃん』

「だな」

『あ、そう言えば少し前に『シュバルツェ・ハーゼ』にあったぜ』

「仕事でか？」

『ああ。　少しばかりラウラ見てた。　可愛かったな～』

「お前、やっぱりラウラが好きだな」

『当たり前だ！　そういうお前こそシャル好きじゃんか』

「ば、別にそれはいいだろうが！」

俺と吉宗は、死ぬ前はシャルとラウラのどちらが可愛いかとか、無駄な争いをしていた。
別に誰がどのキャラが好きだとかはその人の好みなのにな。

『俺はもうＩＳに乗れるのわかってるからな。　一夏が発表されたら俺も出るつもり。　今はフラグを奪うために奮闘中だ』

「お前は一夏のフラグを掻っ攫おうって魂胆か」

『おう！』

まあ、あれからラウラのフラグを奪うなんて、似た条件で、ＶＴシステムのときに一夏の変わりに助けるのが一番手っ取り早い気がする。

「なんでそこまで堂々としてられるかわからんな」

『この世界はスリルがあって楽しいからな！　原作ブレイクしてもいいんだし、ラウラは絶対に誰にも渡さん！』

こいつは異常なほどにラウラが好きだった。

「お前、聞いてるこっちが清々しくなるな」

『ま、そういうことで。　父さんに呼ばれたから切るな』

「ああ。　またな」

通話は切れ、俺は思い耽た。

進路校は決まっている（前書き）

スランプ気味です……。

進路校は決まっている

俺と麗奈は父さんと母さんに呼び出されていた。

「そういえば、終焉と麗奈はどこの高校に行くんだい？」

「二人とも、名門学校に推薦が来たりしていますが、私たちはあなたたち二人の意見を尊重します。　就職したければ、しても構いません」

やっぱりいい人たちだな。

「俺は文月学園に行くつもりです」

「私は明久さんと同じならどこでもいいです」

「へぇ、文月学園ね。　あそこは確か試験校だったね」

「『試験召喚システム』……でしたか？　それが目的ですか？」

「はい。　どんなにいい学校に通っても、結局は変わらないと想います。　ですので、俺は楽しそうなこの文月学園に行きたいと思います」

「麗奈は明久と同じ学校がいいんだっけ？　なら、二人で話し合いな。　学費とかだったら明久の親御さんたちには俺たちから伝えておくから」

「ありがとうございます、お父様、お母様」

「構いませんよ。　私たちは、あなたたちを縛り付けるつもりはありませんので」

本当に変わった親だ。
自分の子供が優秀なら、鎖に繋げようとすると想うんだけどな。

「では、私は明久さんと相談します。　失礼します」

麗奈は部屋を後にした。

「……母さん、麗奈に剣術を教えたのはあなたですね」

「気づいていましたか。　まさか、鍛えているだけではなく、何を教えているかまで当てられるとはさすがに思いませんでしたよ」

「最近麗奈の動きが変わったような気がしたので、写輪眼で見させてもらいましたよ」

「写輪眼の観察眼か。　流石と言うところだね」

「麗奈をなぜ鍛えているのですか？　麗奈には俺も明久もいるのですが？」

「それは彼女から申し出てきたからです」

「麗奈から？」

「はい。　あなたたちの喧嘩を何度も目の当たりにした麗奈は、『守られてばかりは嫌なのです。　私も明久さんと、お兄様のお役に

立ちたいのです』と言ってきたのです」

「麗奈が……？」

「今も気にしてるんじゃないかな？　自分の所為で明久が傷ついたことを、ね」

「そうかもしれませんね」

「なので私は麗奈に剣を教えることにしました。“唯閃”は流石に身体が耐えられないので、鋼糸（ワイヤー）を使った技や、我流の剣術を教えました」

俺も母さんに剣を教わった身。

まぁ、俺の剣は母さんのそれをさらに我流にしたものだけどな。

「つまり、麗奈は鋼糸を扱えると」

「ええ。　しかも彼女の鋼糸の扱いの上手さは私に匹敵します。僅か数ヶ月でここまで上達するとは思いませんでしたが」

「麗奈も俺ほどでもないけどチートなんですよ。　まぁ、俺を殺した神から聞いた話なんですけどね」

「一度会ってみたいね。　終焉を殺した神ってのを」

「一応は俺とコンタクトは取れるんですが、転生者以外の人間の前に姿を現すかはわかりませんよ」

「その言い方から、吉宗は見たことがあるようだね」

ちなみに、俺の両親、及び吉宗の両親は、俺たちが転生者だということは知っている。

「はい。　俺がボンゴレの闇の守護者になったときに」

「是非とも会いたいものだ」

「今度聞いてみます」

「お願いね」

望みは低いと思うけど。
いくら俺に従ってくれるっつっても、セスタは神だ。
そう簡単に顔を見せることはないだろう。

「終焉、私から一つ、個人的なお願いがあるのですが……」

「なんですか？　母さん。　俺にお願いとは……」

「ＩＳの開発をして欲しいのです」

「開発ですか？　なぜ俺なのですか？」

「以前、あなたが暇つぶしと言って考えた打鉄。　前世の記憶によるものだとは思いますが、システムまではあなた自身が考えなければ実現はできない」

打鉄考えたのは俺で、ＫＡＮＺＡＫＩグループは現在のＩＳシェア第四位になっている。

「……確かにそうですね」

「私はあなた自身が本気で考えたものを見たくなったのです。一応は日本一の会社の社長をしていますが、利益なんかよりもただ単純に技術者として、あなたの本気が見たい」

好奇心、か……。

「俺は全然大丈夫です。ですが、明久の訓練、吉宗の召集とかを優先させてもらいます。それでもいいのなら、お手伝いします」

「私は終焉の本気が見たいだけです。見せてくれるのなら、いつでも大丈夫ですよ」

「わかりました。では、俺も失礼します」

俺は部屋を後にし、自室に入る。
そして、俺はコレクションをいくつか手に取り、隠し扉からに射撃訓練場に入る。

ズガンッ！　ズガンッ！　ズガンッ！……

俺はハンドガンやらライフルやらを撃ちまくる。
しばらくの間乱射した後、俺は硝煙の臭いを落とすためにシャワーを浴びる。

「ふぅ～」

シャワーを浴びながら、俺はセスタと交信する。

『セスタ』

『何でしょう？』

『多分聞いていたと思うが、父さんが一度会ったみたいらしい』

『実際のところ、不可能ではありません。　が、私は一般人に知られてはならない存在。　いくらあなたたち転生者のことを知って、黙っているといっても、どんなことがあっても話さないとは限りません』

『それもそうだな』

『会うには条件を付けさせてもらいます。　それでもいいのなら、私は姿を現しましょう』

『その条件は？』

『もしも、私の存在を明かしてしまった場合、転生者であるあなたと、翔也……吉宗以外の、私たちの存在を知った者をこの世界から消します』

つまり、父さんがばらしてしまったら、父さんと、知ってしまった人が死ぬわけか。

『条件はそれだけなのか？』

『はい』

『じゃあ聞いてみる』

『それではこれで……』

『ああ。　悪いな』

セスタと会話を終わらせ、俺はシャワーを出た。

「お坊ちゃま」

「どうかしましたか？」

シャワーから出ると執事長の白石神威（しらいしかむい）さんがいた。

「俺のところに来るなんて珍しいじゃないですか」

「旦那様から伝言です。『さっき言い忘れてたけど、ＩＳ開発するなら何でも言ってよ。　俺も火織も、終焉の本気は気になるからね』とのことです」

「何でもって……今も色々言ってるつもりなのだが……」

武器を貰ったり、聖天絶刀を作ってもらったり、（初めの頃は）鍛えてもらったりｅｔｃ．

「旦那様も奥様も、お坊ちゃまとお嬢様にお甘いのですよ」

「（あり？　聞こえてた？　聞こえないほど小さな声だったはずなのにな）ま、助かるっちゃ助かるけど」

「では、私はこれで」

「ああ、はい。　ありがとうございました」

「いえいえ。　私はこの折原家に仕える執事ですから」

神威さんは俺にお辞儀をして部屋を出て行った。

「俺の考えるＩＳね……」

いろいろと思いついてしまった所為で、俺の（忘れられてる？）優柔不断が発動していた。

「ま、やるだけやるか」

俺はＩＳの製作を少しずつだが、進め始めた。

進路校は決まっている（後書き）

あと少しで高校に入学です。
これで１８話目なのに原作に入ってないなんて……。

設定（前書き）

大まかな設定のまとめです。

設定

《主人公》

【名前】
折原終焉（おりはらしえん）

【見た目】
コードギアスのルルーシュ

【プロフィール】
誕生日は１１月１４日。
前世の名は進藤圭祐（しんどうけいすけ）で、高谷翔也の親友。
折原臨也と神裂火織の間に生まれた。
ボンゴレファミリー闇の守護者。
優柔不断である。

【能力】
転生時に神のセスタから受け取ったスキル。

・身体能力ＭＡＸ
平和島静雄を八割の力で互角の力を持つ。
だが、さらに身体能力は上昇している。

・完全記憶能力
禁書目録のインデックスのように、葉っぱの一枚の形や、雨の滴の形でさえ、一度見たら忘れない。

・処理能力
平行思考や、情報処理など、ずば抜けた処理能力を持つ。

・匣、リングの召喚
ＲＥＢＯＲＮから、思い浮かべたリング、匣を召喚する。
全ての波動を持ち、全てのリング、及び匣を使うことができる。

・闇のオリジナルリング
闇の炎の性質の“吸収”により、攻撃を防ぎ、パワーアップすることも出来る。
本来なら一時的なパワーアップなのだが、なぜか永続している。
未だに身体能力が上昇しているのはそのためである。

・永遠の万華鏡写輪眼
眼の力を遣っても、視力が落ちることはない。
ただし、それ相応の体力を使う。
ちなみに、万華鏡状態の紋様はギアス。

・超能力
とある魔術の禁書目録に出てきそうな能力の使用が可能。
過度な使用は死に至るが、彼は修業のおかげか、能力の使用で死ぬことはほとんどありえなくなっている。

・聖天絶刀
元々は七天七刀を手に入れるはずが、あまりにも強大すぎる彼の力に、七天七刀が耐えれない可能性が出来たため、ＫＡＮＺＡＫＩグループにより創られた至高の一振り。
見た目は七天七刀に似ていて、刃の色は漆黒。

・暗器スキル

武器の使用において、右腕に出るものはいない。
法則を無視した大きさや質量の武器を隠し持てる。

・その他複数
その驚異的な身体能力により、自らの力で手に入れた力など。
その一つに、ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥのロロノア・ゾロの剣術がある。

《オリジナルキャラ》

【名前】
セスタ

【見た目】
ＢＲＥＡＣＨのグリムジョー・ジャガージャック。
本来の姿ではないらしいが、これは彼の趣味。

【プロフィール】
神で、現在の折原終焉である進藤圭祐を誤って殺した張本人。
終焉には与えすぎなほどなチート能力を授けた。
神なのに終焉にボコられ、彼に従順する。
吉宗を殺した天使の上司。

【名前】
折原麗奈（おりはられいな）

【見た目】

緋弾のアリアの星伽白雪。

【プロフィール】
誕生日は１１月１４日。
折原終焉の双子の妹で、吉井明久の彼女。
明久一筋の一途な女の子。
終焉ほどではないが、彼女もかなりのチートらしい。
料理が得意で、その実力は明久以上である。
終焉や明久が知らぬ間に、母である神裂火織に鍛えられ、鋼糸（ワイヤー）と剣の腕は相当の物。
なぜか教えても無いのに終焉ほどではないが暗器スキルを心得ている。
愛刀は“色金殺女（イロカネアヤメ）”。

【名前】
沢田吉宗（さわだよしむね）

【見た目】
ＲＥＢＯＲＮの沢田綱吉に似ているが、彼よりもさらに見た目は穏やか。

【プロフィール】
誕生日は１０月２１日。
沢田綱吉と笹川京子の間に生まれた。
ボンゴレファミリー十一代目ボス候補。
武器は綱吉のグローブや、ＸＡＮＸＵＳの銃と同じ仕組みの物と、刀である。

【能力】
転生時に天使から受け取ったスキル。

・驚異的な身体能力
終焉よりも劣る程度の身体能力。
それでも、平和島静雄には九割の力で互角。
身体能力の上昇は見られていない。

・超直感
ＲＥＢＯＲＮのそれである。
ボンゴレファミリー十代目ボスである綱吉の血を引いているため、
ボンゴレファミリーのボスの資格がある。

・憤怒の炎
レアな光球の炎で、二代目やＸＡＮＸＵＳが持つものと同じ。

・永遠の万華鏡写輪眼
終焉と全く同じ。
ただ、こちらの眼の紋様は十字。

・理想を現実に変える力
うえきの法則の、ロベルト・ハイドンが使用した能力。
レベル２の能力も使用可能。
本来ならば寿命を一年消費するが、彼の場合はデメリットが無い。

《既存キャラの相違点》

・〔バカテス〕吉井明久

原作とは違い、成績はＡクラスレベル。
麗奈と付き合っており、こちらも麗奈一筋。
終焉の弟子で、相棒。
彼の修行のおかげで、文月学園入学前の終焉ならば、五割ほどの終焉と互角に闘える。
光のリングの適応者で、ボンゴレファミリー光の守護者。
リングの波動は“晴”、“雷”、“光”。
愛刀は妖刀の木刀・村雨。

・〔デュララララ〕折原臨也
情報屋として世界中に情報を売っている。
神裂火織と結婚し、終焉と麗奈の父。
平和島静雄とは和解？をしたようで、原作のように喧嘩になることは無い。

・〔デュララララ〕その他
帝人と杏里、正臣と沙樹、静雄とヴァローナ、幽とルリが結婚した。
セルティと新羅は結婚はしていないものの、夫婦のような関係である。
帝人たちは娘が一人、正臣たちには息子と娘が一人ずつ、静雄たちと幽たちは息子が一人いる。
ダラーズは存在し、今現在はボランティア集団のような形になっている。
首無しライダーも実在する。
幽とルリは仕事を続けており、二人ともトップスターである。
息子は静雄夫妻に預けており、静雄が仕事をし、ヴァローナが面倒を見ている。

・〔とある魔術の禁書目録〕神裂火織
ＫＡＮＺＡＫＩグループという会社を立ち上げ、様々な業界でトッ

プの大企業の社長。
臨也と結婚し、二児の母。

・〔とある魔術の禁書目録〕その他
当麻と美琴が結婚し、二人の子供がいる。
インデックスとステイルは結婚はしていないが、それなりにいい関係。

《オリジナル設定》

・闇の炎
“大空”“嵐”“雲”“霧”の性質を持ち、真の性質は“吸収”。
様々のものを取り込み、自分の力に変換することが出来る。
力の変換は、使用者の意思で決まる。
推進力は光次いでナンバー2。

・光の炎
“大空”“晴”“雷”“雨”の性質を持ち、真の性質は“解放”
制限を取り除いたりすること出来る。
全ての炎の中で推進力が最も高い。

・闇狼（ルーポ・ディ・オスクリタ）
闇龍（ドラゴーネ・ディ・オスクリタ）
終焉が考案、召喚したオリジナル匣。
それぞれ形態変化（カンビオ・フォルマ）が可能。
狼の名は『ガロン』、龍の名は『カオス』。

・光鷲（アクイラ・ディ・ルーチェ）

光龍（ドラゴーネ・ディ・ルーチェ）

終焉が考案、召喚したオリジナル匣。
それぞれ形態変化（カンビオ・フォルマ）が可能。
鷲の名は『レイン』、龍の名は『コスモス』。

文月学園入学（前書き）

結構長いです。

文月学園入学

「おはよう終焉。　今日から高校生だね」

「はい。　あ、帰ったら研究所の方に行くつもりなので、母さんに言って置いてください」

「わかった。　……完成しそうかい？」

「まだかかりそうですけど、不可能じゃないです。　まあ、今の世界の技術じゃあオーバーテクノロジーの塊になりますけど。　ってか俺にしか創れませんから」

構想は後々に（多分）。

「そうかい。　完成が楽しみだよ」

「頑張ります」

「そろそろ時間だね、じゃあ行ってきな。　二度目の高校生活だよ」

「途中で死にましたけどね。　では、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

俺は父さんの部屋を出て、鞄を持って文月学園へと向かった。

今は入学式が行われている。
原作だとここで明久と雄二が飛び込んで来るんだよな。
明久はもういるから、どうなるんだろうか。

《それでは、最初に学園長による新入生の皆さんへの祝辞です。
学園長先生、よろしくお願いします》

《あいよ。　コホン。　えー、新入生の皆さん。　入学おめでとう。
アタシは、この学園の学園長を務める――――》

「折原あああああ！！！」

「出て来ーーーい！！！」

ザワッ

『誰だ！？　ここの学園長の名前は違ったはずだぞ！？』

『もしかして偽者！？』

『ならば本物はどこに！？』

《ちょ……っ！？　どうしてアタシが偽者扱いされんといかんのだい！？》

喧騒に飲み込まれた体育館。

「聞けお前ら！　今ここのグラウンドに百人近い人数が押しかけてきている！　腕に自信がある奴は出て来い！　そうでないやつは邪魔だから下がってろ！」

体育館に響く大声。

声の主は坂本雄二だった。

俺は席を立ち、雄二に問いかける。

「……おいそこのお前。　そいつらは何て叫んでた？」

「なんだお前は？　まあいい、『折原を出せ』とか、『これまでの借りを返してやる』とか言ってたぞ」

「はぁ……、すみません、先生方、体育館から誰も出さないでください。　俺に用みたいなんで」

「貴様、どういうことだ？」

ドスのきいた声が聞こえた。

振り返るとそこには、おなじみの“鉄人”こと西村先生がいた。

「中学時代に突っかかってきた連中です。　すぐに片付けますから、続けててください」

俺はそう述べて体育館を出ようとする。

「待て」

「急がないとここまで乗り込んできますよ？」

「いくら貴様の相手だろうと、貴様一人に任せるわけにはいかん」

「ついて来てもいいですけど、何もやることは無いですよ」

「ふん、言ってろ」

俺は走り出した。

「来たか折原ぁ！」

「またあんたらかよ。　懲りないな。　ってかどうやって俺の進学校調べたんだ？」

簡単に分かるわけないんだけどな……。

「お前が知ったこっちゃねえ！」

「全員、かかれぇ！！」

「……先生、下がっていてください」

「なに？」

俺は“聖天絶刀”を取り出した。
コイツを使うという事は、容赦をしないと言うことだ。
俺は絶刀を持ち、集団に向かって走り、そして――

「“七閃（ななせん）”！！」

必殺の鋼糸技。
その一撃で愚かな集団は宙を舞い、
その一撃で愚かな集団は再起不能になった。

「なっ……！」

西村先生は驚いていた。
まぁ、当たり前か。
たった一人で、たった一撃で百人近い人間が再起不能になったのだから。

「……貴様、何者だ？」

「折原終焉。　巷では“終焉の剣（ジ・エンド）”とか“天修羅（てんしゅら）”とか呼ばれてます」

流石にここまで来たら見逃せんな……。

俺は携帯を取り出し、父さんに連絡を取る。

『どうしたんだい、と言いたいところだけど、神威から聞いてるよ。で、どうするの？』

父さんと母さんは忙しくて代わりに神威さんが来ている。

神威さんが連絡したみたいだな。

その本人は今は入学式の様子の撮影でもしているのだろう。

「今までなら見逃してたけど、ここではこういうのは駄目ですので、お願いします」

ここは試験校のため、風評に弱いのだ。

『わかった。　あ、逃げないように縛っておいてくれるかな？』

「わかりました。　では、お願いします」

俺は携帯をしまい、倒れている奴を適当にまとめてワイヤーで縛り上げる。

暑苦しい男共の塊が十個ほど出来上がった。

そして俺は西村先生に頭を下げる。

「今まで見逃していたがためにこのような事態になってしまいまし

た。　すみませんでした」

「詳しい話は後で聞かせてもらう。　お前は戻れ」

その後、体育館にて入学式が再開された。

そして、入学式も終わり、今は自己紹介の途中だ。

どうやら島田の日本語はそこまで酷くはなかった（それでも酷かったけど）。

この世界ではＩＳが普及されているから、日本語が共通語になってるんだよな。
ま、中学とかでやる英語と似たようなもんだな。
出来る人は出来るが、出来ん奴は出来んって感じだ。

「神無月中学出身、坂本雄二だ」

雄二が自己紹介。
原作通りだな。

『アイツ、例の神無月中の……』

『悪鬼羅刹って噂の……』

『かなりやる奴らしいぞ……』

「……フン」

次。

「木下秀吉じゃ。　よろしく頼む」

やっぱり見た目女子だな。
完全な男の娘だ。
ま、骨格が男のものだから男と言う事実は覆らない。
次。

「……土屋康太。　趣味は、盗さ――――何も無い」

原作でもそうなんだが、無理あるだろ。

「……特技は、盗ちょ――――特に無い」

そう言いつつもポケットからはカメラとレコーダーが出てるんだけど。

なんでムッツリーニはそれで隠し通せると思うんだろうな。

次は……あ、明久だ。

「長月中学出身の吉井明久です。　よろしくお願いします」

原作ではセーラー服着てたが、目の前にいる明久はちゃんと制服を着ている。

もしもセーラー服だったら麗奈が大変なことになると思う。

それから、適当に聞いていたら、俺の番になった。

俺は前に出て、挨拶をする。

「長月中出身の折原終焉だ。　情報屋をしている」

一応謝罪はしておいた方がいいだろう。

「……えー、朝の騒ぎはすまなかった。　もしも俺についてで絡まれたら逃げてくれ。　俺が始末する」

『おい、あいつがあの“終焉（ジ・エンド）の剣”の折原か？』

『多分そうだろう。　情報屋だともいっているし、あの時だって五分ほどで戻ってきてたしな』

『そう言えば吉井って奴、折原と同じ中学じゃなかったか？』

『もしかしてあの吉井か？　“無敵の双璧”の、“終焉の剣（ジ・エンド）”、“天修羅”と名高い折原の唯一の相棒って言うあの吉井なのか？！』

明久もそれなりに有名だった。
俺はフルネームで知られているが、明久は俺の相棒とか苗字のみで知られている。

『コイツがあの折原か……。“天修羅”とか言われてるみたいだが、やるようには見えねえな……』

今雄二の声が聞こえたな。
やっぱりかなり有名らしい。

「ま、よろしく頼む」

俺はそういい、席に戻る。
その後は大したことも無く終わった。
島田が原作通りに罵倒していたが、俺は西村先生に呼ばれているので職員室に向かっていた。

「失礼します」

「来たか折原」

「先ほどは本当に失礼しました」

「あのことはいい。　お前の親に話しを聞いた。　中学のときからか、大変だったな」

あれ？

西村先生が凄く優しいんだけど……。

「俺が訊きたいのはあれを始末するときに使った刀とかについてだ」

あ、やっぱり訊かれるか。

「あれはどこに隠していた？」

「暗器使いにその質問はタブーですよ。　まあ、服の中ですね」

「……どうしたら自身の身長を超える刀を隠せるんだ……？」

俺の答えに西村先生は呟いた。

「……あれはなんだったんだ？　一瞬で奴らが吹き飛ばされたが」

「あれはワイヤーを使ってやりました。　特殊なワイヤーで切り裂いたんです。　まぁ、殺すのは駄目なので滅茶苦茶手加減しましたけど」

「……手加減してあの威力だと……？！　訊いていたが、ここまで出鱈目な奴なのか……」

やっぱり訊いているよな。

前の学校ではテストでオール百点で、通知表は全部オール５で、学校に押し寄せてきた馬鹿な不良どもを瞬殺してるんだから当たり前と言えば当たり前なのか。

「あいつらは父さんに任せたので、大丈夫だと思います。　ほとんどあの面子でしたから、他の奴が奮起しない限りは大丈夫でしょう。

来たら私が始末しますので、ご安心を」

「そうはいかん。　いくらお前が強く、お前に喧嘩を吹っかけてきたとしても、お前はここの生徒だ。　生徒を危険な目に合わせるわけにはいかん」

西村先生滅茶苦茶いい人だ！

初めてだぞ、先生にこんなこと言われたのは！

「ありがとうございます。　そう言ってくださるのは嬉しいですが、先生方にご迷惑をおかけする訳にはいきません。　見たところ、あなたはとても強いみたいですが、百人以上を同時に相手をするのは流石に不可能でしょう。　先生方や、他の生徒の迷惑になってしまうので、私がすぐに始末をします。　これは譲れません」

稀に明久も参戦することもある。

ま、俺が安心して背中を任せれるのは今のところ明久と吉宗だけ出しな。

「そうは言ってもだな、こちらとて教師だ。　生徒を守るのが教師の仕事でもある」

「これでは埒が厭きませんね……」

西村先生も頑固だな。

「でしたら、共闘しませんか？」

「共闘だと？」

「あの程度の輩でしたら瞬殺できますが、あまりあの刀は使いたくありません。　他の物を使うと、あれよりも制圧速度が劣ります。　ですから、共闘です。　教師であるあなたは生徒である私を守るのが仕事だと仰るのなら、戦う私を守ればいいのですから」

「クハハッ！　いいだろう、その提案、乗ってやろう」

「ありがとうございます」

「もういいぞ、折原。　あんな奴らが来ないといいな」

「そうですね。　私はこれで失礼します」

俺はそのまま帰宅した。

「さて、やるか」

俺の考案しているＩＳは、相変らずのドチートで、コアは俺が作った。

母さんに頼まれてすぐ、俺はＩＳのコアを解析した。

俺の馬鹿げた演算能力などにより、解析が出来たが、やはりＩＳのコアを創れるのは篠ノ之束のみ。

ならば、俺にしか創れないコアを創ればいい。

俺はセスタに頼んで、オリジナルのＧＮドライブをを製造してもらい、解析、自身でも創れるようになり、現在ＧＮドライブを製造途中だ。

ＧＮドライブ、マジで時間掛かる。

Ｗｉｋｉでは２０年掛かるって書いてあったけど、俺のはかなり特殊で、未元物質（ダークマター）でこの世に存在しない物質を材料にしたりしているから、製造期間は長くても１年半は掛かる。

計算すると、俺が二年になる頃には完成しそうだ。

それと同時進行でシステムやらなんやらの作成も行っており、休みのときは徹夜している。

なんやかんやで俺は、コイツの作成を楽しんでいる。

ちなみに、俺の頭の中の設計だと、ツインドライブシステム＋核エンジンのハイブリッド。
トランザムを付けるつもりなので、トランザム使用後の性能ダウンを防ぐために、核エンジンのエネルギーで補うつもりだ。
事実上永久的に動かせるだろう（ＧＮドライブが半永久的、核エンジンがある時点で無限のはず）。
核エンジンにより放たれる放射能は、これも未元物質を使い、放射能を無害な物質に変える膜で覆い、無効化した。
ツインドライブシステムで異常な性能が約束されているから、こんな化物スペックのＩＳ、誰が使いこなせるんだっつう話になる。
ま、コアは俺が作ったんだし、たとえ誰も使いこなせなくても別にいいけど。
ってか、俺が使うのだけど（これを製造中に俺がＩＳを動かせることが判明。　父さんと母さんには話してあるが、公表はしていない）。

俺は同時進行するための頭脳は一応持っているので、それを可能にする腕を増やす能力“無限の手（インフィニティ・ハンズ）”を発動しながらやっている。
滅茶苦茶便利だが、滅茶疲れる。
まぁ、これのおかげで同時進行及び、ＧＮドライブの製造速度が上昇してるのだが。

「ＧＮドライブは早めに完成させんとな。　同調させるときに不安があるからな」

実質、他システムの大半は一応は出来ていて、実際に組み込んで使

用しないとわからないので、ここ最近はＧＮドライブの製造に熱が入っている。
おかげで、二年に入る前には完成する予定だ。

俺は一人黙々と作業を進め、気づいたときには作業を始めて五時間ほど経っており、もうすぐ夕食時だった。
俺はテレポートで誰にも気づかれること無くこの場から消え、誰にも気づかれること無く自信の部屋に戻った。

文月学園入学（後書き）

作者の無い頭で頑張って考えました。
ガンダムのことはあまり詳しくないのでＷｉｋｉ参照して書きましたが、理解できていない部分もあるかもしれません。
間違っている部分は眼を瞑って頂けると助かります。

ボロボロの教科書（前書き）

連続投稿です。
前半はほとんど7，5、9，5巻と一緒です。
結末が違います。

ボロボロの教科書

文月学園に入学して早二週間。
原作どおりなら、そろそろ明久と雄二の喧嘩があるはずだ。
俺は学校で出来るシステム作成や、ＯＳ作成を、教室の影に隠れながらしていると、坂本雄二が入ってきた。

「っと、と……」

雄二の身体が島田の机にあたり、教科書が落ちた。

「この時期からもうこのザマとは、勉強熱心な奴だな」

雄二が落とした教科書に手を伸ばし、その惨状に気づいた。

「これはまた、酷いもんだな……」

教科書の表紙いは破れ、ページはクシャクシャになっている。

「そういやあいつ、あの時クラスの連中をブタ呼ばわりしてたっけか」

言ってたよ、「黙りナサい。　ブタどモ」って言ってたよ。

「ンなコトやりそうな様子は無かったがな……」

いじめじゃないよ、事故だよ。
これやったのはそこまで悪い奴じゃないよ。

「……まぁいいか。　どうせ俺には関係のない話だ」

雄二がその教科書を机に戻そうとする。

そのとき、

（来た！）

雄二がその場から大きく飛び退る。

（俺が鍛えた明久のを避けるとはな……。　なかなかやるじゃねえか）

明久は雄二を睨みつけている。

いつもの雰囲気とは全く違う、酷く冷たい雰囲気を纏って。

Ｓｉｄｅ～雄二～

何だコイツ！？

いつもの雰囲気じゃねえぞ！？

コイツ、かなりやるぞ！

「どういうつもりだ、テメェ」

「……なに……やってんだよ……」

「それを聞きたいのはこっちの方――」

「オマエ、その子の席で何やってんだって聞いてんだよ！」

そいつの視線は俺の右手、正確には、俺の持っている、ボロボロの教科書に向けられていた。
コイツ、まさか……！

「おい待て吉井。　俺は」

「歯ぁ食い縛れこのクズ野郎っ！」

「チッ――――このバカ野郎が……！」

吉井は俺の話を聞かずに、拳を固めて飛び込んでくる。

（速い！　避けれねえ……だったら……！）

俺はその拳を掴もうとして、そのまま殴り飛ばされた。

「ぐはっ！？」

なんつう力してんだ！？　コイツ！

「お、落ち着け……！　これは俺がやったんじゃねえ……」

「ぶち殺す！」

「……人の話を聞け！」

駄目だ、完全に勘違いしてやがる。
さっきの一撃で机に身体をぶつけて所々が痛ぇ。
これは、やべえぞ……。
俺は起き上がる。

「……待て、吉井、人の話を聞け……」

少しふら付きながらも、このままでは冗談抜きでやばいので、なんとか説得しようと試みる。

「ぶっ飛ばす！」

吉井は一気に俺の顔目掛けて奴の拳が降りかかる。
俺は避けることもできず、両手でガードをしようとする。
奴の拳が、俺に当たろうとした瞬間、奴の動きが止まった。

（？　どういうことだ？）

俺は急に止まった吉井に疑問がわく。

「明久、そこまでだ」

でてきたのは折原だった。

「シエン、放してよ。　僕はコイツをぶっ飛ばさなきゃならないんだ」

吉井はそう言うが、放すってどういうことだ？
折原は吉井に触れても無いぞ？

「悪いな、坂本。　俺の馬鹿弟子が殴りかかっちまって。　コイツ、いい奴なんだけど根が馬鹿なんだよ」

「お、おう？」

弟子だぁ？
コイツ、俺と同い年だろ？

「落ち着け明久。　まずはこいつの話を聞けよ。　麗奈が泣くぞ」

奴がそう言うと、未だに俺に殴ろうとしている吉井がハッとしたように、おとなしくなった。

「……ゴメン、シエン、坂本君」

な、なんなんだ？　こいつらは？
だが、漸く落ち着いたみたいだ。
そして、吉井は床に座り込んだ。
一瞬何かが光ったように見えたが、あれはワイヤーなのか？

「明久、お前は坂本が島田の教科書をボロボロにしたと思ってんだろ？」

「……うん」

「それはお前の勘違いだ。　坂本は島田の机に身体をぶつけただけで、何もしていない」

「え！？　そうだったの！？」

「あ、ああ」

「ごめんなさいっ！！　僕、君が島田さんを苛めてるんだと思ってつい！」

土下座する勢いで謝ってきた吉井。

「坂本。　お前、コイツの強さに驚いただろ？」

「ああ。　何でコイツはそんな体格なのに俺よりも力があるんだ？　普通じゃねえぞ？」

体格差で俺の方が勝っているのに、俺が力負けしたんだぞ。

「当たり前だろ。　なんたってコイツは、この俺の地獄の特訓に耐え続けてきたんだからな」

地獄の……特訓？

「お前も知ってるだろ？　“終焉の剣（ジ・エンド）”か“天修羅”のどちらかの呼び名」

「まあな。　俺みたいのが知らないわけが無いだろ」

百人切りの伝説を持ってるんだ、俺みたいなのが知らないはずが無い。

「で、それがどうしたってんだ？」

「それ、俺なんだわ。　知ってると思うけどな」

「オリハラシエンっていうのはかなり有名だからな。　お前みたいなひょろひょろがそうだとは思わなかったけどな」

百人切りをするって聞いてたもんだから、てっきりもっとごつい野郎かと思ってたんだが、俺よりも体格が無いなんてな。

「俺さ、小学校のときから化物染みてたんだけど、コイツさ、そんな俺の特訓に耐え続けてきたんだよ」

化物染みてたって、どんな風になんだ?

「俺がした特訓っつうのは、三時間耐久ランニング。一定速度よりも遅くなったらおしおきしたり、ｅｔｃ.」

なんてふざけたことをやってんだよ!?
それも小学生のときからだと!?
こいつらはなんなんだよ!?

「だからまぁ、明久に負けても恥ずかしくはないぞ。むしろ当たり前だ」

やっぱり、こんなアホ面した奴に負けるのは悔しいな。

「それと、おい、お前、いつまで隠れているつもりだ?」

何言ってるんだ?

「そこに隠れているのはわかってるんだ。姿を現せ、土屋康太」

「!　……なぜわかった?」

出てきたのは土屋とか言う奴だった。
全く気づかなかったな。

「俺を嘗めんなよ。　それでお前は、カメラが壊れるかもしれないからそこで隠れて見ていたってところだろ？」

なんでコイツはそんなことがわかるんだ？

「坂本、何でわかるんだとか思ってるだろ」

「なっ！」

「言っただろ、情報屋だって。　周りの状況把握くらい出来なくてなにが情報屋だ」

そ、そういうもんなのか？

「土屋、お前のカメラにそのときの映像残ってるんじゃないか？」

「……今確認している」

「明久、机戻しとけよ。　そうなったのはお前の所為なんだからな」

「わかったよ」

吉井はそう言われてせっせと机を直し始めた。

「お主ら、何をしておるのじゃ？」

続いてきたのは、女顔で爺言葉を使う妙なクラスメイトがいた。

「お、木下秀吉だ。　やっぱ、どっからどう見ても顔は女だな」

「ワシは男じゃ！」

「わかってるって。　骨格が男のそれと同じだし」

骨格だと？
見てわかるのかよ！？

「お主、ワシが男だと認識しておるのか？」

「ああ。　顔は女にしか見えんけど、男だと認識している」

「主が初めてじゃ！　初見でワシを男だと見てくれるのは！」

木下はそう言って物凄く嬉しそうな笑みを浮かべて折原の手を掴んだ。
相当嬉しいようだ。

「あれ？　木下さん、いつの間に来たの？」

「今さっきじゃ。　それとお主、なぜ“さん”づけなのじゃ？」

「え？　木下さんは女の子でしょ？」

「ワシは男じゃ！　さっきのやり取りを聞いておらんかったな！」

「木下さんは女の子でしょ？」

「吉井よ、ワシの話を聞かんか」

「嘘はいけないよ、木下さん。　どこからどう見ても美少女じゃないか」

「ていっ」

「……ほぇ？」

木下は吉井の手を取り、自分の胸に導いていた。
どういう状況なんだ？

「……っ！（パシャパシャパシャ）」

教室の隅ではカメラの映像を確認していたはずの土屋が、バズーカのようなカメラを構えて撮影する変態へと化していた。
おかしいな。
俺の常識では量りえない事態が進行している。

「どうじゃ吉井よ。　これでワシが男じゃとわかったかの？」

「き、木下さん……」

「うん？」

「高校生なんだし、ブラくらいはつけた方が……」

「お主ワシの話を微塵も聞いておらんな！？」

吉井は顔を真っ赤にして木下さんの胸元から手を放す。

「……っ！（シパッ）」

その脇では、変態が残像を生じさせるほどの速さで木下の後ろへと移動していた。
まさか、ブラ線の有無を確認しているのか！？
あの野郎……！
どこまでそこの知れない男なんだ……！

「……感……無量……っっ！！（ブシャァァ）」

そして鼻血と共に沈んだ変態。

「とにかく、これでワシが男じゃと言うことはわかったじゃろう？」

「……」

吉井が困った顔をしている。
胸の小さい女子と言う可能性が排除しきれないのだろう。

「むぅ……。　どうしてもと言うのなら、下を脱ぐのもやむ得んが……」

「ちょっと待て！　流石にそれは男のお前でもアウトだ！」

「なんだか越えちゃいけない一線を越えてしまう気がする！」

同感だ。

「それと明久！　木下は男だ！　見た目は美少女にしか見えなくとも男だから間違えるな！」

なぜか熱の入った折原の説得。
何があるんだ？

「シエンがそういうなら間違いないのかな……。　ゴメンね、木下さん」

「待つのじゃ。　ならばなぜ“さん”付けなのじゃ」

「君だと違和感が……」

「むぅ……、納得はいかぬが、男だとわかったのならそれでよしとするかの……」

「で、土屋、確認取れたのか？」

「……（コクリ）」

結構前に言ってたはずなんだが……。

映像確認後。

「……こうこうこと」

「こやつらがここにおったのはそういうことじゃったのか」

「言ったろ、明久の勘違いだって」

「……うん、本当にゴメンね、坂本君」

「けっ」

ほんとコイツといると調子狂うな。

「あれ？　明久さんにお兄様、まだいらっしゃったのですか？」

声がした方を見ると、長い黒髪の女子生徒だった。

「麗奈か。　お前こそまだいたのか」

「はい。　それよりも、お兄様方は何を？」

お兄様だと？

もしかしてコイツ、折原の兄妹か？

「ちょっとな」

「あ、自己紹介がまだでしたね。　私は折原麗奈と言います。　折原終焉の双子の妹です」

礼儀のいい子だな。

「ワシは木下秀吉じゃ。　よく間違えられるが、ワシは男じゃ」

「……土屋康太」

「……坂本雄二だ」

「木下さんに土屋さんに坂本さんですね。　よろしくお願いします」

本当に礼儀のいい子だな。

「お前ら、何をしている？」

この声は！

「筋肉教師！」

「西村先生と呼べ」

「いえ、島田さんの教科書がボロボロになっていたので、話し合っていたところです」

よくもまあ、強ち間違っては無いが嘘をつけるもんだな。

「どういうことだ？　虐めか？」

「おそらく違います。　掃除中に落ちていることに気づかずに引きずってしまったようで」

「そうか。　しかし、なぜそこまでわかるのだ？」

「そのような話を聞いたのと、教科書の破れ具合から、おそらくそうであろうと推測が出来ました」

「そうか。　その教科は何だ？　代わりの教科書を渡す」

「古典です」

「古典だと？　確か古典の教科書は誤って廃品回収車に出したとか言っていたような……」

「でしたら、その回収業者に連絡をして、処分するのをやめるように伝えてもらえませんか？」

「わかった。　こちらから連絡しておこう。　だからお前らはもう帰れ」

「わかりました。　失礼します」

こいつ、この筋肉教師を相手によく平然と嘘をつけ、尚且つ自身を下にしていやがる。
こいつ、底がまったく知れねえ！

Ｓｉｄｅ～雄二～ｏｕｔ

バスケと島田と日本語と（前書き）

タイトルに深い意味はありません。
出てきた奴をタイトルに組み込んだだけです。

「おい吉井に折原。　C組の曙中出身のやつらが購買のパンをかけてバスケをやろうとか言ってるがどうする？」

「僕は遠慮しておくよ。　僕は弁当だしね」

「俺も弁当だがやる。　あーでも、俺がやると確実に勝てるか」

「すげえ自身だな」

「当たり前だよ。　シエンが本気を出したら僕でも瞬殺されるからね」

「マジかよ！？」

闇に炎の性質を理解して、それを使うようになってから、余計に俺の身体能力とかが上昇し始めたんだよな。

「そ、そんじゃ、メンバーを集めるか」

「……手伝う」

「ワシも参加させてもらおうかの。　なにやら楽しそうじゃ」

これで四人。
明久は不参加で、原作ならここで島田の方に行くんだよな。
あ、行った。

「えっと――ちゅう――どれ――ぶにいる――もなみ――？」

フランス語なんだよな、これ。

正確にはＴｕ　ｎｅ　ｖｏｕｄｒａｉｓ　ｐａｓ　ｄｅｖｅｎｉｒ　ｍｏｎ　ａｍｉｅ．

日本語に訳すと、私と友達になってくれませんか、だ。

「――ちゅう――どれ――ぶにいる――もなみ」

「ハナシ　カ　ケルナ　バカ！」

「へ？　梨――蹴るな？」

なぜわからない！？

「Ｗｈａｔ　ａ　ｓｈｉｔ　ｍａｎ　ｙｏｕ　ａｒｅ！！」

「え？　……あ！　ムカつくって僕何かしたかな？」

なぜそれがわかる！？

「うーん……通じてないのかな……」

当たり前だ。

ドイツ語がわかる島田にフランス語を言ってるんだからな。

「ねえシエン、通訳できる？」

「悪いが、ドイツ語はまだ覚えてないな」

嘘だけど。

「そっかー。　ってあれ？　ドイツ語？」

「どうした明久と言いたいところだが、さっきお前が言ってたのはフランス語だからな」

「あぁ！　間違えた！」

漸く気づいたか。

「てかよくさっき島田が言った言葉理解できたな」

「最初は？ワタシ　ハ　ｍａｎ'　ｙｏｕ　は？？　て聞こえたんだけど、よくよく考えてみたらそんなこと言うことないよね」

そりゃそうだろ。

「いくら島田さんが男装が似合いそうだからって、そんなこと言うはずないしね」

まぁ似合いそうだけれども、それ言っちゃいかんだろ！

「Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｅｉｎｅ　Ｆｒａｕ！　Ｉｃｈ　ｓｅｈｅ　ａｕｓ　ｕｎｄ　ｖｅｒｓｔｅｈｅ　ｅｓ　ｎｉｃｈｔ！？（私は女よ！　見てわからないの！？）」

多分上手く聞き取れなかったのだろう。

勘違いしてドイツ語で怒鳴ってるし。

明久はドイツ語がわからないからあたふたしているし。

「し、島田さん！　何言ってるかわからないけど、僕は島田さんの胸が小さいから男装が似合いそうだと思ったわけじゃ……！」

「Ｖｅｒｄａｍｍｔ！！（なんですってぇー！！）」

「ふぎゃぁああっ！　肘間接が逆方向にっ！？」

なぜか原作通りの流れになった。
ってか島田の動き速っ！
明久の間接を変えるとは。

「ははっ。　こいつは傑作だ。　まさか胸のことを言うとはな」

「いたた……、つい口が滑っちゃって……（コキュッ）酷いよ島田さん……」

明久は間接を自らの手で戻した。
その動作には手馴れている。

「Ｗｈａｔ　ａ　ｓｈｉｔ　ｍａｎ　ｙｏｕ　ａｒｅ！！」

島田はそう叫んでから、教室を出て行った。
雄二が島田に話しかけていた。
原作通りってところか。
ま、明久は成績はいいが、根がバカなところは変わっていない。
それは明久のいいところでもあり、ちょっとした短所でもあるんだが、プラスの方がでかい。

「お主、曲がった間接を自分で治せるとはどうなっておるのじゃ？」

「それはシエンとの特訓で何度も関節が外れたから、なんども治されてるうちに自分でも治せるようになったんだ」

初めの方は俺が治してたんだが、次第に自分で治せるようになってたな。

そんときは自分でもビックリだ。

そんなに関節外れてたのかってな。

「俺は勝手にハンデつけさせてもらうから。　俺は右手は使わない」

「わかった。　じゃ、始めようぜ」

パンをかけたバスケ。

俺はいらんが、息抜きにはなるだろう。

「坂本、こっちだ！」

雄二がボールを持っているので、さっそく点を入れるために俺は呼ぶ。

「ほらよ！」

「ナイス！　んじゃ、最初は景気よくスリーだ！」

俺は左手に持ったボールをぶん投げた。

それは、某バスケ漫画の奇跡のなんたらのあの人のように、ぶん投げた。

スパッ！

そのボールは、ゴールへと吸い込まれた。

その後継を目の当たりにした、俺と明久以外の面子は唖然とし、明久は苦笑いをしていた。

「何唖然としてるんだ？　もっと手加減するから、続けようぜ」

「あ、ああ」

このときの相手の心境はこうだった。

「「「「「絶対勝てるわけねえ」」」」」

その後も、俺は滅茶苦茶やって、あまりにも可哀想だったので、後半からはパスしかしなかったけど、結局俺たちが勝った。

そして、それを見ていたバスケ部顧問の先生が、

「折原！　是非ともバスケ部に入ってくれ！」

と懇願されたが、

「すみません、私には部活をやるよりも大切なことがあるのでお断りします」

断った。

俺にはＩＳを創るという、とても重要なことがあるし。

「……仕方がないか。　すまないな、ただ、時間があればコーチでもいい。　是非来てくれ」

「わかりました。　ただ、ほとんど時間は取れないと思いますが」

「念のためだ。　お前ほどの逸材はなかなかいないからな。　時間を取らせたな、もういいぞ」

「失礼します」

「やっぱり部活はやらないんだ」

「今はなかなか時間が取れないんだよ。　父さんと母さんの頼みの所為もあるけど、俺自身、それをやるのを楽しんでるんだ」

「お前、今まで何してたんだ？　あれは異常すぎるぞ」

「何って、明久を鍛えたり、ちょいちょい来る馬鹿共を吹き飛ばしたり、知り合いに呼ばれてちょっと仕事をしたり、情報を仕入れたり、その情報を売ったり、色々だな」

「……随分と奇妙な生活じゃな」

「そうだな。　ま、さっきのアレは、俺のふざけた身体能力とかを使ってやったんだよ」

「随分と手加減してたしね……」

「「「あれでか（の）！？」」」

随分と驚く秀吉に雄二にムッツリーニ。

「半分も出してないぞ。　なぜか最近俺の身体能力が異常なほどに上昇してるんだよな……、なんでだろ？」

その疑問に答えれる人は、ここにはいないのであった。

翌日。

「ヨシイ！」

島田が明久に声をかけていた。

「え？　な、なに島田さん？」

「ア・ノ・ね、ヨ・シ・イ」

「う、うん」

「ワ・タ・シ・は」

「わ、”Ｗｈａｔ　ａ　ｓｈｉｔ”？　ごめん。また僕何か怒らせるようなことを……？」

「違うぞ明久。　私だ」

「あ、そうなの？」

あ、やべ。
つい言ってしまった。
島田の一人称変わらんかも。

「ソウデス。　ワタシは――――」

あ、言葉区切った。
そう言えば、似てるかもって理由で変わったんだっけか。

「アノね、ヨシイ。　ウチは――――」

島田の一人称は問題なく変わっていた。
近いうちに秀吉、雄二、ムッツリーニとの友好関係を深めないとな。

バスケと島田と日本語と（後書き）

何か中途半端な終わり方な気がします。

持ち物検査と試験召喚実習

「全員動くな！　鞄を机の上に置いて、中身が見えるように開け！」

朝のＨＲが始まるや否や、担任の鉄人こと西村先生がそんなことを告げた。

これもまた原作通りの流れだが、明久はまともなので関係ないと思うが、もしものときは観察処分者にさせるか。

「言っておくが、逃げようなんて考えるなよ？」

雄二は相変らずだから狙われてるか？

「よし、それじゃあ見て回るぞ。　授業に関係ないものは全て没収するからな」

廊下側から順に覗き込んでいく西村先生。

俺も服に隠すのをミスって取られちまった。

俺が取られたのはＩＳの理論やらなんやらが書かれた論文。

まだ途中だったのに！

「坂本、お前はポケットの中も見せろ」

「……くそっ」

ＭＰ３プレイヤーが出てくる。

「やはりな。　これは没収だ」

原作通り没収される雄二。
雄二は忌々しそうに西村先生を睨みつけていた。

「次はお前だ、吉井明久」

「あ、はい」

原作ならジャージに着替えさせられるけど、この明久は馬鹿だが普通に過ごしている。
問題ないだろう。

「……指輪に箱？　没収しておく」

「ああ！　それだけは駄目なんです！！」

あれってまさか！
リングと匣じゃねえか！
油断してやがったな！？

「駄目だ。　没収だ」

これは取り返さないと大変なことになるぞ……。

「――――これで全部か？　前から言っているが、学校は勉強をするところだ。　授業に関係ないものは持ってこないように」

没収品を引っさげて西村先生は教壇に戻る。
匣は回収できるが、リングはどうしようもない。
座標移動（ムーブポイント）で取り戻すことも出来るが、バレる恐れがあるのと、もうこの際明久を観察処分者にしてしまおうって魂胆だ。

「さて、持ち物検査に時間を取られたのでＨＲは省略する。　一時間目はいよいよ『試験召喚実習』だからな。　全員速やかに体育館に移動するように」

西村先生は没収品を抱えて出て行った。

☆

『――――試獣召喚（サモン）っ！』

ただ今体育館で実習中だ。

「はぁ……」

「明久、お前が取られたの、リングと匣だろ？」

「……うん……ゴメン……」

「あれは確実に取り戻さないと大変なことになる。　明日にでも実行するぞ」

「わかった」

『次、姫路瑞希。　前に出なさい』

『は、はいっ』

「お、瑞希じゃん」

「あ、ホントだ」

「ムッツリーニ、折角の体操服姿だ。　写真に収めなくてもいいのか？」

「……デジカメは没収された」

「それは残念だったな。　クラスも違うし、滅多に見れるもんじゃないからな」

「試験召喚実習もこれっきりだしな」

「……（ガックリ）」

物凄く残念そうに項垂れるムッツリーニ。

『こ、こうですか？　試獣召喚（サモン）っ』

現れる召喚獣。

「流石は姫路。　随分と強そうな召喚獣だ」

「そうだね。　外見はあんなに可愛らしいのにね」

召喚獣の外見は召喚者の外見をデフォルメしたものだ。

「あんなにゴツイ大剣持ってる奴、他にいなかったな」

「うん。　姫路さんくらいだよね」

「まだ出てきてないだけだろな。　まだ学年主席と次席も出てないしな」

「主席はシエンじゃないか。　次席を争ってるのって麗奈と……誰だっけ？」

「霧島翔子だ」

霧島の名前を言った瞬間、雄二が反応した。

『Ｃクラス　姫路瑞希　　ＶＳ　　Ｃクラス　古河あゆみ
総合科目　　３９４３点　　ＶＳ　　１２６４点
』

この点は中間テストのものだ。
ちなみに、俺は麗奈と霧島に負けない程度で手を抜いてやった。
あまりにやりすぎると後で面倒だからだ。

「４０００点近いなんて、やっぱり姫路さんは頭いいねぇ」

「お前も小一から真面目にやってればあれくらいいけたかも知れんのにな」

『次、折原麗奈と折原終焉！』

「おいおい、兄妹対決かよ……」

「いってらっしゃい、シエン」

「おう」

何でクラス違うのに兄妹でバトるのかなぁ……？

「よろしくお願いします、お兄様」

「ああ。　いくらお前でも、手加減はしねえからな」

「わかっています。　手を抜かれるのは好きではないので」

「じゃ、やるか」

「「試獣召喚（サモン）！」」

麗奈の召喚獣は巫女姿。
もろ緋弾のアリアの白雪だ。
俺の召喚獣は黒いロングコートを纏い、首元にはなぜかネックレス、召喚獣の身の丈を軽く超える長さの黒い日本刀。
思いっきり小さくなった聖天絶刀だった。

「至って普通の見た目だな。　まぁ、俺としてはこの方がありがたいが」

聖天絶刀があるってことは鋼糸もあるはずだ。
このスタイルは俺が最も好んでいるしな。
でもネックレスは何だ？
ま、いいか。

『Ｃクラス　折原麗奈　４２６３点
総合科目
』
『な、なんだ!?　あの点数は!?』
『４０００点オーバーだと!?』
『しかもＤクラスの方は４８００点オーバーだと!?』
俺たちの点数を見て、驚く他の生徒たち。
俺と麗奈は召喚獣を軽く操作して、跳ねたり、歩いたりさせている。
「じゃ、やるか」
「そうですね。　操作の感覚はまだ上手く掴めていませんが、やりましょう」
先生の合図の後、俺と麗奈は同時に前に跳び、鍔迫り合いになる。
「６００点差は大きいですね……」
俺と麗奈の点差はおよそ６００点。
力の差が出ている。
それに、既に俺は感覚を掴みつつあった。
「悪いな、麗奈。　これで終わりだ。“三閃”」
七閃が七本の鋼糸を使うのに対して、三閃は三本。

まだ扱いに慣れていないため、これ以上使うには賭けだ。
三閃は麗奈の召喚獣を切り刻み、消滅する。

「負けてしまいましたか」

「三閃使ったんだからな。　まぁ、一本避けられるとは思わなかったけどな」

さっきの三閃の三本の鋼糸のうち、一本は避けられていた。
これは流石と言うところだ。
俺は明久たちの元へ戻る。

「あの点数は流石だな」

「シエン、あのテスト手抜いたでしょ？」

「お、よくわかったな」

「マジか！？　手を抜いてあの点数だと！？」

「……あの点数は異常」

「驚きじゃな。　ワシとは天と地ほどの差じゃ」

そんな話をしながら眺めていると、

「次！　吉井明久と島田美波！」

「お前の番みたいだな」

「そうみたいだね。　ちょっと行ってくるね」
明久は立ち上がって歩いていく。
「あ、吉井が相手だったんだ。　嬉しい……♪」
最低の発言まで、3，2，1……どうぞ。
「吉井を殴るのって、すっごく気持ち言いもんね」
麗奈から黒いオーラが感じられる。
そもそも、明久は相手が女子の島田だから手を出さないだけで、本来なら瞬殺なんだよな。
「島田さん。　殴り合うのは召喚獣だよ？　僕らじゃないよ？」
「そうね。　ウチらは殴りあわないわね」
明久の召喚獣が、一方的に島田の召喚獣をリンチするだけだからな。
「ウチがアンタを一方的に殴るだけだから」
召喚獣相手なら、明久は容赦しないし、そもそも点数に差があるからな。
「あの、先生。　校内暴力宣言ですよ？　僕らの持ち物検査なんてやってる余裕があるなら、こういったものを何とかするべきでは？」
物凄く正論だ。

「……島田。　いくら吉井が相手でも、暴力はいいことではない」

「でも、先生……！」

「でもじゃない。　駄目なことは駄目だ。　わかるな？」

「……はい」

「そうか。　わかってくれたか。　それなら――」

嬉しそうに笑みを浮かべて一言。

「――今回だけは特別だぞ？」

教師あるまじき発言をしました。

「はいっ！　頑張ります！」

「よし、頑張れよ」

「あはは。　先生も島田さんも馬鹿だなぁ。　僕が君に負けるわけないじゃないか」

ザシュッ！

明久の武器である刀での一閃。

島田の召喚獣は一撃で消え去った。

ちなみに、明久の召喚獣は竜の刺繍の入った学ランに刀という、原作とは違った装備だった。

没収品と観察処分者

持ち物検査のあった次の日。

「なあ、没収品を取り返すなら俺たちもやるぜ」

「なんだ、知ってたのか」

「ああ。　昨日の実習でそんなことを言ってるのが聞こえたからな」

「まあいいだろう。　だが、ばれればどうなるかはわからんぞ？」

「お前がいるんだ。　そんな馬鹿なことするわけないだろう？」

「ふっ、俺だけ助かろうとするかもしれないんだぞ？」

現に俺は明久を落し入れようとしているんだからな。

「それもそうだな。　だがまあ、そんときは腹を括るさ。　あれは買ったばかりだし、鉄人にも貸しがあるからな」

「……俺もやる」

「ムッツリーニか。　カメラを取り戻したいのか」

「皆がやるのならワシも手伝おうかの。　ワシとて取り返せるものなら取り返したい」

全員参加みたいだな。

「んじゃ、まずは目的の物の所在を「場所ならもうわかっている」……流石、仕事が速いな」

「だが、今日の鍵の位置がわからんな」

「鍵？　厄介だな……」

鍵がどこに保管されているかはわからないからな。
鍵の在り処を知るには、もう一度鍵を開けさせなければならない。
まぁ、ピッキングするのもありなんだが。

「と言うことで、誰かの携帯を囮に使う」

「……じゃんけんだな」

理解したのか雄二が誰の携帯を使うのかじゃんけんで決めようと提案してきた。

「くそっ、まさか俺のを使う羽目になるとは……！」

結果は雄二の負け。
原作が崩れたな。

「じゃあ潔くマナーモードをＯＦＦにしろよ」

「……わかってる」

「……鍵の位置が特定できた」

雄二の携帯が鉄人こと西村先生に没収され、西村先生が教室を出て行った後、しばらくするとムッツリーニが戻ってきた。

「で、どこだったんだ？」

「……鉄人のズボンの左後ろのポケットにしまっていた」

「じゃ、その鍵を奪うとしますか」

原作とは変わらないようだった。

「明久、お前がやれ」

「何するの？」

「それはな……」

☆

放課後。

「で、本当に僕がやるの？」

「ああ。　俺がやると確実に疑われるだろうし、お前の方が適任なんだ。　上手く水掛ながらこけろよ」

理由はそれだけじゃないけどな。

「上手くできるかわからないけどやってみるよ」

「雄二、明久が水をかけたら鉄人にお前のジャージを貸せ。　確実にだ」

「わかった」

「……そろそろ鉄人が来る。　明久、一回で決めろよ」

そう言って、俺たちは確定位置に付いた。
鉄人が来た……！

「うわぁっ！」

バケツを持って歩いていた明久が自分の足につまずいて鉄人に向かってバケツを思いっきり投げつけた。
原作ではここで回避行動をとられたが、その一撃で鉄人は水をかぶった。

「す、すみません、西村先生！」

にしても、演技が上手いな。
さっきのこけ方とか不自然さがなかったぞ。

「おうおう、やらかしたじゃねえか明久」

登場する雄二。

「先生、とりあえず着替えた方がいいっすよ。　俺のジャージでよければ貸しますけど」

「そうだな。　済まないが貸してもらおう。　吉井はちゃんと床を

拭いておけよ」

「は、はい。　すみません……」

本当に演技が上手い。
とりあえず床を拭いている明久。

「明久。　鍵をゲットしたぞい」

「そっか。　それならあとは職員室に侵入して物を取り戻すだけだね」

「うむ。　鉄人に気づかれないうちに素早く済ませるのじゃ」

「明久、気配を消して取ってこい。　俺はそれなりに目立つからな。あ、余分なもんは持ってくるなよ？」

「わかったよ。　じゃあ行ってくるね」

職員室に入っていく明久。
俺と秀吉は職員室前で隠れている。
しばらく待っていると戻ってきた明久。

「急いで人目の少ない場所に逃げるぞ」

☆

「リングと匣は取り返したが、これからはもっと気をつけろよ。

これがマフィアに見つかれば、本当にやばいからな」

「うん、本当にゴメン……」

「匣ならまだいいが、リングはちゃんと隠せよ」

「わかってる。　あ、僕ちょっと行かなきゃいけないからゴメン、帰るね！」

原作通りなら島田の妹のところだな。

「わかった。　じゃあな」

明久は走っていった。

俺は明久が見えなくなるまで見送ると、ある場所へと歩みを進めた。

俺は扉の前でノックをする。

「誰さね」

「一年Ｄクラスの折原終焉です」

「入りな」

「失礼します」

俺が来た場所は学園長室だ。

「一年の学年主席が何の要だい？　アタシは忙しいんだけどね」

「同じクラスの吉井明久を観察処分者にしていただきたいのです」

「吉井をかい？　確か成績はかなりよかったはずだけどなんでだい？」

「はい。　観察処分者の利点を、来年の為に利用しようと思ったんです」

「利点？　あんなものに利点なんてあったかね……」

「観察処分者は人よりも召喚獣の使役が出来ます。　それはつまり、他の人よりも召喚獣を使用する機会が増え、召喚獣の操縦技術が向上します。　彼には、私の妹を守ってもらいたいですからね」

「アンタが守ればいいんじゃないのかい？」

「俺は、まだわかりませんよ」

ＩＳ学園にいるかもしれませんしね。

「あんたの言いたいことはわかったさね。　だけどね、何の理由もなくそうすることは出来ないのさね」

まあ、そりゃそうだよな。
この人はこんなりでも、一応は教育者だからな。

「だったら、理由があればいいんですよね？」

「まあそういうことさね」

「でしたら、今日、職員室から袋を持って出て行く明久の姿を見ま

した。　あれはおそらく昨日行われた持ち物検査の没収品を入れた袋のはずです。　これは十分理由になるのでは？」

「確かに、それが本当ならば十分な理由になるさね。　だがね、それが事実だとは限らないよ」

「それはそうですね。　私のでっちあげかもしれませんからね。ですが、証拠ならあります」

俺が取り出したのはビデオカメラ。
明久が荷物を取り出す場面を録画しておいたのだ。

「これでどうでしょう？」

「……仕方ないさね。　匿名の情報と言うことで、職員会議で取り上げることにするさね」

「ありがとうございます。　あ、西村先生にこれを渡して置いてください」

俺が渡したのは一つの封筒。
明久を殴らせないように、でっち上げた説明文が書いてある。
本当のことは書けないしな。

「では、失礼します」

これで原作通りに観察処分者で、尚且つ麗奈を守らせることが出来る。
これで、来年のＡクラスは打ち崩すのはほぼ不可能になった。
Ａクラス並の点数で、尚且つ三年以上の操縦技術を持つ明久に、原

作の霧島並みの点数を持つ麗奈、そもそも点数の高いＡクラスに敵はいないだろう。
まぁ、もしも何かの手違いで明久がＡクラスにならなくても、それはそれで面白そうだけどな。

没収品と観察処分者（後書き）

明久はやっぱり操縦技術がなきゃね。
まぁこれで最強の完成だ。

明久は観察処分者に

「……昨日、職員室で盗難が発生した」

俺が学園長と交渉をした次の日、原作通りに鉄人が言った。

「これは大変嘆かわしい事態だと思わないか、吉井？」

「そうですね。　全く嘆かわしいことだと思います」

受け流す明久。
だが、鉄人には証拠が流れている。

「そうか。　ところで吉井。　少し気になることを聞いてな」

「なんですか？」

「ある生徒が何かを持って職員室から逃げるように出て行ったという証言があるのだが」

「なぜそれを僕に言うんですか？」

「いやなに、匿名でお前と裏付ける証拠を手に入れたんだ」

「そうですか……へ？」

「お前が犯人だと言うことは初めからわかっていた」

「なん、だと……？」

「今朝の職員会議で学園長が直々に処分を決定してくださった。受け取れ。　先生からの贈り物だ」

鉄人が明久に紙を渡す。

渡された紙には文章が一行だけ書いてあった。

――吉井明久。　上記の者を文月学園指定《観察処分者》として認定する――

計画通りだ。

「それと吉井、後で俺の元へ来い」

そう告げて、鉄人はＨＲを行った。

「まさか見られてるなんて思ってもみなかったよ……」

「ああ、あれを教えたのは俺だぞ」

「なんでそんなことするのさ！　おかげで観察処分者になっちゃったじゃないか！」

「それは俺がそうするように頼んだからだ。　観察処分者の利点を使うためにな」

「観察処分者に利点なんてあるわけないじゃないか！　馬鹿の代名詞なんだよ？！」

まあ頭の回る奴でもない限り気づかんだろう。
そもそも、観察処分者は馬鹿の代名詞だから、まずメリットがあると考えないからな。

「まあそうだが、実際のところ、あれはフィードバックがあり、物理干渉が出来るようになるが、あれは他の人よりも召喚獣を使役する回数が増えると言うことだ。　それがどういうことがわかるか？」

「召喚獣の操縦が上手くなる？」

「そうだ。　お前の点数はＡクラス並だ。　そんなお前が学園一の操縦技術があればどうなる？」

「そう簡単には負けないよね」

「それだ。　お前は来年、Ａクラスに入るだろう。　だから、麗奈を守るために、最強であって欲しいんだよ」

俺は来年がどうなるかがわからない。

もしも織斑一夏が出てきたのなら、俺も公表することにしている。
だから、この世界がどうなのかはっきりしない今、後々のことを考えて行動しなければならない。
主に妹の麗奈や、それ以外の仲間のために。

「俺はこのまま行けば学年主席だ。　だから迂闊に前線に出れない。
だから、お前には麗奈の騎士になってほしいんだよ」

「……わかったけど、僕に一言言ってくれてもよかったじゃないか」

「まあ、黙ってお前を観察処分者にしたことは謝る。　すまなかった」

俺は明久に頭を下げる。

「頭を上げてよシエン。　麗奈のためなら諦めるから」

「悪いな。　それと、あの時鉄人に殴られなかっただろ？」

「あ、うん。　それに、大切なものならもっと管理をしっかりしろって言われたんだ」

「リングの詳細を教えることは出来ないから、適当にでっち上げた嘘でお前のみを保障したんだ。　お前ならダメージはそこまで受けないだろうが、あの鉄人だからな。　油断は出来ん」

「確かにね。　僕は殴られないように気にかけてたからわからないけど、雄二は相当痛そうにしてたからね」

この明久は避けたり、逃げ切ったりするので、未だ一度も殴られて

いない。
そもそも、あまり問題を起こしてない。

「麗奈と一緒にいれる時間が短くなるのは残念だけど、麗奈を守るためなら仕方ないね。　僕は麗奈を守るなら何でもするからね」

「それでこそ明久だな。　まあ、俺も手段を選んでないが……」

麗奈を襲おうとした奴は徹底的にボコボコにして、麗奈を苛めようとした奴には、親を精神的に潰したり、形振り構わず色々やったな。
勿論、ばれるようなことは一切してない。
シスコンだと言われても否定しない。

「じゃ、俺はもう行くから」

「あ、うん。　じゃあね、シエン」

俺は帰って、完成の近づいてきたＧＮドライブの製作をしていた。
想像以上に早く製作が進んでいるため、二月ごろにはこれが完成しそうだ。
同調には一ヶ月はかかると推定してもいいだろう。
なぜなら、まず一つ目のＧＮドライブとＩＳのコアを融合、同調させ、起動するかどうか確認し、その後に二つ目のＧＮドライブを融合、同調、さらに二つのＧＮドライブを同調させなければならない。
ただでさえ二つのＧＮドライブを同調させるのに時間が掛かるのに、それにＩＳのコアにも同調させなければならないのが大変だ。
まぁ、俺がそういう風に設計したんだけど。
同調に成功したら、核エンジンも組み込んで、システムやＯＳの確認、稼動データ収集、装備の確認、装備の不具合の確認もあるから、四月には完成する予定だ。

「さーて、やるか」

“無限の手（インフィニティ・ハンズ）”を発動し、無数の手腕を出し、それぞれに部品やらなんやらを持ち、小さなＧＮドライブに向かって悪戦苦闘する。

俺の推測だが、創り方が曖昧なこの状況で推測で一年半掛かるが、完璧に作り方を覚えれば、製造期間を一年、いや、それ以上短縮できるのではないだろうか？

実際、最近の進みが気持ち速くなってきているし、他の作業もなくなってきている。

ドライブ一つに集中できれば、製作期間は十分短縮できるだろう。

まぁ、もう一つ作るつもりはないけど。

ＩＳは着々と完成に近づいている。

明久ＶＳ神威（前書き）

執事長神威さんと明久のバトルです。
バトルと言っても、途中で省略しましたが……。
バトル描写が難しい……。

明久ＶＳ神威

「せあああああ！！」

「甘いぞ、明久！！」

ガンッ！　ギィィン！

俺と明久は殴り合っている。
俺は闇龍のカオスを、明久は光龍のコスモスを形態変化（カンビオ・フォルマ）（鎧モード（モードアーマード））して、俺は漆黒の龍の鎧を、明久は純白の龍の鎧を纏い、殴り合っている。
カオスとコスモスの鎧モードはＩＳと同等レベルの力を持つ。
明久はその状態でしか使えない技がある。
それは、人の身で音速の三倍の速度（超電磁砲と同等の速度）で動ける。
ただしそれは、その強力さ故に使用距離により、炎の消費が大きく、身体への負担もあるため、滅多に使わない奥義だ。
だが、常人は直線でしか動けないものを、明久は自由自在に動き回れる。
もしも身体の負担がなければ明久は最強だろう。
前に一度だけ、俺の化物染みた眼に、写輪眼で動きを見たけど、ぎりぎり捉え切れなかった。
音速の三倍で動く物体にぎりぎりってのはおかしいけど、それは完全な化物スペックの俺だから諦めた。

「閃光（ライトニング）は負担が大きいからここぞって時に使えよ！　大事なときに動けなかったら無意味だからな！」

「わかってるよ！　だから基本月一にしか使わないじゃないか！　今は僕が倒れると麗奈が悲しむから！　僕はそんなことは絶対にしたくない！」

「それでこそ明久だ！　仕上げだ！　行くぜ！」

「ああ！」

「お疲れ、カオス。　戻ってくれ」

『グルルゥ』

結果はやはりと言うか、俺の勝ちだ。
明久は座り込んでいる。

「ありがとう、コスモス。　戻っていいよ」

『キュルゥ』

コスモスは匣に戻り、この場にいるのは俺と明久だけになった。

「シエンはやっぱり強いね。　まったく勝てる気がしないや」

「弟子にそう簡単に負けられるか。　それに、俺には動きがほとんど見切れるからな」

「シエンのチートッぷりには慣れてるけど、やっぱり凄すぎだよね。反射神経や動体視力も凄すぎだよね」

「一般的なものは大体ぶれずに見れるから否定できないな。　てか、俺がチートってことは覆らないんだよな。　残念ながら」

時速三百キロくらい普通に見れるからな。

「僕って強くなってるのかな？」

「お前は強くなってる。　それもかなりな。　お前ならそこらへんの奴なら五十人相手でも余裕だろうよ」

「そうかな？」

「実際にやったことはないからわからんが、今のお前なら、勝てなくとも生身の織斑千冬といい勝負できるはずだぞ」

実際には見たことはないが、今の明久なら勝てずとも善戦できるはずだ。

「織斑千冬ってモンドグロッソのブリュンヒルデのあの？」

「そう。　その織斑千冬だ。　吉宗は戦ったことがあるらしい」

「吉宗もかなり強いけど、吉宗は勝ったのかな？」

「あいつは勝ったらしいぞ。　余裕はあったみたいだけど、気を少しでも抜いたらやばいらしい」

「流石はブリュンヒルデだね。　世界最強のＩＳ操縦者の名は伊達じゃないのかな」

「織斑千冬がそんじょそこらの代表に負けるわけない。　あの人の友好関係に篠ノ之束がいるからな」

「あー確かにね。　それならずっと前からＩＳに触れるしね。　使用時間は断トツだよね」

明久は成績の向上により、頭の回転がよくなった。

勉強をやり始めたころだと会話も大変だった記憶がある。

「そういうことだ。　だからＩＳで織斑千冬が勝つのは必然なんだ。
だがまあ、その条件に織斑千冬自身が強くないと宝の持ち腐れだけどな」

「だけど織斑千冬は実際に強い。　だからこそ、最強の名に相応しい。　だけど、それはあくまでＩＳでの話だから、生身では勝てるかもしれないってことだね」

「多分お前ならいい勝負が出来ると思うぞ。　武器無しだったら勝てるかもしれんが、刀を持ったら相当やばいはずだ」

「きっとそうだね。　僕の記憶が正しければモンドグロッソを刀一本で勝った人だったからね。　いくら僕が“持ち主の深層心理を読む”妖刀である村雨を持っても、相手は刀を極めてるからね。　僕じゃあいいようにやられるだけだよ」

明久に渡した村雨は、所有者の深層心理を読み、その気持ちにより威力が変わる妖刀だ。
明久が心から殺したいと思えば、並の真剣よりも脅威だ。
逆に、傷付けたくないと思えば、相手に傷を付けずに、衝撃だけを与えることも出来る。
いろいろと危険な妖刀だ。

「いや、お前は刀でやってもいい勝負が出来るはずだ。　ただ、勝つのは難しいな」

勝率は良くても四割だな。
実際に織斑千冬の実力を見たわけではないから、モンドグロッソで

見た彼女の実力での推測でしかないが。

「……一度戦ってみたいな」

「お前バトルマニアだったか？」

「ち、違うよ！　僕はただ、シエン以外の人ともやってみたいだけで！」

「ほう。　俺とやるのは厭きたと」

「違うから！　ただ、シエンが強すぎるから、僕が簡単にあしらわれるから、シエン以外の強い人と戦ってみたいの！」

「このあたりで強いって言われてる奴はお前より弱いしな。　そもそもお前が強すぎるのだが」

明久は俺の手により滅茶苦茶強くなった。
だから、明久といい勝負を出来る奴なんてそういない。
だけど、俺には明久といい勝負ができる人を二人、身近に知っている。

「じゃあさ、神威さんか咲夜さんと戦ってみるか？」

「神威さんと咲夜さんってシエンの家で雇ってる人だよね？」

「ああ。　我が家の執事長とメイド長だ。　その実力は織斑千冬を超えるぞ」

「あの二人ってそんなに強かったんだ……」

「当たり前だろ。　じゃないと折原の執事とメイドの長になれるわけがないだろう。　父さんは仕事上狙われたりするし、母さんもＫＡＮＺＡＫＩグループのトップだ。　それなりに戦闘能力がなければやってられん。　ちなみに言うと、神威さんは刀を持った織斑千冬を片手であしらえるそうだ」

「嘘ぉ！？　どんだけ強いのさ神威さんは！？　しかも素手で刀を相手にするのも異常だよ！？」

「俺でも出来るぞ。　まぁ、神威さんと咲夜さんは強いぞ」

なんか神威さんは素手でＩＳのシールドエネルギーを削れるらしい。
父さんが言ってたから間違いないはず。
咲夜さんはＩＳに乗れば世界最強だよな。
てか俺の知り合いに強い人結構いるな。
母さんに静雄さんにセルティさんに神威さんに咲夜さんに吉宗に明久他数名。
知識だけで言うと、ボンゴレの人とかもいるから相当いるな。

「どうだ？　やってくれるかはわからんが、頼めばやってくれるかもしれんぞ？」

「う～ん……やってみたいけど、仕事の邪魔になっちゃうし、わざわざ僕の相手なんかしてくれるわけないよ」

「ふ～ん、じゃあ俺が許可しようか？」

父さん登場。
少し前から気配を感じていた。

神威さんもいる。

「へ？　臨也さん！？　いつの間に！？」

「さっきだよ。　にしても頑張ってるねぇ。　頑張ってる君に、俺から些細なお礼だよ。　神威、明久の相手をしてくれ」

「畏まりました。　それでは明久様、やりましょう」

「え？　えっとありがとうございます、臨也さん！」

ばっと立ち上がって父さんに頭を下げる明久。

「よろしくお願いします、神威さん！」

「刀を使っても構いませんよ」

「えっと……いいんですか？　妖刀と真剣ですけど……」

「妖刀・星砕き、それに属する妖刀・村雨。　その力も理解しております。　私のことは構いませんから、全力できてください」

「……わかりました。　全力でやらせていただきます」

明久は村雨を持ち、目つきが変わる。

本気のようだ。

「では、始め！」

「行きます！」

ダンッと勢いよく踏み込む明久。
その速さは、全国レベルの剣道の猛者をも超える。
明久の村雨が神威さんの横腹に吸い込まれていく。

「なかなかの速さですが、私にはまだ届きませんよ」

神威さんは明久の速攻を避け、カウンターの蹴りを放つ。

「速い！　だけど！」

明久はそれを左手で流し、蹴りを放つ。
だが、神威さんはそれをバックステップで避ける。
そのまま神威さんは明久から距離をとる。

「どうやら私はあなたを過小評価しすぎていたようですね。　申し訳ありません。　ですので、私も少しばかり本気で行かせてもらいます」

神威さんの放つ雰囲気が変わった。
さっきまではいつも通りの穏やかな雰囲気だったが、少し荒くなった。

「行きますよ、明久様」

ダンッと、明久の動きよりも速く神威さんが動く。

「くっ！　三十六煩悩鳳！」

神威さんの接近に対して明久は煩悩鳳を放つ（あれは俺が教えた）。

「飛ぶ斬撃ですか。　ならば！」

神威さんの足から放たれる斬撃。
あれは間違いなく嵐脚だ。
嵐脚と煩悩鳳はぶつかり、消えた。

「まだまだ行きますよ！」

「はい！」

「お疲れ様でした、明久様」

「……強いですね、神威さん」

「明久様もお強いですよ。　私に六式を使わせたのですから」

そう、あれはやはりＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの六式だったのだ。
なぜ使えるのかは知らん。

「どうだった？　明久」

「あんなことが出来るなんて予想外でした。　蹴りで斬撃が飛んだり、僕の斬撃を弾いたり、シエンであああいうのには慣れたつもりだったんですけど、ビックリしました」

「それもそうだ。　なにせ六式は使える人が少ないからね。　それに極限まで高めて、六式の奥義を使えるのは俺が知る限り神威だけだ。　よくやった方だよ、君は」

「まーさか、あんな戦いを神威さんがするとは……」

「六式は私が本気のときにしか使いません。　明久様は本当にお強い。　その若さでその強さとは、驚嘆に値します」

「ありがとうございます」

「神威がそこまで褒めるなんてね。　ビックリだ」

「それだけ明久様が賞賛するに値すべき御方だからです、臨也様」

「……ま、まさかこんなに褒められるなんて……」

「にしてもよくやったな。　神威さん相手にかなり善戦してたぞ」

「そ、そうかな？　一日にこんなに褒められるなんて初めてだよ……」

「これでわかっただろ。　お前は十分強いってことがな」

「うん。　僕ってそんなに強くなってたんだね。　今日、漸く実感したよ」

明久は神威さんとの戦いで、自分の強さを実感していた。

明久ＶＳ神威（後書き）

なんかＯＮＥ　ＰＩＥＣＥが多いな……。

終焉と執事と不幸な少年（前書き）

わかる人はわかります。
あの不幸な男の子です。

終焉と執事と不幸な少年

１２月２４日。
この日は一般にクリスマスイブといわれ、あなた方は何を想像しますか？
クリスマスの前夜？　リア充最高？　リア充モゲロ？　それともどうでもいい？
そして、この主人公である俺、転生者の折原終焉は、否、折原終焉と妹の麗奈、明久はとある道でフリーズしていた。

「……えーっと」

「……これは一体……」

「そんなこと言う前に助けような」

目の前には数人の大人に囲まれて車に連れ込まれそうになっている一人の少年――ハヤテのごとくの綾崎ハヤテなんだけどね――がいた。

「あんたら何してんのかなぁ？」

「あぁん？　なんだぁガキィ」

「そりゃあこっちのセリフだろうが。　大人が高校生相手に何してんだよ」

ガラの悪いおっさんたちが絡んでくる。
最初に絡みだしたのは俺なんだが。

「こいつの親御さんが金を借りててなぁ、親御さんがこいつが返済してくれるっつうんで一緒に来てもらおうとしてんだよ。　関係ないガキはどっか行きな」

やっぱり両親に捨てられたか。

「へぇ……。　で、その額は？」

「1億5680万4000円だ。　こんなもん聞いてどうすんだ？　もしかしてテメェが代わりに払ってくれるのか？」

「……これをやるよ」

「ちょっとシエン！？」

偶々手に入れた一等の宝くじ。

まぁ、偶々買った宝くじを一等に完璧に偽造したんだよね。

偽者だけど、正真正銘本物の宝くじだから、何の問題もない。

「……これを確かめろ」

部下にそう言うリーダーらしき男。

「こ、これ、本当に一等の二億ですよ！」

「その二億全部やるからそいつを放せ」

「おい、そいつを放せ」

ハヤテは開放される。

「兄ちゃん、今度はそいつに金を返してもらうんだな。　じゃあな」

男共は車に乗って去っていった。

「おいあんた、大丈夫か？」

「えっと助けてくださりありがとうございました！　ですが、僕みたいな見ず知らずの人間に二億円もの大金を……。　必ず返済しますから！」

「いや、別に構わんぞ。　元々あれはさっき買った宝くじだし、俺の勝手でやったことだしな」

「たった一枚で二億当てるとかどんだけ運がいいのさ」

「感心いたしますわ」

「そんな大金タダでいただく訳には！　ちゃんと働いてお返ししなければ申し訳ないですし！」

なんかハヤテのごとくっぽいぞ？

「じゃあ俺の執事にならないか？　見た感じ、お前は相当鍛えてるみたいだしな」

「お兄様だけ専属の執事かメイドがいませんでしたね」

前に出ている通り、父さんは神威さん、母さんは咲夜さんが専属で、

麗奈にはマリアさんがいる。
わかる人はわかるように、ハヤテのごとくのマリアさんだ。

「まあ、仕事がどんなのかわからないだろうから、一回来な」

「は、はぁ」

俺たちは、綾崎ハヤテを連れて、明久も一緒に家に帰った。
で、まずは父さんに話をした。

「ふ～ん、大変だったね、ハヤテ君。　で、君は親をどう思っているんだい？」

「あの人たちですか？　僕はもう二度と会いたくありません。　今までずっと耐えて年齢を偽ってバイトをしてもいつも手元にお金が残りませんでしたから。　復讐とかはする気はありませんが、あの人たちがどうなっても僕はどうでもいいです。　僕に関わらなければ」

「……わかった。　君の経歴を聞く限り、色々できるようだし、俺たちの専属の執事かメイドの条件は強いことだ。　君は相当鍛えているようだから君を終焉の執事として認めよう。　返済額は元々の君の借金額の１億５６８０万４０００円。　返済完了すれば君は自由の身だよ」

「ありがとうございます！　頑張ります！」

「うん、いい気構えだ。　神威、仕事を教えてあげな」

「畏まりました。　綾崎君、こっちへ」

「あ、はい。　わかりました」

ハヤテと神威さんは部屋から出て行った。

「よかったんですか？」

「何が？」

「ハヤテです。　あんなあっさり認めてしまって」

「終焉が選んだなら間違いないよ。　それに、そもそも俺は返済してもらおうなんて思ってないし。　ああでも言わないとハヤテは納得しなかっただろうし、ここにいた方が安全だ。　ハヤテの両親は俺が探しておく。　まぁ、ハヤテについて何かあったら言いな」

ハヤテの両親は見つけて、借金返済の手助けにさせるつもりだ。

もちらん、ハヤテには内緒でな。

「わかりました。　では、俺も失礼します」

俺が部屋を出ると、麗奈と明久が待っていた。

「どうだった？　ハヤテは」

「俺の執事になった。　今は神威さんが仕事を教えている」

「では、今日のパーティーにお兄様の専属執事の決定も祝いましょう」

そうは言っているが、ようはハヤテの歓迎パーティーだな。

「と言うことで、マリア、ハヤテさんの分もお願いしますね」

「わかりましたわ」

どこからともなく現れたマリアさんが去っていった。

「僕たちはどうする？　特訓でもする？」

「俺はそれでも構わんが、麗奈が一人になるだろ」

「構いませんよ。　私も明久さんとお兄様の戦っているところを実際に見てみたいですし」

「じゃ、やるか」

俺たちは地下訓練場に入り、軽くアップをする。
俺は木刀を持ち、軽く振る。
明久は村雨を持ち、軽く振りながらイメージしているようだ。

「もう大丈夫。　やろうか」

「ああ。　麗奈、合図を頼む」

「わかりました。　それでは、始め！」

俺たちは同時に動く。
明久は村雨を振り下ろし、俺は木刀を横に振る。
両者の武器がぶつかり、明久は俺の腹目掛けて蹴りを、俺は空いて

いる手で流す。
互いに距離をとる。

「「三十六煩悩鳳！」」

そして同時に煩悩鳳を放つ。
その煩悩鳳はぶつかり、明久の方が消える。

「くそっ、やっぱり駄目か……なら、数で勝負だ！」

煩悩鳳の連打。
俺は明久に接近する。
煩悩鳳は基本避け、最低限は弾く。
俺は木刀を腰に構える。
居合切りだ。

「終わりだ明久」

「……みたいだね。　僕の負けだよ」

俺から放たれた居合は明久の顔に寸止めされている。
そして、俺の持っていた木刀はぽっきりと折れた。
最後の一振りに耐えれなかったようだ。

「お疲れ様です、お兄様、明久さん」

「何回やってもシエンには勝てないな。　いつも僕の上を行く」

「師が弟子にそう簡単にやられて堪るものか。　最近は武器ありだと基本最後には俺の使う武器が壊れるのに、気を抜いてられるか」

実力的に圧倒的に俺の方が上だが、気を抜いていい相手ではない。
それに、明久には基本全力は出さないが手加減はしない。
それは本気で向かってくる明久に失礼だからだ。
まぁ、こういうのは明久だからだけど。

「で、麗奈。　見た感想は？」

「一言で言うと凄い、です。　まさか斬撃が飛ぶとは思いませんでしたし、煩悩鳳でしたか？　無数の煩悩鳳の間を抜けて居合で終わらせたお兄様はやはり凄いです。　明久さんはいつもああなのですか？」

「うん。　いつも負けてるよ」

「明久さんはいつも圧倒的な力の差を見せられているのに諦めないところが素晴らしいです」

「あ、ありがとう」

「じゃ、終わったところだし戻るか」

「「うん（はい）」」

終焉と執事と不幸な少年（後書き）

ハヤテのごとくもＩＮ。
色々混ざりまくってますねｗ

ハヤテと両親（前書き）

タイトルはなんとなくです。

「お、ハヤテ。　似合ってるじゃん」

「ありがとうございます、お坊ちゃま」

ハヤテは原作通りの執事服を着ている。
それとお坊ちゃまて……。

「お坊ちゃまは止めてくれ。　何かハヤテに言われると変な感じがする」

「そうですか？　では、終焉様と呼ばせていただきますね？」

「まだその方がいいな。　実際なら様も違和感あるんだが、どうせ止めないつもりだろ？」

「はい。　僕がお仕えする立場ですので、呼び捨てなど失礼ですので」

「まあいいや。　仕事については把握できたか？」

「はい。　神威さんに教えていただきましたので大丈夫です」

「あーそう言えばお前学校どうなったんだ？　高校一年だろ？」

「そうですけど、わかりません。　僕はここで仕えさせていただく身ですし、辞めるべきかと」

「お前はそれでいいのか？」

「へ？」

「お前はそれでいいのか？　元々俺はお前を縛るつもりはないし、学校に行きたいなら行けばいい」

「そ、それは……」

「それはお前自身が考えろ」

「……はい。　わかりました」

原作通りなら今行っている高校は退学扱いになっている。
どうせ行くなら同じ学校の方が都合がいい。
後々のことも含めてな。

☆

それから、ぱーっと盛り上がりながらパーティーをして、ハヤテの歓迎会も行われた。
そして今はパーティーも終わり、片付けの最中だ。

「終焉様、片付けは僕がやりますから休んでいてください」

「いいよ。　今日は羽を休めるつもりだったから、最近はまかせっきりの事でもやりたい気分なんだよ」

「そう仰るなら……」

ハヤテは引いた。

「……」

「……」

静かになる。
静かな空気を打ち破り、俺は口を開く。

「……あまり時間はなかったが、決まったか？」

「……学校の事、ですか？」

「ああ。　何度も言うが、俺はお前を縛るつもりはない。　お前がここにいるのを望んでいるからこうしているだけであって、お前が望めば今すぐにでも自由の身になれるんだぞ？」

「そう言ってくださるのは嬉しいですが、それでは僕の気が済みませんので。　それと、学校のことはまだわかりません……」

「……そうか。　自分の気持ちが固まってから俺に言え。　それまでは俺からは何も言わない」

「……ありがとうございます」

そしてまた沈黙。
その沈黙の中で黙々と片づけをしていた。

☆

「父さん、話とは？」

片付け終了後、父さんに呼ばれて父さんの部屋に来ていた。

「ハヤテの親が見つかった。　いろんなところにクラッキングして、俺の伝手の情報も照合したから間違いない。　今はあいつらに捕らえさせに行かせている」

「もう見つかったんですか、速いですね。　それと、あいつらをですか？」

「ああ、あいつらを行かせた。　あいつらなら確実だからね」

あいつらは折原に絶対の忠誠を誓い、折原の命令ならどんな命令も聴く。

それがたとえ、どんな命令でもだ。

どんなに小さくとも、受け入れてくれるから、軽くぱしりにした事もある。

「そうですね。　父さんの事ですし、武装も完璧でしょう？」

「勿論。　仕事の成功率は高い方がいいからね」

おかげであいつらの任務成功率はほぼ１００％だ。

あいつらは四人と少人数だが、現役の軍人五人は余裕、十人と互角と戦えるほどの戦闘力を持つ（明久よりも弱い）。

あいつら……四騎士たちの本名は父さんと母さんしか知らない。

あいつらはいつもコードネームを使っているため、本名がわからないのだ。

「で、ハヤテの両親をどうするつもりですか？」

ハヤテの返済（俺たちはどうでもいい）の手助けにすると言っていたから、気になるのだ。

「薬の実験台にして、最終的には臓器とかを売るつもりだよ。　これで１０００万くらいは行くんじゃないかな」

男女二人で１０００万か。
流石と言うところだ。
それと、薬は違法薬物じゃない事を言っておく。

「俺はこれをハヤテに言うつもりはないけど、終焉はどうするんだ？　ハヤテの主はお前だし、あれはハヤテの親でもある。　黙っておくのかい？」

「いいえ、俺は言うつもりです。　いくらハヤテを売ったクソでも一応はハヤテの親です。　言うのが義務だと思いますから」

「うん、終焉ならそう言うと思っていたよ」

「では、俺はこれで」

俺は部屋を出て、自室に戻る。

「あ、終焉様」

ハヤテがいた。

「ハヤテ、お前親のことをどう思う？」

「……二度と目の前に現れなければどうでもいいです」

「じゃあ、もしも親が売られたらどう思う？」

「自業自得ですね。　因果応報とも言いますが。　なぜそんな事を訊くのですか？」

「父さんがお前の両親を見つけてな、捕まえてお前の返済の手助けにしようとするらしくてな。　一応あんな親でもお前の生みの親だから、訊いたんだ」

「……どうでもいいです。　死のうが生きようが僕には関係ないことですから」

やっぱり当たり前なんだが、自分を売った親が赦せないんだな……。

「じゃあお前は親がどうなろうと構わないんだな？」

「ええ。　あの人たちについてはお任せします」

「じゃあそう伝えておく」

俺は父さんにメールをする。

これでＯＫだ。

「……」

「……」

沈黙。

まあ、あんな話をしたらこうなるわな。

俺は立ち上がり、一振りの木刀をハヤテの前に置く。

「これは……？」

「妖刀・星砕き。　真名は白皇（はくおう）だ。　俺の執事になるお前にプレゼントだ」

「妖、刀？　それは持ち主の魂を喰らうとかそういうのですか？」

「確かに妖刀だが、そういうのじゃない。　そいつの能力は所有者の気持ちを読み取り、威力を底上げするものだ」

明久の村雨と似ているが、違いは村雨は威力が落ちることもあるが、白皇は威力をそのままに、所有者の気持ちにより、威力が底上げさせられるということだ。

「そんな物を僕に？」

「ああ。　俺は色々と武器とかを貰っていてな、大量にあるんだ。その中にも妖刀が数本あって、俺が信頼できる相手に渡す事にしているんだ。　明久にも渡してある」

ちなみに、吉宗には渡していない。
どうやら、妖刀が超直感を阻害するらしいからな。

「お前は俺の執事をしてくれるんだ。　主たる俺がお前を信じるのは当たり前だろう？　それに、折原の人間は基本武器を持ってるからな」

「そうなんですか？」

「ああ。　俺の妹すらも持っているぞ」

「見た目に合わずに、凄いですね、色々と」

「だから、白皇はお前のものだ。　それに、白皇はお前に反応して

いるしな」

「そうなんですか？」

「そうだ。　白皇は肌身放さず持っておけ。　お前のためにもなるしな。　あ、暗器スキル覚えさせておくか」

「暗器スキル？」

「そう。　俺と明久、いつの間にか麗奈も覚えていたな。　まぁ、服に武器を隠しこませるんだ。　俺は滅茶苦茶持てるが、まあ刀数本くらいは持てるようになって欲しいな」

「は、はい！　わかりました！」

ハヤテも、俺の手によって多少改造するつもりだ。

ハヤテと両親（後書き）

妖刀・白皇の能力はそれだけじゃないです。

ハヤテＩＮ文月学園

「僕は綾崎ハヤテです。　そちらにいらっしゃる折原終焉様に仕える執事でございます。　これから、よろしくお願いします」

なんやかんやでハヤテも文月学園に編入した。
ハヤテの親は四騎士たちが捕獲して、いろいろ使われているようだ。
で、ハヤテは飲み込みが早くてもう白皇を隠し持てるようになった。
ちなみに、白皇のもう一つの能力に、所有者の不幸を幸福に変える力がある。
正確には、所有者の不幸を取り込み、取り込まれた不幸の分の半分の幸福に変換し、それを与える、なんだが。
原作通りハヤテはまぁ何かと運が悪かった。
だから、不幸を取り込む白皇を渡したわけだ。

ちなみに、ハヤテの今の服装は執事服。
俺が学園長と交渉して、ハヤテの服装はスルーしていいそうだ。
滅茶苦茶目立っている。

「では綾崎、折原の隣に座れ。　その方がいいだろうからな。　と言う事で、綾崎と席を入れ替わるように」

ハヤテは俺の隣に座る事になりました。
なんでさ。
まあ別にいいんだけどさ。
ちなみに、俺の隣に座っていたのは女子生徒で、物凄く落ち込んでいた。
西村先生に抗議の視線を送ったようだが、あえなく敗北し、暗い雰囲気のまま席を変わった。

☆

休み時間。
こんな年齢で執事なんかやっているハヤテに質問が向けられたわけだ。
主になんで執事をやっているのか、という質問を。

「え、えーっと、そのー」

まあハヤテは答えれてないわけだ。
親に売られて、その返済を俺がしたから、その返済のために執事をやってるなんて言えたものじゃない。

「その質問は無しだ。　反論は認めないので」

俺がそう言うと、さっきまでとは全く違う質問をしだした。

「大変だね、ハヤテも」

明久だ。
明久はあのとき一緒にいたから知っているわけだから、あの群れから外れてその光景を眺めている。

「ああ。　執事服で目立つし、俺らと同じ年齢で執事をやってるのも珍しいからな」

「しかもシエンに仕えているしね。　この学校ではそれなりに知られているけど、同学年じゃ認知度１００％だからね」

試験召喚実習で出した４８００点オーバーは目立ったからな。
次席の霧島と三席の麗奈は４３００点ほどで、次席争いをしてるし、瑞希と久保でも４０００点ほどだ。
麗奈は今では４４００オーバーくらいにはなっているだろうな。
この差はでかすぎるといいつつも、基本テストは手を抜いてるからな。
もしも本気を出すなら振り分け試験のときだな。

「麗奈には気づかれてるだろうけど、手抜きであれだからね。　いくら操縦技術を上げても勝てない気がするよ。　だってシエンも結構上手いし」

“七閃”とかに使う鋼糸の扱いは難しいからな。
鋼糸の操作が上手ければ、召喚獣の操作もかなりのものになる。
ちなみに、なぜか俺は一回目で三本を完全に扱えた。

「ま、負けるのは嫌いだからな」

「シエンが負けるところだなんて想像できないよ」

「以前に母さんに負けたことがある。　“七閃”とかを教えてもらったときは、剣の素人でな、あっさりやられたよ」

いくら化物スペックの身体能力やら動体視力があっても、攻撃を当てれなければ意味がない。
剣と鋼糸の扱いを覚えるまでは負け続けた。

「シエンって負けたことあったんだ……」

「俺がどんな化物スペックでも負けるときは負けるぞ？　最近は無敗だけど」

「……やっぱり。　よく一緒にいるけど負けるところなんて見た事ないもん。　麗奈も負けたところを見た事ないって言ってたし」

俺の話してたんだ。
知らんかったな。

「全員席に着け。　授業を始める」

西村先生が登場し、ハヤテが漸く解放された。

☆

学校が終わり、現在は俺の部屋だ。

「さすがに疲れました」

「いくらお前が体力を持ってたとしても、質問の嵐には堪えたか」

「はい……」

「授業の方はついていけたか？」

「はい、大丈夫です。　前の学校ではそれなりに成績は良かったですから」

「そうか。　試験の結果を見て大丈夫そうだとは思ったんだが、その通りか」

結果はＢクラス並であった。

「来年は振り分け試験でクラスが成績順になる。　今のお前はＢクラス並だから、振り分け試験までは勉強を頑張れ。　俺も麗奈も明久も、Ａクラス確実だからな」

なにかアクシデントがない限り、Ａクラス以外になる事はない。

「わかりました。　頑張ります！」

「俺はやる事があるから、お前の勉強をたまにしか見れないが、明久や麗奈にでも見てもらってくれ。　俺から話は通しておくから」

「ありがとうございます！」

「お前には話しておくか。　父さんと母さん、神威さんと咲夜さん以外、いや、マリアさんも知ってるな。　その人たち以外は知らないから、麗奈や明久にも言わないでくれ」

俺の事情を知っているのは父さんと母さん、吉宗だけで、ＩＳを創っているのを知っているのは上記の人たちだけだ。

「わかりました。　それで、話とは？」

「俺がやっている事はＩＳ作製だ」

「ＩＳですか？　そう簡単に出来るものなのですか？」

「なわけないだろ。　製作を始めて一年くらいは経っている」

本来ならもっと時間が掛かるだろう。

「一年ですか？　それは長いのでしょうか？　僕はＩＳについては詳しくは知らないので……」

「ゼロからとしては速いんじゃないか？　俺はゼロから創っててな」

「ゼロってコアからでしょうか？」

「ああ。　ただのコアじゃないけどな。　まぁＩＳを創ってるわけだ」

「ですので姿が見えないときがあったのですね」

「そういうことだ。　その時間の合間を縫って明久の特訓やら何やらをやってきていたんだ。　色々大変だったぞ？」

「でしょうね。　明久さんや僕の特訓だけでも毎日一時間はありますし、学校もありますしね」

そう、最近は明久の特訓をやらない日もよくあるんだが、ハヤテの特訓もあるので取り組める時間が減った。

「俺が製作をしているときは誰もいれないようにしているんだ。

やりづらいからな」

「え？　お一人で創られているんですか？」

「ああ。　俺が考え、構築している。　俺が創ろうとしているＩＳは今の技術では創れない、オーバーテクノロジーの塊だ。　俺は創れるから、それを創ろうとしているんだ。　で、そんな化物を創っているのに、他人に見せてデータを盗まれるわけにはいかないからな」

「そうですね。　なぜオーバーテクノロジーの塊が創れるのかは全くの不明ですが、あなたならと言う理由で納得はできますね。　それが世界に流出したら確実に狙われますね」

何で俺だからで納得できるのだろうか。

俺に常識は通用しないが、ハヤテは俺とであってまだ二週間ほどだぞ？

「だろ？　だから、完成までは信頼できる人以外誰にも教えていない。　明久と麗奈は信頼できるが、もしもがあるかもしれないからな」

「ああ、間違えて言ってしまうかもしれませんね。　ですが、なぜ僕に？」

「言っただろ。　信頼できる人にしか教えていないって。　お前は俺の執事だし、俺がずっといなかったら大変な事になるだろ？　場所までは教えないが、やっていることは教えておくんだ。　ちなみに、場所を知っているのは父さんと母さんに神威さんに咲夜さんの

四人だけだからな。　何かあったら俺に連絡するか、その四人の誰かから繋げてくれ」

「わかりました」

俺がやっているときは扉に多重ロックを能力で仕掛けるから誰も入ってこれないし、闇の炎を使った結界で、結界内の音、電波などなど、全てを遮断するため、外部干渉が出来ないようになっている。だけど、携帯の電波など、必要な事は遮断しないようにしてあるため、連絡は取れる。

「じゃ、飯食ったら行くから。　あの部屋は俺以外誰の立ち入りも許してないから、ついてこなくていいから。　ハヤテは勉強でもしていてくれ」

「わかりました。　では、夕飯の準備をしてきますね」

「ああ、任せた」

ハヤテは部屋を出ていった。
家事スキルはピカイチのハヤテだから、掃除も料理も完璧だ。
料理に至ってはかなり上手い明久以上だし、プロ並だ。
折原＋明久での料理の上手さは、咲夜さん＞＞神威さん＞＞マリアさん≧ハヤテ＞母さん≧明久＝麗奈＞＞俺＞？父さんって感じだ。
父さんは結婚してから母さんに基本まかせっきりだったらしく、父さんの料理を食べた事がないから不明だが、父さん曰く俺の方が上手いらしい。
……これ、どうでもいいな。

俺は改造ＰＣでトランザムを完成させる。

トランザムシステムが思いのほか時間が掛かり、システムで唯一完成していない。
武装は設計は出来ているが、まだすべては完成してない。
ＧＮドライブもまだだ。

「……もっとペースを上げるか……」

多少無理して、腕の量と平行思考の密度を上げるか。
ちょっと間に合うかわからないからな。

GNドライブ完成

俺は、不可侵の研究所に来ている。
そして、念願の物が完成しようとしていた。

「GNドライブ、完・成！」

漸く完成したGNドライブ。
現在は一月の終わり。
二月の初めには完成するとは思っていたが、少し速く完成した。

「さーて、コアとGNドライブの融合を始めるか……」

一番気の滅入る作業に入る。
コアとGNドライブの融合自体はいいのだが、起動できるまで同調させる作業、これが大変だ。

「っとその前に、飯食べよう」

今日は休日。
朝からずっとやっていて、今は二時。
昼を食べずにぶっ続けでやっていたのだ。
空腹でしょうがない。

俺は研究所に多重ロックを掛け、尚且つ闇の炎の結界を張る。
この中は完全なブラックボックスでなければならない。
この中にあるのはオーバーテクノロジーの塊のGNドライブに、未元物質を使った核エンジン、それに闇の炎の結界装置などなど、見つかれば世界が騒然となるような物ばかりだ。

システムやらOSやらのデータの入ったPCは俺が隠し持っているし、何十にもロックとセキュリティーがあるから、たとえ篠ノ之束以上の天才がクラッキングを仕掛けても大丈夫。

「いらっしゃいませ、お一人様ですか？」

店に着いた。
家に帰ってハヤテに飯を作らせるのも何だから、近くにあるファミレスに来た。

「はい」

「では、メニューがお決まりになりましたらお呼びください」

ウエイトレスは戻っていった。
俺はメニューを開き、すぐに決める。

「すみませーん、チャレンジメニューのギガステーキ、お願いします」

二キロのギガステーキ。
それに、大盛りのライスだ。
普段なら食べれないが、今は朝の七時から何も食べていないので、空腹状態。
問題ない。

「お待たせしました。　チャレンジメニューのギガステーキです。
　こちらは、制限時間三十分以内に完食した場合、賞金一万円、できなかったら、一万円のお支払いになります。　準備はよろしいですか？」

「問題ない。　始めてくれ」

「では、開始！」

タイマーが動き出す。
俺はナイフとフォークを持ち、特大ステーキを斬っては食べ、斬っては食べの繰り返し。
途中にご飯を掻き込んで、水を飲み、どんどん食べ進めていく。
店内の視線のほとんどが俺に突き刺さる。
チャレンジメニューを、太ってもない学生が挑戦するのだ。
目立たない訳がない。

ガツガツムシャムシャガツガツムシャムシャ……

俺は変わらぬペースで食べ続け、残り十分になったときには、残りが五分の一になっていた。
周りの空気は、完全に俺に刺さっていた。

「あの身体のどこに入るんだ……？」

「このままのペースだと完食できるぞ……！」

「あいつ、折原じゃないか？」

「折原だと！？」

「あれがあの折原か……実際に見るのは初めてだ」

どうやら俺は相当有名らしい。

そんな外野のざわめきをＢＧＭに、俺はステーキを胃に運ぶ。

ハムハムムシャムシャハムハムムシャムシャ……

巨大なステーキはどんどん俺の胃袋の中へと消えていく。

……俺ってこんなに食べれたんだ……。

肉が好物だけど、ここまで食べれるとは自分でも予想外だった。

「ご馳走様でした！」

タイムは２５分ちょっと。

二キロ＋αを完食した。

「おめでとうございます。　見事制限時間以内に完食致しましたので、賞金の一万円になります」

「どうも」

俺は貰った一万円を財布にしまう。

「当店では完食したお客様の写真を頂いて、飾らせてもらっていますので、今から写真を撮らせていただきます」

「あ、はい」

写真を撮られ、すぐさま現像された写真が、店の壁に貼り付けられた。

俺はそのまま店を出る。

タダ飯だったのだが、それに加えて一万の報酬もあったので、俺は気分がいい。

俺はその気分のまま、不可侵の研究所へと戻り、何十ものロックを解除して入る。
そして、またロックをかける。
セキュリティーを確認し、進入してきた者がいるか調べる。
クラックの形跡があったが、何十とある壁を三枚は突破できていたようだった。

（壁の強度は一枚ごとに堅くなってるからな。　にしても、これを三枚も突破するとはな）

俺の考えた多重のセキュリティーは篠ノ之束以上の天才にでも突破する事はできない。
一つ一つの壁の強度の高いセキュリティーを一枚でも突破するのは難しいのに、それを三枚も破ったのだ。
それが誰だったなのかは気になる。

「まあいいか。　どうせこれを破れる奴はいないんだしな。　セキュリティーの解除方法を覚えたところで、無駄なんだし」

セキュリティーの壁を、不定期で入れ替えたり、取り替えたりしているため、攻略するにはその一回でやるしかない。
現にもう、セキュリティーを取替え、さっきまでのものとは違う出来になった。

「さて、チェックも終わったところで、融合を始めるか」

セスタから貰ったＧＮドライブは実物サイズでかかったが、それは能力で圧縮した。
性能はそのままでミニチュアサイズにしたのだ。
それを出して、俺お手製のコアに繋げる。

空中投影ディスプレイに出てくる情報をぱっと見て、次々と作業を進めていく。
融合だけならそこまで時間は掛からない（三時間くらいかな？）。

「……ここをこうしてああして……さらにこれをこうやって……」

途中ぶつぶつと言いながらも作業を進め、あと少しで一回目の融合が完了しようとしていた。

《……ー……》

「！　……声……？」

感じたのは声のようなもの。
脳に直接響くような感じだったが、その声は細く、小さなもので、聞き取れなかった。
俺は一旦作業を止め、意識を研ぎ澄ませる。
だが、その声らしきものは聞こえなかった。

「……気の……せいか？」

少し待ってもその声は聞こえなかった。
俺はそれを幻聴と自分に言い聞かせ、作業に戻った。

《……え……か……タ……》

「……やっぱり気のせいじゃない……。　これは何なんだ？」

作業をしていると聞こえるこの声の正体がわからない。
コアとＧＮドライブの融合に障害にはならないし、二つに異常も無

い。

（……まさか、能力の暴走か？）

超能力の暴走。

実際に暴走した事はないが、精神系能力が暴走して、誰かの声が響いているのかもしれない。

だが、そう思いついたが、すぐにそれを破棄する。

なぜなら、声が響いているのは作業中だけであり（偶々作業中に起こっているのかもしれないが）、暴走していると言う感覚が無いからだ（そもそも暴走した事がないから、感覚がわからない。　だが、いつもとかわらないから、暴走していないと推測）。

「……ＩＳの自我か？」

ＩＳの作業中にのみ聞こえる声。

ＩＳのコアの深層には独自の意識があると言われているが、それは事実だろう（原作の一夏の白式のコアは白騎士のもので、一夏が昏睡状態で白騎士に遭遇したことから、そう推測できる）。

このコアは俺が作ったもので、性能は本家よりも増してあるが、基本はほとんど同じように作ったため、意識があると俺は考えている。

もしも、その意識が表に現れるのならば、この推測は間違いではない。

だが、これはまだ仮定の段階だ。

「まあ、進めればわかるか」

俺はそう決めて作業に戻る。

途中に声が聞こえたが、俺は終わればわかるだろうと考えたため、気にしなかった。

だが、その声に《マスター》と聞こえたため、俺の考えた仮定が間違いでない確率が高くなっていった。
そしてついに、融合が完了しようとしていた。

「……これで第一段階終了！　うっ！」

完成した瞬間、融合したコアから眩い光が放たれ、俺は視界を奪われた。
潰された視界を、能力を使って通常よりも速く回復させる。

「一体なんだったん……だ……？」

俺が見たのは、コアから発生しているホログラム。
見た目は金髪碧眼、小柄な体格の少女。
まあ一言で言えば、Ｆａｔｅのセイバーなわけだ。
俺、Ｆａｔｅ／ＺＥＲＯ見てる途中で死んだから、ほとんど知らないんだよな。
キャラの名前と、宝具なら多少知っているが……。

『問おう。　貴方が私のマスターか？』

「あ、ああ。　お前が、そのＩＳのコアの意識ならば間違いない」

なんとか答える。
いきなりの事で、まだ思考速度が低下している。

『そうですか。　ならば、貴方が私のマスターのようですね』

セイバーいるけど、聖杯戦争なんて無いよな？
令呪なんて無いから、そんなもの無いよな？

僅かにあるＦａｔｅの情報を総動員して考える。
こうなったらもうどうにでもなれ。

「その姿、ホログラムか」

『はい。　私は貴方が創ったＩＳが生み出した人格……ＡＩです。
この姿になった理由はわかりませんが……』

「そうか。　名前は……無いか」

『はい。　まだ名前はありません』

ＩＳが創ったＡＩならば、名前が存在しないのも肯ける。

「お前のことは“セイバー”って呼ぶから。　大丈夫か？」

『セイバー、ですね。　わかりました』

やっぱりその見た目はセイバーだからな。

「そう言えばセイバー」

『なんでしょうか？　マスター』

「俺の創ったＩＳが生み出した人格って言っていたが、なにができるんだ？」

『マスターが指示すれば、制限をかけたり、機体制御の手伝いなどができます』

「じゃあ例えば、ビットとかの操作を任せたりとか出来る？」

『可能です。　マスターの意思を読んで動かす事もできますので、頭の片隅にでも考えてくだされば、私が操作して、マスターの負担を軽減したりする事も可能です』

「万能だな」

『私自身のことだけです』

「そうか。　セイバー、基本俺の意識内で話しかけてくれ。　ＡＩ搭載のＩＳは存在しないからな。　バレても構わないが、少しばかり面倒な事になるから」

《こういうことですか？》

「そう。　そういうこと」

《わかりました》

《同調の手伝いをしてもらえるか？》

《ＧＮドライブのですね？》

《ああ。　速く完成させたいんだ》

《わかりました。　指示をしてくだされば、私はマスターの力になりましょう》

《ありがとう、セイバー》

会話を切り上げ、第一段階が終了したコアを眺めた。

（俺が創ったコアが生み出したＡＩ、セイバー。　どうなってるんだ？　俺がそう設定したわけでもなく、勝手に創られた。　理解できていないみたいだな）

俺はコアを所持して、いつもの通り、多重ロックと闇の炎の結界を施して、研究所を出た。

GNドライブ完成（後書き）

作者こと私、黒翼は影響を受けやすいんです。
無知の状態でＦａｔｅ／ＺＥＲＯを見ていたら、セイバーを出したくなってしまって、その結果がこれです……。
何かすみません……ｍ（＿＿）ｍ

起動するＩＳ（前書き）

ＧＮドライブ完成したのが前話なのに……。

起動するＩＳ

二月中旬、ついに来た。

『世界で唯一ＩＳを使える男』織斑一夏が出てきたのだ。

「お前も公表するのか？」

『最初からそのつもりだったしな。　お前はどうするんだ？』

「公表するさ。　せっかくＩＳを創ったのに、それを試さなくてどうするんだ」

『お前、どんなＩＳ創ったんだよ……』

「ま、ヒントにツインドライブシステムがある」

『ダブルオー！？　ＧＮドライブ創ったのかよ！？』

「ひとつはセスタに貰った。　もう一つはそれを解析して、自分で創った。　大変だったぞ？」

『だろうな。　ＧＮドライブ創るのに時間が掛かるしな。　で、ダブルオーなのか？』

「いいや、違う。　まあ、まだ未完成だ。　同調があと少しで完了するから、それから武装の確認とかまだやることが山積みだ」

『……大変だな』

「まあな」

セイバーが生まれたから、新しい武装を考え付いたから、同調が終わったら即行で創る。

『俺は来週位に公表する。　終焉は？』

「俺もそのくらいだ。　速めに公表しとけば、学校を控えめにできるからな」

『そうか。　じゃ、頑張ってくれよ』

「ああ。　じゃあな」

携帯をしまい、俺は父さんの部屋に入る。

「どうしたんだい？　終焉」

「公表しようと思います」

「やっぱりか。　織斑一夏を守るためかい？」

「それもありますが、吉宗が行くようなので、守護者としても行くつもりです」

「そうかい。　麗奈はどうするんだい？」

「それは大丈夫です。　明久もハヤテも、強くなりました。　俺の代わりになるほどに。　ですので、俺はＩＳ学園に行こうと思いま

す」

「……このことを予測してみたいだね」

「はい。　もしものことを考えて、対策は打っておきました。　交渉次第では、文月学園とＩＳ学園を往復しようとも考えています」

「多分可能だろうね。　君は文月学園開校以来の天才だからね。評判をあげるには持ってこいの人材。　交渉には俺も立ち会おう」

「ありがとうございます」

「で、いつ公表するんだい？」

「俺としてはいつでも構いません。　吉宗は来週には公表するようですが」

「そう。　じゃあ、来週にでもに公表しようか。　俺の名前は世界中に知られわたってる。　俺の名前と、ＫＡＮＺＡＫＩの名前を出せば、大体大丈夫だね」

父さんはいろんな人の情報……弱みとか持ってるから、世界は折原臨也に弱い。
本当に父さんが親でよかった。

「お前が望む事はなんだい？　可能な限り交渉してみよう」

「……では、ＩＳ学園と文月学園の行き来の自由化、制限付でも構いません。　それと、バイク、ＩＳの使用許可、武器の所持の自由ですね」

「うん、最後のはいつもやってるよね。　まあこの程度なら出来ると思うよ。　相手の弱みならいくらでもあるからね」

……本当に父さんが俺の親で良かった。

「また何かあったらいいな。　俺が可能な限りは手を尽くすから」

「ありがとうございます」

本当にありがたい。
助けてもらってばかりだな。

「終焉、ＩＳの調子はどうだい？　同調、上手くいってる？」

「問題ありません。　セイバーがサポートしているので、予定よりも進行が早くなっています。　四月までには余裕で完成するのではないでしょうか」

「そうか。　それなら良かった」

「では、俺はこれで。　起動できるまで同調率を上げなければならないので」

「わかった。　じゃあ、頑張って」

「はい。　失礼します」

俺は父さんの部屋を後にし、俺専用の研究所へと向かった。

「セイバー、やるよ」

研究所について、すぐに取り掛かる。
今は６５％前後。
起動させるには８０％以上の同調率にしなければならない。

『はい』

「展開」

俺は未完成のＩＳを纏う。
装甲すらもまだ未完成の機体。
ツインドライブシステムの起動が、こいつの完成させる事になる。

「ＧＮドライブ起動。　ツインドライブシステム、始動」

『ツインドライブ粒子同調率、３４……３８……４３……』

ここまではまだいい。

『……５４……５９……６０％突破しました』

ここからだ。

『６１……６２……６３……６４……』

同調率が止まった。

『ツインドライブ同調率低下』

「またここで止まったか……」

これ以上になかなか上がらない。

「セイバー、ＧＮドライブの感じはどうだ？」

『まだずれがあります。　安定させるには、そのずれを小さくするしかありません』

「やはりか。　未元物質」

未元物質で生み出した物質をＧＮドライブに流し込む。

未元物質でＧＮドライブ同士のずれを補正する。

「これでよし。　セイバー、もう一度だ」

『了解』

「ツインドライブシステム、始動」

『ツインドライブ粒子同調率、３７……３９……４２……４７……５０……』

ここからだ。

『５７……６０％突破、……６４……６７……６９……７０％突破』

漸く７０％を超えたか。

あと１０％……！

『７０……７１……７２……７３……７４……同調率上昇停止、並びに同調率低下』

「あと６％……！」

もう一度未元物質を流し込み、微調整をする。

これでできなかったら、トランザムを使うか……。

「ツインドライブシステム、始動」

『ツインドライブ粒子同調率、……３９……４４……４７……５０……５３……５７……』

「まだ……まだいける……」

『……６５……６８……７０％突破、……７３……７４……７５……７６……』

あと４％。

『粒子融合率、７６％で停止しました』

後４％なのに、ここで止まるのか……！

「……セイバー、トランザムだ」

『無茶です！　マスターの身に危険が！』

「やってくれ、セイバー！」

『……わかりました。　トランザムシステム始動！』

――――ＴＲＡＮＳ－ＡＭ――――

機体が赤く光り、放出される粒子も増える。

「……目覚めてくれ……！　“黒騎士（ブラック・オーガ）”！！」

『……粒子同調率、８０％、突破しました。　ツインドライブ、安定領域に達しています！』

「動いた……？　ついに目覚めたか！　黒騎士が！」

『粒子安定状態を記憶しました。　これで、ツインドライブシステムが安定するようになりました。　しかし、しばらくはトランザムの使用は控えてください』

トランザムでの無理やりの起動だ。

いくら安定状態を記憶したとしても、しばらくはトランザム無しでの稼動データを集めてＧＮドライブを慣らす必要があるからだろう。

「わかった。　ありがとう、セイバー。　お前がいなければまだコイツを動かすことが出来なかった」

セイバーがいなければまだ７０％にすら達していなかっただろう。

『私はマスターの指示に従っていただけです。　私はマスターのために存在しているのですから』

「そうか」

『マスター、臨也と火織に連絡した方がよろしいのでは？』

「ああ、そうだな。　起動できるまでになったしな、連絡しておくか」

俺は携帯を取り出し、父さんに電話する。

『終焉、どうしたんだい？』

「ツインドライブシステム、起動しました」

『へぇ！　もう起動したんだ』

「はい。　セイバーのおかげです。　あとは武装と装甲です」

『君の推測よりも大分速いね。　謎のＡＩ、セイバーの力は大きいみたいだね』

「はい。　セイバーの能力はとても高い。　篠ノ之束と肩を並べれるではないでしょうか」

『どんな形で生まれたとしても、流石は終焉が創ったものだね。世界中の企業が馬鹿に見えるよ』

「俺は知っている事を応用しているだけです」

『形や使い方がわかっていても、その設計方法とかがわからないと意味が無い。　でも終焉はそれをして見せた。　それだけで……それができる事が凄いんだよ』

「……ありがとうございます？」

『疑問形じゃなくていいんだよ。　終焉は胸を張っていい、誇っていいんだよ。　最近落ちてきたデュノア社にも教えてやりたいよ』

デュノア社。

量産ＩＳシェア第三位の会社。

後に出てくるシャルロット・デュノアの親がやっている会社だ。

「……デュノア社、何かしたんですか？」

『気になるのかい？　まあいいや。　最近デュノア社は裏で違法武装の取引をしているみたいだよ。　金欠気味みたいだね』

この段階でもうそこまで落ちているのか……。

「……そうですか。　ありがとうございます。　今から家に戻ります」

『わかった』

携帯をしまい、“黒騎士”こと、“ブラック・オーガ”の待機状態であるネックレスを首に掛け、ここを後にした。

起動するＩＳ（後書き）

ＩＳ主体なのに、漸くＩＳが活発になってきました。

交渉の場を掌握

俺と吉宗もＩＳが使えることを公表した。
俺が使えることがわかったら、学校やら近所が騒然となった。
おかげで外に出づらくなったし、家の前にマスコミが殺到したり、ＫＡＮＺＡＫＩグループに電話が殺到したり、俺のプライベート用と仕事用携帯にも電話メールが殺到したり、大変な事になった。

一夏や俺たち男がＩＳが使えることが公表された後、他の男も動かせるか、文月学園の希望した一部の男子がＫＡＮＺＡＫＩグループ製のＩＳで試した。
まあ当然の如く動かなかった。
明久は試さなかった。
もしも動かせるのが公前でバレたら麗奈と別れる事になるのがわかるからだろう。
明久の持つ光の波動は様々な制限を無くす効果があり、推測だが明久はＩＳを扱える。
それを証明するために、明久は俺の家で、極秘で試した。
やはり明久も動かせたが、麗奈と別れるのが嫌だったから、公表はしない。

で、俺は文月学園の学園長藤堂カオルと、ＩＳ学園の理事長真の学園長轡木十蔵、国のお偉いさんと会談の途中であった。
この場には父さんもいて、この場を掌握しているのは父さんだ。
巧みな話術と自身が持つカードを切り、完全にこちらの流れだ。

「こちらの用件、呑んでいただけますか？」

こっちが要求したのは、文月学園とＩＳ学園の行き来の自由、バイク使用の自由、ＩＳの使用制限を無くすこと、武器所有の自由だ。
まぁ、前に言った事と変わっていない。

「アタシとしちゃああありがたいね。　なんせ開校以来の天才が残ってくれるんだからね」

「私も構いません。　彼の成績は既に高校卒業までのものを誇っているそうなのでね。　こちらに来てくれるのは嬉しい限りです」

「学園長たちはこう言ってますけど、あなた方国はどうするんですか？」

父さんは口角を上げながら言う。
……父さんのその笑みが怖い。
相手の弱みを耳元で囁き脅してからだから余計に怖い。

「……わかりました。　折原さんの要求を全て許可します」

国のお偉いさんをこうもあっさり落すとは……。
やっぱり一番敵に回してはいけない相手だ。

「そうですか！　いやぁありがとうございます！　断られるんじゃないかと思って冷や冷やしてましたよ！」

よく言うよ。
確実に通す自信があったくせに。
ほら見てくださいよ、この場にいる全員が『よく言うよ』って感じな目で見てますよ。

「では、私たちはこれで失礼しますよ。　行こう、終焉」

「はい」

俺たちにはそんなこと無いけど、この人の真骨頂は人間遊びだよな。
人間を観察し、人間で愉しむ。
それが俺の思う原作の折原臨也なんだよな。
ここでは違うけど。
まぁ、これで問題は無いな。

「聞いてたと思うけど、ＩＳ学園のテストは来週、文月学園の振り分け試験は三月に入ってからだ」

「はい。　正直、俺のＩＳが間に合うかはわかりませんが、その場合は生身でやりますよ。　現行するＩＳでは脆いので十分やれると思いますし」

「まあ終焉大丈夫だろうね。　神威でもＩＳを倒せるんだからね」

俺の実力は神威さんをも超える。
筋力的にじゃあ世界トップだし、劣る技術面はその圧倒的な力で何とかなるからだ。
筋力が同じだったらまず負けるだろう。

「まあ、終焉の力の差を見せてあげるといい。　お前があのＩＳを纏ったら適う者はいなくなるから」

黒騎士（ブラック・オーガ）がフル稼働させると、一日で世界を滅ぼせるスペックがある。
ＧＮドライブ＋核エンジンの永久的なエネルギーと、強固なアーマ

ーの前には、存在するＩＳ全４６７機を相手にしても、確実に勝てるだけの性能がある。
元より化物チートな俺が使ったら、最強で最凶な存在になるな。

「でしょうね。　オーガの武装もそれに見合う物にしようと思っているので」

勿論、リミッターを掛け捲るけどな。
五つくらいは掛けるつもりだ。

「折原終焉と言う存在は、世界の火種になる存在だ」

「でもそれは父さんたちが守ってくれるんですよね？」

「ああ。　自分の息子を売るほど愚かな親じゃないさ。　俺は楽しければいいんだから」

「俺が火種になるのは面白くないと」

「当たり前じゃないか。　大切な子供が狙われるなんて嫌だからね。
だから俺たちは、どんな手でも使うよ」

「本当にありがとうございます。　おかげでやりたいようにできますよ」

本当にやりたいようにできる。
武器の所持に、ゲームやカードの開発、ＩＳ開発ｅｔｃ.
俺の記憶を使ってゲームやカードを発売したりして、遊戯王やらポケモンやらが大ヒットしたり。
記憶って本当に便利だな。

ピリリリ♪

電話のようだ。
この携帯は、プライベート用だ。

『もしもし、終焉？』

「幽さん？　どうかしたんですか？」

『君がニュースになったよね？　そのとき社長に君と知り合いだってことを言っちゃったんだ』

「『ジャックランタン・ジャパン』の社長さんですか？」

『そう。　その社長が是非とも君をテレビ出演させたいと言い出してね。　一応聞きだけ聞くように言われてしまってるから連絡させてもらったんだ』

「そういうことですか。　幽さんも大変ですね」

『まあね。　で、どうかな？』

「えー、少し考えさせてください。　今はいろいろと忙しいので」

『わかった。　決まったらいつでも連絡して。　繋がらなかったらルリに伝えておいてくれるかな？』

「わかりました」

『うん、じゃあね』

「はい」

電話をしまう。

父さんの視線が刺さっている。

「幽？」

「はい。　また社長が」

「ああ……またあの人絡みか。　で、なんだって？」

「何か、テレビに出ないか？　とのことです」

「終焉はどうしたいのかな？」

「俺としてはどちらでもいいんです。　ですが、今は忙しいし、あまり外に出れないので、少なくともしばらくは断るつもりです。この騒ぎが静まれば、考えるのですが……」

「俺は終焉のやりたいようにやるといい。　終焉なら確実に売れるだろうしね」

「……なんでそう思えるんですか？」

「頭脳明晰、スポーツ万能、ルックス抜群に加えて世界で三人……四人しかいない男のＩＳ操縦者。　これで売れないほうがおかしいでしょ？」

明久を入れたみたいですね。

「……そうですね。　その分いろいろありそうですが」

「でもそれは大丈夫でしょ？　君は世界から狙われると共に、保護対象なんだから。　それに俺たちもいる。　何かあってもすぐに解決できるよ？」

「否定できませんね」

「否定できる方がおかしいって」

「ですねよね～」

俺はどうしても否定が出来ない。
それだけの理由があって否定できる人がいたら教えて欲しい。

「ま、考えな」

「……はい」

本当に色々大変になってきたな……。

交渉の場を掌握（後書き）

思いついたら出したくなるのが作者の性。
企画性ゼロです。
幽の口調が全くわからない……。

入学試験　終焉ＶＳ千冬

俺は学校にも行かずに（行ったら大騒ぎ）、研究所で黒騎士（ブラック・オーガ）のＡＩ“セイバー”と共に、ＩＳの完成を急いでいたが、結局、装甲は完成したが、武装が完成しなかった。

「俺は折原終焉です。　あなた方が俺の相手ですか？」

「そうだ。　私は織斑千冬。　ＩＳ学園で教師をしている」

「私は山田真耶です。　よろしくお願いしますね」

「で、今日の相手はどちらですか？　俺はどちらでも構いませんが」

「お前の相手は山田先生だ」

「わかりました。　あ、先に行っておきますね。　俺、生身でやりますから」

「「！？」」

俺の発言で驚く二人。

「……貴様、ふざけているのか？」

「ふざけてなんかいませんよ。　まだ俺のＩＳは未完成でしてね。　こんな状態でやるのは逆に危険ですので、生身でやった方がいいんですよ。　それに、ＩＳは脆すぎる」

「終焉の言う通りにした方がいいよ、千冬」

「臨也さん、これはどういうことですか？」

「どうって、そのままだけど？　ねぇ、終焉？」

「ええ。　ＩＳが相手なら、俺も久しぶりに本気で、全力でやれますからね」

それでも、全力全開では無いが。

「安心してください。　シールドエネルギーくらいなら展開できますから」

装甲は完成しているから、絶対防御くらい普通に出せる。

「早くやりましょうよ。　久しぶりに本気が出せると思うと、うずうずして仕方がないんですよ」

「終焉の本気を生身の人間が受けたら吹き飛ぶよ。　ラファール・リヴァイブなら、十分勝てる」

「あ、軽くアップしてきていいですか？　久しぶりにコイツを使うんで、軽く感覚を戻しておきたいんですよ」

「時間が掛からなければ構わない」

「そうですか？　どうせなら見てもいいですから」

俺はそう言って、ＫＡＮＺＡＫＩグループの巨大な訓練場に入った。

今日の俺の武器は、この“聖天絶刀”唯一つ。
いつもは百を越える武器を持っているが、それがない。
つまりそれは、体が途轍もなく軽いと言う事だ。

「久しぶりだな、絶刀……」

俺は聖天絶刀を抜き放ち、刀身の輝きを眺める。

「さて、やろうか」

始めは軽く振り、次第に大降りに。
そして、十分ほどしてから、技に入る。

「“七閃”！」

ギュィィィィン！！！

絶刀から放たれた七本の鋼糸の斬撃。
それは見事に金属の塊を切り刻んだ。

「腕は鈍ってないようだな。　じゃあ、

“聖閃”

」

ズガァァァァァン！！！！！

“唯閃”を使わない状態で放てる、俺の最強の技“聖閃”。
これは、通常七本の鋼糸で行う“七閃”を超え、使用鋼糸数は最大で三十本。
三十本で放つ“聖閃”は、山をも断つ。
これは“七閃”のように、同時に放つただの斬撃ではない。
これは、使用する鋼糸を同時に放つが、それだけではなく、一本一本の鋼糸を重ね合わせ、巨大な斬撃にしたり、いろいろと応用することができる。

「十五本でも、相変らずの威力だな」

俺は絶刀を鞘に戻し、訓練場を後にする。
その巨大な訓練場に、大きな傷跡を残して。

「……貴様、本当に人間か？」

訓練場を後にしてから、織斑千冬にあって、一番最初にそう言われた。

「俺は人間ですよ。　異常なほど異常な、ね」

「これで、終焉が生身でも戦える事の証明にもなるでしょう？　ちなみに、まだ終焉にはまだ、隠してある力があるよ」

「「！？」」

（あれだけの威力を生身で出しておいて、まだそれ以上の力があると言うのか！？　あいつは沢田以上なのか！？）

（わ、私、怖くなってきました……）

「大丈夫ですよ。　絶対防御を貫通しない程度の威力しか出しませんから」

（（絶対防御を貫通できるのか（んですか）！？））

「終焉のアップも終わったところで、やりましょうか」

「……臨也さん、前言撤回していいですか？」

「ん？　何を？」

「今日の相手、山田先生の予定でしたが、私がやってもよろしいですか？」

「それは俺が決める事じゃないね」

「俺は構いませんよ。　誰が相手でも、ＩＳが相手なら」

「ではやろうか、折原」

「よろしくお願いします、織斑さん」

俺と織斑千冬は、さっき俺が滅茶苦茶にした訓練場とは別の、ＩＳ用のエリアに来た。

「やりましょうか、ブリュンヒルデ！」

「その名で呼ぶな。　私はその名が好きではないんでな」

「それは失礼、織斑千冬さん」

ちなみに、千冬さんが纏っているのは打鉄だ。
打鉄程度で、織斑千冬の力が出し切れるわけ無いのにな。

『二人とも、準備はいいですか？』

「大丈夫です」

「私もだ」

『それでは、開始！』

スタートの合図と同時に、俺と千冬さんは動き出す。

「“七閃”！」

キュィィィン！

「その技はさっき見た！　七本の鋼糸を同時に放つ斬撃だろう？」

打鉄の近接ブレードで鋼糸を防ぎ、回避する。

「あの速度の鋼糸が見れたんですか、流石ですね。　だが、それが全てだと思わないほうがいい」

「なに？」

「“七閃”」

キュィィィン！

もう一度“七閃”放つ。

さっきは直線状だったが、今度の斬撃は、七方位からの同時斬撃。

これには、さすがの千冬さんでも回避は難しいはずだ。

「くっ！」

だが、流石はモンド・グロッソ覇者、世界最強と名高い織斑千冬。

鋼糸の間を器用に潜り抜け、回避した。

「……七方位からの高速の同時斬撃か。　流石だな」

「お褒めに預かり光栄。　あれを避けるとは、驚きました」

「皮肉にしか聞こえんな！」

俺の攻撃を防いでいた千冬さんが、攻勢に出た。

「はあああ！」

近接ブレードで切りかかるが、俺はそれをぎりぎりで避ける。

「まだだ！」

振り下ろされたブレードを横薙ぎに払い、俺に仕掛けてくる

「ちっ！」

俺は絶刀でその一撃を防ぐ。
ＩＳと千冬さんの一撃の重さは相当なものだ。
俺は地を蹴り、一気に距離をとる。

「逃がすか！」

だが、それを逃がさまいと接近してくる千冬さん。
俺は左手を千冬さんへ向け、鋼糸を千冬さんの腕に絡みつかせ、引っ張る。

「何！」

接近していた千冬さんを追い越し、俺は距離をとる。
鋼糸が掛かった瞬間に鋼糸を引き、後方への移動を、力技で前方へと切り替えたのだ。

「“十閃”！」

鋼糸十本の同時斬撃。
“聖閃”はまだ使うときではない。

「十本に増えたか！　厄介だな、その技は！」

十本にしても避けられる。

かなりの速度で、威力のはずなんだがな……。

吉宗と戦ったのがいい経験になったのか？

「ふぅぅ……」

俺は軽く息を吐き、脱力する。

一気に跳躍し、一直線に千冬さんに接近する。

「“居合・桜花”！」

そして、放つ居合斬り。

“桜花”は、抜刀と共に、鋼糸も放たつ技だ。

高速接近からの不規則な動きをする“七閃”と抜刀斬りだと思ってくれていい。

“桜花”の抜刀は防がれたが、鋼糸の斬撃までは防がれなかった。

「くっ！　軌道が滅茶苦茶とは、厄介なものだな！」

軌道が読めなければ手の施しようが無い。

こいつを避けるのは難しいぞ？

「……もう全力を出すか」

さっきまでは八割まで力を制限していた。

だが、それをなくし、“唯閃”未使用の状態で出せる全力の力を出す。

「“十閃”！」

さっきまでの速度よりも速く、強い“十閃”を放つ。

「！　威力が上がった?！　これがこいつの本気か！」

「もう終わらせましょう」

俺は地に脚を付け、腰の左に絶刀を構え、千冬さんを見据える。

「“聖閃”！」

ズバァァァァァァン！！！！！

『勝者、折原終焉』

その一撃で残りのシールドエネルギーをゼロにした。

千冬さんの纏う、打鉄の装甲をボロボロにして。

「ふぅ……。　お疲れ様でした」

「……最後に何をした?」

「最後にやったのは“聖閃”です。　生身の俺が放てる一応最強の技です。　最後に放った“聖閃”は二十本の鋼糸を同時に使用しました」

詳しい事は教えない。

次やるときに攻略されるからな。

「俺は最強のあなたと戦いたい。　打鉄なんかではなく、あなたの専用機でね」

「ふっ、アイツと似たような事を言うな」

「沢田吉宗の事ですか？」

「！　何だ、知り合いだったのか？」

「ええ。　あなたに勝ったと言ってましたからね。　ちなみに、どこであったんですか？」

「ドイツ軍だ」

「……」

ラウラに喧嘩売りやがったな、アイツ。

「どうかしたか？」

「いえ、あいつがあなたと戦った理由を確信しただけです。　それはそうと、吉宗はなぜドイツ軍に？」

「……それは言えんな」

「あ～ボンゴレですか。　あいつ、ボス候補ですしね……」

「……あいつは世界の闇を教えているのか？」

「……改めて、自己紹介でもしましょうか」

あいつの事を知ってるなら、教えておいたほうがいいだろう。

「？」

「イタリア最強マフィア、ボンゴレファミリー闇の守護者、折原終焉。　改めてよろしく」

「！　貴様もマフィアだったのか」

「ボスの召集が無い限りは普通に過ごしてましたよ。　そこまで汚い仕事はやってないんで、安心してください」

まだ殺しはしていない。
殲滅はしたが、無殺を貫いている。

「……そうか」

「そろそろ戻りましょう。　立てますか？」

「何とかな……」

ふらふらとしながらも立ち上がる千冬さん。

「支えましょうか？」

「この程度大丈夫だ。　気にするな」

気にするなと言われても、やった張本人だしな、俺。
だが、断られてしまった以上、これ以上言うと身の危険がありそう

なので追及はしない。

「お疲れ様、終焉、千冬」

「お疲れ様です、折原君、織斑先生」

「相変らずの太刀筋でしたね」

俺たちが演習場から出ると、父さん、山田先生、母さんが出迎えてくれた。

「体が覚えていましたからね」

「折原君、強いですね」

「それなりにですね」

身体的には最強でも、心が弱い。

「お前は十分強い。　この私に生身で勝ったのだ。　誇れ」

「そうそう。　千冬に勝ったんだから、誇ってもいいんだよ。　いくら千冬が専用機じゃなかったとしても、世界最強の女性ＩＳ操縦者なんだから、誇るべきだよ」

「そうですね。　終焉は謙遜しすぎです。　あなたは自分が思っている以上に強い。　身体も、心も」

武術の達人の母さんにそう言われると、少しは自分の強さを認めてもいいのかもしれない。

「……ありがとうございます」

「あ、折原君、明日は試験です。　高校生二年生の内容です」

「お前の成績は見たが、一応行っておく」

「今からでも構いませんが。　どうせ、一教科五分も掛からないんで」

「だろうね。　普通の高校は上限ありの百点問題。　文月学園は上限無しのテスト。　文月のテストで一教科六百点は軽く出せるであろう終焉がそれをやったら、五分で終わるね」

まだ実際に本気でやったことは無いが、五百点取るのに四十分も掛からなかったしな。

「……では、少し待っていてください。　問題を取って来ますので」

「わかりました」

「その間に終焉と千冬はシャワーでも浴びてきてください。　汗をかいたでしょう」

「では、言葉に甘えて」

俺と千冬さんは、シャワーを浴びて、その後に俺はテストを受けた。
全教科どれも五分も掛からなかった。

入学試験　終焉ＶＳ千冬（後書き）

文才が欲しい！
特にバトル描写の部分！
……自信が無い……。

新春、ＩＳ学園へ？（前書き）

３４話にて、漸くＩＳ学園に到達しました。

新春、ＩＳ学園へ？

俺のＩＳも完成し、春になった。

「麗奈、明久たちと先に行ってくれ。　俺は別でいく」

「わかりました。　お兄様も遅れないようにしてくださいね」

「わかっている」

今日は文月学園のクラス発表日で、同時にＩＳ学園の入学式でもある。

俺は学年主席と言うことが先に伝えられているので、挨拶だけしてからＩＳ学園へと飛ぶ予定となっている。

「ハヤテ、麗奈を任せたぞ」

「お任せください！　では、行ってきます」

ハヤテは家を出て行った。

「さて、俺も行くか……」

男のＩＳ操縦者は珍しく、俺はここでは有名人な為、隠れて文月学園に登校しなければならない。

俺は霧の炎と、光学操作で自分の姿を完全に消し、屋根の上を跳び、文月学園に行くつもりだ。

ちなみに、俺は今ＩＳ学園の制服の上に、文月学園の制服を羽織っている。

「今日からだね」

「はい。　俺が望んだ事ですしね。　俺の変わりは次席の霧島に任せるとして、麗奈は明久とハヤテに守らせます。　ハヤテも、持ち前の身体スペックが明久に及ばずとも、それに近いほどに上昇してますしね。　ＩＳが出てこない限りは大丈夫でしょう」

明久は光のリングの力を使えばＩＳにダメージを与えれるが、ハヤテはまだ無理だ。
なんか神威さんが六式を教えていたようだが、まだ未熟らしいし。

「では、俺も行きます」

「行ってらっしゃい」

俺は家を出ると同時に、霧の幻術と光学操作を使用し、完全にばれなくなった。
地を蹴り、民家の屋根の上を歩き、跳び、誰にも気づかれる事なく文月学園に到着した。
俺は教室には行かずに、学園長室へと向かった。

「失礼します」

「あんたかい。　時間になるまではここにいるといいさね」

「はい」

「で、あんたは挨拶を終えたらＩＳ学園に行くのかい？」

「はい。　主席は俺ですが、代表は次席の霧島にやってもらいます」

「妹にはしないのかい？」

「麗奈と霧島はほとんど変わりませんが、僅差でも勝っている霧島の方がいいでしょう」

次席争いをしている二人は、僅かに霧島の方が上で、点数差は三十点ほどだ。

「まぁ、月に一週間は来れますから、試召戦争の時には来ますし、行事には基本参加するので、代表代理ですかね」

「言い方はどうでもいいさね。　まぁアタシが呼び出しには相当な事がない限りは来て欲しいさね」

「わかりました。　では、そろそろ時間なので俺はこれで」

学園長室を後にし、俺のクラスである、Ａクラスへと向かう。
認識阻害をしてあるので、俺には視線が掛からないように施し、Ａクラスにはいる。
霧島が前に出ており、挨拶の最中だったようだ。

「あ、来ましたか。　折原君、話は聴いていますので、学年主席として挨拶を」

俺が教室に入ったのが担任の高橋洋子先生に見つかると、俺にそう促した。

「わかりました」

俺も前に出て、挨拶をする。

「折原終焉だ。　皆も知っているように、俺はＩＳ学園にも所属する事になったため、代表は次席の霧島翔子に任せさせてもらった。
　戦争には基本来るつもりだが、俺がいないときにでも、油断せずに相手をして欲しい。　特に危険なのはＦクラスだ」

俺がそう言うと、クラスがざわついた。
最も馬鹿なＦクラスが危険と言うんだから、当たり前だが。

「Ｆクラスを嘗めると痛い目に遭うぞ。　あいつらは正真正銘の馬鹿共だ。　あいつらがやる事に常識と言う概念が無い。　あいつらの行動には注意するように」

Ａクラスが負けることは無いが、俺たちの介入により、イレギュラーが存在するかもしれないしな。
ちなみに、このＡクラスには桂ヒナギクもいるの。
二月に転校してきたようだ。

「あ、言い忘れていたが、俺に要があるなら、妹の麗奈か、吉井明久、綾崎ハヤテに聞くように。　俺からは以上だ」

「Ａクラスの皆さん。　これから一年間、主席の折原君の忠告を胸に刻み込み、代表の霧島さんと協力し合い、研鑽を重ねてください。
　これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」

霧島は会釈をして席に戻った。

「高橋女史、俺はこれで失礼します」

「はい。　ＩＳ学園でも頑張ってくださいね」

「はい」

俺は窓に手を掛け、そのまま飛んだ。

『『『！？』』』

俺はそのままＩＳを起動し、ＩＳ学園へと飛んでいった。

Ｓｉｄｅ～明久～

終焉は嵐のように飛んでいった。

あれが終焉のＩＳか……。

漆黒のボディに翼、まるで堕天使みたいだったよ。

にしても、本当にこれ貰ってよかったのかな？

終焉曰く、「これはお前が持っていてくれ。　本来はＩＳの武装だが、匣に変換した。　お前でも十分扱えるものだ。　そんな日が来ない事を願うが、もしものときまで持っていてくれ」だってさ。

光の炎で開匣できたけど、出てきたのは剣の鞘だった。

これってどういう使い道があるんだろう？

後で聞いてみよう。

Ｓｉｄｅ～明久～ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ～一夏～

「全員揃ってますねー。　それじゃあＳＨＲを始めますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。

『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さを持っている。

だが、全員揃っていると言ったが、席が一つ空きがあり、残り一人の同じ男のＩＳ操縦者がいない。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

だが、誰も反応をしない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。　えっと、出席番号順で」

ちょっとうろたえた副担任がかわいそうなので、反応しようと思ったが、しなかった。

そうすることすら出来ないほどに余裕がないのだ。

なぜなら、俺とここにいるもう一人の男子、今はいない男子の三人以外は全員女子だからだ。

しかも俺の席は真ん中＆ａｍｐ;最前列。

俺の右斜め後ろにもう一人の男子がいるが、それでもきついったらキツイ。

窓側にいる幼馴染に救いを求めて視線を送ったが、薄情な事にその幼馴染こと、篠ノ之箒は窓の外に顔をそらした。

……俺、嫌われてるんじゃないか？

「……くん。　織斑一夏君っ」

「は、はいっ！？」

いきなり大声で名前を呼ばれたので思わず声が裏返ってしまった。
案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきた。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。　お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。　だからね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？　だ、駄目かな？」

山田先生がぺこぺこと頭を下げていた。
生徒に頭を下げる先生って……、本当にこの人、年上なのだろうか。
後ろでは、もう一人の男が笑いを堪えているように見えた。
……なんなんだ、このクラスは……。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？　本当ですね？　や、約束ですよ。　絶対ですよ！」

俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。
物凄く注目を集めているのですが……。
俺は後ろを振り向く。
さっきまで背中で感じていた視線が俺に集まる。
これはマジでキツイ。

「えー……えっと、織斑一夏です。　よろしくお願いします」

『もっと喋ってよ』と言う空気が流れている。
だが、話すことが何も無い。
どうしたらいいんだ。
……しばらく考えたが何も無い。

「えっと……以上です」

思わずずっこけた女子が大半だった。
そんなに期待するな。

「あ、あのー……」

涙声成分が二割り増しで聞こえる。

パアンッ！

「いっ――――！？」

いきなり頭を叩かれた。後ろを向くと……
狼を想わせる様な吊り目の人物が出席簿を持って立っていた。

「げぇっ、関羽！？」

パアンッ！
また叩かれた。
滅茶苦茶痛い。
あまりの音に周りが引いてるぞ。

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

いや待て、何でここに千冬姉がいるんだ？
職業不詳で月一、二回ほどしか家に帰ってこない俺の実姉は。

「あ、織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

俺は聞いた事のない優しい声だ。

「い、いえっ。　副担任としてこれくらいはしないと……」

若干熱っぽいくらいの声と視線で担任に応えている。
ここの人はそっちの気があるのだろうか？

「諸君、私が織斑千冬だ。　これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。　私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。　理解出来ない者は出来るまで指導してやる。　私の仕事は弱冠１５歳を１６歳までに鍛え抜くことだ。　逆らっても良いが、私の言う事は聞け、いいな」

なんという暴力発言。
間違いなくこれは俺の実姉、織斑千冬だ。

「キャーーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園から来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！」

キャアキャア騒ぐ女子達を、千冬姉はうっとうしそうな顔で見ている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者共が集まるものだ。　感心させられる。　それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

千冬姉、人気は買えないんだから、もう少し優しくしようぜ。

「きゃあああああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をして～！」

元気でなによりですね。

「で？　おまえは挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は――――」

パアンッ！

本日3度目。　千冬姉は知っているのか、頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬことを……。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

――――――と、このやりとりがまずかった。　つまり、姉弟なのが教室中にばれたバレた。

「え……？　織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃ世界で男で『ＩＳ』が使えるって言うのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなぁっ。　代わってほしいなぁっ」

最後のは放っておこう。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。　諸君らにはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。　その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。　いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんという鬼教官だ。

「あいつはまだ来ていないのか？」

アイツってもう一人の男のことか？

「はい。　まだ折原君は来ていません。　もう来てもいい頃なんですが……」

遅れているのには何か事情があるようだ。

「で、お前はいつまで立っているつもりだ？　馬鹿者」

俺は馬鹿ですよ。

と、そんなやり取りをしていたら、扉から一人の男子が入ってきた。

この人が最後の男性ＩＳ操縦者なのだろう。

Ｓｉｄｅ～一夏～ｏｕｔ

新春、ＩＳ学園へ？（後書き）

ここまで来るの、長かったな……。

ＩＳ　セシリア弄り

「すまない、少し遅れた」

俺は文月学園で挨拶をしてから、ＩＳを纏って飛んできた。
俺が着いたときにはもう自己紹介が始まっていた。

「来たか、折原」

「急いだんですけどね、遅れましたか」

「ちょうどいい。　お前も自己紹介しておけ」

「了解」

俺は教卓に立ち、クラスを見渡す。
吉宗が軽く手を上げていたり、見覚えのある奴もいるな。

「俺は折原終焉。　文月学園にも在学している。　あんたらよりも一個年上だが、気にしなくても構わない。　まぁ、よろしく頼む」

「き……」

あ、ヤバイな。
俺は耳を塞ぐ。
聴覚を遮断しないのは、こいつらが何を言うかが気になるからだ。

『『『きゃあああああああああ！！！』』』

大音量の絶叫。
耳塞いでも五月蝿かった。

「クール系のイケメン！」

「守ってもらいたい！」

「シエン様ぁぁぁぁぁ！！！」

……やっぱり知っている顔がいるな。
記憶に残っている。
俺に告白した事がある子だ。
ここに入学したのか。

「折原は後ろの空いている席だ」

「そこか」

空いていた席は、窓側から二つ目の、最後尾だった。
俺はそこに座る。

「これでＨＲを終了する。　授業の準備をしておくように」

そう言って千冬さんは教室を後にした。
俺は席を立ち、一夏と吉宗のいる席へと向かう。

「久しぶりだな、吉宗」

「ああ。　久しぶり、終焉」

吉宗と会うのは久しぶりだ。

「あれは完成したのか？」

あれとはＩＳの事だろう。

「ああ。　問題ない」

「……お前の事だからとんでもない代物なんだろうな」

「それが俺だからな」

ちなみに、フル稼働で一日で世界を破壊できるほどのスペックだ。

「っと、織斑一夏だったな」

「あ、はい。　織斑一夏です。　一夏って呼んでください」

「そんな畏まらなくてもいい。　一歳しか変わらんしな。　折原終焉だ。　呼び捨てで構わない」

「俺は沢田吉宗だ。　好きなように呼べ」

「じゃあ、シエン、吉宗、よろしくな！」

チャイムが鳴った。

「またあとでな」

俺は席に戻った。

一時間目のＩＳの基礎理論授業が終わり、一夏は篠ノ之箒に連れてかれ、千冬さんに叩かれたあとの次の授業。
一夏は原作通りにことを進めていた。

「織斑君、何かわからないところがありますか？」

きょろきょろしていた一夏に尋ねる山田先生。

「わからないところがあったら訊いてくださいね。　なにせ私は先生ですから」

「先生！」

「はい、織斑君！」

「ほとんど全部わかりません」

「え……。　ぜ、全部ですか……？」

山田先生が困り度１００％で引きつった。

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

勿論誰もいない。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンッ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。　あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。　いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。　やります」

「折原、コイツに教えてやれ」

「了解」

想定の範囲内だ。

「山田先生、授業の続きを」

「は、はい！」

二時間目の休み時間。
原作通りならセシリアが来る。

「ちょっと、よろしくて？」

ほら来た。

「へ？」

一夏は反応したが、俺と吉宗はスルー。

「訊いてます？　お返事は？」

「あ、ああ。　訊いているけど……どういう用件だ？」

「まあ！　なんですの、そのお返事。　わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

生で聞くとウザイな。

「悪いな。　俺、君が誰か知らないし」

よし、弄ろう。

「セスリア・オルゴール。　イギリスの代表候補生だ（笑）」

「セシリアですわ！　セシリア・オルコット！」

「んなもん知ってるわ。　で、学年次席様が何の用件だ（笑）」

「あーあ……、入っちゃったよ……」

吉宗が何か行ってるがスルーだ。

「スマン、代表候補生って何だ？」

「国家代表の候補者だ。　まぁ、一言で言えばエリートだ。　字面でわかるだろ」

「そういわれてみればそうだな」

「そう！　エリートなのですわ！」

ウゼェ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。　その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。　それはラッキーだ」

「お前やっぱりどうしようもないほどに馬鹿だろ？」

俺は喧嘩を売りまくる。

「なんですって！？」

「だから、お前馬鹿だろ。　たかが代表候補生如きで選ばれた人間？　俺たち三人は、この世界でただ三人としかいない男のＩＳ操縦者だ。　代表候補生如きなんかよりも圧倒的に稀有な存在だ。　お前の方が、俺たちと同じクラスになれたことが奇跡なんだよ。　わかったか？　イギリス代表候補生セシリア・オルコット（笑）」

どんどん顔が赤くなっていく。

「終焉の言うとおりだ。　俺たちは約六十億人分の三人だ。　何十億といる女よりも、俺たち三人の方が貴様なんかよりも選ばれた存在だ。　偶々ＩＳの適正が高かった程度で偉そうにしてんじゃねえよ」

吉宗も参戦した。
キーンコーンカーンコーン。
三時間目開始のチャイムか。
思ったよりも時間が経つのが早いな。

「またあとで来ますわ！　よくって！？」

来たら潰してやるよ。
まあ、俺は千冬さんに叩かれるのは嫌なんで、席に着いた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違い、原作通り千冬さんの授業だった。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

俺はやれないしな。
関係ない。

「クラス代表とはそのままの意味だ。　対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。　ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。　一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

「はいっ。　織斑君を推薦します！」

「私はシエン様を推薦します！」

「沢田君を推薦します！」

「折原は駄目だ。　文月学園にも在学しているため、いない日が多いのでクラス代表にするわけにはいかない」

と言う事で、俺はやれないわけだ。

「候補者は織斑に沢田……他にはいないか？　自薦他薦問わないぞ」

「お、俺！？」

「織斑。　席に着け、邪魔だ。　さて、他にいないのか？　いないなら締め切るぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらな――――」

「自薦他薦は問わないといった。　他薦されたものに拒否権などない。　選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも――――」

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

来た！

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルセットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。　それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で――――」

「イギリスだって「おいおい、何馬鹿なこと言ってるんだ？」……シエン？」

本当にうざくなってきたし、一夏に出番はやらん。

「何度も言わせるなよ、女。　日本が島国といったが、そもそもイギリスも島国だし、クラス代表を実力で決めるなら貴様如きよりも吉宗の方が圧倒的に上だ。　それと、日本で暮らすのが苦痛なら、ここに来る必要も無い。　なんなら国に帰ればいい。　それと、文化として後進的な国だと？　じゃあ、世界をこんな風にしたＩＳを作ったのは誰だ？　お前が極東の猿と言った日本人だ。　それを忘れてんじゃねえよ」

「あ、あなた！」

「それと、イギリスも大した国自慢ねえだろ。　日本と大差ないのに、何言ってんだよ。　本当にお前、代表候補生失格だぞ？」

「け、決闘ですわ！」

「別にいいけど、俺はクラス代表にはなれないからな」

「ならば、織斑とオルコットと戦い、勝った方が沢田と戦う。　それに勝った方が折原と戦え」

「なっ！　わたくしはこの男と！」

「貴様では相手にならん。　沢田に勝てればそれなりに戦えると思うが、沢田にも勝てん奴が折原に勝てるわけが無かろう。　この世界で折原に勝てる奴など、沢田くらいしかいない」

「織斑先生、終焉には俺でも勝てませんよ」

「あ、あの……」

「なんだ？」

「折原君ってそんなに強いんですか？」

「コイツの強さは異常だ。　打鉄を纏った私が、生身の折原に手も足も出ずに負けた。　しかも折原は手加減をしていた」

『『『！？』』』

「織斑先生、俺は手加減はしてません。　力を抑えただけで、本気でやりましたよ」

「おい終焉！　なに生身で倒してんの！？」

「いや、まだ未完成だったからな」

「代わりのＩＳ使えばよかっただろうが！？」

「じゃあ逆に問うが、そこいらのＩＳが俺に耐えれるわけがないだろ？　そもそも、お前だって耐えれないんだから」

「あ、それもそっか」

納得したな。

「それでは、勝負は一週間後の月曜と火曜。　放課後第三アリーナで行う。　月曜に織斑とオルコット。　その勝者と沢田。　火曜にその勝者と折原の試合だ。　用意をしておくように」

「あ、織斑先生、どうせなら一夏とオルコットを同時に相手にしましょうか？」

「ん、いいのか？」

「ええ。　吉宗がいるときついですけど、一夏とオルコットくらいなら余裕です」

「では、火曜は沢田と折原、織斑、オルコットペアと折原の試合にする。　では、授業を始める」

どうやって吉宗と戦おうか。

まぁ、一夏とセシリアはボコボコにしましょうか。

ＩＳ　セシリア弄り（後書き）

これらは作者の考えです。
違っていても、眼を瞑っていただけると助かります。

ＩＳ　簡易部屋改造

放課後、俺は一夏にＩＳについて教えていた。
ちなみに、吉宗もいる。

「頭いいな、シエン」

「これでもここと文月の主席だからな」

「何ぃ！？　噂で聞いただけだけど、オールパーフェクトを叩き出したのってシエンだったのか！？」

「ああ。　文月のテストに比べると簡単だったな」

「なあ終焉」

「なんだ吉宗？」

「総合科目何点だ？」

「振り分けテストは本気でやってみたんだが、９０００点オーバーだ」

「何ぃ！？　９０００だと！？」

「自分でもマジびびった。　予想以上の点が取れたからな」

「なあ、文月学園のテストってどんなんなんだ？」

「制限時間内で点数無制限のテストをやるんだ」

「それで、総合科目９０００点オーバー？」

「ああ」

「マジかよ！？　文月学園ってそんなに頭いい人いんの！？」

「俺が異常なだけだ。　次席でも４５００くらいだ。　先生に８００点オーバーもいたけどな」

「先生よりも頭いいのかよ！？」

いい加減女子が五月蝿くなってきたな。

「織斑君たち、まだ教室にいたんですね。　よかったです」

「なんですか？」

内容知ってるけどな。

「えっとですね、寮の部屋割りが決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを渡す山田先生。

「俺の部屋って決まってないんじゃなかったですか？　前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。政府特例もあって、とにかく寮

に入れることを最優先にしたみたいです。　一ヶ月もすれば別の部屋が用意できるので、しばらく我慢してください」

「じゃあ荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら――」

「私が手配しておいてやった。　ありがたく思え。　といっても、織斑の分だけだがな」

俺と吉宗の荷物は手配してないようだ。

「生活必需品だけだがな。　着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。　夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。　ちなみに各部屋にはシャワーもありますけど、大浴場もあります。　学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと織斑君達は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

「お前は同年代の女子と入りたいのか？」

「いや！　入りたくない！」

「そうか、そんなに入りたいなら、そういう女を紹介してやろう」

「どういう女だ!?　それと紹介しなくていいから！　人の話し聞

いてた？！」

「冗談だ」

「えっと、それじゃ私達は会議があるので、これで。　織斑君達、ちゃんと寮に帰るんですよ。　道草くっちゃだめですよ」

千冬さんと山田先生は立ち去った。
俺は携帯を取り出し、電話をかける。

『もしもし。　何の御用でしょうか？　終焉様』

「ハヤテ、明日俺の部屋にある黒い箱を持ってきてくれ」

『畏まりました』

「それとハヤテ。　今日何かあったか？」

『Ｆクラスがクラスに試召戦争を起こしました』

「勝ったのはどうせＦクラスだろ？」

『はい。　どうやら姫路さんがいるようでして』

「だろうな。　朝見えなかったし、明久の話だと熱出して途中退席で無得点扱いになったはずだ」

『そのようですね』

「ハヤテ、毎日何があったか報告してくれ。　Ａクラスが宣戦布告

されたらすぐに連絡しろ。　行くかどうかは俺が決める」

『わかりました』

「またな」

『はい』

携帯をしまう。

「行くか。　着替えくらいなら持ってきているしな」

「で、終焉の部屋はどこだ？」

「俺は吉宗と同じ部屋のようだな。　一夏は女子と相部屋か？」

「多分そうだろうな。　まったく、二人が羨ましいぜ」

お前は箒と同室だ。

教えんけど。

「まあ行こうぜ」

「だな」

「俺はここみたいだな」

「じゃあ俺たちの隣か」

「いくら防音設備があるとしても、完璧じゃないんだからあまり騒ぐなよ」

ちなみに、俺は部屋を改造するつもりだ。
俺は部屋に入る。
吉宗が入るのを確認すると、鍵を閉める。

「鍵なんか閉めて、何するんだ？」

「その前に……」

俺は雷のリングと雷蛍のボックスを出し開匣する。
この部屋に仕掛けられた盗聴器やらなんやらを破壊した。
「盗聴器か……。　まったく馬鹿なことをするな……」
どうせ国の馬鹿共か、会長さんだろう。
「で、何するんだ？」
「何って、改造だ」
「改造って部屋をか？」
「ああ。　すぐに終わる」
俺は研究所のように、闇の炎の結界装置を作りぱぱっと設置する。
「これで防音と電波妨害は大丈夫だ」
「電話とかはどうするんだ？」
「そのあたりは大丈夫だから。　普通に使える」
「……便利だな」
「まあ、それ使うには闇の炎が必要なんだけどな」
「お前いないと駄目じゃん」

「一回の注入で最低でも一週間は大丈夫だから。　本気でやれば一ヶ月は継続するぞ」

「本当にチートだな」

「まあな。　近いうちさらに大掛かりな改造をする」

「まだするのか」

「不法侵入しやがる馬鹿がいるからな」

「あーあいつね。　なるほどね」

「そう言えばお前って専用機持ってるのか？」

「持ってるさ。　ボスが持ってないわけ無いだろ？」

「それもそうだな」

なんかボンゴレっていろいろと凄いしな。

「ちなみに、俺の改造も入ってるから」

「お、と言うことはチート化されているんだな？」

「多分……と言うか絶対お前の奴よりも劣るけどな。　ＧＮドライブとか普通にチートじゃん」

「その分リミッター掛けてあるから大丈夫」

エネルギーやら機動力やらなんやら色々含めると、合計で十五近くになる。

「……で、気になってたんだけど、その指輪と腕輪は何だ？　ＩＳではないことはわかる」

「指輪は魔改造バイクで、腕輪は上昇しすぎた腕力やら握力やらを抑えるための腕輪だ」

「なんか大変だな」

「だろ？　つい殺っちゃわないように身体にもリミッターが必要になってな」

「どんどんチートになっていくな」

「本当に何でだろうな？」

心当たりは無いわけでもない。

ＩＳ　簡易部屋改造（後書き）

本当に終焉の設定がドチートですな。
後悔はしませんが。

ＩＳ　一夏も改造

翌日。
一夏と箒が原作のように喧嘩をしたりしていた。
そして今は、三時間目終わりの休み時間。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」

「え。　案外だらしな――――」

パアンッ！

「休み時間は終わりだ。　散れ」

本当にいつの間に来たのだろうか。
気配を急に感じたのだが。

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。　だから、少し待て。　学園で専用機を用意するそうだ」

「？？？」

「せ、専用機！？　一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ～。　いいなぁ……。　私も早く専用機欲しいなぁ」

どうせあなたには無理でしょう。

「折原、この馬鹿者に教えてやれ」

「了解。　ＩＳのコアを作ることが出来るのは篠ノ之束のみと言われており、そのコアの制作方法は一切明かされていない。　現在世界中に存在するＩＳは４６７機。　ＩＳコアの製作者の篠ノ之束は一定数以上のコアを作ることを拒絶しており、その４６７のＩＳはそれぞれ割り振られており、そのコアを使用して研究などを行っている。　また、ＩＳのコアを取引することはアラスカ条約によって禁止されている」

適当にだが、的を射ているから大丈夫だろう。

「その通りだ。　本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。　が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。　理解できたか？」

「な、なんとなく……」

「織斑先生、折原君や沢田君はどうなるんですか？」

「折原と沢田は既に専用機を持っている」

『『『え！？』』』

俺は首に掛かっているネックレスを、吉宗は右手のリングを見せる。
ちなみに、吉宗は大空のボンゴレリングは首にかけている。

「あの、先生。　篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

「そうだ。　篠ノ之はアイツの妹だ」

勝手に個人情報をばらさないで欲しいのだが。
価値が無くなるから。

「えええええーっ！　す、すごい！　このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人!?　やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする!?　今度ＩＳの操縦教えてよっ」

授業中なのに箒の元に女子が群がる。

「あの人は関係ない！」

原作通りに叫ぶ。

「……大声を出してすまない。　だが、私はあの人じゃない。　教えられるようなことは何も無い」

女子達は静まり返っている。

「さて、授業を始めるぞ。　山田先生、号令」

「は、はいっ！」

次の休み時間にまた来るんだよな。

☆

「安心しましたわ。　まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

ほら来たよ。

「まあ？　一応勝負は見えていますけど？　さすがにフェアではありませんものね」

「？　なんで？」

「あら、ご存じないのね。　いいですわ、庶民のあなたに教えて「代表候補生だから、こいつも持ってるかもしれないな」持って「おい終焉、どうせわかってるんだから喧嘩売らなくてもいいだろ」ああもう！　人の話に被せないでくださる！？」

「こいつのＩＳは『ブルー・ティアーズ』。　イギリスの第三世代だ」

「あなたは知っているようですわね」

情報屋だからな。

なんてな、ただの原作知識だ。

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思っただけだけど。　どうすげーのかはわからないが。　だって既にもうシエンと吉宗は持ってるわけだし」

「まあな。　親のおかげで手に入れやすかったさ」

「俺も親とその他のおかげで手に入れれたさ」

「シエンと吉宗の親って何してるんだ？」

「情報はそう簡単に洩らす訳が無いだろう？　折角の価値がなくなるからね」

「俺もどうように教えるわけにはいかない。　情報は武器になるんでな」

俺も吉宗も裏の人間だ。

貴重な情報を曝すほど馬鹿じゃない。

「俺たちは飯を食いに行くが、一夏はどうする？」

俺はセシリアを無視することにした。

「ん、じゃあ付いてく。　箒も来いよな」

一夏は箒の手を掴んだ。

「は、放せ！」

「黙って付いて来い」

強引だな。

「じゃあな、セシリア・オルコット。　やっぱりお前、代表候補生止めた方がいいぞ」

俺はそう告げて食堂へと向かった。

後ろで何かを言っていたが、俺は勿論無視した。

☆

「一夏お前、今日から剣道するぞ」

「へ？　何で？」

「お前さ、小学校時代は剣道やってたみたいだが、中学では帰宅部だっただろ？」

「ああ。　……って、何で知ってるんだ!?」

「それは俺が情報屋だからだ。　まあ、調べさせてもらった」

「それはどうでもいい。　一夏、お前はその怠けた状態でセシリア・オルコットと戦うつもりか？　いくら何でもそれは無謀だぞ。　あいつは一応代表候補生だからな」

「確かにな。　ＩＳについてはシエンが教えてくれるにしても、こればかりは俺一人じゃあどうしようもならないからな……」

「というわけで、俺と吉宗がお前を鍛えてやる」

「は？」

「俺たち、腕には自信があるんだよ」

「俺も終焉も、千冬さんには勝てるだけの実力があるからな。　お前を鍛えてやる」

「いいのか？！」

「ああ――――」

「ねえ君たち、噂の子でしょ？」

返事を遮って言葉を発してきたのは三年の女子だ。

「はあ、たぶん」

「代表候補生の事勝負するって聞いたんだけど、ほんと？」

「はい、そうですけど？」

俺が千冬さんを倒したのも噂として流れているはずなんだけどな……。

「でも君たち、素人だよね？　ＩＳ稼働時間いくつくらい？」

「いくつって……二十分くらいだと思いますけど」

「そっちの二人は？」

「覚えてないな」

「同じく」

「ＩＳって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？　だったら軽く三百時間はやってるわよ」

ＩＳもそうだが、何事も稼働時間とかが全てじゃないんだよな。用は、使用者次第だ。

使用者に才能があれば初めてでもそれなりに動くし、それなりに出来る。

「でさ、私が教えてあげよっか？　ＩＳについて」

「結構だ。　こいつには俺が教えることになってるんで」

「それに、俺と終焉は織斑先生を倒せるだけの実力はあるので」

「！　で、でも君たち、一年生でしょ？　私のほうが上手く教えられると思うなぁ」

しつこいな。

「俺を嘗めるなよ？　ＩＳについては理解している」

「あ、終焉はＫＡＮＺＡＫＩグループトップの息子ですよ？」

何さらっと個人情報ばらしてんの！？

「おい吉宗！　余計な事は言うな！」

「嘘！？　な、なら仕方ないわね……」

そう言って三年は戻っていった。

「……吉宗」

「なんだ？　終焉」

「ちょーっといいか？」

「え？　げっ！　ちょっま！　助けムグゥ！」

騒ぐ吉宗の口を封じながら人通りの少ない場所へ。

しばらくして、俺は一夏たちの元へと戻った。

「し、シエン？　吉宗は？」

「さあ？」

俺は吉宗を連れずに戻ってきたため、一夏たちは不思議そうにしていた。

「微かに聞こえたのは沢田の悲鳴だと思うのだが……」

ああ、ここまで聞こえてきたんだ。

「何か言ったか？　篠ノ之？」

「い、いや！　なんでもない！」

「まあ、実際は関節技決めて黙らせただけなんだが」

これでも色々武術をやったからな、サブミッションくらいは余裕だ。

「あいつの事だ、そろそろ復活するだろう」

俺が普通に言うと、二人は固まっていた。

「ま、あいつの自業自得だ」

情報は武器になるってさっき言った分だろうに……。

数分後に吉宗が戻ってきて、変な空気の中昼食を終えた。

☆

「じゃあまず、篠ノ之と一夏、やってみようか」

「「はい？」」

「だから、一夏と篠ノ之が打ち合えと言っているんだ」

「わ、わかった」

「んじゃ、吉宗、少しの間見といて。　俺はハヤテの方に行ってくるから」

「わかった」

俺は剣道場を後にして、グラウンドへ向かった。

そこには案の定ＫＡＮＺＡＫＩのヘリが止まっていた。

「終焉様、言われていたものです」

「助かる」

「それと、Ｆクラスは補充試験を受けており、本日は試召戦争は起こりませんでした」

「そうか。　おそらく、Ｆクラスの次の相手はＢクラスだ。　霧島にＣクラスが宣戦布告しても、俺は行かないと伝えておいてくれ。　どうせ俺がいなくても余裕で勝てるからな」

「わかりました。　では、この荷物、どういたしましょうか？」

「俺が持っていくからいい。　それとハヤテ、時間あるか？」

「大丈夫ですが、どうかなさいましたか？」

「ちょっと付き合ってもらおうと思ってな」

「わかりました」

俺はハヤテを連れて、剣道場へと戻った。

そこでは、篠ノ之に打ちのめされている一夏の姿があった。

「やっぱり打ちのめされたか」

「し、シエン……」

「ところで、後ろの男は誰なのだ？　部外者であろう？」

「ああ、コイツは俺の執事だ」

「綾崎ハヤテといいます」

「で、その執事を連れてきたのはなぜだ？　荷物を運ばせたにしても、ここに連れてくる必要は無いはずだ」

「一夏、俺とハヤテの動きをよく観察しろよ」

「あ、ああ、わかった」

「やるぞハヤテ。　久しぶりにお前の実力を測りたくなった」

「わかりました。　ですが、ここで大丈夫なのでしょうか？」

「その点は大丈夫だ。　気にするな」

吉宗の力が施されているからな。

「わかりました。　ではやりましょう」

ハヤテは妖刀・白皇を取り出した。

俺は木刀を取り出す。

この木刀は俺がそれなりの力で扱っても壊れない、結構強度のある木刀だ。

「一夏に篠ノ之、角にいるか、外で見ろよ」

吉宗はもう移動してる。

行動が早いな。

一夏と篠ノ之が動いたところで、俺とハヤテは構える。

「んじゃ、俺の合図で始めてくれ」

「任せるぞ」

「お願いします」

剣道場は静まり返っている。

「……では、始め！」

吉宗の声と共に、俺とハヤテは同時に飛び出した。

「はああっ！」

ガギィィィ！

鍔迫り合いになり、ハヤテの攻撃が重くなったことに気づいた。

「強くなった。　だが、まだまだだ！」

俺は一旦距離をとり、自ら離した距離を自らゼロに戻す。

「くっ！」

上段、下段、左、右と、俺の乱撃にハヤテは防戦一方になった。

「反撃してみろ！　ハヤテ！」

「……“剃（ソル）”」

ハヤテは剃で高速移動を始めた。
だが、俺の目にはハヤテの姿を捉えている。

「はああ！」

ハヤテは剃の速度での突きを放ってきた。
指銃も使えばさらにいいが、まだハヤテは使えない。

「いい突きだ。　だが、俺には及ばない」

俺はその突きを左手で掴み、右手の木刀をハヤテの首元に突きつける。

「そこまで！」

「強くなったな、ハヤテ」

「神威さんにも鍛えられていますので」

「なあ終焉、お前の身近な人間に強い人多くないか？」

「まあ、俺の家の専属の執事、メイドの条件にもあるしな」

強くなければやっていけないしな。

「それと、お前らはいつまで呆けているつもりだ？」

俺とハヤテの戦闘を見ていた一夏と箒は呆けていた。

「す、すげえ……」

「見えなかった……」

「一夏、ハヤテほどになれとは言わんが……と言うか無理だから、まあ頑張れよ」

「しばらくは篠ノ之と俺でやる。終焉とでは力の差がありすぎるからな」

「わかった」

「今日からしごいていくからな。覚悟しろよ？」

「お、おう」

一夏の改造が始まった。

ＩＳ　一夏も改造（後書き）

微妙ですね。

バカテス　試召戦争！　ＡクラスＶＳＦクラス（前書き）

今回はＡクラスとＦクラスの試召戦争です。

バカテス　試召戦争！　ＡクラスＶＳＦクラス

月曜日。
今日は一夏とセシリア、吉宗の模擬戦の日だ。
だが、

『終焉様、本日の十時より、Ｆクラスとの試召戦争が決まりました』

Ａ対Ｆの試召戦争だ。

「やはり来たか。　で、内容は？」

『一騎打ち五回で沙樹に三勝した方の勝ち。　勝負科目はＦクラスが三、Ａクラスが二です』

原作通りだな。

「わかった。　今から向かう」

俺は携帯をしまう。

「織斑先生、今から文月に行きます」

「わかった。　だが、模擬戦はどうする？」

「それまでには間に合いますし、そもそも今日は俺の試合ではないので」

「そうだったな」

「では、急ぎなので俺はこれで」

教室を後にし、窓から飛び出した。
オーガを起動し、エネルギーと機動力のリミッターを全て解除する。
二つのＧＮドライブから発せられる粒子量が増え、ジャミング用の粒子も放出されているのを確認し、さらに超高性能ステルスを使用し、衛星からも捕らえられなくし、最初から全開で飛ぶ。
ＩＳ学園と文月学園の間は、オーガの最高速度で飛ぶと、およそ三十分ほどでつける。
三十分間全開で飛び続け、文月学園に着いた。
今の時刻はもうすぐ十時になるところだ。
俺はオーガを解除し、開いている窓を探して跳び込んだ。
一気に三階まで辿り着き、Ａクラスへと向かう。

「では、両名とも準備は良いですか？」

「ああ」

「……問題ない」

ちょうど始まるところだった。

「間に合ったか？」

俺がＡクラスにはいると、Ｆクラスの連中がざわつき始めた。
まあ、俺はＩＳ学園の制服着てるから当たり前か。

「はい。　ちょうど始まるところでした」

「そうですか」

「シエン、来たんだ」

「ああ。　相手は雄二だからな。　何をしでかすかわからないからな」

「お疲れ様でした。　コーヒーでもいかがですか？」

「貰おう」

ハヤテはコーヒーを淹れに行った。

「……代表はあなたに代わるの？」

霧島が音も無く近づいてきた。

「いいや、俺は今のところ出るつもりは無い。　霧島は雄二に勝つことと、告白する事だけを考えてな」

「……知ってるの？」

「情報屋を甘く見るなよ。　俺は応援するから」

「……ありがとう」

「雄二、今回の一騎打ち、俺は出るつもりは無いとだけは行っておく」

「……そうか。　それはありがたいな」

ま、俺の点数は生徒は誰も知らないからな。
一番の脅威になる俺がいない事は都合がいいのだろう。
ハヤテがコーヒーを淹れて持ってきた。
ちょうどいい温度だ。

「話はもういいみたいですね。　では、一人目の方、どうぞ」

「僕が行きます」

ハヤテが一人目だった。

「ワシがやろう」

相手は秀吉だ。

「あ、ちょっとすみません」

秀吉の姉、木下優子が一旦止めた。

「秀吉、Cクラスの小山さんって知ってる?」

Cクラスと試召戦争をしたのは知っている。
やっぱり秀吉の変装があったのか。

「はて、誰じゃ?」

「じゃーいいや。　その代わり、この試合が終わったら私のところに来てくれる?」

「うん？　何か知らぬがわかったのじゃ」

「教科は何にしますか？」

「家庭科でも構いませんか？」

ハヤテの得意科目は家庭科だ。
総合教科には含まれないが、一応テストはある。
滅多に使われない教科だ。

「構いません」

「「試獣召喚（サモン）！」」

『Ａクラス　綾崎ハヤテ　ＶＳ　Ｆクラス　木下秀吉
家庭科　５２８点　ＶＳ　６８点』

『な、何だあの点数は！？』

『家庭科の点数じゃないぞ！？』

まあ、執事故の点数だな。
ハヤテの召喚獣の装備は執事服に刀。
秀吉は一瞬でやられた。

「では、二人目の方、どうぞ」

「じゃあ、僕が行くよ」

「出たな、明久……！」

「俺が行こう」

出てきたのは須川。

「教科は日本史でお願いします」

「わかりました。　それでは、始めてください」

「「試獣召喚（サモン）！」」

『Ａクラス　吉井明久　ＶＳ　Ｆクラス　須川亮
日本史　４８６点　ＶＳ　４８点』

明久の得意科目の日本史は４００点オーバー。
つまり、腕輪持ちだ。
だが、明久は腕輪は使わないだろう。

「貴様に勝って麗奈たんを我が物に……」

「“閃光（ライトニング）”！」

須川が愚かなセリフを言った瞬間に、明久の召喚獣が光を纏い、須川を瞬殺した。
明久の腕輪“閃光”は、発動すると一秒毎に三点を消費し、召喚獣の能力、特に速さを上げるものらしい。
まあ、ムッツリーニの加速の強化版だ。

「次の三人目の方、どうぞ」

「……（スック）」

出てきたのはムッツリーニだ。

「ヒナギクちゃん、この戦い、ボクに譲ってもらってもいいかな？」

「ええ、いいわよ」

工藤がヒナギクに掛け合っていた。

元々ヒナギクが出るようだったが、相手は保健体育で最強と言われるムッツリーニ。

同じく保健体育を得意とする工藤は戦いたいのだろう。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。　よろしくね」

「教科は何にしますか？」

「……保健体育」

ムッツリーニの最強の武器だ。

「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね？」

原作通りの流れになるな。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？　……キミとは違って、実技で、ね♪」

ムッツリーニが鼻血を流さないだと？

「そっちのキミ、須川君だっけ？　保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？　もちろん、実技でね」

「望むところ――――」

『『『異端者を殺せーーー！！！』』』

こうなるのね。

須川はＦＦＦ団の連中にボコされていた。

「あははっ。　Ｆクラスの人って面白いね」

「そろそろ召喚を開始してください」

「はーい。　試獣召喚（サモン）っと」

「……試獣召喚（サモン）」

ムッツリーニは小太刀の二刀流。

工藤は原作通り、

「なんだあの巨大な斧は！？」

見るからに破壊力抜群の巨大な斧。

二人とも腕輪付だ。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

腕輪を光らせながら工藤の召喚獣が動いた。

「それじゃ、バイバイ。　ムッツリーニくん」

「……加速」

「……え？」

ムッツリーニの腕輪が光り、召喚獣が工藤の召喚獣を切り裂いた。

「……加速、終了」

『Ａクラス　工藤愛子　ＶＳ　Ｆクラス　土屋康太
保健体育　４４６点　ＶＳ　５７２点』

保健体育だけは強いな。
それでも俺の方が上だが。

「そ、そんな……！　この、ボクが……！」

「これで二対一ですね。　次の方は？」

「あ、は、はいっ。　私ですっ」

「それなら僕が相手をしよう」

俺を除くと、Ａクラス男子で最も成績がいい久保利光。
この世界ではそっちの気が無くて助かった。

「麗奈は出ないのか……。　だが、それはありがたい」

俺が主席、霧島が次席、僅か無さで三席に麗奈、四席争いをしてい

るのが久保と瑞希だ。

「ここが一番の心配どころだ」

だが心配しなくても瑞希が勝つさ。
原作通りならばな。

「科目はどうしますか？」

こちらは既に二つ使っている。
選択権は瑞希にある。

「総合科目でお願いします」

「な！？　姫路！？」

雄二の驚愕の声。
おそらく、総合教科を止めるように言っていたのだろう。

「坂本君、ごめんなさい。　でも、私は全力で久保君と戦いたい」

もしかしたら、久保×姫路になるかもな。

「姫路……。　だったら、絶対に勝ってこい！」

「はいっ！」

「よろしいですね？　それでは……」

「「試獣召喚（サモン）！」」

互いの召喚獣が呼び出され、一瞬で決着が付いた。

『Ａクラス　久保利光　ＶＳ　Ｆクラス　姫路瑞希
総合科目　３９９７点　ＶＳ　４４０９点』

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子、折原麗奈に匹敵するぞ……！』

点数差は４００点オーバー。
霧島に匹敵するが、おそらく麗奈の方が上だ。
聞く話によると、振り分けテストは全体的に出来が悪かったそうだ。
特に理数系の教科は全く駄目だったらしい。
珍しい事もあるものだ。

「ぐっ……！　姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。　皆の為に一生懸命な皆がいる、Ｆクラスが」

「Ｆクラスが好き？」

「はい。　だから、頑張れるんです」

明久がいなくてもこういう結果になったんだな。

「これで二対二です」

高橋女史も表情の変化が見られる。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラス代表霧島翔子。

「俺の出番だな」

Fクラスからは、元神童坂本雄二。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

原作通りに宣言した。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。　満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

このごちゃ混ぜの世界だからこそ、わからない勝負の結末。

おそらく雄二は勉強をしてないため、Aクラスの勝ちは揺るがないが、何かあるかもしれない。

「わかりました。　そうなると問題を用意しなければいけませんね。　少しこのまま待っていてください」

高橋女子は教室を出て行った。

「霧島、お前の事だから大丈夫だと思うが、気を抜くなよ。　これに勝てば、お前は雄二と繋がる」

「……わかってる。　だから負けられない」

「そうか。　だったら勝ってこい。　Ａクラスの代表の力、雄二に見せ付けてやれ」

「……うん」

「では、最後の勝負、日本史を行います。　参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

戻ってきた高橋女史が二人に声をかけた。

「……はい」

霧島が教室を出て行った。

「じゃ、行ってくるか」

雄二も出て行った。

「皆さんはモニターを見ていてください」

壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

『では、問題を配ります。　制限時間は五十分。　満点は百点です』

日本史担当の飯田先生が問題用紙を配った。

『不正行為は即失格になります。　いいですね？』

『……はい』

『わかっているさ』

『では、始めてください』

「霧島さん、大丈夫かな？」

「相手はあの坂本君ですしね」

「私たちは霧島さんを信じるだけですよ」

「そうだ。　俺たちには霧島を信じる事しかできない」

ディスプレイに問題が表示された。

《次の（）に正しい年号を記入しなさい。》

（　　）年　平城京に遷都

（　　）年　平安京に遷都

（　　）年　白騎士事件

（　　）年　大化の改新

……問題の順番変じゃね？

『システムデスクに！』

『うぉぉぉっ！』

Ｆクラスの連中が歓喜の雄たけびが聞こえる。

《日本史勝負　限定テスト　１００点満点》

《Ａクラス　霧島翔子　　９７点》

《Ｆクラス　坂本雄二　　５３点》

原作通り、Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

バカテス　終焉ＶＳＦクラス（前書き）

やっぱり主人公無双。

「三体二でＡクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだ俺たちに対する高橋女史の言葉。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ、坂本！　歯を食い縛れ！」

「皆さん落ち着いてください！」

「だいたい５３点って何だよ！　０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――」

「いかにも俺の全力だ」

偉そうに言うことじゃないよな。

『『『この阿呆がぁーッ！』』』

「あんたら落ち着きなさい！　アンタラだったら３０点も取れるかわかんないでしょうが！」

『『『それについては否定しない！』』』

本当に馬鹿だな。

「なあ雄二」

「なんだ？　シエン」

「お前らにチャンスをやろうか？」

「チャンス、だと？」

「そうだ。　お前ら、このまま設備が下がるの嫌だろ？」

『『『当たり前だ！』』』

「お前らの戦い見てたら俺も殺りたくなってな、一暴れしたい気分なんだ。　だから、お前らが俺に勝てば、学園長に掛け合って設備の低下だけでなく、ワンランクアップしてもらえるようにお願いしてやる。　ただし、負ければ通常の通りにワンランク下がる。　どうだ、やらないか？」

すでに高橋女史の許可は得ている。

「……何が目的だ？」

「目的？　そんなものは俺が殺りたいだけだ」

皆のを見てたら疼いてきちゃってね。

「で、やるのか？」

「……試合内容は？」

「俺は一人、お前らFクラスは何人でもいい。　で、全滅させたほうが勝ち。　ちなみに点数はリセットして、試召戦争が始まる前の状態だ」

「俺らの方が有利だな。　それでいいのか？」

「別にいい。　俺がやりたくなっただけだし、これくらいしないとお前は食いつかないだろ」

「それもそうだな。　それ乗った！　いいだろう？　お前ら！」

『『『勿論！』』』

Fクラスの連中にはいいこと尽くめだからな。

「ああそうそう霧島、約束はこのまま継続するから、悪いけど、この後にしてくれ」

「……わかった」

「じゃあ、俺はAクラスの教室にいる。　準備が出来たら来な」

俺は視聴覚室を後にし、Aクラスの教室に入る。

「お兄様、良かったのですか？」

「そうだよ。　あんな不利な試合申し込んでよかったの？」

まあそうだよな。

「俺が勝てない勝負をすると思うか？」

「しかし終焉様、流石に厳しいのでは？」

「傍から見ればな。　だけど、俺にはまだ見せてないものがあるだろう？」

「あ！　そう言えばまだ終焉の腕輪見てない！」

「確かにそうでしたわね。　実習ではいつも鋼糸と刀だけで勝っていましたし」

「つまり、その腕輪が勝利の鍵なのですね？」

「ああ」

まだ一度しか使ってないが、あいつらの度肝を抜くくらいは普通に出来る。
主席の俺＋学園一の操縦技術を持つ明久対Ｆクラスの戦いが気になるのか、もう帰っても良いのにＡクラスの連中が全員揃っている。

「……来たか」

Ａクラスに入ってくる総勢５０人のＦクラス。

「どうやら、俺の相手はＦクラス全員のようだな」

「ああ。　お前がやるんだ、こちらも最大の人数で挑ませてもらう」

「いいだろう。　こうでなければ面白くない」
「で、教科は何にするんだ？」
「勿論、総合科目だ」
「じゃあ、始めようか」
「ああ」
「高橋女史、お願いします」
「わかりました」
高橋女史はフィールドを展開した。
『『『試獣召喚（サモン）！』』』
Ｆクラスの全員と俺が同時に召喚する。
俺は相変らずの黒いロングコートにミニ絶刀、首にネックレスという姿だ。
『Ｆクラス　総合（４９人）　＋　姫路瑞希
総合科目　平均７９０点　＋　４４０９点』
Ｆクラスは圧倒的な量だ。
質がいいのは瑞希のみ。
『Ａクラス　折原終焉
総合科目　９６７９点』

だが、俺の点数は圧倒的だ。

『『『なっ！？』』』

『な、何だあの点数は！？　９６００点オーバー！？』

『次席の二倍以上だと！？』

『去年とは桁違いだぞ！？』

『あれが折原の本気だと言うのか！？』

『これが学年主席の力か！』

教室中からの声。

まあ、９６００点なんて普通は見れないからな。

「想像以上だな……」

「じゃあ、殺ろうか」

「それでは、始めてください」

高橋女子の声。

「最初から全力だ。　見ろ、これが俺の力だ」

ネックレスが光り、同時に俺の召喚獣も光に包まれた。

光が止むと、俺の召喚獣は絶刀に加えて黒い鎧のＩＳに包まれてい

た。

「そしてこれが腕輪の力だ」

腕輪が光り、再び召喚獣が光に包まれる。
光が晴れると、ＩＳが変化し、全身が機械となった。
蒼き八枚の翼を携えた、自由の名を持つ大天使、“ストライクフリーダム”となった。

「行くぜ。“フルバースト”！　果てろぉ！！」

俺は“スーパードラグーン”八機を展開し、全砲門同時砲撃“フルバースト”でＦクラスのモブたちの三分の二を倒す。

『『『な、何だ!?　あの圧倒的な力は!?』』』

だが、俺の点数は減っている。

『Ａクラス　折原終焉
総合科目　８５７９点』

ＩＳを使用時は毎秒５０点を消費し、腕輪使用時は毎秒１００点を消費する。
そして、ビーム砲などを使えば、さらに点数の消費は激しい。
だから、僅か数秒でここまで点数を消費したのだ。

「掛かってこいよ。　まさか、何もせずに終わるつもりじゃないだろうな？」

この程度ではつまらない。

「チェンジ」

腕輪の力で“ストライクフリーダム”から“ランスロット・アルビオン”へと変化させる。

「姿が変わった!?」

「俺の腕輪の能力はスタイル変更だ。　ＩＳは元から装備されている。　なぜだかは知らないがな」

学園長に問い合わせても原因はわからないようだ。

「話は後にしよう。　さあ掛かって来い」

Ｆクラスのモブ男子たちが一気に襲い掛かってくる。

島田、ムッツリーニ、秀吉、雄二、瑞希は後方で見ている。

戦力分析のつもりだろうか。

「そうこないとな。　行くぜ、ランスロット！」

エネンジーウイングを広げ、宙に浮く。

完全に飛行もできるが、それだと面白くない。

俺の召喚獣はＭＶＳを抜き放ち、二刀流でモブたちを切り刻む。

相手の武器諸共ぶった切るため、相手は大した手応えもなく消えていく。

「……後はお前らだけだ」

残ったのは後方で見ていた五人。

「……これは正直予想外だった。　これほどの力の差があるとはな。
だが、お前はその状態でいると点数をどんどん消費していく」

「そうだな」

「おかげでお前の点数は７０００まで落ちている」

「そうだな。　だが、俺が逃がすと思うか？」

「まったく思わねえな」

「来いよ。　正面から叩き潰してやる」

だが、誰も動かない。

「来ないのか？　だったら、もう終わらせる」

ランスロットを纏った召喚獣が宙を舞い、エナジーウイングから無数の刃状粒子を放つ。

「……へぇ、あれをよく避けたな、雄二、瑞樹」

あれを回避できていたのは雄二と瑞樹のみで、島田、秀吉、ムッツリーニの召喚獣は避けれずに消滅していた。

「……まったく、とんでもないことをするな」

「私のところにはあまり来なかったので……」

そうだったのか。
まだ狙いが甘いな。

「んじゃ、終わらせようか」

二丁のスーパーヴァリスを持ち、二人に狙いを定め、撃つ。
これは二人とも避けられたが、雄二は体制を崩していたので、ハドロン砲を撃って消滅させた。

「あとはお前一人だ」

「そうですね」

瑞樹の召喚獣の腕輪が光り、大剣から熱線が放たれた。
避けることもできるが、ここは受けて立つ。
二丁のスーパーヴァリスからのハドロン砲が、瑞樹の熱線とぶつかり合う。
熱線よりも、二線のハドロン砲が勝り、瑞樹の熱線を押し返して瑞樹の召喚獣を飲み込んだ。

「勝者、折原終焉」

もしもハドロン砲が一線だったら、熱線に撃ち負けていたな。
まあ、点数差があるから耐えれただろうけど。

「それなりに楽しかったぜ、雄二」

「……お前、最初からチャンスなんて与えるつもりなかっただろ？」

「お前らにとってはチャンスだが、俺にとっては楽しむつもりだっ

たからな。　誰が負ける戦いなんてすると思う？」

「しねえな。　あー一泡吹かせたかったぜ」

「精精頑張りな。　っと霧島、約束果たせよ」

「……わかってる」

「……！（カチャカチャカチャ！）」

ムッツリーニが撮影の準備をしている。

無駄なのに。

「わかっている。　何でも言え」

潔い。

だが、それで困るのはお前だ。

「……それじゃ――――」

一度瑞樹に視線を送り、再び雄二に戻した。

「……雄二、私と付き合って」

霧島の名言だと思うんだ、俺は。

「やっぱりな。　お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。　ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？　他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。　他の人なんて、興味ない」

「拒否権は？」

「……ない。　約束だから。　今からデートに行く」

「ぐぁっ！　放せ！　やっぱこの約束はなかったことに……」

「雄二、潔く付き合え。　俺は全力で応援するから」

「嫌だ！」

「……折原はいい人」

「名前でいいぞ。　と麗奈と紛らわしいしな。　それと霧島、連絡先教えとく。　何かあったら連絡してくれ」

「……わかった。　あと、私も名前でいい」

「んじゃ翔子、雄二と二人でいってらっしゃい」

「……うん」

翔子は雄二を連れて教室を出て行った。

「さて、Ｆクラスの皆。　お遊びの時間は終わりだ」

「なんだ鉄人。　俺たちに何か用なのか？」

「西村先生と呼べ。　お前たちに我がFクラスの補習について説明しようと思ってな」

来たー。

「おめでとう。　お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。　これから一年、死に物狂いで勉強ができるぞ」

『『『なにぃっ!?』』』

Fクラス男子の悲鳴が上がる。

「いいか。　確かにお前らはよくやった。　Fクラスがここまで来るとは思わなかった。　でもな、いくら『学力がすべてではない』と言っても、人生を渡っていく上では武器のひとつなんだ。　全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない」

本当に正論だよな。

「今はいないが、坂本は念入りに監視してやると伝えておけ。　なにせあいつはA級戦犯だからともな」

原作だとここに明久も入るんだが、観察処分者でも成績も生活態度も悪くないから含まれなかったようだ。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

「んじゃ、俺はＩＳ学園に戻るか」

模擬戦もあるしな。

ＩＳ　吉宗ＶＳ一夏（前書き）

バトルは短いです。

ＩＳ　吉宗ＶＳ一夏

ＩＳ学園に戻っても、まだ授業中であった。
と言っても、すでに六限目の後半であったのだが。
このまま入るのもあれなので、能力を使って姿も気配も完全に消して、しばらく暇をつぶしていた。
そして、暇つぶしも終わり、ついに模擬戦に。
結果はまず、一夏が勝った。
俺と吉宗の特訓のおかげで、剣の腕は原作以上に高く、知識に至っては俺が教えたため、全体的に原作の一夏よりも一回り以上強い。
よって、吉宗の相手は一夏となった。
俺は見ないと言ったのだが、吉宗が見ろといったので見ることに。
本来なら見るつもりはなかったのだが仕方がない。
そして、今二人はアリーナで向かい合っている。

『まさかお前が勝つとは思わなかったよ、一夏』

『お前とシエンに鍛えられたんだ。　負けるわけにはいかないんだよ』

『まあな。　終焉なら物凄い笑顔でお仕置きとかしそうだしな……』

否定しないけどさ……。
あと試合前になに黄昏てるんだよ。

Ｓｉｄｅ～吉宗～

自分で言ったことに落ち込んだ後、真面目にやることにした。

俺のＩＳの名は“大空（チェリー）”だ。
オレンジ色の装甲に覆われている。
今俺が持っている武器は二丁の銃。
さて、そろそろ試合が始まるか。

『３……２……１……試合開始！』

試合開始と同時に俺は右手の銃を撃ち放つ。
モデルはＸＡＮＸＵＳの銃で、それと酷似している。
放たれる弾丸は見た目炎だがレーザーで、威力はセシリアのスターライトｍｋ？の数倍以上だ。
だが、それでは威力が高すぎるので、普段はリミッターをかけてある。

「うおっ！」

俺が撃った炎はギリギリ回避された。

「へぇ……よく避けたな。　だが！」

長引かせてもいいが、終焉を待たせるだけだし、終わらせるか。

「“炎の鉄槌（マルテーロ・ディ・フィアンマ）”！！」

銃から連射して、巨大な炎の塊になって飛んでいく。

「げぇっ！」

あまりの大きさに一夏は驚き、一夏に直撃した。
普通に考えれば相当なダメージを追っていて、なおかつ戦えるかど

うかもわからない。
だが、俺の超直感が告げている。『一夏はまだ戦える』と。

「……あれを斬ったのか」

「ギリギリだったけどな……」

装甲のところどころが破損している一夏の姿があった。
そう、一夏は“炎の鉄槌”を“零落白夜”で斬り、あの攻撃に耐えたのだ。

「やるじゃん。　だけど、もう終わりだ」

銃のマガジンを素早く取り替え、リロードをし終えた。
再び銃を一夏に向ける。

「“怒りの爆発（スコッピオ・ディーラ）”！！」

「“零落白夜”！！」

極太の炎のレーザーと、一夏のエネルギー無効化攻撃がぶつかり合う。

「うおおおおお！！」

ダメージを負いながらも、少しずつ俺に接近してくる一夏。
“怒りの爆発”が“零落白夜”に負けたか。

「よくやったが、俺の勝ちだ」

俺は移動し、“零落白夜”の刃に触れない位置に、銃弾を撃ち込んだ。

『勝者、沢田吉宗』

俺の勝ちが決定した。

Ｓｉｄｅ～吉宗～ｏｕｔ

吉宗と一夏の試合が終わった。

一夏、“零落白夜”以外ほとんど何もしてないな。

「お疲れ、二人とも」

「ああ」

「……俺、ほとんど何もできてない……」

「にしても容赦なかったな。　一夏、“零落白夜”以外ほとんど何もできんかったじゃん」

「いやー一気にぶっ放したくなってな、つい大技連発しちまった」

“炎の鉄槌”に“怒りの爆発”……、“決別の一撃（コルポ・ダッディオ）”をしなかった分いいが……。

「あいつに教わったのか？」

これらの技はＸＡＮＸＵＳの技だ。
見よう見真似で覚えたのか、教えてもらったのか、教えてもらったのならば滅茶苦茶驚く。

「一部な。　練習してたら見つかって、なんか教えてくれた」

「マジかよ！？　あのあいつが！？」

「おうマジだ。　いやー最初は夢なんじゃねえかって思った」

あの傲岸不遜なＸＡＮＸＵＳに教わったって、物凄いことだぞ！？

「っと、あまりこの話はしない方がいいな」

思いっきり裏の話をしてしまった。
俺としたことが……。

「ま、明日は俺とやるから、準備しておけよ。　一夏とオルコットには頑張ってもらわないとな。　じゃないとつまらない」

やろうと思えば一分もかからないしな。

「吉宗、リミッターは外さなくていいから、本気でやれよ」

「当たり前だ。　お前に手抜いたら瞬殺されるっつうの。　一夏とかだから手抜けるんだよ。　そもそも本気出したら最初の一撃で決まってたしな」

「だろうな。　まあ、一夏が“零落白夜”使ってなかったら“炎の

鉄槌”で終わってたしな」

しかも出力を抑えてもいたしな。

本気で撃ったらあの程度の“零落白夜”でも打ち消せないだろう。

「じゃあな。　俺はもう戻る」

俺はピットを去った。

Ｓｉｄｅ～吉宗～

終焉は部屋に戻っていった。

っとそうだ。

俺もクラス代表ができないってこと伝えておかなきゃな。

マフィアのボス候補だし、やりたくないし、面倒だし。

「じゃ、俺も行くな」

一旦一夏たちと別れ、時間が経ってから千冬さんと会っている。

「話とは何だ？」

「クラス代表のことですよ。　千冬さん、俺がボス候補なのは知ってますよね？」

「ああ。　ドイツのときにもいろいろあったしな」

そこで種を仕込んだんだしね。

「もしかしたら現ボスからの召集があるかもしれませんし、俺は辞退しようと思いまして。　それに、俺が出たら誰も勝てませんしね」

俺が模擬戦をやったら終焉以外には勝てる自信がある。

「……やはりそうきたか。　だが、あの馬鹿にはなんと言うつもりだ？」

「どうせ一夏が騒ぐんで、押し付けたってことにしますよ。　あなたが強引に締めればそれで決定するので」

「……はぁ、わかった。　明日のＨＲで代表の決定をさせておく。　お前は折原との試合に備えておけよ。　クラス代表が決定しても、まだ試合が終わったわけではないのだからな」

「はい。　久しぶりに本気が出せそうですよ。　ああ、いい忘れてましたが、俺と終焉の試合には観客席に人は入れないでください。　巻き込まれても知りませんから」

俺が能力を使って理想的なアリーナに改造してあるので壊れはしないが、遮断シールドはわからない。
あれは常時能力を使用してないと利かない気がするから。

「わかった。　それも踏まえてＨＲで伝えておこう。　お前はもう戻れ」

「はい。　失礼します」

俺も部屋に戻った。

Ｓｉｄｅ～吉宗～ｏｕｔ

ＩＳ　吉宗ＶＳ一夏（後書き）

文才がほしい……。

ＩＳ　終焉ＶＳ一夏＆ａｍｐ；セシリア（前書き）

タイトルはああですが、実際のところは短いです。

ＩＳ　終焉ＶＳ一夏＆ａｍｐ；セシリア

一夏と吉宗の試合があった次の日のＨＲ。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。　あ、一繋がりでいい感じですね！」

原作通りに一夏がクラス代表になった。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になっているんでしょうか？　俺よりも吉宗の方が適任だと思うんですが」

「それは俺が辞退したからだ」

「沢田がクラス代表になると勝てる相手が折原しかいない。　これでは意味がないので、沢田がクラス代表になることは最初からなかったんだ」

「で、オルコットに勝った一夏がクラス代表になるってわけ。　わかったか？」

「まだシエンの試合が終わってないじゃん！」

悪足掻きだな。

「だから言ったろ、俺は文月にも行くから無理だと。　それと、俺は吉宗よりも強いと言っているだろう。　強さで吉宗がクラス代表になることができない時点で気づけ」

「だから、クラス代表は必然的にお前になるんだよ」

一夏は項垂れた。

「クラス代表は織斑一夏、依存はないな」

一夏以外は返事をした。

「あー言い忘れていたが、本日の沢田と折原の試合では観客席に入ることを禁ずる。　以上だ」

吉宗がなんか言ったみたいだな。

☆

「さて、俺と一夏・オルコットペアの試合だったな」

放課後、アリーナのピットで俺は試合の準備をしていた。

「折原、準備はいいか？」

《セイバー、アレを使う》

《アレですね。　準備万端です》

《わかった》

「ええ。　問題ないです」

俺の言うアレとは、単一仕様能力（ワンオフ・アビリティ）のことだ。

「行こう、フリーダム」

「「全身装甲！？」」

「！？」

千冬さんと山田先生は全身装甲であることに、吉宗は俺のＩＳが“ストライクフリーダム”であることに驚いているのだろう。

「ちょっと遊んできますよ」

俺は歩いてカタパルトに接続する。

『システムオールグリーン、進路クリアー。　発進どうぞ』

「折原終焉、フリーダム、出るぞ」

ガンダムのように飛び出す俺。

てか原作にこんなのあったか？

まあいいや。

「待たせたね」

もう既に一夏とセシリアはアリーナ上空に待機していた。

「「全身装甲！？」」

「話し合いくらいならしなよ。　少しなら待ってあげるから」

完全に上から目線。

相手よりも確実に上だからやれることだ。

どうせ全身装甲だからって理由で防御重視の機体とかって考えてるんだろうな。

「もう結構ですわ」

「そうか。　なら始めようか」

『3……2……1……開始！』

「これくらい避けろよ」

試合が開始すると同時に、俺は両手に持ったビームライフルと、腰のレール砲を発射する。

セシリアは余裕を持って、一夏は少し危なっかしかったが回避した。

俺はライフルをしまい、二本のビームサーベルを持ち、一夏に接近する。

「速い！」

「どうせ防御型の機体だと考えたのだろう。　だが、この機体……

“ストライクフリーダム”は全距離対応高機動殲滅型の機体だ！」

「「！？」」

「俺を少しは楽しませてくれよ！」

一夏は原作よりも強くなったとはいえ、明久やハヤテの剣に比べたら、一夏のそれは二人の足元にも及ばない。

セシリアと共闘したところで、単調な狙撃手と即席のペアになったところで、手数が増えただけでほとんど変わらない。

「おいおい、二人掛でもこの程度か？　だったら拍子抜けだぞ」

一夏の剣を軽くあしらいつつ、セシリアの狙撃も避け、切り裂き防ぐ。

正直、もう少し俺の予測を裏切ってほしいものだ。

「まだこの機体の力は出し切っていないと言うのに」

まだシールドもドラグーンもフルバーストも使っていない。

「……今のお前らにこれ以上は望めないか」

俺は一夏から距離を取り、ドラグーンを飛ばす。

「誘導兵器！？　その翼、誘導兵器でしたの！？」

「ここが戦いの場だと言うのを忘れているだろ」

ドラグーンを素早く展開し、ライフルとレール砲を構える。

「フルバースト！」

ライフル二丁、レール砲二門、腹部ビーム砲一門、スーパードラグーン八基の計十三の砲撃が放たれる。
それらは飛んでいた四基のビットを破壊し、ビット操作に集中し、ドラグーンに驚愕していたセシリアと、なぜか動かなかった一夏を捕らえた。
吉宗が『えげつな……』と言っていたのは気のせいだろう。

『勝者――折原終焉』

フルバーストを諸に喰らった二人のエネルギーは尽き、俺の勝利となった。
俺がピットに戻ると、放送があった。

『しばし休憩後、沢田吉宗と折原終焉の試合を行う。観客席にいる者は直ちにアリーナを出るように。観戦は認めない。繰り返す』

朝言っていたように、俺と吉宗の試合は観客者はピットの者だけになるのだろう。

「お前、何かしたのか？」

「ああ。俺とお前がやるんだ、被害が出ないわけないだろう？」

「それもそうだな。にしても、思いのほか手応えがなかったな」

「思いっきり遊んでたな、お前。最初からフルバーストで終わら

せればよかったのに、わざわざ長引かせてたんだしな」

「そもそも、フリーダムは仮の姿だ。　俺のＩＳは“ストライクフリーダム”ではない」

「またとんでもないものを考え付いたのか……」

「考えたんじゃない。　偶然だ」

単一仕様能力だからな。
偶々あれが発動したに過ぎない。

「まあ、楽しみにしてるよ」

「俺もだ」

ちょうど一夏とセシリア、箒が来た。

「もう少ししたら俺と吉宗の試合するから、お前らは見るならピットで見ろよ」

ここならまだいいと思う。　観客席は余波が来るんじゃないか？

「オルコット、俺が言ったことの意味わかったか？」

「代表候補生をやめろと言った意味ですか？」

「ああ。　お前、その意味に辿り着けたか？」

「あなたの考えと同じとは限りませんが、自分なりには」

「俺の考えを言うぞ。　もしお前が国家代表になったとすると、お前の発言は国の中でも影響力の大きくなる。　そんなお前が軽率に他国を侮辱したら、どうなるかはわかるよな？」

「国家間の問題になりますわ」

「そう。　だから、自分の立場を理解し、自分の影響力を理解していないお前のことを代表候補生失格だと言ったんだ。　まあ、今のお前を見る限りは大丈夫そうだけどな」

一夏との勝負が終わってから、セシリアは原作通りに変わっていた。

「……で、いつまでそこに隠れているつもりですか？　母さん、咲夜さん」

「「！？」」

出てきたのは俺の母さんとその従者の咲夜さんだった。
気配があったから気付いたぞ。

「流石は終焉。　気付いていましたか」

「母さん、元から隠れるつもりはなかったんでしょう？　母さんほどの人ならば織斑先生でも気付かない。　明らかに織斑先生にはばれていましたよ」

「火織さん、なぜ隠れていたのですか？」

「なんとなくですね」

「母さん……」

それでいいのかよ……。

「火織さん、今日はなぜここに？」

「終焉と吉宗の試合があると聞いたのでデータ収集に」

「それは建前で、本音は単に俺のＩＳの仕上がりを見たかっただけなのでは？」

「そうですが何か？　私は終焉の本気が見たいと前に言ったはずですが」

「火織様も臨也様も、終焉様の本気が知りたいのですよ。終焉様が本気で戦える相手は極僅か。しかもＩＳでとなると、相手は吉宗様以外いらっしゃいません。仕方がありませんよ」

「……わかってますけど、それでいいのか？　会社の社長がそんなので」

「そこは私の権限と臨也の力でどうにでもなります」

流石は世界一の権限を持つ夫婦だな……。

「終焉？　その人は一体……」

「ＫＡＮＺＡＫＩグループ社長で俺の母親の折原火織と、その専属メイドの十六夜咲夜さんだ」

「「「えええええ！？！？」」」

一夏、箒、セシリアが驚愕の声を上げた。

「この人が終焉のお母さん！？　若っ！」

「とても高校生になる子供の母親には見えんぞ……」

「一体どうしたらあそこまでお綺麗なのでしょうか……？」

母さんは三十後半になるのだが、二十代前半に見えるほど若々しい。
父さんも四十代なのに二十代に見えると言う、若い夫婦なのだ。
ちなみに、デュララのキャラは全員若く見える。
なぜだ？

「終焉、そろそろ始めてもいいか？」

「構わない。　俺も疼いてきたんでな」

「咲夜、データ収集の準備を」

「はい」

一応データも取るようだ。
本気で黒騎士（ブラック・オーガ）を使ったことはなかったからな。

「先に行っているから」

「わかった」

吉宗は大空（チェリー）を纏い、カタパルトに接続した。

『システムオールグリーン、進路クリアー。　発進どうぞ』

「沢田吉宗、チェリー、出る」

吉宗はアリーナの上空へと飛んだ。

「俺も行くとするか。　行くぞ、オーガ」

漆黒の装甲と、“ストライクフリーダム”と“デスティニー”の翼が合わさったような、左右五対の十枚の翼、翼に取り付けられた二つのＧＮドライブ。
これが俺のＩＳ“黒騎士（ブラック・オーガ）”の真の姿だ。

「んじゃ、派手に暴れますか！」

初めて本気でこいつを使えるんだ、テンションも上がる。

『カタパルト接続確認。　進路クリアー、発進どうぞ』

「折原終焉、黒騎士（ブラック・オーガ）、出るぞ！」

漆黒の堕天使が大空に舞い上がった。

ＩＳ　終焉ＶＳ一夏＆ａｍｐ；セシリア（後書き）

次回は終焉と吉宗の試合です。
うまく書ける自信はまったく持ってありませんが。

ＩＳ　最強の戦い　終焉ＶＳ吉宗（前書き）

ちょっと書き方を変えてみました。

ＩＳ　最強の戦い　終焉ＶＳ吉宗

「それがお前のＩＳか」

「ああ。　名は黒騎士（ブラック・オーガ）。　俺が手掛けた傑作だ」

「……だな。　そいつを超えるＩＳは未来永劫ありえないかもな」

ＧＮドライブは現在の技術では到底作り出すことのできない代物だ。
それに、終焉の持つＧＮドライブは“未元物質”がなければ作れない。
“未元物質”を使用した部品があるため、いくら解析しても複製すらもできない。
まあ、技術が今の何十、何百倍も発展しても複製がやっとだろう。
オリジナルのＧＮドライブを作れるのは、今現在神か終焉だけだ。

「じゃあ、やろうか」

「そうだな。　俺も、お前とそいつと戦うのが楽しみで仕方がないんでな」

「俺もだ。　ようやくこいつを本気で使えると思うと、疼いて仕方がないんだよ」

終焉は今まで本気も出すまでもなく終わっていたが、今回は全力を出してもアリーナは吉宗の力により破損しない。
相手は吉宗で申し分ない相手だ。

『３……２……１……試合開始！』

「行くぜ、吉宗！」

終焉は一振りの剣を呼び出す。
だが、その剣はただの剣ではない。

「！　それは……まさか！」

吉宗は気づいた。
終焉の持つ剣は視えないのだ。

「そう。　そのまさかだ」

「なら俺も最初から全力だ！」

吉宗は二丁の銃を呼び出した。

「“炎の嵐（テンペスタ・ディ・フィアンマ）”！」

高速機動をしながらの乱射。
乱射だがその精度は良く、嵐のような怒涛の攻撃だった。

「お前の技か！　ならば！　“風王結界（インビジブル・エア）”！」

終焉は不可視の剣に纏わせていた風を炎にぶつけて相殺する。
だが、俺の剣は不可視のままだ。

「厄介だな！」

「照れるな」

「褒めてねえよ！」

「冗談だ」

終焉と吉宗は戦いであるにも拘らず、笑いながら戦っていた。

「これならどうだ！　“炎の鉄槌（マルテーロ・ディ・フィアンマ）”！」

「避ける！」

「逃がすか！」

銃を連射し次々に炎弾を放つ吉宗と、それを苦もなく避ける終焉。

「切り裂け！　“風王結界”！」

膨大な風の刃が吉宗に襲いかかる。

「ちっ！」

吉宗は銃をしまい一振りの刀を呼び出し、風の刃を受け止めた。

収納と展開の速度は速く、『高速切替（ラピッド・スイッチ）』と同等の速度だった。

「あれを受け止めるか。　そうこなくてはお前じゃない！」

終焉は距離を取った。

「これが俺の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の一端だ！　開け、財宝の扉！」

「まさか……！」

終焉の背後に金色の幕が現れる。

「“王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）”！！」

その幕からは剣や斧など、様々な武器が飛び出していた。

「おいおいマジかよ……」

“王の財宝”の出現に、吉宗は正直呆れていた。

「この数の前にどう出る？　吉宗！」

「こう出る！」

吉宗は再び銃を呼び出し、射出される武器を避け、必要なものを炎弾で撃ち落す。

「いつまで弾丸が保つか見ものだな！」

「“炎の鉄槌”！！」

二丁の銃から放たれる炎の。

それは射出される武器には諸共せず終焉に近づく。

「なるほどな。　だが、まだ届かない！　ＧＮフィールド展開！」

終焉の前方に展開し、吉宗の“炎の鉄槌”を防いだ。

「……威力が落ちていると言っても、全力だぞ？　それをいとも簡単に……」

「こいつは万能型ＩＳだ。　近距離も遠距離も高速機動もなんでもできる」

終焉のＩＳ黒騎士（ブラック・オーガ）は攻撃でも防御でも何でも来いのドチートＩＳだ。

「なあ吉宗」

「何だ終焉？」

「次の一撃で終わらせないか？」

「……いいねえそれ」

「じゃあ、同時に全力の大技でどうだ？」

「いいだろう。　その勝負乗った」

「じゃあ、やろうか」

終焉は不可視の剣を握り締める。
吉宗は右手を後方に向ける。
終焉の持つ不可視の剣が眩い光を放つ。
吉宗の右手から膨大な炎が噴出され、左手がオレンジの炎に包まれる。

「行くぞ！　吉宗！！」

「ああ！　終焉！！」

「「これが俺の全力だ！！！」」

終焉の剣がさらに大きな光を発する。

吉宗の右手が大きく輝く。

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）ァァァァァ！！！！！」

「Ｘ（イクス）　ＢＵＲＮＥＲ（バーナー）ァァァァァ！！！！！」

光の斬撃と炎の奔流がぶつかり合う。

「はあああああああ！！！！！」

「うおおおおおお！！！！！」

アリーナに二人の雄叫びが響く。

ドゴオオオオオン！！！！！

アリーナに轟音が鳴り響いた。

『勝者――――折原終焉』

この戦いを征したのは終焉であった。
そして、戦いを終えた二人を迎えたのは静かな空気だった。

「何ですか、この静けさは？」

「……やりすぎだ、馬鹿者共」

呆れたように言う千冬。
二人が最後に放った技に呆れているようだ。

「いいじゃないですか。　俺と終焉なんですから、これくらいしないと」

「そうですよ。　こいつの本気が出せると思ったらあれくらいしなきゃ、こっちの気が済みませんよ」

そして、二人は同時に言い放った。

「「あれでもリミッター掛かってますし、そもそもまだあの技以上の技も使えますし」」

その台詞に千冬は呆れて溜息をつき、一夏たちは驚きすぎてフリーズしていた。
普段通りでいたのは終焉の母である火織と、そのメイドの咲夜だけであった。

「あの技と、あの技以上の技の使用を禁止する。　使用するには私の許可を得てからにしろ」

「「え～～～」」

「え～ではない。　これは絶対だ。　わかったな？」

「「は～い」」

やる気のない返事。
二人は守るつもりがあるのだろうか？

「終焉、吉宗、いい試合を見させていただきました」

「母さん（火織さん）」

「あの試合には満足しました。　データも十分取れましたし、映像も手に入れました。　あれほどの試合ならば、臨也も満足するでしょう」

「父さんのことですから、生で見たかったと言うんじゃないでしょうか？」

「そうですね。　そのときはまた、お願いしますね。　許可は取らせますのでね」

最後の一言を言ったときの火織の表情が黒く、終焉も吉宗も固まった。
そして、何か不穏な空気を感じ取ったのか、千冬は身震いをしていた。

「それでは、私たちはこれで失礼します」

そう言って、火織と咲夜は去っていった。

そして、ピットは再び静けさに包まれた。

その静けさを破ったのは一夏であった。

「シエン、お前のＩＳって何なんだ？」

「オーガのことか。　まあいいか、特別に教えてやる。　吉宗と戦ったときの姿が本来の姿で名を黒騎士（ブラック・オーガ）と言う。　で、お前とオルコットと戦ったときの姿は、俺の単一仕様能力で変えたものだ」

「どのようなものなのだ？」

「白式の単一仕様能力が『無効化攻撃』の“零落白夜”だろ？」

「ああ」

「俺のオーガの単一仕様能力の名は“夢幻（むげん）”。　『夢幻（ゆめまぼろし）を体現する』力だ」

「「「夢幻を体現する力……」」」

「つまり、お前の意思に反応して能力を変える単一仕様能力ってことか？」

「そうだ。　一夏とオルコットと戦うときはあの機体をイメージし、吉宗のときにやった金幕の技あっただろ？　あのときは無限の武器を射出することをイメージして行使していたんだ」

そう言われて、一夏たちはあることに気づく。

「なあそれって……」

「とんでもない能力ではないのか……？」

「そうですわ。　シエン様の仰ったことから考えますと、どんな機体にでもなれて、どんな機体の単一仕様能力も再現できるのでは？」

「できるぞ。　やろうと思えば白式の“零落白夜”も、白式やブルー・ティアーズにすることも可能だ」

「生身でもドチートなのに、ＩＳまでもドチートかよ……」

それが折原終焉という人間なのだ。

「ってオルコット、『シエン様』って何だ？」

「はい。　シエン様はわたくしの重大な過ちを指摘してくださいました。　ですので、こう呼ばせていただきました。　それに、シエン様は年上ですし、他にもそう呼んでいらっしゃる方がいらっしゃるので、わたくしもと」

終焉の長月中のファンクラブの会員だった者が言っていた呼び方が、ＩＳ学園でも浸透していっているのだ。

終焉はまだ知らぬが、ここでもファンクラブが勃発しようとしている。

「またここでもその呼び名なのか……」

「ドンマイ終焉」

「お前は学校中の女子に様付けで呼ばれたことがないから言えるんだよ……。　もう慣れてしまったが、初めは結構辛いんだぞ？」

経験者だからわかる言葉。

現在進行形でもある。

「シエン、お前は中学でどんな生活を送っていたんだ？」

「話してやるからまずはここを出よう」

話し込んでいたが、未だにピット内であったので、終焉たちは寮へと戻っていった。

そして、終焉の中学時代の話を聞いた一夏たちは、その異常な生活に驚き、そのときに付けられた二つ名“終焉の剣（ジ・エンド）”“天修羅（てんしゅら）”の名を聞いた一夏はその名を知っていたのか、驚き叫んだりした。

ＩＳ　最強の戦い　終焉ＶＳ吉宗（後書き）

どうでしたか？

戦闘描写には不安しかありませんが、ご期待に添えたでしょうか？

ＩＳ　一夏の就任パーティー

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

なぜか一夏が墜落した日の夕食後、一夏のクラス代表就任パーティーが執り行われた。

「お前考えたか？」

「まったく。　成り行きで言うしかない」

「だよなー」

二人はこれから来るであろうインタビューをどうするか、考えたのだが、途中で面倒になったのでやめたのだ。

「はいはーい、新聞部でーす。　話題の新入生、織斑一夏君と、あの織斑先生に勝ったという逸話を持つ、沢田吉宗君と折原シエン君にインタビューをしに来ました～！」

周りはオーとさらに盛り上がる。

「あ、私は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）。　よろしくね。新聞部副部長やってまーす」

二人は知ってます。

でも、二人とも名刺は受け取っていた。

「ではまず織斑君！　クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「まあ、なんというか、頑張ります」

「えー。　もっといいコメントちょうだいよ～。　俺に障るとヤケドするぜ、とか！」

「自分、不器用ですから」

「う～ん、じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

原作通りだです。

「次は沢田君。　織斑先生に勝ったって本当？」

「ああ。　事実だ。　ちなみに、終焉も勝ったぞ」

「へー。　じゃあ、何か皆に一言！」

「目的のためならば手段を選ばない。　邪魔をするなら容赦はしない」

「格好いいからあり！　じゃあ折原君、ここに来た感想は？」

「どうでもいい。　俺は面白ければいい。　まあ、うざいのは勘弁だがな」

「んーじゃあ皆に一言お願い！」

「俺の邪魔をするならば女であろうと容赦はしない」

吉宗と似ている。

だが、終焉はそれに加えてさらに付け加えた。

「あと、俺は情報屋だ。　報酬があれば調べてやるし情報もやる。逆に、俺にとって有益な情報ならば買ってやる。　大抵のことなら問題ない。　依頼するなら来な」

「最後に宣伝あったけどありで！　あ、一個質問。　誰からの依頼でも受けるの？」

「それは基本報酬次第だ。　それに見合った情報を提供しよう」

後は終焉の気分次第だ。

「最後にセシリアちゃんもコメント頂戴」

原作通りだったので割愛。

「写真頂戴。　男三人と、専用機持ち四人で」

「んじゃ、とっとと撮るか」

「ああ」

終焉は閃いた。

「なんか小道具あった方がよくないか？」

「あった方がいいけど、そういうのってないから断念……」

「あるんだな、それが」

「……どこから出したんだ？　それ……明らかに服には隠せないサイズだよな……？」

終焉が取り出したのは2メートルを超える長刀の絶刀だ。

「お前らも持て。　刀ならまだあるぞ。　刀以外の方がいいか？」

「いや、刀でいい」

「俺もだ。　ってかどんだけ持ってるんだよ？」

終焉はさらに二本の刀を出し、吉宗と一夏に渡す。

「男三人が刀持ってるっていい！」

「っておい！　これ、真剣じゃないのか！？」

「何当たり前なこと言ってるんだお前は。　真剣に決まってるだろ」

そもそも終焉は模造刀なんて持たない。

「抜刀しておいた方がいいよな」

「ポーズは各々で決めろ」

「じゃあ俺はシンプルに……」

終焉の左に吉宗、右に一夏が日本刀を抜刀して構えた。

「俺が真ん中なのね」

いつの間にかこの立ち居地になっていた。

「だって年上だし」

「刀を持つようにしたのも終焉だし」

「まあいいけど」

終焉は絶刀を抜き放ち、カメラの方へと刃を向ける。

「綺麗……」

「黒き刀だと……！」

「かっこいい……」

女子たちが呆けながらも何か言っている。

「俺はこれでいいぞ」

「俺もだ」

「俺も大丈夫です」

「じゃあいくわよー。　はいチーズ！」

シャッターが切られる。

「うーんいい！　すっごく絵になるわ！！」

薫子は興奮気味だ。

「あーそれ、勝手に二次配布したら斬るんで」

終焉はいろいろと面倒なことになりそうだしな。

「じゃあ最後に四人で並んで撮ろうか」

終焉、一夏、セシリア、吉宗の順に並んだ。

「それじゃあ撮るよー。　３５×５１÷２４は～？」

「「７４，３７５」」

「お、正解」

シャッターが切られた。

「何で全員入ってるんだ？」

原作通り全員乱入した。

「抜け駆けは駄目だよー」

「クラスの思い出になるしさー」

「ねー」

ともあれ、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時まで続いたのだが、吉宗と終焉はこっそりと途中で抜け出していたとさ。

☆

「出てきたらどうだ？」

「更識家十七代目当主の更識楯無さんよぉ」

パーティーを抜け出したのは、終焉たちを見る目があったからだ。

「気づいていたのね」

扇子を持つ、水色の髪の毛の女子生徒。

「俺たちに何のようだ？　更識楯無」

「俺たちの素性を嗅ぎ回っているみたいだな」

彼女の名は更識楯無。

対暗部用暗部『更識家』の十七代目当主であり、ロシアの代表ＩＳ操縦者である。

「あんたらは『折原』を敵にするつもりか？」

『折原』。

終焉の父である折原臨也は世界の情報屋として世界中の情報を持っており、世界中の重役の弱みを握っていたりする。

折原臨也を独占しようとし、私利私欲のために利用しようとした国が過去に存在したのだが、臨也の巧みな情報操作により、その国は弾圧された。

そんなこともあり、世界中の政府は臨也を危険視し、臨也と大きな関わりを持つＫＡＮＺＡＫＩグループに手を出そうとはしない。

もしそんなことをしたら最後、臨也の手によりそれを起こした人間、国は徹底的に潰されてしまうであろう。

「父さんはあんたらの弱みも持っているぞ？　俺個人としても、あんたと、その従者の布仏の情報も握っている。　あんたらの知られたくない恥ずかしい過去を全世界に公開されたいのならば別に構わないのだが」

終焉も独自のコネを作り、様々な情報を入手できるようになった。

特に、関わりの持ちそうな人と、その関係者の情報を徹底的に集めている。

「たとえば、こんなのもあるけど……」

終焉は楯無の耳元でささやく。

すると、楯無は顔を青ざめた。

「な、なんでそんなことを知ってるの……？」

「俺を舐めるなよ。　俺は折原臨也の息子だぞ？　この程度の情報を手に入れれずに情報屋なんてやるかよ」

今の終焉は、昔の臨也並……いや、それ以上の情報網を持っている。普通では調べれないことも知っていたりする。

「まだまだあるぞ？　ちなみに布仏の情報もな」

「それでもまだ俺たちを嗅ぎまわるのか？」

「そ、それは遠慮しておくわ……。　ああいうのをばらされたら堪ったものじゃないし……」

終焉が言ったことは、楯無を恐怖させるには十分だった。

「で、俺たちは行っていいのか？」

「え、ええ、構わないわ」

すっかり終焉の情報に恐怖した楯無は終焉と吉宗を逃がしていた。正確には、楯無が逃がされたのだが。

方やイタリア最強のマフィア、ボンゴレファミリー十一代目ボス候補の吉宗、方や『折原』の名を持ち、独自の情報網を持ち、圧倒的な力を持つ終焉。

そんな二人を相手にしたのだが、楯無は一方的に言い包められ、なす術もなく逃がし、逃がされたのだった。

「で、あいつは何がしたかったんだろうな」

「さあな。　まあ、俺たちの素性を探るなら、潰すだけだ」

あまり知られたくない。
特にマフィアについては、ボンゴレがもみ消しているが、それでもばれないと言う保証はないのだ。

「もしかして、部屋に入れなかったから盗聴器でも付けようとしたんじゃないか？」

「それもそうだな。　まあ、俺たちにつけたところで即効でばれるんだけどな」

そんな話をしながら部屋に戻ったのであった。

ＩＳ　一夏の就任パーティー（後書き）

楯無さん登場してけどほとんど空気……。

バカテス　清涼祭準備

桜色の花びらが徐々に姿を消し、変わりに新緑が芽吹き始めた頃（五月です）。
ＩＳ学園には中国代表候補生凰鈴音が転校してきて、一夏と喧嘩中である。

そして、終焉は今、文月学園にいた。
文月の学園長に呼び出されたのだ。

「俺を呼んだのは『清涼祭』についてですか？」

今、文月学園では『清涼祭』の準備が始まっている。

「そうさね。　あんたには召喚大会に出てもらう」

「あれですか。　景品の腕輪は大丈夫なんですか？」

「そんなことも知ってるのかね、あんたは？」

「ええ。　俺の点数では確実に暴走しますよ」

「わかってるさね。　あんたに出てもらうのは、宣伝のためさ。
あんたは三人しか存在しない男のＩＳ操縦者だ。　だから、宣伝のために出てもらうのさ。　あと、Ｆクラスの坂本たちの手助けをね」

「雄二を利用する気ですか。　雄二のペアは誰ですか？」

「木下秀吉さね」

（秀吉か。　原作では明久だが、どうせ麗奈と出るだろう。　腕輪の欠陥を光の炎の力でどうにかできないか？）

終焉は考える。
腕輪の欠陥は入出力が一定水準を超えたら起こるものだ。
その水準の限界をなくせばどうにかなるのでは、と考えているのだ。

「一度その腕輪を一日ばかり貸してください。　原因を探ってみます。　可能ならば、その不具合も取り除きます」

終焉はＩＳを一人で完成させれるだけの頭脳がある。
腕輪の解析くらい余裕でできる。

「わかった。　今日一日貸そう。　あと、今日呼んだのはもう一つある」

「……依頼ですね」

「そうさね。　教頭の竹原について調べてもらいたい」

「報酬は？」

「これでどうだね？」

学園長は指を三本立てる。
三万円だ。

「……わかりました、その依頼を受けましょう。　本来ならもう少し上げたいところですが、学園存続の危機ですし、それで手を打ち

ましょう」

終焉は五万は欲しいところだが、相手はここの学園長でもあり、これは学園存続にも関わってくるため、妥協したのだ。

「あ、それと、もし不具合が取り除けても雄二たちには知らせずに続けさせてください。　その方が面白そうなんで」

「わかったさね」

「俺のペアは自由に決めていいんですか？」

「言い忘れてさね。　あんたには一人で出てもらうさね」

「はい？」

「あんたの召喚獣は謎だしね、実力も十分。　大抵の相手には勝てるはずさね」

「俺に一人で無双しろと言いたいんですね。　まあわかりました」

「あと他にも何かやってもらうかも知れないから、そのときは頼むよ」

「了解。　あ、もしかしたら今回の学園祭に羽島幽平とカメラが来ますんでそのつもりで」

「どうやって取り付けたんさね！？」

「父さんの友達？　の弟なんで、俺もそれなりに知り合ってるんで

す。　で、前にテレビ出ないかって誘われたんで、どうせならここの宣伝も含めて呼んでしまおうと」

「こっちには何の相談もなしなのかい！？」

「どうせ了承すると思ったんで。　羽島幽平と俺の名前は大きいと思いますよ？」

「……仕方がないさね」

現金な人である。

「あー最後に一つだけいいですか？」

「なんさね？」

「今はいろいろやって誤魔化してますが、ここ、盗聴器仕掛けられてますからお気をつけて」

そう忠告して終焉はＡクラスへと向かった。
Ａクラスに入ると、Ａクラスの人たちがあっちこっち右往左往していた。

「あ、シエン。　来たなら手伝ってくれないかな？」

「そのつもりだ。　で、Ａクラスはメイド喫茶だったけか」

「うん。　僕たち男子陣はウエイターもやるけど、裏方の仕事をする人が多いよ」

ここもだが、なぜか女子のレベルが高いのだ。

「で、お前はどうなんだ？」

「僕は基本厨房だよ。　少しはウエイターをやるみたいだけどね」

「ハヤテも両方だろうな」

「うん。　ウエイターやウエイトレスの練習はハヤテが中心にやってるよ。　いいお手本だからクオリティーが高かったりするんだ」

「なるほどな。　で、俺にできることはないか？」

「あ、折原君、ちょっといいかしら？」

終焉に話しかけてきたのは、秀吉の双子の姉の木下優子であった。

「木下か。　なんだ？」

「こっちを手伝ってもらってもいいかしら？」

「わかった」

それから、終焉はあっちこっちと、クラスメイトと共に清涼祭の準備に励んだのだった。

☆

「さて、解析するか」

終焉は貸してもらった二つの腕輪の解析を始めていた。

「ふーん、なるほどね。　直せるが、少し面倒だな」

終焉は一つのリングを呼び出す。
そして、そのリングを指に嵌めた。

「もう複製はできるから、実験してみるか」

終焉が嵌めたリングは光のリングだ。
光のリングの炎の効果を試そうとしているのだ。

「どうなるか、楽しみだな」

光の炎の属性は“解放”。
あらゆるものの制限をなくしたり、その名の通り、縛られているものを解いたりすることもできる。
終焉はこの性質を利用してみるのだ。

ボワッ！

白き光の炎が輝く。
そして、白き光が腕輪に吸い込まれていくように消えてゆく。

「これでどうだ？　……お、上限が伸びた。　この点数ならＡクラスの中堅くらいでも暴走しないな」

結果は上手くいった。
今の水準ならば、ＦクラスからＡクラス中堅でも暴走しない。
ハヤテでも使えるほどだ（ハヤテの家庭科は圧倒的だが、それは総合科目には含まれていないので、総合科目ではＡクラスの中の上くらい）。

「もう少し上限を引き上げるか。　決勝で俺と当たる奴にプレゼントしよう」

終焉は決勝までいくつもりで、なおかつ優勝する気満々だ。
終焉は危ない相手の明久と麗奈のペアやとは違うブロックで、決勝で当たることになっている。
だから、危険な相手のいない終焉は決勝に行く自信があるのだ。

「決勝に行くまでで俺を楽しませてくれる奴がいるといいな」

単体では最強の実力を誇る終焉だが、相手のほうが数は上なため、僅かながら期待をしているようだ。
召喚獣での勝負で終焉といい勝負ができるのは学園一の操作技術を持つ明久のみ。
だが、終焉は気づいている。
自分といい勝負できる人がいないと。
だからこそ、決勝が楽しみであり、自分を楽しませてくれる相手がいて欲しいと願うのだ。

「俺の期待をいい意味で裏切ってくれる人がいてくれると、俺は嬉しいな……」

チートであるが故の悩みであった。

バカテス　清涼祭開幕

清涼祭当日。
すでに終焉たちは着替えており、ウエイターは執事服、ウエイトレスはメイド服を早くも着ている。

「さっきFクラスの中身見てみたけど、流石は雄二だ。　クラスが見違えていた」

「本当に流石だよね。　にしても、何で雄二はやる気を出したんだろう？」

「何かあったんだろう。　詳しくはわからんがな」

終焉が翔子に逃げている雄二の居場所をムッツリーニ教えて、原作通りの流れになったのだ。

「皆さん、味見用のシフォンケーキができましたよ」

ハヤテがシフォンケーキを持ってやってきた。
終焉、明久、麗奈、翔子、優子、ヒナギク、工藤愛子、久保利光らAクラスのトップ陣がそれぞれ試食した。

「流石だな。　文句無しだ」

「うん。　ふわふわしていて美味しいよ」

「美味しいです。　ハヤテ、後で作り方を教えてくれませんか？」

「いいですよ」

「……美味しい」

「これ、美味しいけど……」

「何か複雑だよね……」

「女のプライドがズタズタにされる味ね……」

「彼の仕事上仕方がないことじゃないかな？」

優子、愛子、ヒナギクはハヤテの腕前に落ち込み、利光はそれを慰めていた。

「んじゃ、俺は試験召喚大会の一回戦に行ってくるから、店は任せたぞ」

「うん、いってらっしゃい。　シエンなら大丈夫だと思うけど、決勝で戦おう」

「ああ。　お前こそ、翔子や雄二に負けるなよ」

「霧島さんはきついけど、負けるつもりはないよ」

「……私だって負けない。　プレミアチケットが掛かってるから」

「まあ、決勝で誰と当たるか楽しみだ」

終焉は会場へと向かった。

☆

「それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージで大会が行われる。

「三回戦までは一般公開もないので、全力を出してください」

立会人を務めるのは数学の長谷川先生。

勝負科目は数学だ。

「げ！　折原！」

「マジかよ！　クソッ、もうリタイアかよ……！」

「誰かと思ったらFクラスの須川に近藤か」

相手はFクラスの二人。

前回Fクラス全員と終焉一人の試召戦争があり、そのときに圧倒的な力の差を見せ付けられたため、二人はもう諦めていた。

「では、召喚してください」

「「「試獣召喚（サモン）（……）」」」

三人の召喚獣が現れ、Fクラスの二人の召喚獣が消滅した。

『Ａクラス　折原終焉
数学　９１７点　』

遅れて点数が表示された。
最早この点数の相手に勝てるわけがない。
二人の点数を合計しても、終焉の点数との差は８００近くあった。

「勝者、折原終焉！」

終焉は教室へと戻った。

「盛況だな」

Ａクラスに入ってから終焉が最初に言った言葉だった。
Ａクラスはウエイトレス、ウエイター共にレベルが高く、ハヤテ監修の元、接客もメニューも完璧だ。
流石は本物の現役執事。

「あ、お兄様、戻ったのなら手伝ってください」

「あ、悪い。　あまりの盛況ぶりに見入っていた。　すぐ手伝う」

「お願いします」

終焉はホールに出ると、女性から指名で慌しく動いていた。
元々いろいろな意味で有名な終焉は、ＩＳに乗れることが判明してから余計に有名になり、同年代の女子に絶大な人気を誇っていたのだ。
そんな終焉の接客を受けれるとなると、必然と指名が多くなるのだ。

「シエン、僕と麗奈は一回戦行ってくるから」

「わかった。　負けるなよ」

「もちろん」

「行きましょう明久さん。　早く戻ってこちらに戻りましょう」

「うん。　じゃあ行ってくるね」

「勝ってこい」

終焉の激励を受けた明久と麗奈は大会の会場へと向かっていった。

程なくして返ってきた二人は、もちろん勝った。

明久は持ち前の操縦技術で相手を圧倒し、麗奈も加わり瞬殺だったそうだ。

「シエン様、サインください！」

「私にも！」

女性客の一人がそう言うと、それが広がりサインを欲しがる客があっという間に増えた。

「ちょ、押すな！　離れてくれ！」

「静かにしてください」

凛とした声が響く。

「お客様方、当店ではそのようなことは行っておりません。　申し訳ありませんが、お静まりください」

その声の主は利光だった。

執事服を纏い、本職のような雰囲気を纏っていた。

「ですが、メニューのほうには料金を支払っていただければ、ご指名した執事、メイドとのツーショット写真を撮ることができます。　代わりといっては何ですが、こちらの方でお引きください」

利光がそう言うと、女子たちは引いていき、ツーショット写真を撮るために注文していった。

「久保、ありがとう。　助かった」

「騒ぎを起こされると他の客に迷惑になるからね。　こうする他なかったんだ。　写真の注文が殺到するだろうけど、頑張ってくれ」

「ああ。　ありがとな」

利光は自らの仕事へと戻っていった。

終焉は写真の注文が殺到し、あっちこっち呼ばれて写真を撮り続けた。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。　二―Ｆの中華喫茶は酷かったしな！』

『テーブルが腐ってたし、虫も湧いてたしな！』

終焉たちが仕事をしていると、店内で大声を出す客がいた。
Fクラスの営業妨害を目的とした馬鹿コンビだ。

「ねえ、シエン……」

「わかっている」

「終焉様、どういたしましょうか？」

「俺が殺る」

「字が違う気がするけど、今回は仕方がないよね」

「ああ。　一応周りを気にかけておいてくれ。　……翔子！」

「……何、終焉？　あいつら？」

「ああ。　お前の大好きな雄二のいるFクラスの営業妨害をしてやがる馬鹿共だ。　こっちの営業に多少支障があるかもしれんが、構わんか？」

「……もちろん。　あいつら許せない……！」

翔子は馬鹿な二人に怒りが湧き上がる。

「あいつらは俺が始末する。　少し店が騒がしくなるが、すぐに終わらせる」

「……わかった」

終焉は馬鹿な二人――――常夏コンビ――――の座る席へと向かう。

『とにかく、汚かったよな』

『ああ。　食いもん出す店じゃなかったな』

「お客様」

「なんだ？」

「お客様は見たところ三年生のようですね」

「それがなんだってんだ？」

「ここの三年生ともあろうお二人が、学園のシステムのことを知らないはずがありませんよね？」

「だからなんだってんだよ！」

終焉の言葉に苛立つ馬鹿二人。

「あなた方が侮辱をしたFクラスはここのシステムであのような教室を使っているのです。　Fクラスという教室で店を出さなきゃならないのです。　あいつらはあいつなりに、自分たちの手でできる精一杯のことをやってるんだよ」

終焉の言葉がほころび始める。

「あんたらはそのことを知っていて、頑張っているあいつらの努力を踏みにじったんだ。　ここの三年で、しかも生徒の見本にならなければならないＡクラスのあんたらが、何くだらねえことしてんだよ」

終焉は鋼糸で二人を縛る。

「なんだ！？」

「う、動けねえ！」

「俺はあんたらの目的がなんだかはわかってるんだよ。　ちょっとじっくりお話しようか」

終焉はこちらを見ている客の方に向き直る。

「大変失礼しました。　この不届き者の二人は私たちの方で罰を与えます。　この二人が言っていたのは嘘になっております。　二―Ｆの皆は、設備と戦いながらも、自分たちでできる精一杯のことをやってきました。　教室を綺麗に掃除もしており、彼らはＦクラスの教室は見違えるほどに綺麗になっております。　もしかしたらお見苦しいところがあるかもございませんが、どうか寛大なお心を持ってくださると、私どもは大変喜ばしく思います」

Ｆクラスをフォローするように語る終焉。

「では、私はこれにて失礼します」

終焉は二人を連れて、ある部屋へと連れて行く。

「西村先生、営業妨害を行った馬鹿二人を連れてきました」

「ご苦労だったな。　こいつらには俺からみっちり罰を与えてやる。
お前はもう戻るといい」

「わかりました。　こいつらは任せます」

そんな感じで一時間が過ぎていき、終焉の二回戦の時間となった。
相手はCクラスのモブ二人で、もちろん瞬殺した。

バカテス　清涼祭開幕（後書き）

早くも常夏コンビをお仕置きしました。

バカテス　終焉と仕事

終焉が二回戦を終えて教室に戻っているとき、雄二とであった。

「お、雄二か」

「シエンか。　お前も順調みたいだな」

「まあな。　で、馬鹿二人はこっちで始末しておいたぞ」

「馬鹿二人ってもしかして！」

「そうだ。　三年の馬鹿がＡクラスでお前らの営業妨害をしてきてな。　西村先生に受け渡しておいた」

「だから急に女性客が増えたのか」

Ｆクラスの客に、女性客が増えた。
終焉のフォローがあってから、半々だった割合が４：６と、女性の割合が増えたのだ。

「馬鹿二人は少なくとも今日一日は西村先生に捕まっているはずだ。
あいつらの営業妨害はないはずだ。　黒幕がどう動くかは知らないが、しばらくは大丈夫なはずだ」

「……お前、知っているのか？」

「まあな。　だが、これを教えることはできない。　すまないな」

「いや、いいさ。　どうせ依頼だったりするんだろう？」

雄二も終焉に依頼をしたことがあるため、そこのところはわかっている。

「ああ。　じゃあまたな。　Ｆクラスの宣伝もこっちでも少なからずやるから、瑞樹を転校させないようにお前らも頑張れよ」

「そこまで知っていたか……」

「俺はな。　ま、俺は手を貸そう。　何かあったら俺に教えろ。可能な限り手助けをしよう」

「……商売か？」

「失礼な。　これは俺の善意だ。　今回は瑞樹の転校が掛かっているんだ。　多少縛りもあるが、情報も含め、必要ならば提供しよう」

「それは助かるな。　まあ、何もないことを願うさ」

「それが一番だしな。　じゃ、俺は戻るぞ」

「ああ。　常夏コンビの処理、感謝するぜ」

雄二と終焉は別れ、それぞれ教室へと戻った。

「さて、どうせまた写真撮影か……」

終焉は女性客からの写真撮影が圧倒的に多いのだ。

他にも男性のウエイターがいるのにもかかわらず、ダントツの多さ

だ。
これもＩＳ効果なのだろう。
逆に、ウエイトレスで写真撮影が多いのは麗奈、翔子、ヒナギクだ。
この三人は男性客との写真撮影が多い。
麗奈が呼ばれたときに毎回明久が黒いオーラを放つのは止めてほしい。

「さて、やるか……ん？　あれは……」

終焉が仕事に戻ろうとしたとき、終焉の視界にある人物を見つけた。
高速でシャッターを切っている、特徴的過ぎる人物が。

「……！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「……ムッツリーニ、お前は自分のクラスが大変なときに何してんだよ……」

「……人違い」

「俺にそんなことが通用すると思うなよ？　まあ、麗奈を売らなければ見逃そう」

「終焉の名の下に、売らないことを誓おう」

即答だった。

「ま、客とかの迷惑にならないようにな」

「わかっている」

こういうことになると決断が早いムッツリーニだった。

「やあ、終焉」

「父さん、母さん、それに神威さんに咲夜さん、しかもマリアさんもいるんですか」

「私がいては駄目ですか？」

「駄目じゃないですよ。　だから怒らないでください」

「怒ってませんよ～？　絶対に、決して怒ってなどいませんよ～？」

「絶対に怒ってるんじゃないですか。　目が笑ってませんよ」

「マリア、抑えなさい。　久しぶりの出番だからと言っても、怒ってはいけません」

「麗奈、メタ発言はやめような」

「仕方がありません。　麗奈がそういうのなら抑えましょう」

「では、こちらへどうぞ」

立ち話もあれだし、今の臨也たちは客でもあるため、仕事を全うする。

「こちらがメニューになります」

「ありがとう。　で、明久とハヤテはどこかな？」

「二人ならば現在厨房にいます。　お呼びしましょうか？」
「いや結構だ。　仕事の邪魔をするわけにはいかないからね」
「シエン君、悪いけどまたよ」
ヒナギクが声をかける。
またお呼びのようだ。
「了解。　では、私はこれにて失礼」
一礼してそのお客の下へ向かい、写真を撮る。
これでもう五十枚は撮られている。
……なぜか二回目を撮った人もいたのだが。
「相変わらずの人気ぶりだね、シエン」
「明久か。　ホールに出るのか？」
「うん。　さっき臨也さんたちに挨拶をしてきたんだ」
「そうか」
「にしてもシエンは本当に凄い人気だよね。　流石はＩＳ操縦者だね」
「こんなもんは疲れしかない。　やられる身にもなってみろ」
「……堪ったものじゃないね」

「だろ？　まったく、何で俺が人気なんだよ……」

「ま、まあ、頑張って」

明久は逃げるように仕事に専念しだした。

「さて、俺もやるか」

そうこうしているうちに時間が経ち、雄二たちが来た。

「しょ、翔子！　これ本当にうちの実印だぞ！　どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

「にしても雄二、話って何だ？」

「ああ。　客が少なくなってきてな、またどこかで営業妨害されてるんじゃないかと思ってな。　お前の力を借りたいんだ」

「わかった。　すぐに調べる」

終焉は空中投影ディスプレイで学園内の隠しカメラをチェックしていく。

「何かわかったか？」

「……ちょっと出てくる。　営業妨害については俺が処理しておく。お前らは営業のほうに専念しておけ」

「わかった」

「麗奈、俺は少し出てくる。　ここは任せたぞ」

「わかりました」

終焉は教室を出て、学園長室へと向かった。
だが……

「折原君、少しいいかね？」

「教頭……！」

教頭の竹原に捕まった。

「何のようですか？　俺には用があるんですが」

「そんなに時間は取らせない。　少し話があるんだ」

「手短にお願いしますよ」

「ここで話すのもなんだ。　ついてきてくれ」

竹原に連れられて着いていく終焉。
教頭室に入る。

「で、話とは何ですか？」

「取引がしたい」

「……学園長の失脚が狙いですか」

終焉は予想通りの展開に呆れていた。

「知っているのなら話は早い。　君の手で腕輪を暴走させて欲しい」

「遠慮します。　俺にメリットがありませんから」

「報酬は百万でどうだ？　十分なメリットだと思うが？」

「金はいりませんよ。　親のおかげもあってか、余るほどあるんでね」

実際、本当に持っている。

終焉個人の貯金額だけでも億を越えている。

「この話はなかったことで。　では、私はこれで」

「……逃げれると思うなよ。　やれ、お前たち」

「無駄ですよ。　最初からわかってたんで、拘束させてもらいました」

「くっ！」

「では、俺はこれにて失礼。　馬鹿な真似は止めた方がいい」

忠告し、わざと見逃して終焉は当初の目的通り、学園長室へと向かった。

「学園長」

「……竹原かい？」

「ええ。　Ｆクラスの営業妨害をしていた馬鹿二人は竹原と繋がっているのはご存知のはずです」

「もちろんさね。　あんたの情報にもあったからね」

「竹原がの二人が西村先生に捕まったのを知ったか、チンピラを雇ったようです。　それも、かなりの人数を」

終焉はさきほどあったことを話す。

「竹原はあんたに眼をつけたわけかい」

「ええ。　でもまあ断りましたよ。　メリットなんてものは一切なかったので。　それに、依頼主の裏切るのは俺の心情ではないのでね」

「それはありがたいね。　だが、竹原を見逃す意味はないはずさね」

「あいつはまだ何かを企んでいるはずです。　どうせ捕まえるのならば、まとめて捕まえたほうが効率がいい。　明日、奴を仕留めます。　ククク、明日が楽しみだ……」

そういい終焉は部屋を後にする。

「……そこまで依頼した覚えはないんだがね……」

残ったのは顔を引きつらせた学園長だけだった。

バカテス　四回戦・次席の戦い（前書き）

今回は麗奈と翔子の戦いがメインです。

終焉はＦクラスの営業妨害をしていた相手をしばき倒し、鉄人に受け渡しておいた。
で、終焉の試験召喚大会三回戦も、終焉の圧勝だった。
相手はＢクラスだったのだが、まあ相手になるはずもなく瞬殺された。

ピリリリリ！

仕事用の携帯。
しかも、この番号は雄二だ。

「なんだ、雄二」

『秀吉が襲われた』

原作では明久が襲われたが、ここでは秀吉が襲われたようだ。

「場所は？」

『関係者以外立ち入り禁止の空き教室だ。　あの時はたまたま俺がいたからどうにかなったが、いなければ秀吉は確実にやられていた』

「なるほどね……」

竹原は終焉の忠告を無視し、実力行使に出たようだ。

「雄二、おそらく準決勝終わりに仕掛けてくるはずだ。　俺の準決

勝の相手が常夏コンビだからな」

『お前が勝つのは確実だ。　常夏コンビと繋がっている奴が実力行使に出るってことだな？』

「そういうことだ。　俺も警戒しておくが、お前も警戒しておいてくれ。　そっちで問題があればすぐに連絡しろ。　俺の依頼と関わってくるからな」

『わかった。　もしものときは絶対に手をかせよ』

「当然だ」

『それならいい。　じゃあな』

「ああ」

終焉は携帯をしまい、教室に戻った。

☆

時間は過ぎ、明久たちの四回戦の時間が迫っていた。

「明久さん、そろそろ時間です」

「あ、もうそんな時間？」

「……優子、行こう」

「はい。　って、吉井君たちもそろそろなの？」

「うん。　僕達の相手は霧島さんたちだね」

「……そうみたい。　負けるわけにはいかない」

「それは僕もだよ。　終焉と戦うんだから」

「言い合いしてないで行けよ。　俺達で店を回すから」

「それではお兄様、お願いします」

「両方頑張れよ」

終焉の激励を受け、四人は教室を後にする。

☆

『それでは、四回戦を始めます。　出場者は前に』

マイクを持った審判の先生に呼ばれ、明久たちはステージへと上がる。

外部の来場者のために作られた見学者用の席はほぼ満席であった。

「翔子さん、決着をつけましょう」

「……うん。　あなたとはちゃんとした決着を付けたかったから、ちょうどいい」

「麗奈は霧島さんとやるみたいだね。　じゃあ、僕の相手は木下さんだね」

「そういうことみたいね。　代表と麗奈の決着を付けるにはいい舞台だしね。　吉井君、負けないわよ？」

「僕だって負けるわけにはいかないよ。　シエンと戦いたいからね」

『四人とも、よろしいでしょうか？』

「はい。　では――――」

「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

それぞれ召喚獣が現れる。

『では、四回戦を始めてください』

先生の掛け声と共に動き出す召喚獣たち。

翔子と麗奈、明久と優子の召喚獣が相対する。

「行きます！」

巫女姿の麗奈の召喚獣は、左手に銃を持っていた。
麗奈はその銃で翔子の召喚獣を撃つ。

「……その程度、利かない」

翔子はそれを避け、回避と同時に麗奈へと接近する。
麗奈も翔子を撃ちながら接近する。
そして、麗奈は接近と共に右手に持ったものを投げる。
翔子はそれをかわすが、それは戻ってきた。

「……鎖鎌！」

「ええ。　私の武器は刀と鎖鎌と銃の三つです」

今まではほとんどがテストの点数の勝負で、召喚獣での勝負がなかったため、翔子は知らなかったのだ。
試召戦争でも常に刀と銃で戦ってきたので、それ以外にないと思い込んでいたのだ。

「これからが本当の勝負です」

「はあっ！」

「それじゃあ僕には当たらないよ」

優子と明久の戦いは明久の優勢だった。

同じＡクラス同士点差は少なく、明久は持ち前の操縦技術で優子の攻撃を尽く避けていた。

「反撃させてもらうよ！」

明久は優子のランスを紙一重で避け、明久は刀で一閃する。

「くっ！　やるわね……！」

「流石は鎧ってところだね。全力で斬ったわけじゃないけど、その程度で済むなんて」

『Ａクラス　霧島翔子　＆ａｍｐ；　Ａクラス　木下優子
古典　４３７点　＆ａｍｐ；　２６３点
』

ＶＳ

『Ａクラス　折原麗奈　＆ａｍｐ；　Ａクラス　吉井明久
古典　４６９点　＆ａｍｐ；　３５２点
』

優子の点数は明久の攻撃により、１００点近く削られていた。

「……麗奈、その点数……」

「振り分け試験よりも出来がよかったんです」

「……そう。　でも、負けられない……！」

「それは私もです！」

二人の召喚獣の腕輪が光り、麗奈の召喚獣の頭のリボンが解ける。
麗奈の召喚獣の持つ刀には炎が纏い、翔子の召喚獣の持つ刀には風が纏う。
麗奈の召喚獣の速度は、先ほどよりも速くなり、翔子の召喚獣も同様に速くなる。

ガギィィィ！

二人の召喚獣がぶつかり合う。

「それが翔子さんの腕輪の力ですか」

「……そう。“風王”の力よ」

風を操る力、それが翔子の腕輪の力だ。

「……私の腕輪に似てますね。　ですが、負けません！」

風と炎が幾度もぶつかり合う。

「まったく、すごい戦いだよ」

麗奈と翔子が戦っているのを横目に、優子を圧倒する明久。

「さて、僕たちの戦いは終わらせよう。　麗奈の戦いが見たいしね」

「あたしを圧倒しておいて、その台詞はないんじゃない？」

すでに、満身創痍の優子に対し、明久は余裕の表情。

点数差は２５０点以上もある。

「ごめんね。　だけど、麗奈の戦いが見たいのは事実だよ。　だから、僕の戦いはもう終わらせる」

「せめて傷一つでもつけてみせる！」

ボロボロの召喚獣を操作し、明久の召喚獣へと向かわせる優子。

だが、

「遅いよ」

終焉の特訓により強くなった明久の前では、優子の召喚獣の動きは遅く、優子の召喚獣は明久の持つ刀に貫かれて消滅した。

「僕は負けるわけにはいかないんだ。　麗奈を守る騎士としてね」

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ａクラス　吉井明久
古典　０点　ＶＳ　３５２点』

明久と優子の一騎打ちは明久の勝利で終わった。

「……優子が負けた……！」

「流石は明久さんですね」

腕輪の力を使って戦っている二人は、優子が負けたことに気づいた。

「では、私たちもそろそろ終わらせましょう」

「……そうね」

麗奈は刀を鞘にしまい、翔子は風をさらに刀に纏わせる。

二人が止まってから、数十秒。

「……行きます！“緋緋星伽神”！」

「……“ストライクエア”！」

居合の形で放たれた麗奈の炎と、暴風と化した翔子の一撃がぶつかり合う。

二人の技が爆発し、煙で二人の召喚獣が見えなくなる。

そして、煙が晴れ、立っていたのは……

「……私の勝ちですね、翔子さん」

「……うん、私の負け」

『Ａクラス　霧島翔子　０点　ＶＳ　Ａクラス　折原麗奈　３４１点　古典』

『勝者、折原・吉井ペアです！』

四回戦とは思えないほどの大歓声が沸き起こり、Ａクラスの学年次席の戦いは麗奈の勝利で終わった。

バカテス　四回戦・次席の戦い（後書き）

どうだったでしょうか？
麗奈の腕輪は緋弾のアリアの白雪そのものです。
翔子の腕輪のイメージはＦａｔｅのセイバーの風王結界です。

バカテス　明久たちの準決勝（前書き）

今回も明久たちの戦いです。

バカテス　明久たちの準決勝

「お疲れ。　いい試合だったよ」

「見てたの？」

「ああ。　これでね」

空中投影ディスプレイに映されているのは大会の会場。
複数の視点から撮られている。

「隠しカメラを仕掛けておいてな、そこから見てたんだ」

「ムッツリーニと似たようなことしてるね」

「情報収集に余念がないだけだ。　にしても、次席対決はよかった。
あとでこの試合を上映しよう」

「や、止めてくださいお兄様！　恥ずかしいです」

「シエン、あとでそれ頂戴」

「いいぞ。　よし、あとで雄二にもプレゼントしよう。　いいよな、翔子？」

「……雄二なら大丈夫。　雄二、見直すかな？」

「見直すだろ。　滅茶苦茶いい試合だったからな。　あー直接見に行けばよかった」

二人の試合は終焉の心を躍らせた。
妹とか関係なく、アニメの技がぶつかり合ったりしたのもあり、記録に残したものを保管しておこうと思うほどだ。

「俺の相手、全員つまんないからな……」

終焉を楽しませる相手がいないことにがっかりしている。

☆

「じゃ、俺四回戦行ってくる」

「行ってらっしゃい」

☆

「ただいま」

「勝ったみたいだね」

「ああ。　勝ったんだけど、つまんなかったな」

「麗奈様と明久さん、霧島さんと木下さんの試合の後ですしね」

「物足りなかったんだね」

「ああ。　せめて雄二くらいの相手がいないものか……」

雄二はお世辞にも強いとは言えないが、雄二の頭脳戦なら話は別で、それなりに楽しめたりするのだ。

「お前らの次の相手は雄二と秀吉だぞ」

「うん。　雄二のことだから何かしてくると思うよ」

「坂本さんですしね。　木下さん……わかりづらいので秀吉さんでいいですね、その秀吉さんも警戒しておいたほうがいいでしょう」

麗奈の目的は優勝商品の『如月ハイランド　プレオープンプレミアムペアチケット』で、明久の目的は終焉と戦うこと。

目的は違えど、負ける気はさらさらない二人であった。

☆

『お待たせしました！　これより準決勝を開始したいと思います！』

始まるのは明久・麗奈ペアと、雄二・秀吉ペアの準決勝だ。

『出場選手の入場です！』

明久と麗奈の向かい側には雄二と秀吉が立っている。

「ありがとな、明久」

「何のこと？」

「お前のおかげで俺の最悪のシナリオは回避された。　例を言うぜ」

「また馬鹿なことをしたんだね。　諦めて霧島さんとくっつけばいいのに」

「そうですよ、坂本さん。　翔子さんはいい子なんですから、どこに不満があるのですか？」

「今はそんなことはどうでもいいだろ！」

動揺する雄二。

それを温かい目で見る明久と麗奈。

「お、俺をそんな目で見るなぁぁぁ！」

「……雄二よ、早く始めようぞ。　こやつら相手ではあの手も使えまい」

「……わかってる。　正直、翔子が相手のほうがまだマシだったな」

「何か考えてたみたいだね。　でも、ムッツリーニを使おうとは考えても無駄だよ。　ムッツリーニでも僕は倒せないし、麗奈を倒させない」

「だろうと思ったさ。　だから、俺はお前とは真正面からぶつかっ

てやるよ」

「「試獣召喚（サモン）！」」

雄二と秀吉は召喚する。

「僕たちもやろう」

「はい」

「「試獣召喚（サモン）！」」

二人も召喚し、戦闘の態勢が整った。

「にしても珍しいね。　雄二が真正面からぶつかろうなんて」

「お前を潰すにはシエンかハヤテを持ってくるしかないし、麗奈を潰すにしてもお前やシエン、ましてやハヤテたちを敵に回すことになるからできない」

超絶なシスコンの終焉は麗奈を傷つけるものには一切の容赦をしない。

そして、その終焉は世界最強のＩＳをも持っているため、麗奈を傷つけたりすることは自殺行為だ。

「お前らに有効な手はない。　だから真正面からやるしかないんだよ」

「なるほどね。　でも、僕たちに勝てると思ってるの？」

「これは賭けだが、手がない訳ではない」

『Ａクラス　折原麗奈　＆ａｍｐ；　Ａクラス　吉井明久
保健体育　４４８点　＆ａｍｐ；　３１８点
』

『Ｆクラス　坂本雄二　＆ａｍｐ；　Ｆクラス　木下秀吉
保健体育　１８４点　＆ａｍｐ；　１１８点
』

遅れて点数が表示される。

「流石雄二。　やっぱりこの教科も点数が上がってるんだね。　でも、秀吉もそこまで点数を上げてるのは驚きだな」

「ワシも多少は勉強しておるのじゃよ」

「でも、短期間でその点数まであがるなんて、何をしたの？」

「そうです。　いくら勉強をしたといっても、そこまで点数を上げるのは困難なはずです」

「なに、ただ勉強のときは霧島の真似をして勉強をしたまでじゃ」

普通は真似で点数を上げるのは不可能である。

「凄い役者魂だね。　霧島さんの真似をして勉強しただけでそれだけ点数を上げただなんて」

「……そういうことですか。　お二方が言う『手』と言うのはそう

いうことですか」

「何かわかったの？　麗奈」

「ええ。　坂本さんは私に任せてください。　明久さんは木下さんを。　おそらく、とても手強いことでしょう」

「麗奈がそういうなら間違いないね」

「では、やるとするかのう」

「だね。　いくら秀吉でも、容赦はしないよ」

「そうでなくと困る。　ワシとて本気でやっておるのじゃ」

「麗奈のほうにも行かないといけないからね。　最初から全力で行くよ！」

「来い、明久！」

二人は同時に動き出し、二人の得物……刀と薙刀がぶつかり合う。

「！　そういうことだったんだね」

「そうじゃ。　ワシは主の真似をしておるのじゃ」

「確かに僕の動きに似ている。　だけど、完璧じゃない！」

明久はつばぜり合いしている刀で薙刀をそらし、蹴りを入れる。

「く！　流石は明久じゃ。　本物の足元にも及ばぬか……！」

「いい動きだよ。　でも、それは模造品でしかない。　僕に勝ちたいなら模造品であるそれを自分だけのものにしないとねっ」

明久は刀を振り、乱打する。

「ほらほら！　防戦一方だよ！　だから簡単に隙ができる！」

明久は刀を振り切る。
秀吉の召喚獣は飛ばされた。

「だけど、よくあれを受けて消えなかったね。　ギリギリ致命傷を避けたんだね」

「そうじゃ。　せめて時間くらいは稼いで見せよう！」

「雄二と二人係で倒そうとしてるみたいだけど、それは無理だよ。だって麗奈も強いからね」

「くっ！　やっぱり一筋縄じゃいかねえか」

「私とていつも守られている訳じゃないのです。　明久さんの足手まといにならぬよう、自身を磨くのは当然のこと。　ですので、あなたに負けるわけにはいかないのです」

すでに腕輪を使っているので、召喚獣そのものの攻撃力と素早さは通常時よりも高くなっている。

『Ａクラス　折原麗奈　ＶＳ　Ｆクラス　坂本雄二
保健体育　３８１点　ＶＳ　１１９点』

互いに削りあっているためが、元の点数差や腕輪の力もあり、雄二が劣勢だった。

「ここまで来た以上、負けたくはねえ！」

「負けたくないのは私も同じ。ですので、早く決着を付けましょう」

麗奈の持つ刀に炎が纏う。

「“緋？毘”！」

炎と一体と化した刀が振り下ろされる。

雄二は体制を崩しながらも避け、麗奈の背後から雄二の拳が迫る。

「私の速さを見誤りましたね」

「何？」

無防備だったはずの麗奈の召喚獣が振り向き、雄二に刃を向けていた。

「終わりです。　坂本さん」

自らの勢いもあったため、雄二の召喚獣は燃え盛る刀に突き刺さり、消滅した。

「麗奈は終わったみたいだね。　じゃあ僕たちも終わらせようか」

「雄二がやられおったか……。　しかし、一矢報いって見せようぞ！」

秀吉の召喚獣はすでにボロボロで、いつ止めを刺されてもおかしくない状況でもなお生き残っていた。

「まだそんな力があったんだ。　でも、僕には勝てない！」

勢いよく突進する秀吉の召喚獣に、カウンターで仕留める気の明久。

「終わりだ、秀吉！」

見事に決まったカウンターは秀吉の召喚獣の首に突き刺さった。

「しかし、一矢報いて見せたぞ」

「……うん、そうだね」

だが、明久の召喚獣の右腕は失われていた。

あの状況で秀吉は明久の右腕を切り落としたのだった。

『勝者、折原・吉井ペア！』

歓声が上がり、明久たちは舞台から降りた。

「お疲れ、明久、麗奈」

「シエン。　負けないでよ」

「ああ。　絶対勝つ」

すぐさま行われる終焉の準決勝。

相手は常夏コンビ。

教頭の竹原が何をしでかすかわからない以上、瞬殺するつもりの終焉だった。

バカテス　準決勝と愚者

『えーそれでは、ただ今より準決勝二回戦を始めます』

その声と共に終焉は舞台に上がる。

無駄な時間を過ごす気はないようだ。

「解放されたんだ、あんたら」

終焉の相手は常夏コンビ。

今までのように慈悲など掛けるつもりは一切ない。

「あーすみません。　時間がないんですぐに始めてもらっていいですか？」

『あ、はい。　では、始めてください』

「試獣召喚（サモン）」

終焉の召喚獣が現れる。

「早くしてくれ。　無駄な時間を過ごすほど、俺は暇ではない」

「こいつ……！」

「俺たち二人を一人で相手にしようだなんて、なめてんのか？」

「？　何当たり前のことを言ってるんだ？　お前らなんぞ、俺の足元にも及ばない。　早く召喚しろ」

「この……！」

終焉の挑発に簡単に乗る馬鹿二人。

「後悔させてやるぜ」

「「試獣召喚（サモン）」」

二人の召喚獣が現れる。

「お前らと遊んでいるほど暇ではないんでな。終わらせる」

「やれるもんならやってみやがれ！」

「そうか。なら、遠慮なく殺れる。
“十閃”」

終焉の声と共に放たれた十本の鋼糸は二人の召喚獣を切り刻み、消滅した。

『Ａクラス　常村勇作　＆ａｍｐ；　Ａクラス　夏川俊平
保健体育　２１３点　＆ａｍｐ；　２０４点
』

常夏はそれなりの点数だった。
だが、

『Ａクラス　折原終焉
保健体育　９１１点
』

「「なっ！？」」

終焉の足元にすら及ばない。

『勝者、折原終焉君です！』

終焉はそれを聞くとすぐさまそこを立ち去り、携帯を手にする。
雄二からのメールを確認するためだ。

『姫路と島田、その妹が攫われた。
大会が終わり次第駆けつけてくれ。
場所はムッツリーニに聞いたからわかった』

やはり連れ去られたようだった。
だが、秀吉は連れ去られていなかった。

「！」

終焉はもう一つ来ていたメールに怒りが湧いた。
差出人はハヤテだった。

『先ほど、何者かに麗奈様たちが連れ去られそうになりました。
相手は僕、明久さん、麗奈様により拘束しました』

「……そうか、そうなんだな……」

終焉はぶつぶつとつぶやく。

「……竹原の野郎、やってはならないことをしてしまったな……」

そう、竹原がやろうとしたことは、この世界で最も敵に回してはいかず、最も怒らせてはならない者の逆鱗に触れることをしたのだった。

「……いいだろう……あいつがその気なら、俺も一切の情けも容赦もしねえ……」

怒りを宿した終焉は滅多に使わない、指輪になっている魔改造バイク『フェンリル』で瑞樹たちが囚われているカラオケボックスへと走らせた。

徒歩五分ほどの場所だが、終焉がそこについたのは学校を出て一分ほどだった。

「雄二、来たぞ」

終焉が来たときはまだ雄二は突入していなかった。

「来たかシエン。　間に合わないかとも思ったんだがな」

「相手は常夏だ。　瞬殺してやった」

「……そうか」

「で、相手はここだな？」

「ああ……って何する気だ！？」

「何って突入して締め上げるだけだが？」

「まだ待て！　ムッツリーニが三人を救出するまで待て！」

小声で怒鳴る雄二。

「その必要はない。　すぐに拘束できる」

「あ、おい！」

終焉はボックス内に入る。

「邪魔するぞ」

「え？　折原？」

「し、シエン君？」

驚いている二人。

「何だお前？」

黙って瑞樹、美波、その妹の葉月を見る。

「……さて、お前ら、一回死んで見るか」

ボックス内にいた五人の男たちは何かによって切り刻まれ、血を流して倒れた。

「「え？」」

「安心しろ。　酷いのは見た目だけだ。　……いや、中身はもっと

酷いか」

「……おいおい、入って数秒でこれかよ……」

呆れている雄二も入ってきた。

「……流石はシエン」

陰に隠れていたムッツリーニは出てきて称賛の声を上げる。

「……こいつらには聞きたいことがある。　お前らは先に戻っていてくれ。　学園長と明久たちを呼んでおいてくれ」

「……わかった」

雄二たちは瑞樹たちを連れて出て行った。

ここに残っているのは終焉の哀れなチンピラが五人のみとなった。

「……監視カメラはなし。　これなら大丈夫だな」

辺りを確認し、誰にも見られないことを確認すると、終焉の眼は写輪眼となる。

そして、終焉は倒れている男の一人と眼を無理やり合わせ、幻術を掛ける。

「これを指示したのは誰だ？」

「……文月学園の教頭の竹原だ」

相手は言葉に感情を感じさせない声で告げる。

「なぜやった？」

「……金で雇われた。『坂本雄二と木下秀吉を動けなくしろ。手段は選ばなくていい』と言われた」

「お前らは他にも指示されたのか？」

「……俺たちの仲間が『折原麗奈を捕らえろ。その後は好きにして構わない』と」

その言葉に苛立つ。

「……そうか、やはりあいつはただじゃおかねえ……！」

憤怒の業火が燃え上がる。

そして、八つ当たりと言わんばかりに男たちを立たせ、眼が開いているのを確認すると、万華鏡写輪眼にし、両目にギアスの紋様になる。

「“月読”」

「「「「「ぎゃあああああああ！？！？」」」」」

終焉の眼を無理矢理見せられた男たちは同時に悲鳴を上げて気絶する。

端から見れば一瞬だが、あいつらが感じたのは十二時間オカマたちに襲われると言う、普通（ノーマル）な人間からしてみれば、地獄でしかない状況を体感したのだ。

精神には多大なダメージを与え、最早廃人だろう。

終焉は携帯を取り出し、ある人物へと連絡する。

「俺だ、終焉だ」

『何で御座いましょうか、終焉様』

「今すぐ■■■■に来い。　男五人を捕らえた。　こいつらはもう廃人だ。　処分はお前らに任せる。　俺は文月に戻っている」

『畏まりました。　我ら『四騎士』、すぐさま向かいます。　では』

通話が切れ、終焉は外に出る。

今回は四騎士を呼んだ。

いつもは臨也に連絡するのだが、今回は四騎士。

ある程度人の思考が読め、なおかつ予測のできる終焉だが、四騎士の四人は何を考えているかほとんど読めず、予測もできない。

だから、終焉は四騎士にしたのだ。

あまりの怒りに、終焉は何をするか読めない四騎士に処分を任せたのだった。

「さて、あの馬鹿共はあいつらに任せて、俺は戻るか」

再びフェンリルにまたがり、遠回りをして学園に戻る。

久しぶりにフェンリルに乗るので、気分を紛らわすためにも乗り回したのだった。

バカテス　準決勝と愚者（後書き）

『フェンリル』やっと出せた！
いつ出そうか悩んでたんですが、なかなか出せないので今回出しました。

バカテス　知らされる事実（前書き）

連続投稿！

バカテス　知らされる事実

「すまない、少しばかり遅れた」

終焉は喫茶店の終了したFクラスの教室に来た。

瑞樹たちはいないが、麗奈はいる。

「あとは学園長だけか」

「ああ。　で、あいつらは？」

「こっちの方で始末しておいた。　鬱憤晴らしも含めてな」

「終焉様」

「ハヤテ、麗奈を攫おうとした奴はどうした？」

「既に臨也様に受け渡してあります」

「……そうか。　それならいい」

「ねえシエン、あいつらは何なのさ？」

「悪いな。　それは学園長が来てからだ」

「お前にもババァにも、詳しい話をしてもらわねえとな」

「麗奈が狙われたのはババァにあったのか……！」

「やれやれ。　わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねぇ」

「来たかババァ」

「おいババァ。　早く話せ」

いつもの雰囲気とは違い、怒りが滲み出す明久。

「まず明久。　麗奈が狙われた理由はおそらく俺の所為だ」

「シエンの所為？　どういうこと？」

「今回俺は学園長の依頼を受けていたんだ。『教頭の竹原を調べろ』ってな」

「教頭？　どうしてまた……」

「雄二に秀吉、お前らはチケットの回収を持ち出されただろ？」

「ああ。　それが関係しているんだろ？」

「ああ。　だが、実際のところは違う。　学園長が回収を持ちかけたのはもう一方の景品だ」

「もう一方というと、『白金の腕輪』とやらか？」

「ああ」

「それについてはアタシが話す。　アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだがね、ことがあったようじ

ゃあそれはできないね……」

「誰にも公言するなよ」

終焉が釘を刺しておく。

「腕輪を勝ち取って貰いたくて、あんたらに頼んだのさ」

「ワシらが勝ち取るじゃと？」

「そうさ。　デモンストレーションもなしに回収なんてしたら新技術の存在が疑われるからね」

「では、なぜにワシらだったのじゃ？」

「……欠陥があったからさ」

「その欠陥は俺たちであれば問題がないのか？」

「あんたらに頼んだときはそうだった」

「だった？　ということは、今は違うのか？」

「折原に依頼した際に、この不具合をある程度直してくれたのさ」

「なに？」

「その欠陥は一定水準以上を超えると暴走することだ。　だから、学園長はお前ら『低得点で優勝の確立がある』お前らに頼んだわけだが、俺が解析してＡクラスの中堅くらいの点数までは使えるよう

になっている」

「なぜそれを俺たちに教えなかった？　水準が上がったなら俺たち以外でもできたはずだ」

「それは折原がそう言ったからさ」

「そう。　その方が面白くなりそうだったからな。　雄二がどう楽しませてくれるか、ってな」

「ねえシエン、いい加減麗奈を狙った奴が知りたいんだけど」

「もう少し待て。　すぐわかるから」

明久は怒りを堪えて不機嫌だった。

「その話を聞く限り、俺たちの邪魔をしてきたのは学園町の失脚を狙っている立場の人間――他校の経営者とその内通者といったところだな」

「ご名答。　身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけには行かないからね。　恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね。　近隣の私立校に出入りしているみたいだしね」

「俺が調べたから間違いない。　一連のことはすべて竹原が原因だ」

「つまり、麗奈を襲うように言ったのは竹原なんだね？」

「ああ。　あいつは俺に取引をしてきてな、それを断った結果がこれだ。　せっかく忠告してやったのによ、やりやがったよ、あいつ

は……！」

抑えた怒りの声。

だが、その身体からは怒りのオーラが溢れんばかりに出ていた。

（（（ゾクッ！））））

雄二、秀吉、学園長は身震いをし顔を青くしていき、明久、麗奈、ハヤテは冷や汗を流した。

（シエンが、本気で切れてる……）

（……あそこまで怒ったお兄様は初めてです）

（終焉様が怒っている。　しかも、明久様でも冷や汗を流すほどに……。　……竹原はとんでもないことしましたね……）

「……あー悪い。　つい殺気立っちまった。　……まあ竹原については俺が殺る。　父さんにも学園長にも殺らせない。　明久でも殺らすことはできない」

「う、うん。　わかった」

（反論なんてできない。　今ので僕の怒りが吹っ飛んじゃったし……）

「あいつと繋がっていた常夏は俺が倒した。　決勝では俺と明久たちだ。　だが、明久の点数でも水準を超える」

「じ、じゃあどうするのさ？」

「腕輪を誰かにあげればいい」

「それは折原が勝った時だけだね」

終焉は一人。

しかもＩＳ学園にも在学しているため、腕輪の譲渡が許されている。

「じゃあ僕たちはわざと負けるの？」

「いいや。　そんなこと俺が許さない。　俺はお前とは全力でぶつかりたいからな」

「あの、学園長」

「なんだい、折原妹」

「明日の決勝、明久さんとお兄様の一騎打ちにしてくださいませんか？」

「なぜだい？」

「二人の戦いに私が入るのは野暮。　とても邪魔することはできません」

「……それは明日の観客に聞くんだね」

「わかりました」

「なら、俺から一つ。　麗奈が戦わないなら、明久にその分の得点を上乗せしてくれないか？」

「え？」

「ほう、理由を訊こうじゃないか」

「俺は元々二人を同時に相手取るつもりでした。　ですが、その麗奈がやらないなら、せめて点数は合わせて欲しいと思ったからです」

「いいだろう。　一騎打ちになった場合、妹の点数を吉井の点数にプラスしようじゃないか」

「ありがとうございます」

「でもいいの、シエン。　それだと負けるかもしれないんだよ？」

「ああ。　俺は二人と戦いたかったんだ。　それに、俺は負けるつもりは毛頭無い」

「言ってくれるじゃん。　僕だって負けるつもりは無いよ。　絶対に勝ってみせる！」

「あんたら、盛り上がるのはいいんだけど、最悪の場合は学園存続の危機になることを覚えとくんだよ」

学園長の一言は二人には聞こえてないようだった。

そして、清涼祭一日目が終わった。

バカテス　知らされる事実（後書き）

後二、三話くらいで清涼祭終了になると思います。
それと、しばらく更新できません。
活動報告の方にも書いてありますので、詳しくはそちらで。
といっても、ほとんど内容が変わらないのですが……。

バカテス　決勝戦開戦前（前書き）

私は帰ってきたぁぁぁぁ！
やっとテストが終わりました！
結果はまだですが、投稿を再開します。

「雄二、ムッツリーニ」

「何だ、シエン？」

「……何か用か？」

翌日、終焉は朝一でテストを受けてから、Ｆクラスへと来ていた。

「お前らにこれを渡しておく」

「これは……グローブか？」

「……針？」

終焉が二人に渡したのはグローブと針だった。

もちろん、少々……というかかなりとんでもない代物だったりするのだが。

「それらはちょっと特殊仕様で作ってあってな。　そのグローブはスタンガンと同じ機構が備え付けてある。　殴ったのと同時に電流が流れる仕組みになっている。　で、その針は即効性の麻痺毒が仕込んである」

「なんで俺らに？」

「昨日のこともあったし、ちょうどいいと思ってな」

「……ちょうどいい？」

「元からお前らに渡すつもりだったんだよ。　雄二は肉弾戦で使わせればいいし、ムッツリーニはなぜか無駄に投擲技術があるしな」

「なるほどな。　だが、安全なのか？　見た目はなんか金属っぽいぞ」

「俺をなめるなよ？　大自然の雷並の電流、電圧が流れても静電気ほどの痺れも通さない」

「流石だな」

「で、ムッツリーニのだが、即効性の痺れ薬が塗ってある。　人に掠らせるくらいで十分だぞ」

「……ありがたい。　だが、無くなったらどうする？」

「安心しろ。　これ渡しておくから」

終焉がムッツリーニに渡したのは小さな機械。

「……これは？」

「俺手製の転送マシンだ。　最大質量は一キロほどだが、その分持ち運びが楽だ。　連絡してくれれば転送する」

「……便利だな」

「それが俺クオリティー」

「納得できるな」

「……同感」

「んじゃ、特訓とかなら休日とかに付き合えたら付き合うから。最悪サボればいいし」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。　もう教師のほとんどの弱み握ってるから」

さらっと笑顔でとんでもないことを言い放った終焉。

当然、二人は唖然としているのだが。

「なんてふざけた家族だよ……」

「……恐ろしい」

「なんかあったら言えよ。　事情があるなら金は取らねえから。んじゃな」

終焉は立ち去るが、しばらく二人は立ち尽くしていました。

☆

「さて、時間だ」

「そうだね」

忙しく働きつつも、ついに決勝戦の時間が近づいてきた。

「頑張ってね、三人とも」

「応援してるよ」

「生で見られないのはとても残念ですが、応援しています」

「いい試合を見せてくれ」

クラスメイトから激励をされ、三人は会場へと向かう。

「すごい観客だね」

「そうですね」

「まあ司会が羽島幽平と聖辺ルリだからな。　それもあるだろう」

羽島幽平こと平和島幽が来ることになっていたが、決勝戦の司会をやることに、さらにはルリが来るともなればファンが山のように来るのは当然だったりする。

「じゃあ僕たちは反対だからまたね」

「ああ」

明久と麗奈は終焉とは反対の入場ゲートへと向かった。

「折原君、もうすぐ始まりますのでこちらに」

スタッフの誘導に従い移動する。

『『『キャアアアアア！！』』』

『『『ウオオオオオオ！！！』』』

『『『幽閉さーーーん！！！』』』

『『『ルリちゃーーーん！！！』』』

終焉が時間が来るまで待っていると、突如男女の大歓声が響いた。

どうやら、司会の二人が出てきたようだ。

『Ｌａｄｉｅｓ　ａｎｄ　ｇｅｎｔｌｅｍｅｎ！』

『ｂｏｙｓ　ａｎｄ　ｇｉｒｌｓ！』

二人のアナウンスが入る。

『大変長らくお待たせしました！　ただ今より文月学園清涼祭、メインイベント！』

『試験召喚システムによる召喚大会・決勝戦を行います！』

『『『ウオオオオオオ！！！』』』

またまた観客の大歓声。

『出場選手の入場です！』

『まずはこの二人！　二年Ａクラス所属・吉井明久君と、同じくＡクラス所属・折原麗奈ちゃんです！　皆さん、盛大な拍手でお迎えください！』

『二年生次席の霧島翔子ちゃんのペアと戦った四回戦では両者譲らない戦いをし、準決勝にまで上がってきた最下級クラスのＦクラスの坂本雄二君と木下秀吉君との激戦を征し、この決勝に上がって来たのはこの二人！　Ａクラスの名は伊達ではありません！』

瑞樹の親御さんへの印象は薄いが、Ｆクラスが準決勝にまで上がったのは伝えられた。

『それに対するのはこの男！　この名前を知らない人はいないでしょう！』

『二年生学年主席にてＩＳを動かせる男！　二年Ａクラス所属・折原終焉！　盛大な拍手で迎えましょう！』

終焉は盛大な拍手に歓迎されながら舞台に上がる。

『彼はこれまでの試合を圧倒的な強さで勝ち上がってきました！圧倒的過ぎる力を持つ彼には誰も敵わないのでしょうか！』

終焉と明久は互いに向き合っている。

「すみません、少しマイクを貸してください」

学園長から話を聞いているのか幽はすんなりと貸してくれた。

『清涼祭にお越しの皆さんこんにちわ、折原終焉です。　今回の決勝戦ですが、皆さんにお願いがあります』

終焉がそう言うと会場がざわつき始めた。

『本来ならば二対一の試合ですが、この試合を私、折原終焉と彼、吉井明久との一騎打ちにしたいと思っているのですが、構わないでしょうか？　もちろん、ペアの折原麗奈の点数は今回は特別仕様で吉井明久の点数に加算されます。　私たちの我侭に付き合ってもらえないでしょうか？』

終焉は頭を下げる。

それにならい、明久と麗奈も頭を下げる。

パチパチパチ！！！

盛大な拍手が沸き起こった。

『えーこれは認めてもらったと受け取ってもよろしいのでしょうか？』

『当たり前だ！』

『どちらが最強か見せてくれ！』

『シエン様のお願いです！』

『我らファンクラブが認めないはずがありません！』

会場に来ていた生徒たちは認めていた。
大人にも認めている人がいた。

『ありがとうございます！』

終焉はそう一言いい、マイクを幽へ返す。

「……頑張って」

幽の激励に終焉は驚く。

「！　はい」

『それでは、この試合は二対一の試合から、吉井明久君対折原終焉君の一対一の一騎打ちとします！』

再び観客の歓声と拍手が湧き上がる。
最強を決める戦いが始まる。

バカテス　決勝戦！　終焉ＶＳ明久（前書き）

なんかワンパターンな気がする。

バカテス　決勝戦！　終焉ＶＳ明久

『それではルールを簡単に説明します。　試験召喚獣とはテストの点数に比例した――』

幽によるルール説明があるが、終焉と明久はそれを聞き流す。

「さて、俺はこの時を楽しみにしていた」

「うん。　僕もだよ」

「一対一。　邪魔をするものは何もない」

「麗奈には悪いけど、正直言って僕はこの状況が嬉しくて堪らない」

「俺もだ。　召喚獣の操縦技術ではお前の方が上だ。　だが、だからと言って負けるつもりは毛頭無い」

「シエンに簡単に勝てるなんて思ってないよ。　いくら麗奈の点数が上乗せされてると言っても、相手はシエンだ。　油断や慢心なんてしてたら確実に負ける」

明久は終焉の戦闘のことを一番理解している。
だからこそわかるのだ。
一瞬の油断で終わると。

『それでは試合に入ります！　吉井明久君、折原終焉君、お願いします！』

「行くぞ、明久！」

「わかってる！」

「「試獣召喚（サモン）！」」

掛け声をあげ、二人の召喚獣が現れる。
いつもの装備で、二人とも腕輪をしている。

『Ａクラス　吉井明久（＋折原麗奈）
日本史　９８１点（５２９点＋４５２点）』

明久の点数を見て客席から歓声が上がる。
二人の合計だが、あと少しで四桁と言うとんでもない点数だからだ。

「ほぉ……二人とも前よりも点数が上がってるな」

「僕だって勉強したんだ」

「明久さんの力になれるように頑張りました」

「これでシエンの点数とは互角なはずだよ」

「そうだな。　だが、それは俺が本気の全力でやらなかった場合だ」

「「え？」」

終焉の発言に呆ける二人。
そして、終焉の点数が現れる。

『Ａクラス　折原終焉
日本史　１５８４点』

『『『な、なにぃいいいいいい！？！？！？！？』』』

『何だあの点数は！？』

『あんな点数取れるのか！？』

『あれが学年主席の男の真価か！』

『あれほどの点数を……！』

会場からどよめきの声が溢れる。

生徒、来賓含めてこの場にいるほぼすべての人間が驚いている。

「……なに、その点数……」

「なに、お前と戦うのならばと言うことで、俺も全身全霊を掛けたまでだ。　今回のテストは両手を使わせてもらった」

「り、両手？」

「そう。　片手では取れる点数が限られてしまう。　ならば、それ以上の点数を取るには手を増やしたまでだ」

「……流石はシエンだね。　まさか両手でテストをするなんて」

「俺とてお前に手を抜けるほど甘くは無い。　俺が認めた男だ。俺のすべてを持って迎え撃つ！」

「そうこないとね！　僕だって最初から簡単に倒せるなんて思ってなかったしね！　だから始めよう！」

「「俺（僕）たちの戦いを！」」

二人の声が重なり、召喚獣が同時に動き出す。

ガギィィィン！

とてつもない速さで動き出した二人の召喚獣の得物――――終焉のミニ絶刀と明久の刀――――がぶつかり合う。

「……なんて重さだ。　手が痺れそうだよ」

点数差は５００点以上もあるため、明久は召喚獣のフィードバックで手に小さな痛みを覚えていた（無論、それは明久だからであって、

同じ点数でも明久以外の者ならば絶叫物）。

「そういえばフィードバックがあったんだな」

「だからって手を抜かないでよ！」

「当然だ！」

二人の召喚獣は幾度もぶつかり合う。
互いに一歩も譲らない展開だ。
点数は一向に減らない。
そして、そんな状況が数分続くと、突如二人の召喚獣の動きが止まった。

「ふぅ……ウォーミングアップはこれくらいにしとくか」

「……そうだね」

この声を聞こえた者は驚愕する。
それは当然のことだ。
目で追うのも難しい速度で動き、乱撃を繰り返していた二人のあの動きがウォーミングアップだと言うのだ。
もはやこの二人は他の生徒とは次元が違う。

「ここからが本番だよ！　シエン！」

「ああ！　もうここからは無駄な時間は必要ない！」

明久の腕輪が光り閃光に包まれ、終焉の召喚獣はオーラに包まれた。

「“閃光（ライトニング）”！！」

「“唯閃（ゆいせん）”！！」

『Ａクラス　折原終焉
日本史　１１８４点』

終焉の点数が一気に４００点も減った。

これが終焉の召喚獣のみが使える秘技・唯閃だ。
使用時に４００点を消費することで、五分間攻撃力を跳ね上げ、素早さと防御をも上昇させる生身の唯閃の召喚獣バージョンだ。

ただ、生身とは違うのは最初にダメージが来ることだ。
生身ではじわじわと負担が掛かるが、召喚獣は先払い。

だが、その分効果は絶大だ。
偽ＩＳと腕輪は強力だが、それらは単教科では使い勝手が悪い。
偽ＩＳだけでは毎秒５０点、腕輪使用時では毎秒１００点＋αのため、単教科では数秒しか使い物にならない。
だが、唯閃ならば最初に４００点を使うが、そのあと五分間は絶大な貫通力を得られる。
終焉ならば（ここ重要）単教科でも十分使える。

「さーて、最終決戦だ！」

「ここからはノンストップ、止まらない！」

その瞬間、二人の召喚獣は目にも留まらぬ速さで動き出した。
だが、観客は息を飲んだ。

明久と終焉の召喚獣から放たれる光とオーラが光の球と化し、ぶつかり合い、幻想的ならずも美しい光の応酬に目を奪われたのだ。

『Ａクラス　折原終焉　ＶＳ　Ａクラス　吉井明久
日本史　８２３点　ＶＳ　６８９点』

互いに被弾が増え、点数が削られていく。
明久は自身の持つ操縦技術を持ってしても、終焉の攻撃の威力のおかげで防いでもダメージが通り、鋼糸の手数で防げないものもある。
終焉はまだ未熟（と言ってもかなりの操縦技術）なため、被弾が増える。
だが、唯閃で上がった防御のおかげもあり、ダメージは控えめだ。

この戦いの中、会場で響いているのは召喚獣同士の戦闘音のみ。
会場は固唾を呑み、戦いの行方を見守る。

「はあああああ！！」

「うおおおおお！！」

光の応酬は僅か二分ほど続いたが、この短い時間は実際の時間を長くしたような感覚で、この場にいる多くの者が三分以上の時間が過ぎたと錯覚していた。
そして、また二人の召喚獣がぶつかり互いに吹き飛ばされる。

「「ハァ……ハァ……」」

終焉と明久は息が切れ、汗を浮かべている。

『Ａクラス　折原終焉　ＶＳ　Ａクラス　吉井明久

日本史　２３８点　ＶＳ　２２１点』

互いの点数は最初の点数から大幅に削られていた。

「……もう終わりにしよう」

「……うん。　楽しいけど、かなりきついかな……」

終焉はいつも以上に研ぎ澄まされた集中力で、明久はフィードバックで身体を痛め、互いに体力を削っていた。

「これで……最後だ！」

終焉の召喚獣が絶刀を鞘にしまい、見た目は居合の構えを取る。

「全力全開！　真正面からぶつかり合うのみ！」

明久の召喚獣を包んでいた光が刀一本に集中する。

「最大仕様三十本――――」

「約束（エクス）された――――」

終焉の周りに鋼糸がうごめく。

明久は発光する刀がさらに光り輝き、刀を頭上に上げる。

「――――聖閃（せいせん）！！！」

「――――勝利の剣（カリバー）ァァァ！！！」

掛け声と共に放たれた互いの最強の技。
終焉は抜刀し、三十本もの鋼糸が一つの塊となり、明久に放たれる。
明久は刀を振り下ろし、光の斬撃が終焉に放たれる。

ズパァァァァァァン！！！！

会場に轟音が鳴り響いた。

『Ａクラス　折原終焉　ＶＳ　Ａクラス　吉井明久
日本史　６２点　ＶＳ　０点』

そして、残っていたのは終焉。

『この激闘を制したのは二年生学年主席！　折原終焉！』

『文月学園清涼祭・試験召喚大会決勝戦勝者、折原終焉君！　素晴らしい試合を見せてくれた二人に、盛大な拍手をお願いします！』

観客の大歓声が沸き起こり、終焉と明久の一騎打ちが終わった。

バカテス　決勝戦！　終焉ＶＳ明久（後書き）

多分途中で……というか最初から読めてた人がいるんじゃないかと自己嫌悪に陥りそうです……。

バカテス　デモンストレーション（前書き）

これで終わられなかった……。

「大丈夫か？　明久」

「まだ身体が重いけどね……」

明久は試合の後気を失い、保健室のベッドで寝ていた。
フィードバックにより受けた終焉の聖閃のダメージは、悲鳴を上げることすらできなかったのだ。

「晴の活性と雨の沈静で治療はしたが、無理はするなよ」

「うん、わかってるよ」

試験召喚大会の表彰はまだ行われていない。
準優勝の明久が倒れたため、表彰は後伸ばしになったのだ。

「さて、きついのはわかるが、表彰式だ。　客をあまり待たせるものではないしな」

「じゃあ行こうか」

☆

学園長の話は飛ばしてデモンストレーション。

「えー腕輪のデモンストレーションを行いたいところですが、私はＩＳ学園にいることが多いので、この腕輪は二年Ｆクラス、坂本雄二と木下秀吉に渡したいと思います」

明久と麗奈の点数ではギリギリアウトなので雄二たちを呼ぶ。

「彼らは、Ｆクラスであるのにも関わらず、準優勝ペアである二人と良い試合を見せてくれました。　故に、私は彼らにこの腕輪を受け渡します。　と言うことで、坂本雄二、及びに木下秀吉は出てきてください」

雄二と秀吉がステージに上がってくる。

「本来ならば準優勝である吉井明久と折原麗奈に譲るべきですが、彼らは打倒Ａクラスを掲げて頑張っています。　そして、私はＩＳ学園にほとんどいますが、それでも今年のＡクラスのトップメンバーは強い。　それはＡクラストップ成績者１０人でＦクラス全員を相手取れるほどに」

観客……大人たちからのざわめきが走る。

「私は彼らには諦めて欲しくない。　ですので、戦争を有利にするこの二つのアイテムを扱うに相応しいのは、Ａクラスの二人相手に善戦したこの二人だと思います。　故に、この腕輪をこの二人に譲ります」

雄二には召喚用フィールドを作り出す腕輪を、秀吉には二体の召喚獣を呼び出す腕輪を渡す。

「では、この二人に腕輪のデモンストレーションをしてもらいます」

「起動（アウェイクン）！」

フィールドが形成される。

「試獣（サモン）召喚！」

秀吉の召喚獣が現れる。

「二重（ダブル）召喚！」

『Ｆクラス　木下秀吉
数学　４４×２　点（８８点）』

秀吉の召喚獣が二体になり、その点数は元の点数の半分となった。

（問題は無いみたいだな）

『デモンストレーションも終わったところで、これにて試験召喚大会を終了するよ！』

☆

「お疲れ様でした」

「ああ。　ハヤテ、俺は幽さんに呼ばれているから任せる。　明久

には無理をさせるなよ」

「わかりました」

Aクラスは優勝したこともあり、さらに盛況だった。

「じゃ、幽さんを待たせるわけにはいかないから、俺は行くぞ」

「はい。　ごゆっくり」

終焉はクラスに戻ったのも束の間、幽とルリとの待ち合わせ場所に向かった。

「すみません、お待たせしました」

「気にしてないよ。　優勝者だし、学年主席だったり、君は有名だったり人気だったりするからね」

「と言うことで、今から取材ね」

なにがということでなのかはわからないが、終焉はそれに応じる。

「まずは、優勝した感想は？」

「とにかく疲れました。　明久があそこまで強くなってるとは、驚きました。　初めて全力でテストと戦いましたね」

両手で同時進行でのテストを受け、全力でぶつかった。

それは、今までの中で最も集中した時間だと感じていた。

「では、次は気になるＩＳ学園について。　ＩＳ学園で過ごしている感想は？」

「女子の視線がうざいです。　羨ましいとか思う人もいると思いますが、あれはそんな生易しいものじゃあない。　落ち着けるのは自分の部屋か、トイレくらいですね」

「元々ＩＳ学園は女子高ですしね。　たった三人しかいない男子ではそれも納得ですね」

「あと、ＩＳスーツをどうにかして欲しいものです。　あれは絶対製作者の趣味としか考えれませんよ」

「視線のやり場に困る、というわけですか」

「何度かＩＳ同士の戦闘を見ましたが、確かに酷いですね」

「わかってくれますか」

「同じ男だからね。　同じ立場だったら、同じことを考えると思う」

「やっぱりわかってくれる人はいるもんですね」

「じゃあ次。　オリジナルの歌を歌っていると言う話を聞いたんですが、本当ですか？」

「それが本当ならば今度歌ってください。　歌も上手いという話もありますしね」

「えー、それって父さんか母さん辺りから聞いた話ですよね？」

終焉は暇なときに前世の歌を歌ったり弾いたりしているのだが、それは基本自室の中だから、それを知っているのは臨也や火織、家にいる者だけだ。

「そうですが何か？」

「……まあいいや。　それは間違いではないですけど、歌うとなるとテレビですよね」

「そうなるね。　社長がうるさくてね」

「あの人は人のことを何勝手に垂れ流してるんだよ……」

（情報屋が実の息子の情報を流してどうする……）

「まあいいや」

だが、終焉はそれを割り切った。

臨也が考えていることはなんとなくだがわかったからだ。

「いいですよ。　歌いましょう。　だけど、少し時間をくださいよ。曲を仕上げないといけないので」

「わかった。　社長にもそう言っておくよ。　準備ができたら連絡して」

「了解です」

「では、取材は以上になります。　これからＡクラスとＦクラスの

教室に行こうと思うんだけど、まずはAクラスの教室に行くから案内して？」

「わかりました」

終焉は幽、ルリをつれてAクラスへと戻った。

まあ、スターが二人も来るとなると騒がしくなる訳で、

「幽平さん、サインください！」

「ルリさん、握手してください！」

こうなる訳だ。

「やっぱりすごい人気だな」

「そうですね。　幽さんもルリさんも大人気ですしね」

「僕は生で見るのは今日が初めてかな」

「そうだったか？」

「話なら聞いたことはあるけどね」

「そうでしたか」

「……私たちからしてみれば何であの二人と知り合いなのかがわからないわ……」

「ヒナギクさん、それが折原家ですから」

「本当にとんでもないわね……」

「そういう家系だ」

臨也から繋がる関係はいろいろと凄い。

世界中のお偉いさんに、スターにデュラハンなどなど、とんどもない繋がりを持つ。

「さて、仕事やるぞ」

バカテス　清涼祭終幕（前書き）

清涼祭終了！

『ただ今の時刻を持って、清涼祭の一般公開を終了しました。　各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「終わったー」

「やっと終わったか」

「皆さん、お疲れ様でした」

「何でハヤテ君はそんなに元気なのよ……」

「こういうのは僕の仕事ですので」

「それでもおかしいでしょ……」

体力的にも疲れたはずなのに、ケロッとしているハヤテ。
ハヤテの体力は異常である。

「皆さん、着替えてから片付けをしましょう」

「んじゃ、俺は学園長のところに行くか」

「いってらっしゃい。　片付けは僕たちの方でやっておくから、ちゃんと殺っといてよ？」

「わかっている。　それも含めて行ってくるんだから」

「あれ？　シエン君、どうかしたの？」

終焉がクラスを出ようとすると、ヒナギクに声を掛けられた。

「ちょっと依頼の清算にな。　片付けは任せてしまう。　悪いな」

「別にいいわよ。　私も依頼人になったこともあるし、その辺りのことはわかってるつもりだから」

「悪いな。　じゃ、俺、急ぐから」

そして所変わって学園長室。

「学園長、これが竹原を調べた結果です」

「ふむ……どうでもいいものも混ざっているが、流石だね」

どうでもいいものとは、体重とかそういうのだ。

本当にどうでもいい。

「さて、俺はこの依頼の報酬を頂きたいところですが、竹原の始末、やらせてもらいます」

「わかっているさね」

コンコン

「邪魔するぞ」

「お主、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが……」

「アタシは前に返事を待つように言ったはずだがねぇ」

「お主も来ておったのか」

「ああ。　来ると思っていたよ。　ムッツリーニもついてくるとは思わなかったが……というかその格好は何だ？」

「……訊かないで欲しいのじゃ」

「……チャイナ服」

「……まあ、ドンマイ」

原作通りなのだが、それでもなぜか哀れに思えて仕方が無い。

「学園長よ、ワシらは負けてしまったのじゃが、シエンのおかげで腕輪の確保はできた。　教室の改修――」

「待て！　秀吉！」

「む？」

「……盗聴の気配」

「やられたか！」

雄二は焦っている。

「……さて、ようやくか」

「シエン！　早く追うぞ！」

「お前らはここで待ってな。　俺が竹原諸共始末する」

終焉は空中投影ディスプレイで監視カメラを確認する。

（ビンゴ。　あいつら、原作通りに動いているな）

「くくくっ、ただで済むと思うなよ、竹原ぁ！」

終焉は学園長室の窓から屋上へと跳び上がる。
いとも簡単に屋上に着き、愚かな二人組みを待つ。

ギィィ……

扉が開く。

「へへっ。　これで俺たちの逆転だな」

「そうだな。　これで受験勉強なんてしなくても「そうだな。　確かに受験勉強は必要ない」なっ！？」

「折原、なんでここに！？」

「お前らは受験勉強など必要が無い。　なぜなら、ここから逃げれるはずが無いからだ」

死刑宣告。
終焉は絶刀を抜き放つ。

既に鋼糸で拘束されている二人に、逃げ道は存在しない。

「や、やめろ……」

「助けてくれ……」

動けぬ二人にとって、刀を持ち、無表情で迫る様は恐怖でしかない。

「殺しはしない。　ただ、しばらくは動けなくなるだけだ」

一歩、また一歩と近づく。

その足音は、愚者へのカウントダウンであった。

「我が愛刀で斬られること、誇るといい。　では、堕ちろ」

絶刀が振られる。

常夏コンビは絶刀に触れることなく地に崩れた。

「……冗談だ。　貴様らなど、絶刀に触れること資格などない」

終焉は絶刀ではなく、鋼糸で二人の意識を刈り取ったのだ。

「さて、縛り上げておくか」

鋼糸の拘束を解き、ただの紐で縛る。

「こいつらは、まあここに放置しておくか」

気絶した二人は放置して、今回の現況である竹原の元へ。

「よぉ、竹原ぁ」

「貴様は……！」

「さて、妹を狙ったことを後悔しながら死ね」

「行け、お前たち！　コイツを捕らえろ！」

出てくるのは十人の男。

「だから言っただろう。　無駄だと」

鋼糸を使い、即座に切り刻み、意識を奪う。

「ここではもう誰も俺たちのことを見るものはいない。　だから、コイツが使える」

「何を……」

「“月読”」

終焉の万華鏡が竹原を捕らえる。

「今から72時間、貴様は殺され続ける。　だが、死ぬことは無い。
永遠に行き続け、殺される痛み、恐怖を味わい続ける」

貼り付けにされた竹原は複数の終焉に同時に刺し貫かれる。

「あああああああああああああああ!?!?!?!?!?!?!
?」

だが、次の瞬間には何も無かったかのように、傷はなくなっていた。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」

「まだまだ」

貼り付けにされたままの竹原は、足を切り落とされ、腕を切り落とされ、腹部を刺され、甚振る様に殺された。

「あ……ああ……」

「72時間、貴様は殺され続ける。　死ねない苦しみを味わいな」

バタン。

竹原が悲鳴も上げずに倒れる。

「俺は守ると決めた者のためになら、鬼にも悪魔にも、なんにでもなる。　そう決めた」

だから、手段も選ばない。

それが、殺しであろうと、どんなに外道なことでも、終焉は躊躇わずに殺れる。

「貴様が麗奈に手を出した時点で、貴様の人生は終わってるんだよ」

竹原の始末を終えた終焉は、学園長に報告をし、Ａクラスとｆクラスの合同の打ち上げのある公園へと向かった。

もちろん、バイクで。

「よおシエン」

「常夏はどうしたんじゃ？」

「俺のほうで処理しておいた。　俺を見たら相当ビビるんじゃないか？」

「お前（お主）は何をした（のじゃ）……」

「拘束して真剣を振り下ろす」

「そりゃぁビビるだろうな……」

「臨死体験じゃな……」

「さて、打ち上げだ。　今日はまだこっちにいるしな、ゆっくり楽しむとするか……っと、そういえば雄二」

「何だ？」

「売り上げはどうだった？」

「全員分の机と椅子は無理だな。　もう少し行けば全員分できたんだが……」

「もしもお前らが優勝できていれば全員分は行けたな」

「多分な。　だが、お前が俺らに腕輪を譲ってくれたおかげで、それなりに客が増えたんだ。　感謝している」

「そうか。　んじゃ、パーッとやろうぜ」

「ああ」

終焉は雄二と別れてぶらりと歩く。

「あ、終焉様！　ヒナギクさんをどうにかしてください！」

ハヤテの方を見ると、ヒナギクが顔を赤くして、ハヤテに迫っていた。

「シエン君、邪魔しないで！　いいところなんだから！」

「ヒナギクさん！？　終焉様、助けてください！」

「ハヤテ、受け入れろ」

「終焉様！？　あ、終焉様！　ヘルプミー！」

ヒナギクに迫られているハヤテを放置して次の場所へ。

「……麗奈、明久、こんな場所で何するつもりだ？」

これも顔を赤くし、服装をはだけて明久に迫る麗奈の姿があった。

明久は明久で抵抗らしいものをしていない。

「あ、ちょうどよかった！　シエン、麗奈を止めて！　鋼糸で身動きが取りづらいんだ！」

「なるほど。　だから抵抗してないのか」

「感心してないで止めてよ！　皆の見てる前でやるなんて嫌だよ！」

「と言うことは、既にやったんだな」

「うっ！　いいから止めて！」

言葉に詰まったことから、既にやったのがわかった。

「わかったわかった」

明久に絡みつく鋼糸を切断し、麗奈を気絶させた。

気絶させたくは無かった終焉だったのだが、離しても明久に迫るため、渋々眠らせたのだ。

「明久、麗奈を連れて家に帰れ。　ここにいるより、家の方がいい。お前の家に泊まることは俺から父さんに言っておくから」

「えーっと、ありがとうシエン。　風邪とかひいちゃうのは嫌だから、僕たちは先に帰らせてもらうね」

「ああ。　家ならなにしてもいいしな」

「じ、じゃあもう行くね！」

明久は麗奈をおぶって帰っていった。

「さて、俺も盛り上がるか！」

それから、公園では夜まで宴会のように盛り上がっていたとさ。

ＩＳ　クラス対抗戦と乱入者（前書き）

一話で対抗戦終了。

ＩＳ　クラス対抗戦と乱入者

清涼祭が終わり、翌週の月曜日。
この日はクラス対抗戦、一組対二組の試合だ。
清涼祭のおかげで、中国代表候補生の凰鈴音の存在がほとんど無きに等しい状態だが、一組の一夏と、二組の鈴音の試合だ。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

で、一夏と鈴は空中で向き合っている。
鈴の機体は『甲龍』。
読みは『シェンロン』だが、『甲龍』。
シェンロンと言ったら七つのボールで願いを叶えるあれを連想してしまうが、『神龍』じゃなくて『甲龍』。
大切なことなので何度も言いますよ。
読みは『シェンロン』だけど、『神龍』じゃなくて『甲龍』。
まあ、それは結構どうでもいいことなんだけど。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。　全力で来い」

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。　シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

ちなみに、終焉の“黒騎士（ブラック・オーガ）”と、吉宗の“大空（チェリー）”の全リミッター解除したら、操縦者もコアも灰と化す。

終焉の場合、灰すらも残らない。

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーが鳴り止むと同時に動き出す一夏と鈴。

「やるな、鈴」

「当然でしょ。　にしてもアンタ、本当に素人？」

「素人だぜ。　だが、俺を教えてくれる二人が滅茶苦茶なんだよ」

終焉と吉宗である。

剣にしても、知識にしても、容赦なく叩き込まれた。

終焉とやったときに何度か心が折られそうになったのは、まあ仕方が無いので省略。

「でも、そのくらいで勝った気にならないでよね！」

一夏は反応するが、肩に当たった。

鈴の甲龍の『龍砲』による衝撃砲だ。

「衝撃砲か！　厄介なもん使うじゃねえか」

「へえ、たった一回でわかったんだ。　でも、わかったところで全部避けきれる？」

「（ハイパーセンサーで空間の歪みと大気の流れを探らせるにしても、それじゃあ遅い。　すべて避けきるのは無理。　なら、多少の被弾覚悟で一気に畳み掛けるのみ！）」

一夏は動き、タイミングをうかがう。
一夏の持つ《雪片弐型》、そして『白式』の単一仕様能力の“零落白夜”。
零落白夜は『バリアー無効化攻撃』ができる。
シールドエネルギーに関係なく攻撃できるため、絶対防御が発動して一撃でもかなりの威力を誇る。
だが、自らのシールドエネルギーを使用するため、使用には難がある。
だが、当たれば脅威。
一撃必殺の諸刃の剣、それが雪片弐型と零落白夜だ。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

一夏がそういう。
仕掛けるつもりなのだろう

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。　とっ、とにかくっ、格の違いってのを見せてあげるわよ！」

『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』。
一度放出したエネルギーを再度取り込み、それを圧縮して放出し、瞬間的に加速する技能。
出しどころを間違えなければ、代表候補生とも渡り合える。
だが、普通この奇襲は一回しか通用しない。

「うおおおおっ！」

ズドォォォォンッ！

鈴に一夏のの刃が届きそうになった瞬間、突然アリーナ全体に走った。

☆

「（来たか……。　だが、数が三体とはな……）」

「（これも俺たちが介入した結果か……）」

終焉と吉宗は各々の思案をしていた。

《セイバー、あいつらに生命反応があるか調べてくれ。　それと、ドラグーンのリミッターを解除をしておけ》

《了解しました》

「さて、殺るか」

「待て。　遮断シールドがレベル４に設定されている所為でこちらからは手が出せない」

「残念ながら俺には常識は通用しないんでね。　遮断シールドなど、簡単に両断できる」

「……わかった。　お前に任せよう」

「さて、久しぶりの全力でも出してみるか」

《吉宗、反応しなくていい。　箒を見ておけ》

テレパスでそれだけ伝え、絶刀を出す。

「あ、これ持っといて」

終焉は腕に嵌められたリミッター用の腕輪を外し、吉宗に投げ渡す。

「お、おい、まさか……！」

吉宗の考えたことは間違っていない。

終焉は、乱入してきた三体のＩＳを生身で倒す気だ。

「まずはこれを壊すか。　“聖閃”」

鋼糸三十本の高速斬撃により、シールドバリアは断ち切られた。

それを見て、千冬は思う。

「（あの時どれだけ手を抜いていたんだ!?　生身でレベル４のシールドをああも簡単に断ち切るとは……）」

実際、終焉はあの日以上に身体能力が増している。

闇の炎の吸収は本来は一時的なはずなのに、終焉は永続的に強化されているのだ。

終焉は、闇の炎を使えば使うほど強くなる、とんでもない体質なの

だ。

「一夏、鈴、下がれ」

「シエン！？」

「生身で何する気よ！？」

「何って、あれを斬るだけだ」

《マスター、解析した結果、三体とも無人機です》

《わかった。　ありがとう》

「まあ、流石に三体同時に殺るのは面倒なんで、こうするがな」

翼だけを部分展開し、ドラグーンを飛ばす。

総数十のドラグーンが、三体のうちの二体を貫き、機能を停止させる。

「う、うそ……でしょ？」

「マジかよ……」

呆然とする二人。

ドラグーンから放たれた十本のビームがいとも簡単にＩＳを機能停止させたので当然である。

「邪魔だから下がってろ。　巻き込まれても知らないぞ」

「わ、わかった」

二人は下がり、残りの無人機は終焉に向いている。

「さて、久しぶりにやるか、あれを」

無人機は終焉へと右腕を向けた。

そして、アリーナのシールドを貫いたレーザーを放つ。

「シエン！」

終焉は避けようとしない。

それぱかりか、レーザーに向かって歩みを進めている。

そして、終焉は全員の度肝を抜いた。

「“唯閃”２０％」

放たれた一閃に、レーザーが打ち消されたのだ。

それどころか、終焉の一振りの余波で敵機ＩＳの体制を崩した。

『『『は？』』』

アリーナのシールドを破るほどのレーザーを、刀を一振りしただけで消し飛ばした終焉。

そんな馬鹿げたことをした終焉に、全員がぽかんとしていた。

「なんだ、この程度のレーザーか。　拍子抜けだな。　たった２０％でもあれか……」

唯閃の出力はあれでたったの２０％。

しかも、本気の一振りではなく、軽く振ったのにだ。

「１０％で余裕で両断できるな」

敵機ＩＳは最大出力形態（バースト・モード）にした右腕で再度レーザーを放つが、それも打ち消され、もう終焉の間合いだった。

「終わりだ」

終焉が前方に跳び、敵機ＩＳを通り過ぎる。

そして、終焉は絶刀を鞘にしまう。

スパンッ！

ＩＳは真っ二つにされ、そこには大きなクレーターが残っていた。

ＩＳ　クラス対抗戦と乱入者（後書き）

ドチート無双の終焉でした。
やっぱり、ドチート無双っていいね。
だけど、戦闘描写が酷すぎる……。

ＩＳ　対抗戦事後（前書き）

連続投稿。

ＩＳ　対抗戦事後

終焉が無人機を両断しピットに戻ると、全員がぽかんとしていた。

「お疲れ。　全力出せなくて残念だったな」

吉宗の言葉に全員が目を見開く。

「全力出したらここが割れる。　はぁ、満足に“唯閃”が使えんとか、マジでないわ……」

最大出力の唯閃で本気の一撃だったら、多分軽く3キロは割れる。

「あ、リミッター掛けとかねえとな……」

終焉はディスプレイを呼び出し、パパっとドラグーンの出力にリミッターをかける。

「折原、来い。　話がある」

我に返った千冬に呼ばれる終焉。

「了解」

抵抗することなくついていく。

「ここならばいいだろう。　まず、あれはなんだ？」

「アレってなんですか？　ドラグーンですか？　それとも唯閃のこ

とですか？」

「両方だ」

「ドラグーンはリミッターを外しただけです。　唯閃はあれでも出力２０％です。　最後は１０％ですけど」

「唯閃とは何だ？」

「母さんから教えてもらいました。　簡単に言うと、身体能力を跳ね上げる技です」

「……そうか。　念のために言っておくが、唯閃とやらは人に向けて使うな」

「わかっている。　当たり前のことを言わないでください」

「最後に。　お前のＩＳは何だ？」

「オーガはオーガです。　俺が使っても壊れない、最高のＩＳです」

「ハァ……、もういいぞ」

頭を抑える千冬。

あまりのとんでもなさに頭痛がしだしたのだ。

「失礼しました」

終焉はそそくさとこの場を後にし、部屋に戻る。

「おかえり」

「ただいま。　さて、解析するか」

「なにを？」

「あのＩＳのコア」

「……いつの間に取った？」

「最後の一太刀のとき。　見えなかったか？」

「写輪眼を使えば見えるが、そもそもあの瞬間に取れるとか普通に考えておかしいだろ。　お前も俺も普通じゃないけどさ」

「まあな。　最後のあの瞬間、闇の炎を使い、絶刀にコアを吸収したんだ。　で、そのあとすぐに光の炎で取り込まれたコアを解放した。　で、そのコアは取り出してすぐに服にしまった」

あの神速の世界で同時にそんなことをしていた終焉。

「あの一瞬でそんなことを……。　一瞬炎を感じたのは間違いではなかったか……」

「やっぱり炎は感じていたのか」

「一応な。　目視するのも難しいほど薄かったから気づきにくかったけどな」

「ま、そういうことでコアは一個盗み出したわけだ。　他にコアは

一個残しておけばいいだろう」

「ドラグーンで中枢とコアを狙っていたのか？」

「ああ。　一機はコアは残してある。　両方中枢をぶち抜いておいた。　流石に原作以上の情報を出すわけにはいかないしな」

「で、お前が最後に斬ったあれはコアを取り出し、コア諸共消失したように演出したと？」

「正解。　中枢とコアの周囲はばれないようにしてあるさ」

「もう流石としか言いようだない手際だな……」

「それが俺クオリティー」

「で、そのコアはどうするんだ？」

「解析して、俺が保管する」

「まあ、それが妥当だな。　ばれたら大変なことになるしな」

「ばれたら口封じするさ」

殺しはしないが、精神的に殺したり、記憶を消したり、脅したりと手はいろいろある。
最も敵に回してはならない相手である。

「……俺、お前が味方で本当によかったと思う」

「転生者なんて敵になったら厄介でしかないしな」

「いや、転生者云々よりも、お前自身が恐ろしい」

折原の情報網に、精神を殺すに持って来いの万華鏡写輪眼、記憶操作もお手の物の超能力、そして圧倒的過ぎる力。

なんでもありすぎて、もしも何も気にしなくなったら誰も手が負えない。

「さて、さっさと解析するか」

「そんなに簡単に解析できるものなのか？」

「邪魔がなければ能力全開でやれるからな」

「あーなるほどね」

「俺、集中するから、あんま話しかけないでくれよ」

「了解」

何十もの空中投影ディスプレイをだし、無限の手（インフィニティ・ハンズ）を使う。

現れた手が、キーボードを操作し、次々に画面が変わっていく。

その速度は篠ノ之束のそれとでもさえ比べ物にならないほどに速い。

「終わった」

そして、僅か十分ほどでコアの解析を終わらせた。

「もう終わったのか！？　まだ十分くらいしか経ってないぞ！？」

「そもそも一度解析したことあるし。　まあ、一回やったから覚えてるんだよ」

「流石究極の記憶能力者だな……」

終焉の完全記憶能力は、一度見たもの（それがどんな一瞬でも）瞬時に覚え、忘れることが無い。
見たものだけでなく、音すらも記憶してしまう。
もはや究極の完全記憶能力と言ってもいいだろう。

「さて、結果は普通のコアと大して変わりは無かった。　問題は無いだろう」

「コアネットワークはどうするんだ？　俺のはちょっと小細工してあるから命令なんて受け付けないが」

「オーガのは俺が作ったコアだ。　全く問題ない。　で、このコアだが、もう手を加えてある」

「手が早いな。　そしてちょっと待て。　お前、コア作れるのかよ」

「篠ノ之束が作れるコアとは違うがな。　あれはあいつにしか作れない。　オーガに使ったコアは俺にしか作れない」

「つまり、本物の性能はそのままコピーしたが、本家の上を行くコアを作ったと」

「まあな。　じゃないとＧＮドライブなんて耐えれるわけが無いだろう」

「それもそうだな」

もう終焉の異常ぶりにはもう慣れてしまった吉宗だった。

バカテス　如月ハイランド《前編》（前書き）

まるでバカテスがメインのように見えますが、これはＩＳがメインです。
紛らわしいけど、ＩＳがメインのはずです。

バカテス　如月ハイランド《前編》

prrrr！

「もしもし、どちらさんだ？」

終焉に朝っぱらから電話が非通知で掛かってきた。

『……』

……キサマヲコロス』

「ほう、だったら俺は殺られる前に貴様の個人情報を全世界に公表してやろう。　そして、貴様の隠していることも、恥ずかしい思いでも、すべて晒してやろう。　どうだ、嬉しいだろう？」

『俺が悪かった』

「わかればいい。　で、どうした雄二？」

『どうしたじゃねえ！　何でアレを翔子に渡した！？』

「前に言っただろう。　俺は翔子とお前の関係を応援するって。そのために、わざわざ明久と麗奈ではなく、翔子にプレゼントしたんだ」

『お前は俺を不幸にする気か！？』

「翔子みたいな奴に好かれているんだ、お前は誇っていいんだぞ。あいつがやっているのは多少やりすぎだが、それでもお前を思う

気持ちは本物だ。　翔子のどこに不満があるんだ？」

『それは……』

「まあいい。　俺は用があるからもう切るぞ」

終焉は一方的に電話を切ったが、雄二から再び掛かってくることはなかった。

「行くのか？」

「ああ。　吉宗も来るか？」

「いいのか？」

「ああ。　確実に雄二と翔子をくっつけるためにやるんだよ」

「乗った。　俺もあの二人にはくっついて欲しい。　特に、霧島翔子にはな」

「雄二も意地にならなくてもいいのにな」

二人は二人にくっついて欲しいかったようだ。

「んじゃ、行くか」

終焉は各部リミッターを解除して、いつもの如くＧＮ粒子とステルスで完璧に姿を隠し、腕には吉宗を抱えて飛び立った。

吉宗には超能力で覆い、負荷が掛からないようにしてあるため、何も問題ない。

「速いな」

「それが俺クオリティー」

チートなのは終焉だからと言う理由で納得されるのはもう終焉を知るものにとっては常識になっている。

☆

「いらっしゃいマセ！　如月ハイランドへようこソ！」

終焉たちは姿を隠し、雄二と翔子の同行を観察していた。

「本日はプレオープンなのでデスが、チケットはお持ちですカ？」

「……はい」

「拝見しマース」

「……そのチケット、使えないの……？」

「イエイエ、そんなコトはないデスよ？　デスが、ちょっとお待ちくだサーイ」

係員は携帯を取り出し、電話をし始めた。

「――私だ。　例の連中が来た。　ウエディングシフトの用意を始めろ。　確実に仕留める。　あのお方の指示通りに行けば大丈夫だ。　抜かるなよ？」

あのお方とは、もちろん終焉のことだ。
一方その頃、終焉はというと。

「さて、俺も移動しないとな」

「だからその格好なのか」

「ああ」

スタッフと同じ格好をしており、バイザーを付けている。

「んじゃ、俺は行く。　お前は好きにしていいぞ」

「じゃ、俺は監視させてもらう」

終焉と吉宗はテレポートし、各々動いた。

「カメラを持ってきました」

「オー、わざわざアナタ様が持ってきてクレたのデスか。　感謝しマース」

「悪いがちょっと電話をさせてくれ」

「わかりまシタ」

「……クソッ、やっぱりでねえか」

雄二は終焉の携帯に電話を掛けたようだった。

もちろん、終焉の指示で他のメンツの携帯の電源は切ってある。

「もうよろしいデスか？」

「早くしないと貴方の個人情報をばら撒きます」

「おい！？　なにしようとしてるんだ、お前は！？」

「人違いではありませんか？　私はナナリー・ヴィ・ブリタニア（１４歳）、通称ルルーシュだ。　けして、折原とかいう名前ではない」

「人種性別氏名、そして地味に年齢に嘘をつくな！　しかもどう考えてもその名前で通称ルルーシュはないだろ！　ついでに俺は一言も折原なんて苗字は言ってない！」

「言い忘れていました。　私は多少ならば人の思考が読めるのです。貴方が折原の名前を考えていたのは読めました」

「なにぃ！？」

終焉は間違ったことは言っていない。

実際に読心術を使えるし、能力もあるので人の考えを読むのは朝飯前だ。

「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ」

「……？？？」

雄二は翔子のスカートを捲り上げた。

「……っ！！（ギラッ）」

キツネの着ぐるみが懐に手を伸ばした。

「咄嗟に懐のデジカメに手を伸ばす動き……。　やはりムッツリーニも来ていたか」

「流石ですね。　人前であるにも拘らず、彼女さんのスカートを捲るとは。　素晴らしい度胸ですね。　リア充モゲロＤｅｔｈ」

「キャラ変わってないか、お前！？」

「さて、証拠写真もあるので警察に……」

「待て！」

「……それは困る」

「そうですか？　では仕方ありませんね」

「ちょっと待て、その写真をよこせ」

「写真に彼女の下着が写ってるかもしれないからと言って、奪うのはよろしくないですよ？」

「違う！　それをネタにされるのが嫌なだけだ！　俺は翔子の下着なんかには興味は無い！」

「……それはそれで、困る」

「ぐぁあああああっ！　理不尽だぁあっ！」

「でハ、写真を撮りマース。　はい、チーズ」

「では、すぐに印刷をします。　しばらくそのままお待ちください」

「……わかった。　このまま待ってる」

「ぐぁあああっ！　このままだと俺の頭蓋がっ！」

「はい、どうぞ」

雄二が翔子の手から解放された。

「……ありがとう」

「こちらの方でサービス加工を入れておきました」

「……なんだ、これは」

原作通りの写真となっている。

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「貴様正気か！？　コレを飾ることでここに何のメリットがあると

いうんだ！」

「……雄二、照れてる？」

「すまない。　どこからどう見てもこの写真には照れる要素が見当たらない」

『あぁっ！　写真撮影してる！　アタシらも撮ってもらおーよ！』

『俺たちの結婚の記念に、か？　そうだな。　おい係員。　俺たちも写ってやんよ』

上から目線のチャラいバカップルがやってきた。

「すいまセン。　こちらは特別企画でスので……」

『あぁっ！？　いいじゃねーか！　オレたちゃオキャクサマだぞコルァ！』

『きゃーっ。　リュータ、かっこいーっ！』

俗に言うチンピラだ。

「ここは私に任せて貴方方は先に行ってください」

「デスが……」

「大丈夫だ。　天修羅の名は伊達じゃないさ」

「それデはお願いしマース。　ルルーシュ、早く戻ってきてくださ

いね」

「了解した」

終焉によるチンピラ処理が始まった。

愚かなバカップル二人は、一瞬だけ発動された写輪眼の瞳術により、その場の記憶を改竄しておいた。
どのようにかと言うと、超がつくほどイチャイチャした写真を撮ったと錯覚させておいたのだ。
まあ、こんなどうでもいい奴らがどうなろうと、困る人間は誰一人存在しないので、その程度で済ませた終焉に感謝すべきだろう。

「にしても、ネタのつもりで言った名前をあの人が実際に使うとは……」

自身の顔がルルーシュなので、ネタのつもりで『通称ルルーシュ』と言ったのだが、まさか本当にそう呼ばれるとは思っていなかった終焉。

「っと、俺も戻らなければな」

終焉が戻ると、二匹のキツネの着ぐるみと、雄二と翔子、それと似非外国人がいた。

「お待たせしました」

「おヤ、モウ戻ってこられたのデスか。　流石デスね」

「翔子、絶対にお化け屋敷以外に行くぞ」

「そうですね、断れば貴方の実家に大量のプチプチの梱包材を送ります」

「そうデスね。　ルルーシュの力があれバ、五キロは軽く手に入りますネ」

「やめろっ！　そんなことをされたら我が家の家事が全て滞ってしまう！」

「知っているからこの手を使うのです」

「なんてことをしてくれるんだ！」

雄二が終焉に気を取られている隙に、似非外国人が翔子に近づいていた。

「坂本翔子サン。　お化け屋敷は彼氏に抱きつき放題デスよ？」

「……雄二。　お化け屋敷に行きたい」

「貴様！　翔子に何を吹き込んだ？！」

「なんのことデスか？」

「惚けるな！　いだだだだっ！」

雄二は翔子に間接を極められ、抵抗することができなくなった。

「では、こちらにサインをして下サーイ」

「これは只の誓約書ですのでご安心を」

「安心できるかっ！　……だがまぁ、面白そうではあるな」

【誓約書】

1．私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。

2．婚礼の式場には如月ハイランドを利用することを誓います。

3．どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

「……はい雄二。　実印」

「朱肉はこちらデース」

「俺だけか！？　おれだけがこの状況をおかしいと思っているのか！？」

「おかしいのは貴方デース」

「おかしいのはお前らだぁあ！」

「さて、これは冗談で、誓約書はいいのでどうぞ入ってください」

「……うん。　冗談」

「カーボン紙を入れて写しまで用意しているくせに冗談と言い張るのか」

「それデハ、邪魔になりそうなノデその大きなカバンをお預かりしマース」

「……お願い」

翔子の手元には大きなバックがある。

「……零れちゃうから、横にしないで欲しい」

「このカバンをデスか？　わかりまシタ。　気をつけマース」

「では、行ってらっしゃいませ」

「……雄二行こう」

「痛だだだっ！　肘がねじれ切れるっ！」

『私だ。　ターゲットが入った。　シエン様の考案の作戦を実行せよ』

雄二たちが扉の向こうに消える直前、似非外国人がそう通信をした。もちろん、雄二にギリギリ聞こえるかどうかのタイミングで掛けさせたのだった。

「さて、俺はあっちの準備のほうを見てくる。　出てきたら作戦通りにつれて来い」

「わかっております」

☆

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

《なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生カップルがいらっしゃっているのです！》

《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援するための催しを企画させて頂きました！　題して、【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズ～！》

ドンドンパフパフ～♪

その音と同時に、出入り口を封鎖する。

《本企画の内容はいたってシンプル。　こちらの出題するクイズに答えていただき、見事五問正解したら弊社が提案する最高級のウエディングプランを体験して頂けると言うのものです！　もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍と言うことでも問題ありません！》

《それでは、坂本雄二さん&

《第一問！》

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうか？》

ピンポーン！

《はいっ！　お答えをどうぞっ！》

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！　恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

《お見事！　正解です！》

――このクイズは出来レースだからだ。

《第二問！　お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうかっ？》

ピンポーン！

《はいっ！　答えをどうぞっ！》

「鯖の味噌煮！」

《正解です！》

「なにぃっ！？」

《お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名

【鯖の味噌煮】で行われる予定です！》

「待ていっ！　絶対その別名はこの場で命名しただろ！　強引にも程があるぞ！」

《第三問！　お二人の出会いはどこでしょうかっ？》

雄二の叫びは無視して続行する。

「……させない」

ブスッ

「ふおぉぉぉっ！？　目が、目がぁっ！」

ピンポーン！

雄二がどこかの空飛ぶ城の大佐の物真似をしている間に翔子がボタンを押す。

《はい、解答をどうぞ！》

「……小学校」

《正解です！　お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至ると言う、なんとも仲睦まじい幼馴染なのです！》

《第四問！》

ピンポーン！

「わかりません！」

《正解です！　『お二人は生涯に何人の子を授かるでしょうか？』という問題で、まだまだ青春真っ盛りなお二人にとって、どれだけ子を授かるかはわかりません！　問題を読み上げる前に答えを言い当てた坂本雄二さんと翔子さんの間には素晴らしい愛の絆があるようです！》

雄二の考えは読めている。

『わかりません』と言うのは予想の範囲内のため、予備問題も存在している。

《それでは最終問題です！》

『ちょっとおかしくな～い？　アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーセーだけが特別扱いなワケ～？』

『あの、お客様。　イベントの最中ですので、どうか――』

『あぁっ！？　グダグダとうるせーんだよ！　オレたちゃオキャクサマだぞコルァ！』

現れたのは終焉の写輪眼で記憶の改竄を受けたバカップル。

この二人はどこまでも邪魔をするようだ。

『アタシらもウエディング体験って奴、やってみたいんだけど～？』

『で、ですが――』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルァ！　オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ！』

「っるっせぇんだよ！　黙ってろ屑共が！」

終焉が耐えれなくなり怒声を上げる。

『あぁ！？』

「他の客が黙ってみてるんだろうが！　テメェらも黙ってみてやがれ！　テメェらなんぞがウエディング体験なんぞやったらここの評判が地に落ちる。　目障りだ、消えろ」

『何言ってんだ、このガキぃ！　喧嘩売ってんのか、あぁっ！？』

「わからないのか？　売っているんだよ、屑。　邪魔だからとっとと消えろ」

元から知っていたことでも、うざいものはうざかった。

終焉の沸点も低くなったものだ。

『リューター！　こんなやつととっととやっつけちゃってよ！』

『そうだなっ！』

馬鹿は殴りかかってくるが、動きが止まる。

「どうした？　殴るんじゃなかったのか？」

『テメェ！　なにしやがった！？』

「さて、こんな屑がＫＡＮＺＡＫＩグループに存在しているとは、一度社員全ての行動を知らなければな……」

『なに言ってんだテメェは！』

「わからないのか？　俺は折原終焉。ＫＡＮＺＡＫＩグループ社長の折原火織の息子で、ＩＳを使える男だ」

会場がざわめく。

まあ、こんなところに世界に三人しかいない男性ＩＳ操縦者がいるんだから当たり前だ。

しかも、世界のＫＡＮＺＡＫＩグループ社長の息子ともなれば余計にだ。

どれも世間に公開されているため、何のためらいも無く暴露することが出来る。

「さて、会場の皆さん、こちらの屑は私のほうで始末しますので、引き続きイベントの方をご覧ください」

終焉はそう告げ、馬鹿二人を引きずって出て行った。

《えー、最終問題になります！》

終焉が出て行った後、イベントは再開された。

☆

『おい！　放せ！』

『放しなさいよ！　男が女に逆らうんじゃないのよ！』

「下らない、実に下らない。　あんたらは自分の置かれた立場にわかってない」

反応するが、二人は引きずったままだ。

『何！？』

「俺はＫＡＮＺＡＫＩの社長の息子。　しかも、俺そのものの立場も上だ。　ついでに言うと、貴様らは悲しいことにＫＡＮＺＡＫＩの下っ端中の下っ端。　言いたいことがわかるか？」

二人は顔を青ざめていく。

「俺の一言で貴様らは職を失う。　まあ、永遠に職を失っていろ」

人の目が無い部位に来た。

「この目を受けることを光栄に思え」

終焉の眼がギアスの紋様になる。

「“時間指定月読”“神威”」

終焉は月読を時間を設定して発動できる。

例えば、二時間後に指定すれば、ちょうど二時間後に月読が発動する。

今回は五分後に設定し、神威で馬鹿二人を裏取引を生業にする業者の事務所の前に飛ばした。
そして、終焉は携帯を取り出し連絡を取る。
これで馬鹿二人は始末が終わった。

「流石に万華鏡二つ連続は疲れるな」

そうは言っているが、傍から見ればいつもと変わらないし、事実終焉もそこまで疲れていない。
本当にふざけた身体である。

バカテス　如月ハイランド《中編》（後書き）

馬鹿二人も永遠におさらばです。

バカテス　如月ハイランド《後編》（前書き）

如月ハイランドはこれで終了です。

「終焉」

「吉宗か。　どうした？」

「あいつらは？」

「もう出会うことは無い。　俺が始末した」

「……何をしたんだ？」

「月読に神威で裏業者の事務所の前に転移させた。　生きるかどうかは知らん」

「……だろうな。　月読を使った時点で一般人が耐えれるはずが無いしな」

「さて、最後にまだあれがある。　どうせだから見ていけ」

「ああ。　最初からそのつもりだ」

二人は会場に戻る。

Ｓｉｄｅ～雄二～

シエンか明久の指示か、スタンガンで眠らされていつの間にかタキシードに着替えさせられていた。

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！　皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！》

馬鹿でかい拍手が聞こえるが、どうせサクラが混ざってるんだろうな。

「坂本雄二サン、お願いしマス」

似非野郎が耳打ちしてきた。

コイツをぶちのめして逃げてやるか。

「抵抗すれバ、海胆とタワシの活け造りをアナタの実家に送りマース」

そんなことをされたらあの母親は全部海胆だと勘違いしてタワシにも手を出してしまう……！

なんてことを考えるんだ……！

「やれやれ……。　まぁ、あくまでただの体験だしな。　適当に付き合ってさっさと終わらせるか……」

こいつらの狙いは一連のシーンを大々的にメディアに発表することだ。

俺は誓いの言葉までに脱走すればいい。

大げさに仮病でも使えば式を断念せざるを得ないはずだ。

これさえ逃げれば後はどうにでもなる。

だが、問題はシエンだ。

あいつのことだ、もうあのバカップル二人は始末しただろう。

あいつの目を潜ってどうやって逃げ切るかが問題だな。

だが、それを考えている時間は無い。
どうにかなるだろう。

「さァ、どうゾ」

「あいよ」

小さな階段を上り、ステージに上がると一瞬めまいがした。
おかしいだろ、このセット。
数え切れないスポットライトにライブステージのような観客席。
スモークの設備はおろかバルーンや花火の用意までしてあるように見える。
……金掛けすぎだろ。

《それでは新郎のプロフィールの紹介を――》

そこまで本格的にやるのか。
きっとシエンたちにでもに訊いて細かくした調べを――

《――省略します》

手ぇ抜きすぎだろ。

《それでは、いよいよ新婦のご登場です》

ＢＧＭとアナウンスが流れ、同時に会場の電気が全て消えた。
スモークが足元に立ち込め、否応なしに雰囲気が盛り上がる。
これで翔子に花嫁衣裳が似合ってなかったら興ざめだな。

脱走はまだ大丈夫だろう。
折角だ、翔子のドレス姿くらい見ておくのも一興だ。

《本イベントの主役、霧島翔子さんです！》

アナウンスと同時にスポットライトがステージの一点のみを照らす。
暗闇から一転した輝きに思わず目を瞑る。
そして、再び目を開けたときに飛び込んできた姿に、一瞬目を疑った。
あれは……誰だ？

『……綺麗』

静まり返った会場から洩れた台詞。
純白のドレスのスカートの裾は床に擦らない限界の長さに設定されていて、あいつがステージの中央まで歩いてくる間、一度も床に触れなかった。

「……雄二……」

どこか不安げに俺を見上げる。

「翔子、か……？」

「……うん」

つい頭が真っ白になり、出たのは下らない質問だった。
あまりの変化に確認したかったのかもしれない。

「……どう……？　私、お嫁さんに、見えるかな……？」

俺はつい勢いで返事をしてしまった。

「ああ、大丈夫だ。　少なくとも、婿には見えない」

さっき頭に浮かんだ『似合わなければ興ざめ』なんて言葉はすでに消え去っていた。

あれだけ言えただけでも上出来だと思う。

「……雄二……」

翔子はブーケを抱えなおし、そして、その場で動きを止めた。

「お、おい。　翔子……？」

様子がおかしい。

駆け寄るべきか一瞬迷う。

すると、俺が迷っている間に、翔子は再び言葉を紡いだ。

「……嬉しい……」

翔子が俯き、ブーケに顔を伏せる。

そして、静かに震えだした。

《ど、どうしたのでしょうか？　花嫁が泣いているように見えますが……？》

翔子は静かに泣いていた。

「お、おい。　どうした……？」

なんで急に泣き出したんだ？
会場は静寂からざわめきが生まれる。

「……ずっと……夢だったから……」

涙交じりの掠れた声。

《夢、ですか？》

「……小さなころからずっと……夢だった……。　私と雄二、二人で結婚式を挙げる事……。　私が雄二のお嫁さんになること……。　私１人だけじゃ、絶対かなわない、小さなころからの私の夢……」

口数の少ない翔子から紡がれた言葉は、俺に形容し難い何かの感情を喚起した。
翔子の俺への気持ちは、罪悪感と責任感から来る勘違いなのに、どうしてコイツはここまで強い気持ちを抱ける？

「……だから……本当に嬉しい……。　他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」

そこまで言って、また静かに泣き出した。
会場のどこかから鼻をすする音が聞こえてくる。
誰かのもらい泣きだろうか。

《どうやら嬉し泣きのようですね。　花嫁は相当に一途な方のようです。　さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか？》

俺がやることは只一つ、コイツの勘違いを正すことだけだ。

だが、頭ではそう考えてはいるのに、俺の口はなかなか言葉を紡ぐことができなかった。

「翔子。　俺は――」

（本当にお前はそれでいいのか？）

「！」

シエンの声！？

脳に直接響くように、俺にシエンの声が聞こえた。

（お前は本当にそれでいいのか？）

《どうしたのでしょう？　新郎は何かを探しているのでしょうか？》

どこだ？

どこにいる？

（お前は逃げてるだけなんじゃないのか？　自分を思ってくれる、翔子の思いから逃げてるだけなんじゃないのか？）

「……」

（自分の気持ちにいい加減気づけよ。　自分の気持ちから逃げるな。翔子の気持ちから目を背けるな。　逃げるじゃなくて、受け止めろ。　それが嫌なら完全に拒絶しろ。　それが、お前ら二人のためだ）

なんだ、なんなんだよ、この声は？！

《あれ？　は、花嫁さん？　花嫁さんはどちらに行かれたのですかっ？》

俺が頭に響く声に気を取られていた隙に、翔子は壇上から姿を消していた。
さっきまで立っていた場所にブーケとヴェールを残して。

「……」

俺はヴェールを拾い上げる。

《霧島さん？　霧島翔子さーんっ！　皆さん、花嫁を捜して下さい！》

スタッフがバタバタと駆け出す。
これは中止か？

「さ、坂本雄二さん！　霧島さんを一緒に探して下さい！」

「俺はパスだ。　便所にも行きたいし、そんな余裕はねえ」

「え？　ちょ、ちょっと、坂本さん……！」

背を向けて歩き出す俺に、スタッフが声を掛けてくるが、無視の姿勢を崩さないでいると諦めたようだ。
さて、そろそろか？

「いい加減出てきたらどうだ？　シエン」

「ほう、気づいていたか」

「あの声の正体は知らないが、お前なら俺のほうに来ると思ってたさ」

「ふっ、わかりやすかったか」

「で、何なんだよ、お前は。　俺の何を知っている？」

「知っているさ。　翔子がお前を思い始めたあの事件のこともな」

「！　ならわかるだろ！　翔子の俺への思いは罪悪感と責任感から来るものだって！」

「俺はわからないな。　翔子の気持ちから逃げようとする、お前に」

「なに？」

「たとえどんなことが原因で翔子がお前のことが好きになったとしても、あいつの思いは本物だ。　あの事件からずっとお前を一途に思い続けたにも関わらず、お前は煮え切らずにはっきりとしないまま今もその状態のまま変わらない。　お前さ、本当に翔子のためを思っているのならはっきりしろ。　好きなら好き、嫌いなら嫌いって言ってやれ。　じゃないとお前らはこのままずっと苦しみ続けることになるぞ」

「……」

「“過去”から逃げるのはいい。　だがな、“今”から逃げるのは止めろ。　“今”から逃げたら“明日”なんて見えてこない」

「……」

「翔子のためを思うのなら、自分から逃げるな！　翔子に真正面から向き合ってやれよ！」

「……俺は帰る」

「……そうかよ」

シエンは去って行った。
翔子のカバンを残して。

☆

「よぉ、翔子」

「……雄二……」

俺は今翔子の目の前にいる。

「翔子」

「……なに？」

「お前の俺への気持ちは過去の罪悪感と責任感から来る勘違いだ」

「……ゆう、じ……」

正面から言われた傷ついたかもしれん。

「だけどな、俺はもう自分から逃げるのは止める」

「……？」

もう、あの“過去”から、そしてこの“今”から逃げるのは止めよう。

「その勘違いは俺の勘違いだった。　お前がどういう理由で俺を好きになったかは知らない。　だが、それでもお前が俺が好きなのは変わらない」

「……雄二？」

不思議がる翔子。

「翔子、俺はお前が好きだ！　だから俺と付き合え！」

「……ほん、とう……？」

「ああ。　もう俺はあれから逃げない。　自分からも逃げない。自分に嘘はつけない。　俺は前から薄々感じていた自分の気持ちから逃げ、自分に嘘をついていた。　だけどな、もう自分に嘘はつきたくない！　俺がお前が好きって気持ちに嘘偽りは無い！」

「……ゆう、じ……！」

そういえばこれを渡すのを忘れてたな。

「っ！　……さっきのヴェール……！」

折角拾ったんだ。
この日の思い出の証としてコレ以上ないものだろう。

「あと、弁当、旨かったぞ」

軽くなったカバンを翔子に渡す。

「……気づいて、くれたんだ……」

「さっさと帰るぞ。　遅くなると色々誤解されるからな」

「……雄二」

「特にお袋の奴はいくら言っても――――」

「雄二っ！」

ここ最近では記憶にない翔子の大きな声。

「私、やっぱり何も間違ってなかった！」

「そうかよ。　帰るぞ」

ありがとな、シエン。

☆

同日、俺はシエンに電話を掛けた。

『……どうした、雄二？』

「ありがとな。　お前のおかげで自分に正直になれた」

『俺は思ったことを言っただけだ。　雄二』

「何だ？」

『翔子を手放すなよ』

「何当たり前なことを言ってるんだよ。　そんなことわかりきってるさ」

『それならいい』

もう、俺は逃げない！

Ｓｉｄｅ～雄二～ｏｕｔ

バカテス　如月ハイランド《後編》（後書き）

雄二と翔子をくっつけました。
変なところがあったかもしれませんが、これが私の限界です。
意見は受け付けますが、反論はご遠慮願います。

ＩＳ　二人の転校生（前書き）

終焉と吉宗の嫁登場！

ＩＳ　二人の転校生

「シャルル・デュノアです。　フランスからきました。　この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

六月。
原作通り、シャルとラウラが転校してきた。

（骨格が女。　これには異常はないな。　ていうかなんか癒されるな）

終焉は騒がしい周りを無視してシャルルを観察していた。
そして、シャルルの声に癒されていた。

「……挨拶をしろラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。　もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。　私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

（やった！　やっと来たぁぁ！）

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

吉宗は大好きなラウラが来て、内心テンションが上がっていた。

「あ、あの以上……ですか？」

「以上だ」

そして、ラウラは一夏と目が合う。

終焉は動こうとはしなかった。

なぜなら、何が起こるか知っているし、どう変わるかも予測できるからだ。

「！　貴様が――――」

振り上げられたラウラの手は、一夏に振り下ろされることはなかった。

「駄目だぜ、ラウラちゃん」

なぜなら、吉宗がラウラの手首をつかんだからだ。

「貴様はボンゴレ！」

「ここではその呼び方は止めてくれない？」

「黙れ！　私はお前も認めない！　放せっ！」

「いいよ」

吉宗がラウラの手首を放すと、ラウラは吉宗を睨んで席に着いた。

（ありゃりゃ、やっぱり嫌われてるね。　でも、これだから頑張り甲斐があるってものだ）

「ではＨＲを終わる。　各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。　今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。　解散！」

「折原に沢田、デュノアの面倒を見てやれ。　織斑では不安だ」

終焉と吉宗は移動するためにシャルルの前に立つ。

「君が折原君と澤田君？　はじめまして。　僕は――」

「挨拶は後だ。　女子が着替え始めるからとっとと移動するぞ」

「そういうこと。　遅れると織斑先生が怖いからね」

終焉は一瞬躊躇ったが、シャルルの手首を取り、教室を出る。

「男子は空いているアリーナの更衣室で着替えることになる。　実習のたびに移動だから早めに慣れてくれ」

「う、うん」

終焉は移動しながら説明をする。

「ああっ、転校生発見！」

「しかも織斑君たちとも一緒！」

「いたっ、こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

女子の群れが進路を邪魔する。

「（吉宗）」

「（わかってる。　んじゃ、俺は一夏ね）」

「（それでいい）」

終焉と吉宗はアイコンタクトで次の行動の打ち合わせをする。

「行くぞ、吉宗。　悪いシャルル。　少し我慢してくれ」

「え？　きゃっ！」

シャルルは一瞬理解できなかったが、終焉に横に抱えられたので小さく悲鳴を上げた。

「きゃあああああっ！」

「お、お姫様抱っこ！」

「い、いい！」

終焉はシャルルをお姫様抱っこをし、吉宗は一夏を右腕に抱えられ、窓から飛び降りた。

「きゃあああ！？」

「うおおお！？」

何も知らされずに飛び降りたので、一夏とシャルルは悲鳴を上げた。

「これでよし」

「急ぐぞ」

飛び降りてからは靴を履き替えてから、走って移動し、今はアリーナの更衣室。

「十分余裕はあるな」

「まあ、飛び降りたしな」

「と、飛び降りるなら飛び降りるって言ってよ……」

「し、心臓に悪い……」

終焉と吉宗はケロッとしているが、一夏とシャルルは急の飛び降りに軽くダウンしていた。

「さて、俺は折原終焉だ。　一個上だが、気にしなくていいぞ。あと、好きに呼んでいいぞ」

「俺は沢田吉宗。　ま、よろしくな。　名前でいいから」

「俺は織斑一夏。　一夏って呼んでくれ」

「うん。　よろしく、シエン、吉宗、一夏。　僕のこともシャルルでいいよ」

「わかった。　じゃ、さっさと着替えようぜ。　遅れるのは洒落にならないからな、ってどうした、シエン？」

「いや、何で皆『シエン』って呼ぶんだろうなって思ってな」

終焉を『終焉』と呼ぶ人間は少ない。
終焉の名前を呼ぶほとんどが『シエン』だ。

「そういう名前なんだから仕方がないだろ」

「どういう名前だよ……。　俺の名前が変なのは認めるが……」

親が折原臨也なんだから仕方が無いったら仕方がない。

「はぁ、というか早く着替えろよ。　時間なくなるぞ」

終焉のＩＳは何を着ていようが変わらない性能を出すから、本来なら着替えなくてもいい。
だが、終焉は毎度毎度着替えている。
それはなぜか、目立つからだ。
元より目立っている終焉だが、これ以上目立つのは頂けないのだ。

「え、えと、あっち向いててね？」

「わかったから早く着替える。　織斑先生の出席簿が落ちるぞ」

ぱぱっと着替えて終焉と吉宗は着替えが終わっている。
というより、着替えるのが面倒だから元から着ているだけなのだが。

「外で待ってるから早くしろよ。　一夏はどうでもいいが、シャルルは初日だ。　遅れるのはまずい」

「あ、うん。　わかったよ」

「俺はどうでもいいって酷くね？」

「お前が織斑先生にいくら叩かれようが知ったことではないからな」

「姉弟なんだからそれくらい受け入れろ」

「あれを何度も受け入れてたまるか！　あれ滅茶苦茶痛いんだぞ！」

「知るか。　叩かれるようなことをするお前が悪い。　んじゃ、シャルルは早くな」

そういって終焉と吉宗は更衣室から出て、壁にもたれかかる。
そして、しばらくすると二人が出てきたので四人揃って第二グラウンドへと向かった。

ＩＳ　実習

「では、本日から格闘戦及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習のため、いつもの倍の人数。

「くぅっ……。　なにかというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

鈴とセシリアは織斑先生に頭を叩かれ、鈴に関しては最早呪詛のようである。

「今日は戦闘を実演してもらおう。　ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。　――――凰！　オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

セシリアは一夏を蹴った鈴の巻き添えになった。

完全なとばっちりである。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。　いいから前に出ろ」

文句は言いつつも前に出る。

織斑先生の恐怖は生徒に根付くものである。

「お前ら少しはやる気を出せ。　――――アイツにいいところを見せ

られるぞ？」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの！」

この二人はこの二人で物凄く単純であった。

「それで、相手はどちらに？　わたくしは別に鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。　こっちのセリフ。　返り討ちよ」

「慌てるなバカども。　対戦相手は――」

キィィィィン……。

「あああああーっ！　ど、どいてください～っ！」

山田先生が落下してくる。

落下地点には一夏がいる。

（まあ、止めとくか）

終焉は右腕を部分展開し、山田先生へと向ける。

そして、山田先生は動きを停止した。

終焉がやったことは、超能力で動きを止めただけだ。

だが、部分展開をしておかないと怪しまれるため、わざわざ右腕の展開をしたのだった。

「気をつけてください、山田先生」
そういいながら地面へと降ろす。
「ありがとうございます、折原君」
「危ないですから気をつけてくださいよ」
「はい」
しゅんとする山田先生。
これだから先生に見られないのだが、自覚はあるのだろうか？
「織斑先生？　相手ってもしかして……」
「そうだ。　お前らの相手は山田先生だ」
「二対一で……？」
「いや、流石にそれは……」
「安心しろ。　今のお前たちなら直ぐに負ける」
簡単な挑発にすぐに乗る。
この二人は本当に単純である。
「では、はじめ！」
号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。

「手加減はしませんわ！」

「アタシも手加減は無し！」

「い、行きます！」

☆

まあ結果は原作通りに鈴とセシリアが呆気なく負けた。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

織斑先生は手を叩いて全員の意識を切り替える。

「では専用機持ちは織斑、折原、沢田、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。六人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？　では分かれろ」

言い終わるや否や、終焉、吉宗、一夏、シャルルの元に女子たちが詰め寄ってくる。

予想通りである。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！　順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩ

Sを背負ってグラウンド百周させるからな！」

鶴の一声……というより脅しの域である。

『『『よろしくお願いします！　シエン様！』』』

終焉のグループになった女子六人は、六人揃って同時に全く同じことを言っていた。

ここでも『シエン様』は定着してしまっている。

それに呆れて終焉は溜息をつく。

「ええと、いいですかーみなさん。　これから訓練機を一班一体取りに来てください。　数は『打鉄』が四機、『リヴァイヴ』が三機です。　好きなほうを班で決めてくださいね。　あ、早い者勝ちですよー」

「ということらしい。　どっちがいい？」

『『『どちらでも構いません！』』』

またもや息のあった返事。

「……俺が勝手に選んでくるから、少し待ってろ」

終焉はそう告げてＩＳを取りに行く。

終焉が選んだのは『打鉄』。

自分で手掛けたこともあり、こちらにしたのだ。

終焉は腕輪を外して軽々と運ぶ。

こういう重いものを運ぶときは、終焉の身体能力の異常なほどの高さは役に立つ。

「んじゃ、さっさとやるぞ」

運び終わり、終焉は腕輪を嵌めなおす。

「とりあえず、装着と起動、及びに歩行を行う。　順番にやっていくぞ」

終焉は指示をし、進めていく。

「時間内に終わらせる。　放課後に居残りなど、面倒だ。　素早く終わらせるぞ」

終焉たちの班は、どの班よりも早く進んでいった。

☆

「では、午前の授業はここまでだ。　午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班ごとに集合すること。　専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。　では解散！」

終焉、吉宗の班の人は余裕をもって行動が出来ていたが、一夏たちの班は肩で息をしていた。

「あー……。　あんなに重いとは……」

「ＩＳ使えば早いんだけどな」

「そういう終焉は軽々と運んでたじゃんか。　吉宗もだけど」

「俺と吉宗はお前と違って力があるんだよ。　俺の場合は常にキロ単位で剣やら銃やら持ってるしな」

「俺は鍛えてるし」

終焉は毎日服の下には数キロ、数十キロの武器を持ち歩いており、元々のスペックが高いが故に可能なことだ。
吉宗は確かに鍛えてはいるが、こちらも元々のスペックによるものもある。
まあ、どちらにも言えることはチートであると言うことだ。

「シャルル、着替えに行こうぜ。　俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしていくから、先に行って着替えててよ。　時間がかかるかもしれないから、待ってなくていいからね」

「ん？　いや、別に待ってても平気だぞ？　俺は待つのには慣れ――」

「さっさと行くぞ。　先に行けって言ってるんだから行けばいいだろうが」

「それでも待つというのなら、同性愛者という称号を与えよう」

「俺は同性愛者じゃない！」

「じゃあ行くぞ。　俺はお前がそういう趣味でも構わないからな。同性愛者は文月にもいるから、慣れてるんだ」

「だから俺はそうじゃない！　てか、文月学園にもいるのかよ！」

「んじゃ、ちゃんと来いよ」

終焉は一夏の首根っこを持って更衣室へと連行していった。

「シエン！　いい加減放してくれ！」

更衣室に着き、ようやく開放される一夏。

「あのさ、人には色々あるんだから拒絶するならそれに従えばいいんだよ」

「あのまま無理を通していたら、お前の評判が地に落ちるぞ」

「男にしか興味がないってな」

「俺はノーマルだ！」

「まあ、一部の女子にはそれでも人気だろうな。　腐女子はこの学園にも蔓延ってるしな」

「文月にもいるぞ、腐女子。　優等生の顔をして、実は腐女子って奴もいるしな」

その女子とは、お分かりの通り木下優子である。

「着替えたらさっさと行くぞ。　昼の時間がなくなる」

「あ、そうだ。　シエンと吉宗も昼一緒に屋上で食べないか？　箒に呼ばれたんだ」

「参加する。　食堂は絶対混むから（シャルも行くしな）」

「俺も（ラウラちゃん探したいけど、女子の群れは嫌だ）」

「一夏、お前は先に行ってろ。　シャルルには俺から伝えておく」

「いいのか？　悪いな。　じゃあ、また後でな！」

一夏は着替えて走っていった。

ＩＳ　二人との差

更衣室で待っていると、シャルルが戻ってきた。

「な、何でいるのかな？　先に戻っててていいって行ったよね？」

「確かにそう言ったな。　まあ、誘いだ」

「誘い？」

「一夏たちが屋上で飯食うから一緒にどうだだとさ。　俺と吉宗も行くが、お前はどうする？　ちなみに、俺の予想だとお前目当てで食堂は滅茶苦茶混んでいるぞ」

これは、簡単に推測できることだし、カメラで確認したから間違いない。

「じゃあ、ご一緒しようかな」

「じゃ、俺は外で待ってるから、一緒に行くぞ。　なんかお前一人だと女子に掴まりそうな気がする」

「うん、急いで着替えるね」

シャルルは更衣室に入っていき、終焉は溜息をつく。

（シャル、どうするか……）

一夏には任せたくない。

終焉は、どうやってシャルを守るかを考えているのだ。
デュノア社社長を潰すか、デュノア社そのものを潰すか、それともＫＡＮＺＡＫＩに引き抜くか。
手段はいくつも存在するが、どうやれば一番効果的か考えている。
そんなことを考えていると、シャルルが出てきた。

「お待たせ」

「じゃあ行くぞ。　購買で食うもん買ってくぞ」

「あ、うん」

☆

「……どういうことだ」

「ん？」

終焉たちは揃って屋上で昼食をとっている。

「天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？」

「そうではなくてだな……！」

この場にはいつものメンツが揃っていた。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ。　それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが……」

「はい一夏。　アンタの分」

タッパーを投げる鈴。
食べ物を投げるんじゃない。
これは世界共通の常識のはずだ。

「おお、酢豚だ！」

「そ。　今朝作ったのよ。　アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

だが、なぜか酢豚オンリー。

「コホンコホン。　――一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。　よろしければおひとつどうぞ」

セシリアがバスケットを開いた瞬間、終焉の目付きが変わった。

「……セシリア」

「だ、大丈夫ですわ！　今回はちゃんと作りましたし、味見もしましたから！」

そう、終焉はセシリアの料理を指摘したのだ。

文月には殺人兵器を作り出す秀才女子がいるが、それよりもマシな段階にいるセシリアの料理を食べ、それなりに料理が好きな終焉にとって、文月のあいつと目の前にいる女子二人は許せなかった。料理を侮辱するなと、前回怒こったのだった。

「……匂いは大丈夫だな。　化学薬品の臭いはしない」

普通化学薬品の臭いがするものは食べ物ではない。

「では一夏。　食え」

「なぜに俺？」

「セシリアが元々お前に作ってきたんだ。　お前が食うのが当然なことだろ」

「……わかった」

一夏はサンドイッチを手に取り、口に運ぶ。

「ど、どうでしょうか……？」

「……大丈夫だ。　今回は食べれる」

その言い方は、前回は食えたものじゃないと言っているようなものだが、実際に食べれるものではなかった。

文月の必殺料理人は、これを遥かに越える料理を生み出し、死体が生まれないのが奇跡のような状態なのだ。

「ええと、本当に僕が同席してもよかったのかな？」

実際は女の子な転校生は遠慮深い。

「いやいや、男同士仲良くしようぜ。　色々不憫もあるだろうが、まあ協力してやっていこう　わからいことがあったらなんでも聞いてくれ。　と言っても、俺なんかよりもシエンや吉宗のほうが詳しいんだけどな……」

「何自分で言って暗くなってるんだよ」

「お前らにわかるか！　同じ男なのに、どうしようもないほどの差があることの辛さを！」

知識、実力、全てにおいて圧倒的に差がある。
三人しかいない男なのに、その二人が圧倒的過ぎることに一夏は打ちのめされていた。

「知らん」

「だったら追いつけるように努力すればいいだけだろ」

「その努力を簡単に打ち砕くのはお前らじゃないか！」

そう。
終焉と吉宗は、ひたすらに努力する一夏をことごとくボコボコにしてきた。
最強ドチートの終焉と、それに近い吉宗に勝てるわけがなく、それは当然な結果なのだが、実体を知らない一夏にとっては辛いの一言である。

「だってなあ」

「なあ」

「「お前とはやり始める時期が違うし」」

正論である。

終焉も吉宗も、その家計故にこういったものに関わってきた。

特に終焉はＩＳを作る企業の社長の息子であるがために、当然なのだ。

「諦めなさいよ、一夏。　あたしたちじゃあ何があってもシエンと吉宗には敵わないんだから……」

鈴も自分で言ったのに暗くなっていった。

「え、えっと、皆、どうしたの？」

「シャルル、お前もすぐにわかる。　この二人の圧倒的過ぎる差をな……」

「そうですわ、デュノアさん。　あのお二人はわたくしたちとは格が違います……」

「それが誰であろうと、あの二人の前では雑魚でしかないんだよ……」

「……この二人になにがあるかは知らないけど、大変なんだね……」

シャルルさえも、一夏たちの巻き添えを食らって暗くなる。

「おいお前ら。　飯食わないと時間なくなるぞ」

「そうだぞ。　ああ、あと一つ言っておくことがある」

「「お前ら覚悟できてるんだろうな？」」

終焉と吉宗は、いい笑顔でそう言ったとさ。

ＩＳ　嵌められた終焉とその結果（前書き）

嵌められたのは、悪い意味ではなく言い意味です。

ＩＳ　嵌められた終焉とその結果

「シエン、話って何かな？」

「話？　何のことだ？」

「え？　吉宗からシエンが話があるみたいだから後で部屋に来いって聞いたんだけど……」

終焉が知らぬ間に、吉宗が話を進めていたようだった。

「（あいつ、まさか……！）ちょっと悪いシャルル。　少し待ってくれ」

「あ、うん、わかったよ」

終焉は携帯を取り出し、吉宗に電話をかける。

「おいお前は何してんだ？」

『あ、シャル来たんだ。　何ってお膳立てだけど。　やるなら早いほうがいいだろ？』

「それはそうだが、なんか言えよ。　いきなり来たからびくっただろうが」

『だから、俺はお邪魔だから消えてるんだよ』

「はぁ……、もういい。　後で一回殴らせろ」

『は！？　ちょ、ま（ピッ）』

吉宗が慌てていたが、それを無視して通話を切る。

「はぁ……、まだ言うつもりはなかったんだけどな……」

「ど、どうしたの？」

「気にするな。　こっちの話だから」

終焉はもう一度溜息をつき、思考を切り替える。

「シャルロット・デュノア、俺たちのＩＳのデータが目的だな？」

「な、何言ってるの？　僕はシャルルだよ」

「俺が気づかないと思ったか？　最初から父さんから情報が渡されていたし、そもそもそれがなくてもお前が女であることはわかる。
そもそも骨格が違うからな」

終焉が臨也の息子であることは、国関係の人間なら知らぬ者はいない。
だから、「情報を渡された」と言ったとき、シャルル……いや、シャルロットは反応した。

「まさか一目見ただけでばれちゃうなんてね。　思ってもみなかったよ。　骨格の違いなんてよくわかるね」

「女にしか見えない男を知っているからだ」

終焉は二枚の写真を渡す。

「これは？」

「とある双子の写真だ。　姉妹にしか見えないだろ？」

写真に写っているのは、異様に似ている双子の木下秀吉と優子だ。

「うん」

「それ、一方は男だ」

「え？　ええっ！？」

「俺はその二人を骨格の違いで見分けている。　男と女では骨格が僅かだが違うからな。　俺は眼もいいんだ。　おかげで、そんなことができるんだ」

「ばれるわけだよ……」

シャルはばれたことに納得していた。

「さて、お前の目的は俺たちのＩＳだな？」

「そうだよ。　デュノア社からの命令でね」

「もういいぞ。　もう調べはついてるから」

「え？」

「お前は愛人の子で、父親からは道具のように扱われている。　で、そのクソな父親の本妻からは叩かれたこともある。　違うか？」

「……そうだよ。　よくそんなことまで調べれたね」

「まあ、それが折原だとしか言いようがないな」

原作で知っていたことなのだが、実際に臨也からの提供もある。

「俺はなぜお前がこんなことをしたか知っている。　お前はどうしたい？」

「……どうって？」

「お前はこれからどうやって生きて行きたい？」

「僕にはどうしようもないよ。　本国に呼び戻されて、よくて牢屋行きだよ」

「それでいいのか？」

「だから、僕にはどうもできないんだよ！　この状況に抗うことも出来ない弱い人間なんだよ！　僕はあの人の道具でしかないんだよ！」

「自由に生きたいか？」

「出来るものなら生きたいよ！」

シャルの叫び。

「シャルロット、俺の元へ来い」

「へ？」

「ＫＡＮＺＡＫＩに来い、シャルロット」

「ＫＡＮＺＡＫＩって、あの？」

「ああ。　今持つＩＳを手放し、代表候補生ではなくなるが、お前の安全は保障できるはずだ」

「でも、どうやって？」

「俺が、『折原』の人間だってこと、忘れてないか？」

「ま、まさか……！」

シャルはある結末に思い至った。

「そう、そのまさかだ。　父さんの力を借りることになるが、フランス政府とデュノア社を脅す」

「やっぱり……」

「どうする？　まだ聞いてはいないが、俺の頼みは大体叶えてくれる。　おそらく手を貸してくれる」

「……一日、考えさせて」

「わかった。　拒否をしても、少なからず三年は期間があるってことは言っておく」

「三年？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。　本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

「よく覚えれていたね。　特記事項って五十五個もあるのに」

「俺は一度見たものは忘れないんだよ」

完全記憶能力者だからだ。

「最後に一つ言っとく。　シャワーを浴びるなら気をつけろ。　一夏にばれるぞ」

「うん、わかった。　気をつけるね」

「ばれたら俺に言え。　その部分だけ記憶を飛ばすから」

「もう何でもありだよね、シエンって」

「まあな。　んじゃ、明日答えを聞くから」

「うん。　じゃあね」

シャルは部屋を去っていった。

「さて、父さんに聞くか……」

終焉は携帯を取り出して臨也に電話をかける。

『どうしたんだい？　もしかして、シャルロット・デュノアちゃんのことかな？』

「はい。　彼女をＫＡＮＺＡＫＩのテストパイロットに引き抜きたいんです」

『いいけど、そのこの意思は？』

「一日考えるそうです」

『ふーん。　終焉ってシャルロットちゃんのこと、どう思ってるの？』

「まだ一日しか経ってませんよ？」

『どうしてだろうね、なぜか君はシャルロット・デュノアを知っているんじゃないかって思ったんだよね』

物凄い勘である。

「確かに知ってますよ。　このＩＳも、前世ではラノベでしたから」

『へぇ。　で、どう思っているんだい？』

「好きですよ。　ラノベのときはキャラとしてでしたけど、実際に

あって見るとそれも変わりました」

『ライクじゃなくてラブってことかい？』

「……まあ、そうですね。　俺はシャルロットが幸せになれるならそれでいいんですよ」

『ふーん。　じゃあ、俺は応援するとしよう』

「……ありがとうございます」

『準備はしておくから、後々連絡してくれ』

「わかりました」

通話が切れ、終焉はベッドに寝そべる。

「ただいま～」

「お帰り、吉宗」

「ぐふぅっ！」

寝ていた終焉はテレポートして、吉宗の腹をぶん殴った。

「いってえぇ！！　かなりマジで殴りやがったな、終焉！」

「気に入らなかったからな。　本来ならまだバラすつもりはなかったのによ」

「別に良いじゃんか！　どうせやるなら早いほうが！」

「父さんにも聞かなければならなかったし、準備が不十分だったんだよ。　やるなら準備を整えてからにするつもりだったのに」

とはいっても、大分いい方向に進んだのでいいのだが。

「はぁ……。　次何かやるなら俺にちゃんと言え。　でなければ、次は本気でボコす」

「わ、わかった」

立場上では吉宗のほうが上なのだが、実力的に終焉のほうが上なのは気にしないように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8385v/

転生者が織り成す物語

2011年12月18日18時53分発行